

未来への進撃

pezo

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

巨人のような再生能力をもつ少年兵と、壁の外から来たと自称する団長の副官。

彼らと調査兵団、そしてマーレの戦士たちのおはなし。

8月15日 第一幕完結しました。（原作より少し前く巨大樹の森での女型捕獲まで）

8月27日 第二幕はじめました。（巨大樹の森からの帰還くエレイン奪還作戦まで）

目次

現在公開可能な情報	1
第一幕 終章	
少年の決意	3
一章 壁の外	
一	8
二	20
二章	
女神	
一	32
二	45
三章	
切り裂きケニー	
一	55
二	67
三	80
四章	
トロスト区攻防	
一	99
二	109
三	122
四	132
五章	
バケモノの子どもたち	
一	141
二	154
三	170
六章	
マーレの戦士	

三	二	一	二章	三	二	一	第一章	第二幕	英雄の夢	第一幕	三	二	一	八章	三	二	一	七章	四	三	二	一
			交戦				帰還	終章	英雄の決意	序章				女型の巨人				王家の依代				
400	391	378		365	353	342	339	335	325	311	296	282	267	250	238	223	210	194	181			

三章 遺志

一

413

二

425

三

437

四章 兵士と戦士と、

一

448

二

455

三

467

## 現在公開可能な情報

### ●イリヤ・ツエランの再生能力

巨人化能力者の再生能力をも上回るほどの能力。彼自身は巨人化できない。ケニー・アツカーマンより、ツエラン家が代々アツカーマン家と同様、王家に仕えていたことが明らかにされている。その正体は、アツカーマンと同様、マーレの巨人科学の副産物。ツエランは偽名で、本来はクルーガーという姓をもつ一族であった模様。

### ●クシエルの故郷

八年前に壁外でエルヴィンにより保護されたクシエル。それ以前の記憶は曖昧だが、どうやら壁外の住人らしい。マーレに故郷があるのかどうかも不明。

### ●イリヤの母親の死

イリヤの記憶の限り、母親は彼の目の前で巨人に潰されて死亡している。彼の故郷はシーナ内地のレイス家領地内。

### ●夜に動く巨人

844年、壁が破られる前年に、シガンシナに侵入した巨人は夜でも動いていた。その詳細は未だ不明。

### ●硬質化のカケラ

アニ・レオンハートの残した硬質化のカケラは、ハンジの記憶では、八年前、クシエルを壁外調査で保護した際に見たものと同様のものである。なぜ、壁外にあったのか、クシエルと何か関係があるのかは不明。

### ●クシエルの拳銃

彼女の養父が作った連発式の拳銃。しかし、養父は中央憲兵に

よって殺害され、彼女もまた、命を狙われた。シグリ・アーレントの名はその際に捨て、現在はリヴァイが名付けたクシエルという名前で身分を隠している。

### ●エレン・クルーガー

エレンの父、グリシャ・イエーガーに「進撃の巨人」を託したエレン・クルーガーのことを、クシエルは知っている模様。しかし、年齢的に彼らは出会うはずがないが……。

### ●クルト・ウエルナー

イリヤの同期の元・調査兵。しかし、その正体はマーレの戦士候補生。彼が壁外の間人かもしれないと疑っていたのはクシエルと、彼女の部下のエーミールのみ。しかし、クシエルはウドガルドにて死亡。エーミールは女型との巨大樹での戦闘により、トロスト区で療養中。

### ●ニシンの缶詰

ライナーが読めなかった文字の缶詰。ユミルは読めたが、読めないと言ったのはライナーのハツタリだったのか、それともユミルの故郷がライナーたちとは異なっていたからか。クシエルもまた、その文字を読めたが、それは彼女の故郷が壁外であることの証左であり、かつユミルと同郷である可能性を示唆している。

### ●エレンの記憶

エレンの中に、イリヤに関する記憶が混在している模様。しかしそれをエレン自身は自覚できないでいる。また、その記憶はイリヤもまた、身に覚えのないものもある。

## 第一幕 終章 少年の決意

俺はいつだって好きなようにやってきたんだ。それで今までうまくやってこれた。

常識ばかり重視する大人なんてクソ食らえ。  
ちっぽけな世界で安住する凡人には俺は絶対になりたくない。

「後方より増援！」

「目標、加速!!」

「兵長!!追いつかれます!!!」

巨大樹の森の中、恐怖に震えたりヴァイ班の面々の声がこだまする。振り返れば、女型の巨人が仲間のワイヤーを掴んで、その身体を地面に叩きつけていた。

ぎよろりと馬鹿でかい目玉と目が合った気がして、生理的な悪寒が背中を走る。

「リヴァイ」

斜め前方の班長が、先頭に行く兵長の名前を呼んだ。恐怖でリヴァイ班の精鋭たちですらおののくなか、彼女の声はいやに静かで乱れない声だった。

「あとは頼む」

そう言った班長の顔は見えないが、あれは絶対笑ってる声だ。あの班長は常識人なようできて頭のネジがぶっ飛んでるから。

こんな死の瀬戸際で、あの上官は人類最強に未来を託して笑っているに違いない。

「……了解だ」

振り返りながら言った兵長の表情は、いつもと変わりなく厳しい。でもその視線はしっかりと班長に注がれている。

ああ。やっぱり。やっぱり、あんた間違ってるよ、リヴァイ兵長。

「荷馬車護衛班!!何としてもエレンを守れ!!女型の巨人を足止めしろ!!!」

班長の鬼気迫る指示に、先輩方が応える。

女型の巨人が迫る。ああ、クソだ。こんな状況は本当にクソだ。

班長がアンカーを放つたのを皮切りに、他の先輩方も馬を離脱し、背後の巨人へと立ち向かう。

ああ、クソだ!!

「なあおい!! エレン!! お前!! 間違うなよ!! 頼むぞおい!!」

それだけ叫び、前を走る緑色の目玉が大きく見開いたのだけ確認してから、俺は背後の巨大樹の幹むけてアンカーを放った。

最後の一矢になるまで？

ふざけるな。俺はまだこんなところで死にたくない。こんなわけもわからん作戦途中でなんて、死んでたまるか。

「脚の腱を狙え！」

班長の鋭い指示が飛ぶ。先輩方が合図を送る。視界の隅で、エレンを守ったままりヴァイ班の精鋭たちが馬で遠のいていくのが見えた。

俺は死にたくない。こんなところで、誰も死なせたくないんだ。

班長の厳しい顔が、女型の動きを見て歪む。

ダメだ。班長、そっちはダメだ。死んじまう。

リヴァイ兵長。あんたやっぱり、間違ってるよ。

俺は死にたくないし、死なせたくない。絶対、あんたとの約束、俺は果たしてみせるんだ。

俺は、再度誓って、その馬鹿でかい脚の臆向かって、刃を振り抜いた。

## 一章 壁の外

一

状況は絶望的だった。

ガスの残量は残りわずか。先ほどの戦闘で、刃は全て消費した。俺の他、生き残った兵士たちの装備も同じようなものだった。

なだらかな山の稜線の向こうに太陽は沈みかけており、空と山の境目はまるで血のような赤に滲んでいた。

本隊はとうに壁内へと帰還している頃合いだろう。

「イリヤ。生存者の搜索は打ち切りだ。私たちが見張りをするから、あなたたちは休みなさい」

きゆるりとワイヤーを巻き上げて幹の上へと降り立ったのは、薄く微笑みを浮かべた短い黒髪の女性だった。長い前髪の間から、黒々とした大きな瞳がキラキラと夕焼けを反射して輝いていた。

笑顔の彼女の右手には、人間の手首が握られている。細いそれは、女性のものと思われた。

眼下を見遣れば、すっかり蒸発して骨だけになった巨人たちの残骸と、その下に花のように咲く人間の大量の血痕が見える限り広がっていた。

「ク、クシエル副官。班のみんなは……」

微笑む上官に問うたのは、隣で震えていた女性兵士、ユグデイである。

ひとつつにゆわれた長く美しい金色の髪は、頭から被った仲間たちの血で真っ赤に染まっていた。

班員の無事を尋ねた彼女に、その黒髪の上官は「ん？」とまるで雑談でもするように首を傾げた。

「生き残ったのは私たちだけだよ。ユデイ、イリヤ。それから、クルトと……」

巨大樹の遥か下方で、馬たちの駆ける足音がして、副官はその微笑を深めて振り返った。

クシエル副官の視線の先では、二人の兵士が馬を数体引き連れて戻ってきていた。彼らは器用に馬を近くの木にまとめた後、立体機動で俺たちのところへと上がってきた。

「リヴァイ兵長」

副官の呼び声に、呼ばれた男性兵士は厳しく細められた三白眼をちらりと彼女へ寄せてひとつ頷いた。

「近くに巨人の気配はない。夜になるまでなんとか持ちこたえられそうだな」

「それはよかった。九死に一生を得たってやつですな」

場所は壁外。ウォールマリア領土にある小規模な巨大樹の森の中。

リヴァイ兵長の後ろについていた同期のクルトと、女性兵士でひとつ先輩のユデイが張り詰めた息を漏らした。

そう。俺たちは、壁外に取残されたのだ。

「私たちは運がいいです。突如巨人の大群の襲撃に合いながら、団長たち本隊は無事に帰還路へと戻ることができた。第四分隊の半数は壊滅しましたが……、捕獲作戦用の機材もなんとか持ち帰れたようですし」

言いながら、手にしていた人間の手首を、懐から出した布でくるんでいるその女性は、団長付の副官である。まるで他人事のように微笑をのせて言う姿は、この絶望的状况にふさわしくない。

ちらりとクルトを見遣れば、もともと気の小さな彼はすっかり副官の笑顔に怯えて顔を青くしていた。

「あとは、我々が無事に壁内へと帰ることができれば、さらに運がいいですね」

笑う彼女に、リヴァイ兵長が舌打ちして、俺たち五人の装備の確認をした。俺とクルト、そしてリヴァイ兵長は刃もガスの残り少ないものの、帰路の分くらいはかろうじて残っていた。ユディは激戦の末、刃を使い果たしていた。微笑むクシエル副官にいたっては、ほんのわずかなガスが残っているだけで、刃もない状況だった。

まさに、絶望的状况だった。

「クシエル。壁外へ取残された調査兵が帰還した例は今まであるか」

リヴァイ兵長の声はいつものように静かに低く響いている。どうしてこの上官たち二人は冷静に話しているのか。俺もユディもクルトも、彼らがいなければ発狂でもしてしまったんじゃないのか。少なくとも、今必死で黙って両足で立っているのがやっとな精神状態だ。

クシエル副官の声は明るく、さらに絶望を述べた。

「ありませんよ。壁外へ取残された兵士の生還率はゼロです。そもそも、壁外に残された人間の足跡がありませんから……。そういえば、昨年発見したイルゼ・ラングナーの手記は唯一の足跡でしたね。あれは興味深かった。運がよければ、本隊からはぐれた後も、数時間は生きていくということです」

彼女がみやつた先では、太陽が赤く燃えながら地平の向こうへと沈んでいった。

もうすぐ、巨人どもが静まる夜がやってくる。

その間は、なんとか生き延びることができるとははずだ。

「私たちは……。私たちは生き延びることができるとはしようか……」

呟いたのはユデイだ。彼女の言葉に、言いしれぬ恐怖が形をとって内臓の奥をむしばむような気がした。じわじわと。しつかりとしみこんでくる恐怖に、知れず手が震えるのがとめられなくなる。

俺たちは、ここで死ぬのか。何の成果も得られずに？

「オイ。情けない顔してんじゃねえぞ」

舌打ち混じりに告げられた言葉に顔をあげれば、兵長がユデイに白い清潔そうなハンカチを差し出していた。「血をふけ」と彼女に差し出して、震えるクルトと俺に言った。

「イリヤ、クルト。お前らもだ。絶望的な現状を嘆くことは確かに必要な儀式だ。だがな、ここは壁外。つまり戦場だ。ならば俺たちがすることは決まっている」

鋭く細められた灰色の瞳に、沈む太陽の最後の光が差し込んできりりと一瞬輝いた。

「生きているうちに最善をつくす。それだけだ」

上官二名の話し合いにより、壁内へと戻るための作戦は決められた。作戦、といってもそれはただ単に、日の出の二時間前から出発し、馬で北を目指すというだけのものだった。

実際、壁外へ残された俺たちには、愚鈍な虫のように北を一心に目指すほか生き残る道はなかった。

「リヴァイ兵長がいることだけが心の救いだな……」

巨大樹の枝の上、俺はついユデイとクルトにそう漏らしていた。上官二名は、隣の樹の枝で見張りをしてくれていた。

「それだけじゃないわ。馬もいて、それぞれガスも刃も残ってる。クシエル副官が言っていたとおり、私たちには生存できる可能性が残されてる。まだ、大丈夫よ……」

絞り出すようにユデイが気丈に言った。彼女の気持の切り替えは、班のなかでも特に優れていた。班員が目の前で死んでも、彼女はすぐに動くことができた。だから、進軍中に巨人に取り囲まれて絶望が兵

団を襲つても、彼女はすぐに動いて生き残ることができたのだ。

「でも……夜が明けたらどうだ？平地を索敵陣形もくめない少人数で走るなんて、巨人のエサになるようなもんだろ……。たとえリヴァイ兵長がいても、さつきみたいは何体か一気に来たら、」

「クルトー！」

震えながら恐怖に震えるクルトの名を叫ぶ。薄い茶色の短髪の頭がびくりと震えて、俺を見てきた。開ききった瞳孔。まずい。

クルトは決して勇敢な兵士じゃない。どちらかと言えば臆病で、気も弱い。なぜ調査兵に志願したのか。同期の俺もよく知らない。だがいつか先輩が言っていた。調査兵で生き残る者は決して勇敢で強いものばかりじゃない、と。

臆病な者はむやみやたらに巨人へ立ち向かわない。それ故、生き残る確率は勇敢な兵士のそれより高いのだと。

そして、何より生き残るためには、運が最も大きいのだ、と。

こいつが生き残ったのも、その運とやらなんだろう。そのことを教えてくれた先輩は眼下の死体の山にいる。ちらりと暗い地面に視線を落とせば、わずかな月光に照らされた仲間達の残骸が眼に入っ、気持ち悪さが臓腑から込み上げて来た。

仲間達の死骸は回収しない。そのために樹を降りるガスの消費がもつたいない。そう判断したのは、クシエル副官だ。リヴァイ兵長は少し逡巡していたようだったが、結果的に、部下であるはずの彼女の判断を尊重した。

クシエル副官の判断が正しいのかどうかはわからないが、さすが、あの団長の副官たるものだ、と思った。あのエルヴィン団長なら、ここで旧友の戦果を持ち帰ろうとすることを決して優先しないだろう。

「クルト。気をしっかり持て。お前こんなところで死にたくねえだろ。弱気になったら死ぬぞ」

「……ああ、ああ。分かっている。わかっているよ、イリヤ。ごめん。うん。そうだ。俺はこんなところで死ぬわけにはいかないんだ。ちゃんと、任務を果たさないと……」

「任務？……ああ、調査兵は生きて帰ることが任務だもんな」

震える友人の肩を叩いてやれば、口角をなんとか持ち上げて笑って返してくれた。大丈夫。不細工な作り笑いだ、それができればお前は大丈夫だ。

「そうよ。大丈夫。私たちには人類最強のリヴァイ兵長がついてる。それに……。戦女神クシエル副官。シガンシナ陥落の際に取残された兵士たちを危険を冒してまで助けたような「聖母」と言われるような人がいるんだもの。きつと。きつと、大丈夫よ……」

振り返った枝の上に、小柄な男女の影がある。きりりと伸びた背筋と、無駄のない立ち姿に、俺たちは少しだけ安堵した。

そうだ。彼らは、シガンシナ陥落の英雄たちだ。そんな英雄が率いる俺たちが、死ぬはずがない。

「リヴァイ。分かっているとと思うが……。何かあれば、あなたはまず、いの一番に私たちを囿にして逃げてくれ。命の優先順位はあなたがここでは最も高い」

「……ああ。分かっている」

団長付の副官であるクシエルが、隣の樹の枝で休む少年兵たちを見ながら口にして、対するリヴァイは苦々しく頷いた。

敬語を崩して話す女の様子を見るに、彼らはどうやら気心知れた古い仲のようだった。調査兵団の古参兵は、時折上官と部下の垣根をこえたやり取りをする。特に、五年前のシガンシナ陥落前からの古参兵は、それ以降の兵士達とはまた一線を画した絆がある。

彼らのなかにも、そうした絆が垣間見えた。

「何事もないことを祈るばかりだね。彼らみたいな若い兵士を死なせたくはない」

「どうだかな。巨人どもはこっちの都合なんざ気にしちやくれねえからな」

「違くないね」

少しの沈黙の後、リヴァイがおい、と彼女に声をかけて己の腰にある刃を差し出した。

「俺は刃があと二対ある。一対はお前が持て。ガスも刃もねえのはマズイだろ」

「……それはあなたが持たなければ意味がないよ。私が持っているよ

り、あなたが持っている方が格段に生存者の数は増えると思うよ」

月光に、女の僅かな微笑が照らされた。

リヴァイが引き下がらないとでも言うように、その刃を突き出したまま彼女を黙って見据える。が、クシエルは短い髪を揺らして「はは」と場違いに笑うばかりだった。

「月がキレイだと思わない?」

「あ?」

「星も。とつてもきれいだ」

旧マリア領地は広大だ。彼らがいる巨大樹の森は、小規模ながらも観光地としてかつては賑わっていた場所だった。それは、広がる巨大な木々の荘厳さもさることながら、そこから望むことができる景色が、まるで壁のない世界のもののように広大で、限りのないようなものに見えたことも大きい。

そんなかつての観光名所からのぞむ満天の星空は、彼ら翼を背負う者たちが焦がれてやまない、まだ見ぬ壁外の景色を彷彿とさせた。

「あの向こうには……どんな楽園があるんだろうね。私はいつかそこに……」

「クシエル?」

「いつか、帰りたい……」

見開かれた黒い双眸は、リヴァイを見ることなく、まっすぐに壁の外の遙か彼方を見つめていた。

俺たちがクシエル副官の先導で巨大樹を出たのは、月も遙か地平近くまで落ちつつある夜の底だった。

「行こう。目指すは北北東。トロスト区へ帰還する！」

彼女の号令に、たった五人の調査兵団はおう、と声を上げて出発した。即席で作った松明を片手に、馬を駆けていく。巨人が隠れていそうな森は避けて、なるべく平地を行軍する。列の殿は、リヴァイ兵長が勤めていた。

「イリヤ！少し遅れている！しっかりついてこい！」

「はいー！」

先導しながら、時折振り向いては行軍の様子を見ていたクシエル副官が、すぐ後ろについていた俺に叫んだ。応とこたえたものの、疲労はそろそろ限界に近い。

昨日の朝からずっと壁外なんだ。夜も身体を休めたとは言え、その疲労がとれるはずもなく。

顔を上げれば、遙か山の向こうが薄く白くなっていた。

もう、朝が来る。巨人たちの時間がやってくる。

運がいいことに、日が昇り始めてから、しばらくは巨人に遭遇することがなかった。奴らが現れたのは、トロスト区の壁がようやく視界に入ってきた頃だった。

「背後より三体！」

リヴァイ兵長の鋭い声が背中を叩く。壁上で警備をしているはずの駐屯兵たちに向けて、クシエル副官が信煙弾で合図を放った直後だった。

「逃げ切る！そのまま進め!!」

運が悪いことに、そこは平地。立体機動で応戦するにはあまりに分が悪い。しかも背後で駆けているのは、不気味な表情の15メートル級が三体だ。

「奇行種だ！足が速い!!」

兵長の叫びに振り返れば、うち二体が凄まじい速さで駆けてきていた。ぐん、と距離を詰められる。マズイ。もう、壁は目の前だと言うのに。

しかも、その二体の向こう側から、さらに数体の巨人が走っているのが視界に入った。応戦しても、これではキリがない。いくら兵長がいると言っても、この装備の少なさだ。すぐに巨人のエサになってしまう。

手綱を切ろうとした兵長に、前方の副官が叫んだ。

「リヴァイ兵長！ユディ！援軍の要請を頼みます！イリヤ、クルト！お前たちは応戦しろ！私がおとりになる!!」

ぐるりと馬の首を返して、壁と反対側に向う上官。

クソ。こんな貧乏くじあつてたまるか。

「クソが!!」

叫びながら、俺はクルトに目配せして馬の手綱を引いた。一馬身前の副官とリヴァイ兵長がすれ違いざま、頷いたのが見えた。

副官が二体の前に躍り出る。奇行種だったが、奴らは彼女を追って方向を変えた。その背後について、一体のうなじを直接狙ってアンカーを放つ。足は速いが上半身の動きはやけに鈍い。これならける。意を決して、トリガーを引いてワイヤーを巻き取った。

朝焼けの光のまぶしい空に投げ出された身体が、血管の浮いたような気味悪い肌に近づく。

距離、三。

俺は身体をひねって、刃を振りかぶった。

クシエルから援軍の要請を頼まれたリヴァイは、ユデイを連れてトロスト区の門扉へと猛進していた。その鋭い双眸が、門扉方面からやってくる馬の行軍を認めるには、それほど時間はかからなかった。

「兵長！調査兵团です!!」

ユデイが歓喜に泣いた声をあげた。確かにそれは翼を背負った仲間たちの行軍だった。リヴァイは馬を止め、その先頭を見る。それはどうやら、彼の次に兵团での実力を誇るミケ・ザカリアス率いる分隊のようだった。

「ミケー！」

行軍の先導をするように、リヴァイはくるりと馬の首を返し、来た道に戻る。その合図をしかと見届けたミケは、速度をさらに上げるよう分隊に指示した。

「リヴァイ！」

「ナナバ！お前のガスと刃をよこせ!!」

行軍が彼らに追いついたとき、ミケ分隊長のすぐ後ろで馬を走らせていた短髪の兵士が彼の名を呼んだ。ミケ分隊の副官であり、シガンシナ陥落以前からの旧友であるナナバである。

友人の無事に叫んだ彼女に、リヴァイはほとんど恫喝するように怒鳴った。その一言で全て察したナナバが、すぐさま彼の馬へ近づき、併走しながら刃とガスを手渡す。

リヴァイがなんとか不安定な馬上でガスと刃を補充したときには、ミケを始め数人の兵士たちは彼が置いてきた仲間のもとへと向かっていた。

振り返った先に、後ろをついていたユデイがいない。どうやら彼女もまた、仲間のもとへと向かったのだと気づき、リヴァイは舌打ちして速度を上げた。

\*\*\*\*\*

「ああ！クソ！こんなことなら、さっさと報告しときゃよかった！壁外に出る前に全部すませときゃ、こんなことには……！」

「おい、コルト！何言ってる！立て！馬に乗れ！！死にたいのかよ！！」

地面に這いつくばって頭を抱えるクルトを、思わず乱暴に引っ張った。

クシエル副官が馬に乗って巨人を引きつけてくれている。今のうちに、早く。

早く逃げなければ。

どこに？

振り返った先に、巨人。目の前にも迫る巨人。

どこに、逃げ場があるというのか。四方は、既に巨人に阻まれてい

た。

7メートル級の笑顔のはりついた奴が手を伸ばしてきて、思わずクルトをつかんでいた手を放して後ずさってしまった。哀れにも、俺に見捨てられたクルトは、巨人の野郎に足をつままれた。

空に浮かぶクルトの細身の身体。

絶望にひきつる表情。

断末魔に近い、耳を塞ぎたくなる悲鳴。

クルト、が、

「イリヤー！」

呼び声の次に腹を叩いた衝撃。嗚咽をもらして、痛みに鳴く身体をひねれば、いつの間にか馬上にいた。どんな芸当か。どうやら俺はクシエル副官に引かれてその馬上に引き上げられたらしい。馬で駆けさせて、クルトをつまんだ巨人から遠のく副官に、俺は叫んでいた。

「クルトが！副官！戻してください！」

非難の声をあげて彼女を振り返った先に、ゆらりと立ちふさがる巨人。

彼女の愛馬である斑の毛色の馬が、悲痛な鳴き声をあげて足を止め

る。く、と息を呑んだ彼女の焦燥だけが、その背中からありありと伝わってきた。

その時。確かに俺は、命の終わりを覚悟した。

だが、その終わりは訪れなかった。

その時の風景を、俺は生涯忘れることはないだろう。

朝焼けの中、太陽の中から現れた無数の兵士たち。何本も空を走るワイヤーが巨人たちのうなじへと伸びている。次の瞬間には、血しぶきがそこらであがった。噴射されたガスが幾重にも重なり、まるで光を抱きしめるようにきらきらと輝いて見えた。

クルトを捕まえた巨人に、ひときわ素早い動きの兵士がとりつく。「リヴァイ兵長だ」と思った瞬間には、それはゆつくりと身体を横たえていた。

「間に合った……」

援軍が。間に合った。それはまさに奇跡だった。

「クルト！クルト！」

地面に投げ出された臆病な兵士に、綺麗な髪の女性兵士が駆けよつた。ユデイだ、と思ったとき、クシエル副官はそちらに馬を向けてい

た。

クルトはどうやら気を失っているらしい。それが分からないのか、ユデイは必死でクルトの名を呼んでいた。その傍で、副官はひらりと馬をおりた。

周囲では濛々と巨人の蒸気があがっている。遠くでまだ数人、飛んで戦っている兵士が見えたが、あらかた近くに群がっていた巨人は一掃できつつあるようだった。

「クルト」

副官が呼んでも、彼は目を覚まさない。まさか本当に死んでしまったのではないか、と思った矢先、彼女の足がクルトの肩を乱暴に蹴り上げた。

重くて鈍い音に、ユデイが非難の声をあげかけたとき、ようやくクルトがその瞼を開けた。

「……、あ、俺」

「クルト！」

「ユデイ？イリヤ？」

俺たちの顔を見て彼は何度か瞬きした。すっとぼけたような、呑気な間抜け面だ。それを見て、ようやく俺は、生きている実感に心の底から安堵した。

「クルト」

クルトを抱き留めるように囲んでいたユデイと俺の傍に、静かな声で副官がかみこんできた。夜の闇のように暗い瞳の、黒い視線がクルトに注がれる。

「クルト。あなたが生きていてよかった」

そう言った彼女の笑顔は、なぜか苦しそうに歪められていた。

\*\*\*\*\*

「閉門!!」

全ての調査兵が帰還したのを確認した駐屯兵の声。閉門の合図が、トロスト区の門扉付近で響く。

壁外の眩しいばかりの陽光がローゼの扉で遮られて、壁に覆われた影が、安寧を連れてくる。影がゆつくりと、生還した5人の調査兵たちを包んでいく。

昨日、帰還した調査兵団の一行は、常のように本部には戻らず、門扉付近で駐屯した。

調査兵団団長、エルヴィン・スミスが、ドット・ピクシス司令に、壁外に取残された兵士の捜索のために、壁上への部隊配置を願い出たのは、彼ら調査兵が帰還してからまもなくのことだった。

壁外へ取残されたのはシガンシナ陥落の際、誰よりも功績を残した、人類最強とされるリヴァイ兵士長であるとエルヴィン団長は言った。

類い稀なる運と実力の持ち主である彼ならば、自力で壁内へと戻るよう抗するはずである。ならば、調査兵団はその英雄の帰還を待たなければならぬ、と。

しかし、参謀を含め、駐屯兵の多くは、その申し出に難色を示した。壁外に取残された者は、今まで多くいたのだ。人類最強、彼一人だけこうも特別な待遇をするのはいかななものか。今まで壁外で死んだ多くの兵士の遺族や仲間の反感を買いかねない。

そう、若き優秀な女性参謀は、その怜悧で聡明な政治的判断を述べたが、エルヴィン団長は、

「リヴァイ兵士長は特別だ。他の兵士と待遇が違うのは今に始まったことではない。彼を失うことは、人類の大きな損失だ」

とまっすぐに狂気を滲ませるような気迫で、彼女の冷静な判断を却下した。

結果、ピクシス司令の最終判断により、翌日の日の入りまでという期限付きで、調査兵団は壁上へと配置された。

その判断を下したピクシス司令は、生来の変人として名高い。それはつまり、柔軟な思考の持ち主であるということの証左でもあった。そんな柔軟性に富んだ変人は、若き調査兵団団長の意志をくみ、いくつかの分隊を調査兵団の援護に配置もさせた。

そして、二つの兵団は、夜通し松明の火をたき続けて、その兵士の帰還を待った。

「ハンジ。君はそろそろ休んだ方がいい。無理はするな」

「あなたもでしょ、エルヴィン。置いてきたのは、私の分隊の部下だったんだ。上官である私が休むわけにはいかない」

壁外調査の疲労を癒やすため、調査兵は順番に休憩をとりつつ壁上での待機任務を果たしていた。そのなかで、休みをとることなく、朝を迎えるまで壁外の夜を睨み続けていたのは、団長と第四分隊分隊長、ハンジ・ゾエだった。

曰く、その日、巨人捕獲作戦を第四分隊を中心に決行中、巨人の大部群に襲われたという。第四分隊の壊滅、そして機材の損傷を免れるため、彼らは分隊の半数の兵士を切り捨てた。その指揮をとった団長は、森を脱出する寸前、巨人の群のなかに彼の英雄がひらめく姿を認め、その兵士に帰還命令を下すために、いちかばちか、副官であった女性兵士を巨人の群へと突入させたのだという。

彼らが待っているのは、切り捨ててきた部下たちと、それを守るために残った英雄。そして、その英雄を取り戻すために放った一矢だった。

エルヴィン団長が信じたその英雄は、確かに翌朝、数人の兵士を引き連れて帰還を果たした。朝が明け始めた頃、壁の向こうであがった緑色の信煙弾は、壁上で待機していた調査兵と駐屯兵に歓喜の嵐を巻き起こしたほどだ。

「よく戻った、リヴァイ、クシエル」

史上初めて、壁外から帰還を果たした彼ら五人の兵士は、それぞれ団長と司令からねぎらいの言葉を受けた。駐屯兵や調査兵。それぞれの兵士の歓喜の声を一身に浴びながら、彼らは門扉近くの兵舎へと導かれた。

さすがと言うべきか、リヴァイ兵士長は疲れの表情も出さずにその二本足でしっかりと立って、団長へと報告をしている。その後ろで、10代の若き兵士である三人の男女がそれぞれ仲間と抱き合って生還の喜びを分かち合っていた。

「クシエル副官」

「エーミール。彼だ。疲れているところ悪いが、頼む」

「何をおっしゃいますか。あなたほどではありません。今、でいいんですね」

「ああ。これ以上は泳がせてられない」

喜びを分かち合う兵士を見ていた副官の女に、彼女の部下らしき長髪  
の甘いマスクの男が指示を仰ぐ。彼女がひとつ頷いたところ見て、  
男は仲間と目配せした。

数人の調査兵が、三人の若い兵士に近づく。その様子に、団長と兵  
長もまた、会話をやめて副官の女にひとつ頷いた。

「お前らよく生きてたな！」

「いや、それでも皆助けられなかった……」

「何言ってるんだ！お前らが帰ってきただけで十分だろ！なあ、クルト  
！」

彼らと特に仲の良い若い兵士たちが抱き合い、生き残ったひとりの  
少年を振り返った。

「え？？」

その少年は、屈強で年かきのいった強面の調査兵たちに脇を固めら  
れていた。まるで、彼を逃すまいとするように、がちりとその両腕  
を二名の兵士がつかみ上げる。

「えっ？あの、」

「クルト?」

少年たちを取り囲んでいた調査兵たちに、動揺が走る。その動揺に答をもたらししたのは、団長付の副官、クシエルという女兵士だった。

「クルト・ウエルナー調査兵。あなたを機密情報漏洩の容疑にて拘留します」

「え!?!」

驚く少年兵に、その様子を見ていた金色の団長が言い放った。

「クルトを地下牢へ。他の者は解散したまえ」

唐突におこった出来事に、少年たちが絶句する。生き残った兵士の一人、イリヤという栗色の髪の高い兵士がクシエル副官につめよったが、全く相手にされなかった。

それは、イリヤ・ツエラン調査兵が世界の謎の一端を知ることになる、数ヶ月前のことであった。

クルト・ウエルナーと、壁を隔てた世界で生きていたことなど、こ

のときの彼は知るよしもない。

まだ俺が幼く、あの屋敷にいた頃のことだ。

屋敷の敷地の中にあつた湖のほとりで、その人はよくぼんやりと座っていた。

「お父さんには内緒だよ」

たかだか使用人のせがれなんぞに、彼はいつも菓子を握らせてくれた。色とりどりの、ガラス玉のような丸くて甘い菓子は、自分のような身分の者では決して口にすることができないものだと知ったのは、屋敷を家出同然に出て訓練兵に入ってから後のことだった。

「ほんの束の間のもでも、安寧と平和は何よりも代え難い宝だと私は思う。それは人の愛だけが成せるものだ」

優しく穏やかな彼は嫌いじゃなかったが、その彼の主張と、それを支持する屋敷の一族や、父親のような使用人の大人たちは大嫌いだった。

こんな、息の詰まるような退屈な日々は嫌だ。俺はいつもそう思っていた。

だが。

そうは思っていたが、

「この世界で一番偉いやつは、力の強いやつだ。弱いやつはクソみたいな人生を、ウジ虫みてえに生きてくだけだ。なあ、おい、クソガキ。てめえはどっちだ。クソ野郎で死ぬか、大いなる夢をもって生きるか。どっちだ」

あの侍衛の男の言っていたことは極論だと、今でも思う。世の中、力だけがものを言うわけじゃない。どんなに強くなつたって、偉くなれるわけじゃない。

「おい、クソガキ。何か文句があるなら言え。今なら聞いてやる」

目の前で、尊敬する上官が俺を見上げてそう言った。自分より数十センチは小柄なはずなのに、その上官の威圧感たるや。

その鋭い視線と口汚い口調は、幼い頃、屋敷の主人の隣にいたガラの悪い護衛の男をなぜか彷彿とさせた。

「いえー異論ありません!!」

103期訓練兵の中で最も美しいと評された敬礼で、屈服の意思を示す。

その上官、リヴァイ兵士長は、「ならいい」と冷たく言い放った。

執務室の主人であるエルヴィン団長が、柔和な笑みを浮かべてひとつ頷いた。

「異論なければ早速本日から、君たちには新しい配属先での任務に入ってもらおう。ユデイはリヴァイ兵士長率いる特別作戦班へ。イリヤはクシエル率いる研究班だ。君たちの働きを期待している」

あの男は、この世界は力が全てだと言っていたが、きつとそれは真理じゃない。

それが真理ならば、ユデイではなく、巨人討伐数の多い俺が、あの憧れのリヴァイ班へと入れたはずなのだ。

※※※※※

「えらく浮かない顔だな。そんなにこの配属が不服か」

トロスト区内にある、調査兵団本部の廊下で、一人の兵士がその少年兵の様子を見ながら可笑しそうに笑った。

少年は、あの奇跡の生還劇をほんの三日前に果たしたばかりのイリヤ・ツエランである。

帰還後、その早朝まで調整日として休暇を与えられていたイリヤとユデイは、それぞれ急な異動を団長直々に言い渡された。

同年代の兵士達は皆、その意外な異動に驚きの声を上げていた。急なそれだったというだけではない。

十年に一人とされるほど、成績優秀なイリヤではなく、一般的な力量のユデイがあのリヴァイ班へと配属されたことは、大きな驚きだった。

しかし、おそらくは生還劇の功績がそれぞれにあるのだろう、と噂された。

もう一人の生還者、クルト・ウエルナーの存在については、誰も口にしなかった。

調査兵団の機密情報を買っていた容疑で捕らえられ、脱退させられたということだけイリヤは耳にしていた。

三年間、血の滲むような訓練を共にした同期だったが、その別れはあつけないものだった。

彼が帰還後すぐに地下牢へと連行されてから、イリヤは彼に会っていない。

「クシエル副官は団長付きの仕事だけじゃなくて、文献資料をもとにした歴史研究もしておられる。その研究の必要性は、ハンジ分隊長の研究よりも理解者が少ないが……。エルヴィン団長が考案した長距離索敵陣形も、クシエル副官の研究が下敷きになってる。俺たちの任務はわかりづらいが、非常に大切なもんなんだ。わかるか？イリヤ」

「はい。エーミールさん」

長身のイリヤと肩を並べて歩くその長髪の男は、目尻の皺を深めて笑った。女好きのしそうな、整った顔立ちのその上官は、シガンシナ陥落前からの古参兵である。

朝一番の今日の任務のため、イリヤを引き連れて地下へと続く階段を下りる。

湿気が多い地下は、どこかかび臭い。階段をおりていけば、すぐに朝の爽やかな光は遠のいて、夜を思わせる闇と壁にかけられた松明が世界を彩る。

階下にまず見えた重厚な扉の前でエーミールは、その笑顔を引つ込めて、厳しい表情でイリヤを振り返った。

「俺たち研究班の仕事は多様だ。その多くはヨゴレ仕事だと覚悟してほしい。イリヤ。この仕事については口外するなよ。幹部しか知らない機密事項だ」

ヨゴレ仕事。

イリヤが疑問を覚えるより早く、エーミールは彼の目線から逃れるように性急に扉を開けた。

ぎい、と軋んだ扉の音が地下の壁に反響して響く。

そこは、地下牢だった。

「クシエル副官。イリヤをお連れしました」

地下牢の鉄の格子の前に、数人の屈強な体格のいい兵士たちが、憲兵団の持つ銃を肩にかけて立っていた。そこに、一際小柄な女性兵士がいた。

「イリヤ。よく来たね」

地上にいた時と同じような、朗らかな笑顔で彼女が振り向いた。

エーミールに促されたイリヤは地下牢へと足を進めて、格子の中に

恐る恐る視線をやる。

「……………！クルト！！」

地下牢のベッドの上で後ろ手に拘束されて座らされているその姿は、数日前、共に死地から帰還した仲間だった。

「クルト！お前、」

「イリヤ」

痩せ細って正気を失った表情の同期に声をかけようとすれば、それは笑顔をたたえる女性兵士に遮られた。

「……………これは一体……………」

「数週間前から、兵団内部の機密情報が漏洩したと思われる事案がいくつかあった。おそらく、王都の調査兵団に反感を持つ貴族が絡んでいるらしいと、兵団内部で怪しい動きをする人間を探してたんだ」

「それが、クルトだと……………？」

「ああ。怪しいと睨んでいたんだが、先日の壁外調査での発言で確信した。「報告」とは、一体誰に何のためにするのか……………。先程からずっと聞いてるんだけどね……………。なかなか口が硬くて答えてくれない」

「参った、とクシエル副官はまるで日常会話の延長のような軽妙な動作で肩をすくめた。」

「――壁外に出る前に報告しておけば。」

それは、確かあの時。巨人に囲まれて死を覚悟した時のクルトの言葉だ。

副官はあの混乱時に、クルトの漏らしたあの嗚咽を聞いていたらしい。凄まじい地獄耳だ。

「さてイリヤ」

くるりと振り返って、クルトからイリヤへと向き合った副官が、顔で彼の名を呼んだ。朗らかで可愛らしいとも形容できる表情だが、周りの状況との不整合さに、悪寒がイリヤの背中を走る。

「私の班に来てくれてありがとう。歓迎するよ。新たな班員となったあなたに初任務だ」

笑顔を深めた彼女の弾んだ声が地下牢に響く。

「クルトから繋がっている貴族の情報を聞き取れ。尋問で心もとなければ、「それなりの対応」も許可する。クルトと同期で、兵団の中では彼と交流の深かったあなたならできるだろう?」

嬉々とした彼女の声に、周囲の兵士たちは黙して厳しい表情を崩さない。

「……は?」

「さあイリヤ、入りなさい。クルト。お友達が来てくれたよ。彼に不快な思いをさせたくなければ、早く喋ってしまいなさい」

躊躇うイリヤの背中を、エーミールが無言で押して地下牢の格子の中へと入れた。

困惑に汗が身体中から吹き出るのを感じながら、イリヤが振り向けば、打って変わって冷たい表情の副官が、「命令だ」と冷酷に言い放った。

イリヤの手が震えだす。

彼の目の前で、息を失ったクルトが座っている。あの、臆病でいながら優しい霧囲気の同期は、もはやどこにもいなかった。

「クルト……」

名を呼べば、罪人の少年はうろんげな視線をイリヤに向けた。

「おい、ウソだろ……。お前が、そんな。お前はいつだって真面目だったじゃねえか……。兵団を裏切ったなんて……。ウソだろ……」

震える声で言ったイリヤに、クルトは何も言わず、ただ気だるそうに視線をベッドの上に戻しただけだった。

まるで、もうイリヤを見ることすら疲れた、とでも言うような態度に、イリヤは格子の外へと弾けたように向かった。

「副官!!こんなことはおかしい!!彼の拘束を解いてやってください!!彼は罪人じゃない!!クルトは何も言わないじゃないですか!あんたが間違ってる!!」

閉じられた格子の扉を掴み、じっと中を観察していたその女性へ掴

みかかるとかのようにイリヤは叫んだ。

鉄の冷たい格子ごしに、黒くて濡れた瞳が、イリヤの黄金色の瞳を見据える。何の感情も読み取れない黒は、まるでガラス玉のように冷え切っていた。

「クシエル副官!!!」

再度イリヤが叫べば、ようやくその女性は口を開いた。

「答えないと言うことが何よりの証だ。本当に無関係ならば、この状況から逃れるために、何でも口にして命乞いするだろう」

「そ、そんな……」

「イリヤ」

女が名を呼ぶ。

彼女は、あのシガンシナ陥落の際の英雄のひとりだ。

聖母のような優しさと、英雄たる勇敢な行動で、シガンシナに取り残された人々を助けた女神だと、人は言う。

その女神は、イリヤに命令した。

「イリヤ。もう一度言う。クルトから情報を聞き出せ。「それなりの対応」も許可する」

それは、拷問も辞さないとする命令だった。わざわざその非人道的な悪魔の所業を、女神は同期のイリヤに成せ、とのたまったのだ。

イリヤに注がれる、屈強な兵士たちの無言の視線。目玉が彼を見つめる。おののいて振り返れば、罪人とされた少年の暗く淀んだ目玉と視線が合った。

イリヤの中で、何か音が立てて崩れた。

「おかしいだろ……」

「イリヤ？」

「おかしいだろ！こんなのおかしい!!あんたは女神様じゃなかったのかよ!!こんなことして、いくら裏切り者かもしれないねえからって、許されんのかよ!!俺は嫌だ!!あいつは俺の友達だ!あんたらなんかの命令なんざ聞か!!」

唾が飛ぶような勢いで、イリヤの怒声が地下の中でこだまする。

は、とイリヤが我に返ったときには、すべて後の祭り。

上官への侮辱ともとれる発言に、兵士たちは眉間に皺を寄せて彼を睨みつけていた。

咎めるようなその視線を寄越さなかったのは、その罵声を浴びた当の本人、クシエル副官だけだった。

彼女はきよとんと、まるで驚いたかのように大きな目をさらに見開いて、イリヤをまじまじと見つめた後、ふは、と場違いに少し笑った。

「そうか。それがあなたの答えだね」

「あ、…あ、いや、」

「遠慮しなくていい。わかったよ。出て良い。今日はこれで終まいにしよう。皆、通常任務に戻ってくれ」

冷たい鉄の格子扉が、音を立てて開けられる。逡巡するイリヤの手をクシエルが引いた。

「エーミール。イリヤに通常任務の説明をしてやってくれ」

「はっー!」

言う彼女は穏やかな表情である。周囲の兵士たちも、その上官の態度に任務の終わりを察し、イリヤに向けていた厳しい視線を解いていた。

急に変わった空気についていけず、イリヤは困惑する。そんな少年兵に、副官はひとつだけ「悪かったね」と労いの言葉をかけた。

「私は少し残る。皆、先に上がってくれ」

その言葉に数人の兵士が躊躇いを見せたが、エーミールの催促に、彼らは渋々といったで地下牢の扉をくぐっていった。

イリヤが最後に扉を出ようとしたとき、クシエルが彼を呼び止めた。

「確かあなたはハンジ分隊長の第四分隊所属だったね」

「……それが何か?」

「彼女は言つてなかったかい？」我々の目に見えているものと、本質は違うんじゃないか」って」

言う副官の表情は無である。イリヤはその黒い上官の真意がわからない。

「どういう意味で……？」

「目に見えているもの。噂に聞くもの。それらを盲信することは物事の本質を見逃すことになる。「女神様」と言われるものが、本質もそうだとは限らない。その逆も然り、だ」

言つて、視線を牢の中へと移す。その牢の中では、先程と打つて変わった、まるで人を殺さんばかりのギラギラとした瞳で、彼女を睨みつけるクルトの姿があつた。

「クルト、」

「イリヤ。もういい。行け」

今度こそ冷たくクシエル副官は言い放つて、イリヤはためらいながら、その牢を後にした。

※※※※※

がちりと古い扉が閉まる音が地下牢の石の壁に響く。

ふう、と息を吐いたのは女である。彼女はおもむろに牢の中に入り、中に設置された机の引き出しから長手袋を取り出した。

自由の翼の上着を脱ぎ、立体機動のホルスターの下に隠された黒い小銃を机の上に置いて、腕まくりをする。

「実は団長からは、あなたに危害を加えるような真似は寄せと言われているんだ。調査兵団としては、容疑者と言えども、暴力的なことは避けたいのが本音だ」

手袋をして、彼女は拳をひとつふたつ握った。

兵団のズボンのポケットから、小さな金具を取り出して、手袋の上から指にはめる。

「だから、これからすることは調査兵団としてではなく、私個人としての行動だ。よく理解しておいてくれ、クルト」

一歩、彼の座るベッドへと近づいた。その女の眼に、ぎらりと光る得体の知れない感情があった。

その光に、初めてクルトが抵抗するように声をあげた。

「さあ、話をしよう。この壁の中であなたと私しかできない、壁の外の話だ。故郷の話に花を咲かせようじゃないか」

その日、地下牢から副官が出てきたのは、それから数時間後。陽も高く上がった頃だったという。そこで何が行われていたのか。それを知る者は誰もいない。

その日、イリヤは己の不甲斐なさに絶望していた。

クルトが地下で尋問を受けている。それも非人道的とも取れるやり方で。少なくとも、あの副官の目は決して冗談で拷問を命令したようなものではなかった。あれは、本物だ。

しかし、三年間苦楽を共にした同期の状況に、彼は何事もできずにいた。いや、何事も考えないように、なるべく関わらないようにその日1日を過ごした。

班の先輩であるエーミールに副官率いる研究班の任務を教えてもらい、午後からは訓練を行ない、そのあとは研究班に回ってくる雑多な書類整理を行なった。

その間中、彼はほとんどクルトを思い出そうとしなかったし、早朝に見せられたあの光景も、頭の片隅に追いやって、埋没させて過ごした。

仕事が忙しかったからというわけでもない。ただ単に、ここでクルトの保護を主張することは、兵団内での立場を危うくするだろうという保身故だった。

その浅ましくも正常な人間としての保身が、彼の内面に剣を立てたのは、クルトと特別な仲にあったユデイの姿を見たときだった。

ユデイはクルトやイリヤより一年先輩の女性兵士である。先日

壁外調査から共に生還した優秀かつ幸運な兵士である。そんな彼女が自分が最も憧れていた、リヴァイ兵長率いる特別作戦班へ配属されたことに暗い嫉妬心がなかったわけではない。

しかし、彼女の凜と澄まされた白い横顔に、訓練で流した汗が一筋落ちるのを見たとき、彼は不意に己の不甲斐なさと卑しさに苛まれた。

要するに、ユデイの姿を見て、クルトへの罪悪感が爆発的に発露したのだ。己は不甲斐なく、浅ましい人間だ。胸の内部をまるでじりりと焼き尽くすようなその感情に、イリヤは夕食の終わり、ユデイに声をかけてしまった。

「クルトが地下牢で尋問を受けている」

突如イリヤに呼び出されて、兵舎の脇に連れてこられたユデイは、その知らせに一瞬、青い双眸を大きく見開いた。

「そう」

しかし、イリヤの予想に反し、彼女は静かに頷いただけだった。恋人の報せに恐ろしいほど冷淡に頷いた彼女に、イリヤは「夜なら見張りが薄い。クルトを逃すことができるかもしれない」と焦るように言った。そのイリヤの言葉に、ユデイは高く澄んだ声を尖らせて、

「何を言ってるの」

と驚いた。周囲を見渡して声を落とした後、「あなた何を言ってるのかわかっているの」と再度問うてきた。

「だから、クルトを逃すんだよ。だってあんなこと、お前許せるのか

よ」

「何を言ってるのよ」

ユデイは今度はその白い顔を歪めて、咎めるように一息に反駁した。

「あなた、それが規律違反だって自覚あるの？ 第一、逃すってどこに？ この壁の中のどこに逃げるっていうのよ。あなた、クルトと一緒に一生兵団から逃げることできる？ 私にそれをやれっていうの？」

空の色を収めたような眼球が、透明の涙を湛えている様子を見て、イリヤはようやく己の問いかけの不毛さに気づいた。

「……なんでそんなこと私に言ったのよ」

どんなに絶望的な状況下でも、調査兵として冷酷かつ冷静な姿勢を崩さないユデイの声が震えた。彼女が逃げるようにその場を立ち去って、兵舎の脇に夜色の影が濃厚に落ちる。兵舎の中の喧騒から離れたその影に立ち尽くしながら、イリヤは無責任な己の発言を後悔した。

そう。彼らには、最初から選択肢などなかったのだ。

イリヤは己の浅薄さに堪えきれず、それを振り払うためだけに考えなしにユデイに告げてしまったのだ。それは結局、ユデイの高潔な調査兵としての誇りと、恋人を想う柔らかい想いを傷つけただけだった。

その夜、イリヤは、ユデイの綺麗な瞳からこぼれ落ちた涙のかけら

が、地下牢に落ちて、クルトの血となって石の床に流れる夢を見た。まるで粘土の中に閉じ込められたような、重苦しい夜だった。

クルトが逃亡したという報せがイリヤに届いたのは、翌朝のことだった。

\*\*\*\*\*

機密情報漏洩の容疑のため、地下牢にて尋問中であつたクルト・ウエルナーが逃亡した。

その報せをうけて地下牢へと団長直々に召集されたのは、クルトの上司であつたハンジ・ゾエ分隊長、尋問をうけていたクシエル副官とその班員のエーミールとイリヤ、そして夜間に地下牢の見張りをうけもっていたリヴァイ兵士長とその部下のエルド・ジンとユディだった。

イリヤはエーミールに、ユディはエルドに夜の行動を細かく尋問されたことから、おそらくクルトの逃亡ほう助の疑いをかけられての召集だと知れた。

地下牢は、一夜にしてその顔を一変させていた。

イリヤが上官たちに連れられてユディと並んでそこに入ったとき、まず鼻腔をついたのが鉄臭い血の臭いだった。

地下独特の湿気た空気の中に、濡れて錆びたような鉄が香っていた。エルヴィン団長、リヴァイ兵士長とハンジ分隊長、そしてクシエル副官が検分している地下牢の中に目をこらせば、そこに据え置かれ

たベッドの上に、赤黒く変色した血痕の跡があった。

よく見れば、冷たい石の上にもいくつか血痕が散っていた。出血量は致死にいたるものではないが、決して少なくない血痕に、ユデイがう、と口を覆った。青い顔の彼女にとつきに手を伸ばしたが、気丈にもユデイは「大丈夫」とその手を払った。

「逃亡をほう助した者にやられたのか。それとも逃亡する前に別の者にやられたのか……。調査兵団の地下牢でとんつでもないことになっちやったね」

やけに緊張感のないような声色でそう言ったのは、ハンジ分隊長である。

昨日、夕刻近くに最後の尋問を終えたクシエル副官のあとをうけて、リヴァイ兵長が地下牢へつながる地上の扉前での見張りをうけもった。それが、クルトを見た最後であったとクシエル副官は述べた。リヴァイ兵長によると、夜半は彼の班員と交替で見張りを行っていた。その見張りに穴があいたのは明け方近く。リヴァイ兵長がひとり見張りを行っていた際、少しその場を立ち去ったときだけだった。

エルヴィン団長は、その兵士長あるまじき行動に苦言をていしたが、当の本人は「すまなかった」と悪びれるでもなく述べた。

「し、しかし……エルヴィン団長」

逃亡ほう助の犯人は誰か、と思考を巡らせている団長たちの姿に、一抹の不安を覚えて発言したのはイリヤである。若輩者の許可を得ていない発言に、エーミールが彼を止めようとしたが、エルヴィン団長は咎めなかった。

「クルトは……、まずはクルトの安否の確認が重要ではないでしょうか。こんな怪我……いったい誰が……早く見つけないと!」

「早く、見つけないと?」

探るような、醒めた蒼の眼球が、イリヤを見る。エルヴィン団長のそれは、ユデイと同じく空の色をしているのに、こちらはひどく冷たく硬く、怖い色だ、とイリヤは子供のようにその青に震えた。

「え、……早く見つけ、ないと……だって、早く手当しないと、」

「手当てならしたから問題ない」

団長の問いの意図がつかめずしどろもどろになっていたイリヤを遮ってそう言ったのは、クシエル副官だった。

ひとつだけ灯された松明の炎が照らす闇の中で、こともなげにその副官は無表情にそう言った。一瞬、その場に沈黙が落ちた。ちりりと、松明の焼ける音だけが響く。

「え?」

「クシエル。ではお前が「これ」をやったのか」

団長がベッドの上の赤い染みを顎で示せば、彼女ははい、と静かに頷いた。

「尋問中、必要と判断して行ないました」

「私は暴力を許可した覚えはないが」

「はい。私の勝手な判断です。申し訳ございません」

まるで従順な人形のように謝罪する黒髪の副官の内面は、その表情からは一切読み取れない。その心のあり方が、行動の意味が理解できない。

「副官。どうして、クルトにそんなことを……」

心底わからず、イリヤが問えば、問われたクシエルは首を傾げて、

「どうしてって、質問に答えなかったからそうした。それ以外にないだろう?」

と心底わからない、とでもいうように言った。

「クシエル」

そんな彼女の名を呼んだのは、先ほどからずっと押し黙っていたりヴアイ兵長だった。彼の声に副官が振り向いた瞬間、突如としてその細い体が宙に浮いて地下牢の格子にしたたかに打ち付けられた。

その場にいた者たちが、リヴァイ兵長が彼女を蹴り上げたのだ、と気づいたときには、その鋭い蹴りが彼女の細くて薄い肩口を再度蹴りあげていた。

「リヴァイ兵長!!!?」

格子の外で驚愕の声をあげたのは、彼女の腹心でもあるエーミールだった。エルドもまた、己の敬愛する上官の突然の行動に、驚きの声

をあげた。

「おい、クシエル。腹に力入れろ」

リヴァイ兵長の声に、咄嗟に防衛本能で両手で腹をかばった彼女の左頬に、強烈な右足の一撃が入った。「ああ、悪いな。顔だ。腹じゃねえ」とこともなげに言いながら、衝撃で倒れて動かない彼女の髪を掴み上げた。

その鋭い三白眼が、彼女を見つめる。皆が一方的に暴力を受けたその女性に視線をやると、その真つ黒な瞳が、まるで熱を帯びたような眼光をもって、彼を睨みつけていた。

壁外であれほど信頼を寄せ合っていたように見えた二人の姿は、そこにはない。

「オイ、クソメガネ、ユデイ。どうする？気がすまねえなら、俺が代わりにもう一発くれてやってもいいが。……それとも、お前らが直接やるか？」

突然呼ばれたユデイが、驚いたように肩を震わせた。クソメガネ、と呼ばれた分隊長は、開ききった瞳孔をそのままに、笑い声をあげた。その声が乾ききっていて、そこに部下を貶められた彼女の分隊長としての怒りが抑えられていることに気づき、イリヤは背筋を凍らせた。普段温厚そうに見える分、ハンジ分隊長の怒りは薄ら寒い。

「いいよ。十分だ。まあ、暴行された私の部下の分には及ばないとだろうけど」

彼女が冷たく見下す視線の先で、リヴァイ兵長が手を離した。バランスを崩したクシエル副官が、四つん這いになって咳き込めば、冷た

い石の上に粘り気のある赤い血が口から一筋落ちた。エーミールがそれを見て、すばやく牢の中に入ってきて、彼女の背中をさすりながら布を差し出す。

「……しっかし、シガンシナで女神と言われた彼女がこんなザマとはね。エルヴィン。この落とし前はとうつけるつもり？これはあなたの監督不行き届きだろ」

厳しい声で分隊長が、その怒りの矛先を団長へと向けた。確かに。内部の機密を漏れさせた上に、その容疑者を暴行したのち逃亡させるとは、調査兵団の管理体制そのものを問わざるを得ない事態である。

調査兵団の責任者たる男は、ふむ、と頷いたのち、「彼女を処罰する時間も労力もない」と言つて、「しかし、確かに私も、クシエルもリヴァイ兵長も、それぞれ責任を負う必要はあるな」と述べた。

「オイオイオイオイ。なんで俺も入ってる」

「クルトの逃亡にはお前の見張りの怠慢が大きい。当然だと思うが」

「はっ。それで調査兵団のトップと俺が責任をとるってか。悠長なものだな。調査兵団ってのは」

それもそうだ、とイリヤは頷く。青い瞳の団長は、抑揚の少ない声で、

「イリヤの言う通り、クルトの安否確認は最重要課題だろう。ハンジ。この件についてはお前の分隊に任せる。クシエルやリヴァイにはもちろん責任をとってもらわねばならないが、彼らに謹慎させるような真似はできない。その代わり、彼らには最も苦手とする任務をになっ

てもらおうことにしよう。ハンジ、それで手を打とう。この不祥事は、次回の壁外調査に必ず活かしてみせる」

団長の提案に、分隊長は怪訝そうに首をかしげた。団長が少し笑ったのを見て、リヴァイ兵長はその不機嫌そうな顔をさらに歪めて、口を曲げた。シガンシナ陥落の際の女神は、黙ったままその男の口から出される言葉を、じっとさながら犬のように待っている。

「豚貴族どもへの接待だ。今度の調査では再度巨人捕獲作戦を実行しよう」

「え、でもそれは資金が不足してるって、この前、」

「だからこそその接待だ。大丈夫。クシエルとリヴァイと協力して、必ず金をもらってこよう」

だからクルトの消息を頼んだ、と笑いかけた団長に、ハンジ分隊長の表情が一変したのは言うまでもない。

彼女があげた歓喜の声に、リヴァイ兵長はわずかに舌打ちし、エルドやエーミールは冷や汗をかいていた。イリヤがちらりと地に伏せるクシエル副官を盗み見たが、彼女は顔を伏せていてその表情はまったく見えなかった。

イリヤの隣で、ユディが少しだけ震えていたのは、ハンジ分隊長の歓喜に踊る姿に圧倒され、誰も気がつかなかった。

### 三章

#### 切り裂きケニー

一

昔、あの男は「神の慈愛」をイリヤに説明したことがある。彼曰く、その慈愛とは「クソを等しくクソだと認識すること」だと言った。

その男の言語力は子供ながらにわかるほど乏しく、イリヤにその意味を解することはできなかつた。後日、使用人長である父の目を盗んで屋敷の当主に問うたところ、その優しく澄み切った瞳をした当主は「彼の言う通りかもしれない」と笑った。

イリヤはまだ、「慈愛」なるものを全く解していない。

否、それが実は空想上の概念で、決して現実の世界ではありえない無意味なものなのだ、と彼は身に染みている。そういう意味では、「慈愛」などないということを知っているのかもしれない。

そんな哲学的思考に逃避しながら、イリヤは豪華絢爛を尽くしたその空間で、こっそりとため息をついた。

そこは王都のダリス伯爵の屋敷であつた。富を誇示するような豪華な内装の大広間で、見たこともないような美しく着飾った女と男が談笑し合っている立食パーティーなるものだった。

そこだけ見れば、一般的な貴族どもの豪華をつくした会合なのかもしれないが、奇人として名高いダリス伯爵の開いたそれは、一風変わったものであつた。

参加する男女の顔には、それぞれに仮面が施されている。おそらくそこに集ったものは社交界のなかで顔の知れた者同士であろうが、それをつけている限りは、己の名を隠し、そして相手の名を知らぬふりをする。そんな趣向の会合であった。

数十人が集うその大広間の空間で、一様に仮面の下で笑う貴族どもに、イリヤとユデイとは薄ら寒い気持ちを押し殺しながら、広間の隅で無口な壁に徹していた。

クルトが逃亡してから十日余りが経っていた。

上官の護衛の任でそこにいる彼らは、屋敷の当主曰く「無粋な」兵団の礼服を身にまとい、仮面をつけずにそこに立っていた。

イリヤが見る先には、薄墨の礼服を身につけた団長と、白いドレスで飾り付けたその副官がいる。仮面をつけていようとも、団長の朝焼けの色に似た金色の髪と、副官の夜の闇を固めたような短い黒髪はイリヤにとって馴染み深いものだ。

団長の相手役に、とドレスまで充てがわれて招待された副官は、箱馬車のなかで見せていた機嫌の悪い表情はひっこめて、仮面の上からでもわかるほど愛想のいい笑顔を浮かべている。

団長は、言わずもがな。仮面の下は、貴婦人方に見せる甘い溶けるような笑顔なのだろう。

「イリヤ。ごめんなさい。少し気分が悪いから、席をはずすわ」

不意にそう言ったのは、隣で壁と化していたユデイである。護衛を嫌う貴族の意向を汲み取り、今回たった二人だけつけられた護衛のひとりだった。

イリヤが見れば、彼女は気持ち悪そうに顔を歪めている。どうやら人と香水と、酒の匂いに寄ったらしい。ローゼ内地の山奥で生まれ育ったという彼女には、この空間はどうにも慣れないものだろう。

「大丈夫か」

「ええ」

イリヤは彼女を介抱しようと手を伸ばしたが、それはあっけなく拒まれて、彼女はするりと逃げるように大広間の扉から外に出て行ってしまった。護衛などあつてないようなものだから、持ち場を離れるのは大して問題ではないだろう。

それよりも、イリヤは彼女の介抱のため、という理由でその場から逃れる機会を逸してしまい、もう一度ため息をついた。

「神の慈愛」など幻想だ。

だってそんなものが存在していたならば、なぜこんなにもこの場所には酒と甘い菓子と、そして分厚い肉が並べられているのが説明できない。

この世界は理不尽だ。そしてどこもかしこも壁だらけだ。その壁の内側に入れば入るほど、多くの利を得ることができる構造になっている。

「おい。大丈夫か」

再び壁に徹して、思考に耽り始めていたイリヤに唐突にかけられた

声に、彼は思わず背筋を伸ばした。

「リヴァイ兵長」

簡素な黒い仮面を律儀につけたその上官が、いつもよりも不機嫌そうに眉をひそめてそこに立っていた。彼もまた、黒い礼服に身を包んでいた。首元をきっちりと締めているクラバットだけが、いつもの彼であった。

「ユディは出たのか……。まあこんなクソみてえな場所で仕方ねえが……。おい、イリヤ。お前はあいつをしっかり見ておけ」

彼が顎で指し示した先では、白い羽の装飾が施された仮面をつけたクシエル副官がいた。露出は少ないものの、白く艶やかなドレスを身につけた彼女は、常の兵士然とした雰囲気はなりをひそめ、まるで妙齢の女性らしい色気を発しているのが、まだ若いイリヤにも見て取れた。まるで花嫁のように清楚な格好をしながらも、どこか手慣れた娼婦のような雰囲気すらある。単なる副官である彼女がドレスまで充てがわれて招待された理由の一端が、なんとなくわかった気がした。

「クルトの件だけじゃねえ。自分の女でもねえやつに服を充てがうなんて、変態のやることだ」

仮面の下から、リヴァイ兵長は剣呑な視線を彼女の方へと向けた。そこには、当主であるダラス伯爵の子息が彼女に声をかけているところだった。ちょうど、彼女をエスコートしていたエルヴィン団長が、貴婦人たちに取り囲まれて彼女が手持ち無沙汰になっていた頃合いを狙っていたらしい。子息は、ごく自然に彼女の腰に手をまわし、外に連れ出そうとしているようだった。

「リヴァイ兵長」

「自由の翼をお持ちの方かしら？」

クシエル副官の様子に焦ったイリヤの声は、可愛らしい柔らかかな声によつて遮られた。イリヤが呼んだ上官は、その声に振り返り、そばに寄ってきていたそのうら若い女性に向かい合つた。言葉少なに彼が頷くと、仮面の下の頬を薄く染め上げて、その女性が歓声をあげた。

ここに集まつた貴族たちは、どうやら調査兵団に悪い感情を持つものだけではないらしい。少なくとも、貴婦人たちは、団長や兵長に、まるで流行りの舞台の役者に向けるような眼差しを一心に注いでいた。仮面とはなんぞや、という具合である。

彼らがここにきた理由は金策である。ここで彼女たちを無下に扱うことは団長命令で禁じられていた故か、それとも元来の律儀さ故か、それともそれとも案外女好きなのか。リヴァイ兵長は彼女の発言に寄り添うように頷きを返してた。浮いた噂のない兵長の、兵団では決して見ることでできない姿である。

イリヤがその様子に背筋を固めていると、リヴァイ兵長はちらりと鋭い視線を彼によこしてきた。

——仕事をしろ。

そう言われた気がしたのは気のせいではないだろう。

は、と我に返ったイリヤが視線をむけた先には、クシエル副官と子息の姿はなかった。

\*\*\*\*\*

ダリス伯爵からの社交場への招待状は、エルヴィン団長とリヴァイ兵士長宛に届けられた。その類の誘いは決して少なくない。ウォールマリア陥落以後、その役割を求められるようになった調査兵団をもてなすことは、貴族たちにとっても利となることが多いようだった。

しかし、そのダリス伯爵の誘いは、他の貴族のそれとは少し違っていた。

そのひとつは、クルト・ウエルナーが情報を漏らしていた貴族、というのがこのダリス伯爵である可能性が高いということ。

そしてもうひとつは、エルヴィン団長の相手役として、クシエル副官が指名されており、さらには彼女宛に白いドレスまで招待状とともにあてがわれていたことだった。

前者はエルヴィン団長にこの誘いを受ける大きな理由となった。我らが団長様は、敵地に策を弄して揚々と乗り込むような性質の男だ。

後者は、リヴァイ兵長の機嫌を損ねさせる要因となった。その潔癖な男は、「気持ち悪い」と苦々しく言い放っていた。

——確かに、気持ち悪いな。

クシエルは腰回りを撫で回るその男の手に、他人事のように思った。大広間から外れた、薄暗い廊下の端である。廊下の壁に等間隔に備えられたあかりから逃れるように、男は彼女を影の中へと連れ込んで白いドレスの上から、その兵士らしく鍛え上げられた身体を撫で回していた。

「ご子息。こんなところでは」

「クシエルさん。私のことはテオと」

「テオ様」

長いドレスの裾をまくりあげて、太ももに直接触れてきた細く長い指に、思わず彼女は手を添えてそれ以上の侵攻を防止しようとした。男の荒い息が首元を襲って、悪寒に思わず目を閉じた。

「テオ様」

「どう、しましたか」

彼女には、仕事がある。

「このドレス。貴方が見繕ってくださったの？」

「……ええ。とても似合っている。以前、王都に来ていらしたときに貴女に目を奪われてから……この時をどれほど夢に見たか」

ぐ、と身体を寄せられて、思いの外強い力で、左足を持ち上げられた。高いヒールで片足で立つバランスの悪さに気をとられた一瞬に、男の無遠慮な左手がいきなり下着の中に侵入してきて、思わずひとつ上ずった声をもらった。

仕事をせねば。

そう頭の中で強く声をあげ、彼女は焦る気持ちを押し込めようとする。そうして冷静さを保とうとする一瞬が、男の指を彼女の中に許し、首元をにちりと焼ける口づけを甘んじた結果を招いた。

——情けない。

彼女はぎゅ、と目をつむり、気持ちに反してわずかに漏れる女としての声に、彼女の想う男の顔を思い浮かべて心底泣きそうな心持ちになった。

\*\*\*\*\*

イリヤはその情景に、思わず絶句したまま、しかし全く目をそらすことなくしつかりと目に焼き付けるように見ていた。

廊下の脇、屋敷の奥へと続く曲がり角の先で、女の声が甘く漏れている。窓の外から廊下を照らす月光と、壁にかけられた炎の光がわずかに届かないその暗闇の中で、男の背に隠されている女が噛み殺すようにわずかに鳴いている。

持ち上げられた白い足が、規則的に、蠱惑的に揺れている。男の手が、彼女の中心を揺さぶって、徐々にイリヤの耳にもその情事の音が聞こえてくるようだった。

「あ、」

ひととき大きな女の声が、ひとつの頂の瞬間をイリヤと、その男に教えた。女と、男の荒い息遣いがはつきりと耳に届いて、イリヤはつい鼻息を荒くした。10代も後半の盛りをついた彼にとって、それはなんとも言えない蠱惑的な時間だった。

初めて見るその情景にうっかり釘付けになっていると、男は抱えていた女の足を下ろし、己のベルトに手をかけながら、

「クシエルさん」

女の名を呼んだ。

その聞き慣れた名に女の正体を知ってしまい、マズイ、と彼がその場を立ち去ろうとしたのと、ごつりと鈍く寒気のするような音がして男がゆっくりとその場に倒れたのはほぼ同時だった。

「……クツソ……」

甘い声とかけ離れた、女の悪態が廊下に響く。その右手には、男のこめかみを殴ったと思われる黒い小銃が握られていた。

「ん？」

ずるりと倒れた男を鬱陶しそうに蹴り上げたその白いドレスの女性が、ふと廊下の先にいるイリヤに気づいて顔を上げた。その上官のと視線があつて、イリヤは青ざめて己の不遇さに心の中で盛大に泣いた。

「クシエル副官！断じて俺は！そんな盗み見ようとなんて！！」

「イリヤ。声大きい。怒らないからこつちおいで」

敬礼をしながら後ずさったイリヤに、彼女は手を招いた。おそろおそろ近づいてみれば、どこか独特の甘い香りが鼻腔をさした。それが何の匂いか考えるより先に、イリヤはどん、と強く胸を拳で殴って、再度敬礼で己の煩惱を殺した。

「つい殴っちゃった。まあ、大丈夫かな。よく酒を飲んでいたようだ

し。適当に口裏合わせてくれるかい?」

「もちろんであります!」

冷静に言った彼女の顔を見ながら言って、イリヤは思わず息をのんだ。彼女の頬には、すいたような茜がまださしている。潤んだ黒い双眸が闇にゆるりと光って、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

イリヤは決して年上は好みではない。しかも彼女はかなり年上だ。決してそんな趣味は彼にはない。しかし。

「イリヤ。少し向こうを向いていてくれる?」

は、と気づいたときには、彼女はドレスをまくりあげ、その白くて細い太ももに備えられたホルスターに小銃を戻しているところだった。

「……下着を、直したいんだけど」

「大っへん申し訳ございませんっ!!!」

再度敬礼をして、即座に彼女には背中をむけた。ここにクシエル副官だけでよかった。兵長や団長がここにいたならば、自分はただではすまなかったかもしれない。そう思いながら、心の中で自分の不憫さと男としての悲しい性に涙を流した。

「……情報を聞き出す前に思わず殴ってしまった。あなた、例のあれ、聞き出せた?」

「いえ、まだ自分も何も……」

衣擦れの音がしたあと、彼女の許可が降りてからイリヤは振り返って答えた。

「兵長と団長は大広間でご婦人のお相手をなさっています。ダリス伯爵の姿は広間にはありませんでした」

「となると、やはりあれは……」

「可能性はあるかと思いません」

そうか、と彼女は言ったのち、わずかに背中を丸めて口元を手で覆った。その様子に思わずイリヤが体の不調があるのか聞けば、彼女は顔を朱にそめたまま、黙って首を横にふった。

その男の声がイリヤの頭の上から降ってきたのは、その時だった。

「死に急ぎのクソ野郎がここで何してやがんだ？あ？クソがしてえならこつちじゃねえぞ」

幼い頃にイリヤに「慈愛」について説いた声、そのものだった。怪訝そうにクシエルがその瞳を細める。

おそろおそろ振り向いたそこには、長身の初老の男が月の光を背負って立っていた。

「……ケニー」

それは、イリヤが幼い頃に仕えていた一族の当主、ウーリ・レイスの近侍の姿だった。

愛と平等、そして平和を唱える者が集うその屋敷の中で、彼は異色そのものだった。彼は暴力を信じ、それを実行してきた男だった。その薄汚れた長い外套も、くたびれた革靴も、道化のように釣り上げられた口角も、そしてその口から紡がれる汚い言葉も、全てが異色だった。

屋敷の使用人の多くは、突如として現れたというその男を恐れ、遠巻きにしていたようであるが、まだ幼い子供だったイリヤは、周りの退屈な大人と違った彼にひどく惹かれた。彼は彼とて、存外子供の扱いに慣れていたようだった。今なら笑い話にもなるうが、実は結構他愛もない話をしてくれたことは昨日のことのように覚えている。

ただその男は、ふとした気安さを許さないような壁をしつかりとイリヤの間に張り巡らせていた。イリヤが甘えるように彼のもとに駆け寄れば、悪口雑言の嵐を浴びさせられた。また、稀に、子供でもわかるほど濃い血の匂いをまもって揚々と鼻歌を歌いながら屋敷をうろつくこともあった。

イリヤにとってケニーというその男は、単なる屋敷の従者の一人、というにはあまりに大きな存在であり、そしてあまりに全てが遠い存在でもあった。

「オイ。お前、ツエランの息子じゃねえのか」

「え、ケニー？…どうしてここに」

「イリヤさん？お知り合いですか？」

三人三様の質問に、その場に沈黙が落ちた。

男はイリヤの記憶とは異なり、小綺麗なスーツを身につけ、長い髪を後ろに流すようにしっかりと整えていた。いかんせん、その粗暴の悪さは表情にしみついていようであるが、その豪華絢爛な屋敷の中でも、異色さはなりを潜めているようだった。

男はその鋭い野生動物のような視線を、床に転がった伯爵子息にむけた後、「こりや、いったいどういう状況だ？」とクシエルに詰問するように問うた。

「例の場所へ案内してくださいと言ったださったのですが……どうやら飲みすぎたらしく、倒れてしまわれたのです。そこで彼が、イリヤさんが通りかかったもので……」

「……アンタは何だ。ここに紛れ込んだあの死に急ぎ集団の仲間か？」

「死に急ぎ……？ いえ、私はテオ様に招待された者でございます」

まるで、「調査兵団とは関係ありません」といった淑女然とした顔で事もなげにそう言った上官に、イリヤは心中で管をまく。先輩方が「全ての女は女優だ」と飲みの席で再三言っていた意味が何となくわかった。

ケニーはクシエルのその言葉に大げさに笑った後、

「このクソ子息の遊び女のひとりかアンタ！ ハッ!! 可哀想になあ。い  
いぜ。俺がこの汚物の代わりに案内してやる」

「え？ え？ ケニー？」

「テメエは来るなよ。こつから先は大人の時間だ。そんなダセエカツコしてる奴は入れねえんだよ」

言いながら、テオを軽々と担ぎ上げた男は、イリヤに顔を近づけてにやりと笑った。しかし、クシエルはそのイリヤの腕にしなだれるように寄り添って、

「駄目ですか。テオ様もそんなことになってしまつて……私、一人では心細いのですが」

「何だ、姉ちゃん。そいつあ兵士だぜ。あの場所には不釣り合いだが……」

途中で何かに気づいたのか、ケニーはまじまじとその鋭い視線を彼女の頭のとつぺんから足の先まで遠慮なく向けて、再びにやりと笑った。

「なるほどな。アンタも運がねえな。えらく辛そうじゃねえか。オイ、イリヤ。お前その服捨てろ。そんなダセエ兵服なんざ脱いでこい」

「は？？兵服を？」

「オイオイオイオイ。何度も言わせんじゃねえぞクソガキ。そのご淑女様はお前をご所望なんだよ。わかるだろ？盛られた薬は相当きつそうじゃねえか。趣味がいいぜ、このクソ子息も」

え、と腕にすがりつく上官を振り返る。

盛られた薬とは。

その内容を問うまでもなく、彼女が子息にされていたこと、そしてその彼女の表情を見て、経験のないイリヤでもすぐに察しがついた。

興奮剤によって高められた体をもてあそぶ彼女の頬が、先ほどよりもさらに赤らんでいた。地下牢でも冷静にクルトを尋問していた上官が、微かに息を乱していた。

\*\*\*\*\*

エルヴィンが言っていたことはつまり、こうだ。

ダリス伯爵は、調査兵団の機密情報を入手し、そこで得た情報を流して貴族どもに売っていた。調査兵団の情報は、様々な意味で高く売れる。兵団を良しとしない者にとっても、彼らを支援する者にとっても、それは有益なものだった。

それは超大型巨人の出現により、壁内の平和が崩されたことにより、唯一壁の外の巨人と戦う術をもつ調査兵団に、人類の矛と盾となることを望む声が高まったからだ。

自由を求めて翼を得た彼らに、壁の中の民のために死ねと人々が叫びだしたのは、まるで穏やかで波風すら立たなかった湖面に、大きな波紋が広がる様子にも似ていた。

今のところ、ダリス伯爵によって売られたと思われる情報によって、兵団に特別な損失は発生していないように思われる。しかし、それは今だけのことだろう。このまま捨て置けば、いずれ、兵団の損害となる事態は免れないだろう。

しかしエルヴィンは邪魔なものを切り捨てたりするような単純な男ではない。彼は、ダリス伯爵を己の手駒にすることを思いついた。

ダリス伯爵は、貴族を集めては違法な酒宴を催している。そんな暗い噂をどこで手に入れたのか。そのネタでゆすつて、パトロンにさせる。そんな計画を嬉しそうにリヴァイと私の前で話した彼の表情は、なかなか忘れられるものではない。あんなに無邪気な笑顔で、人を貶める計画を練る人間など、私は彼以外に知らない。

人を人とも思わぬような行ないを、「人類のために」という名目でやり遂げるような男だ。彼らしい選択だった。

そして私は、どうやらその限られた貴族だけが招待されるという酒宴の場に無事たどり着くことができたというわけだ。

ケニーという胡散臭そうな男の案内で、私と兵服を脱いだイリヤは、地下の大広間に案内された。大広間の入り口の給仕は、ケニーの顔と、彼に無造作に担がれたテオ子息を一瞥して、即座にその扉を開いた。

ケニーというこの男。

見るからに堅気ではなさそうだが、かといって貴族にも兵士にも見えない。ゴロツキというにはあまりに風格があるだろう。

腕を貸してくれているイリヤをちらりと見上げれば、彼は緊張のためか完全に目が泳いでいる。この少年兵と男は知り合いのようだった。訓練兵を首席で卒業した優秀かつ品行方正な彼のことだ。おそらくは、訓練兵になる前の知人となるだろう。

数週間前に見たイリヤ・ツエランの履歴書を記憶の中でもたどる。

彼の出自は確か、どこぞの貴族の使用人一家であったか。

地下に設けられたその大広間は、暗く怪しげな光に包まれていた。そこかしこで揺れるランタンの炎が、その酒宴の妖しさと、集う人間の昏い欲望を誘う。

どうやら広間の前方には舞台が設置されているようだった。見れば、数人の奴隷と思わしき人間が競りにかけられていた。人身売買だ。

いくつかのテーブルが備えられており、参加者たちはそこでそれぞれ酒を飲みながら、競りに参加したり、舞台に飾られたその商売品を眺めて楽しんでいるようだった。

ケニーはその舞台から最も遠い位置にあつた空いたテーブルにどかりと座り、テオをそこいらの給仕に適当に預けた後、私を隣の席に座らせた。

「さて。身体の調子はどうか」

「悪いです。これは何の薬でしょうか」

率直に問えば、男はぐい、と私の顎を右手で持ち、乱暴に顔を上げさせた。

「地下街で一時期流行したヤベエ薬だ。量を間違えば死んでしまうようなやつだが、うまく飲めばすぐに天国見れるような麻薬だ。男ならすぐおっ勃てちまうし、女ならアソコからぐずぐずに溶けちまうようなやつだぜ。テメエがそんな冷静に俺と話せてる方がオカシイつてくれえに、頭の底から湧いちまう即効性のあるやつだ」

男の長くて骨ばった指が私の耳をさすって、頬を撫でる。明らかに私の欲望を誘うような触れ方のわりに、その狼のように真意のつかめない瞳は、欲望を宿さず、試すような光が灯っている。

嫌がらせだ。

私の隣で、イリヤがたじろいだのを、手で制してやれば、男は面白がってそのかさついた指を私の口につっこんで、舌をなであげてきた。

そんな鬼畜じみた行為にも、薬がまわりきった身体がうずいて、頭が沸きそうになる。

「っと」

腹立ちまぎれにその汚い指を噛み切ってやろうとしたが、年の割に反射のいい男は即座に指をひいてしまう。舌打ちすれば、彼は心底嬉しそうに笑い声をあげた。

「なあ。おめえの名前はなんだ。所属は？ 貴族じゃねえな。やっぱりこのクソガキと同じ、調査兵团か？」

ぎらりと狂ったような瞳に射すくめられ、生理的な恐怖が背中を走る。まるで、初めて巨人に遭遇したときのような、明確な生存の危機を察した恐怖だ。

「俺、リヴァイ兵長を、」

「イリヤ！ 座っていなさい」

怖気付いて愚かにも助けを呼ぼうと席を立ちかけた部下を静かに

一蹴すれば、男はさらに嬉しそうに笑った。

「リヴァイ。人類最強ってやつか？やっぱり調査兵团か。役職は？」

「クシエル。団長付きの副官だ」

一瞬、その狂気じみた笑みが凍りついたように見えた。ゆっくりと手が離れていく。

「クシエル。姓は」

「さあ……。特に。今はない。ただの、クシエルだ」

ケニーというその男は一瞬、表情をなくしたが、そのあとすぐに可笑しそうに、そしてどこか嬉しそうに大声で笑い転げた。周囲の貴族が鬱陶しそうに彼を見つめるのも気にしない素ぶりだ。いい年こいた壮年のおっさんのくせに、この人はどうにも言葉も悪ければ、動作もいちいち大仰だ。

「調査兵团のクシエル副官か。覚えておいてやるぜ。なあ、クシエル。お前はこの場所が好きか？」

「はっ。」

「俺は俺のご主人様の犬としてここに来てる身だがな、この悪趣味なパーテイーとやらは反吐が出そうな気分だ。お前もそうだろう？違わねえよなあ」

ずい、とにやにやと得体の知れない笑みを浮かべて身を近づけて来た彼に、思わず身をひいてまあ、と頷く。

「ならこうしようぜ。俺はお前の正体をこの豚共にはバラさない。お前はお前の仕事をしろ。俺は俺の好きなようにして、お前を見逃してやる。だが、その代わりお前は俺を楽しませろ」

「ケニー!!」

咎めるように声をあげたのはイリヤである。ケニーは血相を変えた少年に、「どんなエロい想像してやがんだよ」とからかった。イリヤは顔を悔しそうに赤らめて口を開閉するばかりである。彼に、この男の相手は荷が重いようだった。

「秘密をひとつ。打ち明ける。これはどう?」

「ほお。俺が楽しめるような秘密か?」

「さあ。でもあなたも私に何か秘密を打ち明けてほしいな。私ばかり楽しませるといのもね。あなたも私を楽しませてくれないの?」

「エロいことでもいいのか?」

「やぶさかではないよ」

答えれば、男はほ、と目を丸くした後、苦い顔をして「俺は人の女には手を出さない主義だ」となにやら持論を展開した。その持論に首を傾げれば、

「とっておきの秘密を打ち明けてやろう。だが、忘れるな。俺はお前の生殺与奪を握ってんだ。お前が調査兵で、ここに身分を偽って入って来たなんて知れたら、お前だけじゃねえ。上でブタ共の相手をしてるてめえの飼い主や男も分が悪くなる。よおっくそのお利口そうな頭で考えろよ、人類の翼」

不意に広間に歓声があがる。見れば、舞台の上の綺麗な黒髪の少女が、一人の貴族の男に買い占められたところだった。じわりと、身体の奥から熱がこぼれ落ちる。はあ、と息を吐けば思いの外それは色めいていて、どうにも興奮がじりじりと精神を蝕んできている気がした。

気づけば、私もまた、彼ににやりと笑いかけていた。

「秘密だけじゃない。せつかくだ。ここであなたが楽しめる余興もしてあげる。これでどう？今夜は楽しめるんじゃないか？」

なんだよ、そりゃあ。わくわくするじゃねえか。

そんなことを言いながら、その口汚い男は口角を上げた。どこかその口調と笑い方に既視感を覚えながら、さあ、と催促する。

「俺の秘密はな。俺は、都の大量殺人者の切り裂きケニーだ」

両手をぐわりと広げて、もったいぶってそう言ってきた男に、あんぐりと口を開けてしまう。

ん？と両手指をわきわきと動かしながらケニーは首をかしげた。

「ごめん。イリヤ。切り裂きケニーってなに？」

「え？知らないんですか?!有名な都市伝説じゃないですか。二十年以上前に、王都で憲兵ばかり何十人も殺した殺人鬼の話！」

「都市伝説？」

「だからそれが俺だつて」

ううん、と唸る。都の大量殺人鬼。なるほど。頭のネジがぶっ飛んでいるのはそのせいか、と妙に納得がいった。

それならこの男の奇々怪界な雰囲気も、妙な既視感も、全て得心がいく。

「驚かねえな」

「ごめんなさい。世間知らずで。そういえばそんな話も聞いたことがある気がしなくもないような気がするわ」

「おいそりや、ほとんど知らねえじゃねえか。お前な、俺があの時どんっただけ苦勞して憲兵のブタどもを綺麗に削いでやったと思つてんだ。あのな。まず、」

「いや、うなじの削ぎ方を知っているので結構です」

「巨人と一緒にすんじやねえぞ。人間はな、そりやあ、ちつせえんだぞ。ちよつと加減を間違えりや、ナイフが一気に向こう側まで突き抜けちまうんだ。しかもな、巨人と違って蒸発しねえし、憲兵どもは脂が乗りすぎてる。毎回ナイフを綺麗にクリーニングしてやらねえとすぐその脂で錆びちまう。おめえ、その苦勞がわかるか？あ？」

「なるほどね。そんな苦勞してでも必要な殺しだったわけだ」

「ああ!？」

言え、それまで馬鹿みたいに口を滑らせていた男が怪訝そうに眉を歪めた。

「大量殺人が「必要」だと？」

「必要な殺人もあるわ」

言えば、都の大量殺人鬼はその気持ちの悪い笑みをひっこめて、鋭い視線で私を睨みつけてきた。咎めるような眼差しではない。ただ、恐ろしく研ぎ澄まされていて、まるで私を獲物のように見つめるそれだった。その冷たい視線を流して、黙っていれば鋭利ではあるものの、存外整った顔立ちのおじさんだな、と熱でうだる思考でぼんやりと思った。

都の大量殺人鬼。その話は知っている。でも、殺人鬼の後の話は知らない。私が知っているのは、その殺人鬼の何でもない馬鹿みたいな話ばかりだ。そんな殺人鬼が、今、貴族の小間使いと成り果てている話など、聞きたくもない。

面白くない話だった。

「私のとっておきの秘密を教えてあげる。切り裂きケニー」

そんな物語より、よっぽど私の物語の方が面白い。

この壁内には絶対にあり得ない、危険な物語。

「私はね、ケニー」

耳打ちするように、そつと声をひそめてケニーに言う。

「私はね、壁の外からやってきたの」

自由を奪われた女が、自由を求める気狂いの王子様に助けられて命を与えられ、英雄たちと巨人に立ち向かう。そんなお話。

それが、私のおきのお話だ。

「壁の外からやってきたの」

唐突なその副官のカミングアウトに、イリヤははあ？と心底呆れたような心地がした。この副官はなにを言っているのか。今ここに来て頭が湧いたのか。

しかし対するケニーはというと、先ほどまでの下品な笑顔は消えて、どこか神妙な、怪訝そうな複雑な表情で固まっていた。

「テメエ……」

「秘密。とっておきの。内緒ね」

いたずらっぽく笑った彼女の頬が赤い。明らかに、その瞳に欲情の色がのつていた。

「クシエル副官」

「隊長」

イリヤが彼女の名を呼んだ声とかぶさって、一人の女の声が割って入って来た。透き通った、しかしどこか冷たい抑揚のない声だった。

「ああ？トラウテ。なんだ」

「油売ってないで。そろそろ行きますよ。上でももうお開きです」

「ああ?!ここからがいいところだろ。なあ、クシエル」

シャツとパンツという簡素な格好をした、金髪の瞳の大きな美人だった。ケニーの部下らしき彼女は、

その美貌を凍てつくような無表情で固めていて、イリヤは薄ら寒い気持ちになる。

「クシエル?彼らは……調査兵ですか?」

「そうだ。今からこの姉ちゃんと遊ぶ約束してんだ。お前は先帰ってろ」

トラウテ、と呼ばれたその女性は呆れたような大きなため息をついて、ケニーのその頭を容赦無くはっ叩いた。

「どうりで……。クシエルさん?上で調査兵団の団長たちが、あなたたちを探していましたよ。これ以上ここにいるのはマズイです、隊長」

団長たちが。早く戻らねば、と思い立ち上がって副官に声をかけようとしたイリヤは、彼女が俯きながら「そうか」と笑みを浮かべていたのを見た。

「ク、クシエル副官?」

ランタンの光が仄かに揺れる大広間。舞台上で繰り広げられていた競りも、終焉を迎えつつあるようだ。貴族たちの噛み殺した、しかし下品な笑い声が密やかに響く。

クシエル副官が、その上気した顔を上げて、その舞台を見た。うつとりと、恍惚とした瞳が場違いに濡れている。ふう、と吐いた彼女の

吐息がまるで桃色に色づいているかのよう、蠱惑的に漏れて、ぞくりとイリヤは伸ばしかけた手を引いていた。

「ケニー。もうひとつの余興だ」

そう言った彼女が立ち上がった。右手に、いつの間にか黒い小銃が握られている。あ、と思った時には、彼女はその小銃をひとつ、天井にかけられたシャンデリアむけて放っていた。

突如響いた轟音と、ガラスの碎け散る音。その後には響く、貴族たちの悲鳴。なにが起こったのか、把握できずにうろたえる貴族たちを抑えようと、舞台の上に、屋敷の当主であるダリス伯爵が躍り出た。その脇に、兵服を着た女性が一人。

「え、ユディ？」

その女性兵の姿にイリヤが瞠目している間に、優雅な歩みで、白いドレスの副官が舞台へと近づいていく。

「ダリス伯爵」

凜、と響くような、しかし甘くよく通る声が、舞台上の貴族を呼ぶ。広間に広がっていた悲鳴が、彼女の声で、静寂に返っていく。

「今宵はお招きありがとうございます。今、わたくしの身体にはどうやら一種の興奮剤が入っているようです。この興奮剤、先ほども奴隷の商品に盛られていたようですが……。どうでしょう？ここに参加している貴族のみなさまも一緒に飲んで、ひとつ皆で天国へと昇ってみるというの？なかなか良い余興かと思うのですが」

「はあ?!なにを言っているんだ、君は」

舞台の下で、彼女へと近づいた青年たちに、副官はにこりと微笑んで、しなだれるように近づいた。甘く濡れた瞳の彼女に、一瞬青年がたじろいだ隙に、その白いドレスの女性は、彼らを背負い投げた。舞台の上で、スカートがまくれるのも気にしない彼女が乗り上げたのを見て、護衛らしき屈強な男性が数人彼女へと走りよったが、機敏な動きで彼らは殴られてしまう。

女性とはいえ、やはり毎日鍛え上げた兵士、というところだろうか。屈強な男を片手で投げ飛ばす様は、まるで並の人間のなせるものではない。彼女はあつという間に護衛の男をのした上、倒れた男の懐からナイフを取り出し、きらりとランタンの光の下にさらした。

「おい、誰かこの女を捕まえろ！」

勇気ある数人の男性が、彼女へと向かっていく。振り返った彼女が、まるで踊るようにステップを踏んで、ふ、と笑ったのを、確かにイリヤは目にした。

その軽やかなステップの踏み込みと同時に、くるりとナイフが彼女の手の中で逆手に持ちかえられて、男たちの肉を削ぐために翻った。浅くはあるが、確かに斬り付けられた男が手をおさえてその場にうずくまる。

鮮血が散り、くるりと舞うように踏み込んだ女のドレスが鮮やかに赤く色づく。

「ク、クシエルふううくかあああああんん！！！！」

なにやってんだあの人は！！

なんとかかしてあの暴走を止めなければ、と思い舞台に走る。その際、舞台脇で目を丸くしていたユデイに、「お前も止めるよ!」と叫んだ。そのときは、イリヤはなぜその場にユデイがいるのかどうかなど、全く頭になかった。

「副官!どうか気を確かに!何やってるんですか!!」

振り返った彼女の顔は、どうにも正気を逸しているような、恍惚とした表情をしていた。いつもの緊張感を湛えた副官はどこにもいない。舞台を上がろうとしたとき、背後から首根っこをつかまれて投げられた。

ケニーによって投げられたのだと気づいたのは、そのケニーが舞台の上でも彼女の背後をとったまさにその時だった。

「オイ。ナイフの握り方はそうじゃねえ」

静かに、男の声が響いた。

右手にナイフを握った女は、手首を掴み上げたその背後の男を振り返った。もうそこには理性のカケラなどない真っ黒な欲望に溺れた瞳があるだけだった。

男は笑わずに、そのナイフを握る細い手を、後ろから包み込んで、少しだけその指の位置を調整してやる。

「こうすりゃ、今より力が入りやすい。これで振ってみろ。次は手首くれえ簡単に落とせる」

「……あなた、」

「クシエル。テメエのことは覚えておいてやるぜ、このケニー様がな。だからよお……だから、」

ケニーは口を噤んで、彼女の鳩尾に背後から強烈な拳を叩きつけた。背後からの殴打にもかかわらず、それはひどく彼女の内臓に響いたらしく、彼女はげえと唾を吐き出してその場に倒れ込んだ。

男はそつと倒れこむその体を支え、ゆつくりと床に倒したあと、何も言わずにその場を去った。彼の部下であるトラウテという女性が、副官の側まで来て、

「解毒剤よ。少しはマシになる」

白い粉が入った袋を、その側に置いた。苦しげに悶える彼女は意識はあるらしく、その女が去っていく様子を鋭い瞳で睨みつけて見えた。

「クシエル副官！」

イリヤが叫んだそのとき。

大広間の扉を大きく解放する音と、研ぎ澄まされたよく通る声が広間の空気をつんざいた。

「リヴァイ兵士長！彼女を取り押さえろ！第四分隊は参加者とダリス伯爵の保護を!!」

そこに居たのは、薄墨のスーツを身にまとった、エルヴィン団長だった。彼の背後から、黒くて小さな影と、ハンジ分隊長率いる第四分隊が入室してくる。

ダリス伯爵をはじめ、貴族たちが突然の兵士たちの乱入に、慌てて大広間から逃れようとするが、それは第四分隊の屈強な兵士たちに取り囲まれて叶わない。

貴族の「保護」など建前にすぎないことが、彼ら兵士の毅然とした態度で一目瞭然であった。ハンジ分隊長が兵士たちを指揮するなか、黒い礼服に身を包んだリヴァイ兵長がひとり舞台へと上がってきた。

「オイ。クシエル。生きてるか」

「リヴァイ兵長！副官は興奮剤を飲まされています！その解毒剤を！！」

戦場と同じような無駄のない動きで彼女を抱き上げた兵長に、イリヤが手渡せば、彼は舌打ちをしながらその水と彼女のそばに落ちていた解毒剤を彼女の口へと流し込んだ。

「リヴァア……」

「どうした。話せるか」

しっかりと彼女を抱きとめたりヴァイ兵長は、少し焦ったように彼女の声を聞き取ろうとその唇に耳を寄せたが、彼女はそれを拒否するようになやみやと首を振って、彼の手から逃れようと身じろぎした。

「クシエルさん！いい加減、おとなしくしてください！あんだ、やばい状況ですよ！」

上気した頬と、弛緩した体は少しは震えている。ケニーは確か、「話せているのがおかしい」状況だと言っていた。

「オイ、イリヤ。こいつが飲まされたのはなんだ。興奮剤ってのはどんな種類のもんだ」

「催淫剤ですよ！あの伯爵のご子息に！」

イリヤの取り乱した報告に、リヴァイは盛大な舌打ちをして、忌々しそうに「あの変態が」と漏らした後、苛立った怒号で、

「クソメガネ!!おい、ハンジ！」

分隊長を呼んだ。戦場でもそんなリヴァイ兵長の怒号はそうそう聞くことはない。その声に血相を変えて舞台へと上がってきたハンジ分隊長もまた、いつもの飄々とした余裕は影を隠していた。兵長から簡潔に状況を説明された彼女は、すぐに彼の腕から副官を抱き上げて「クシエル？クシエル！大丈夫かい？私だ。ハンジだ。もう大丈夫だ」とその背中をさすった。

どうやらその女性の手ですら快感を拾うらしい。副官は苦しそうに、しかし確実に色を宿して僅かに喘いだ。それがハンジ分隊長だと認めると、安心したように「おさまらないんだ」と泣きそうな声を出して、彼女にすがりついた。

「大丈夫だ。大丈夫。私が誰にもあなたに手出しさせないから、あなたはとにかく水を飲んで。薬の効果を薄めるんだ。わかったね？」

腕の中で体を焼くような苦しみに耐えている副官を、まるで母のようにかばって他の兵士から見えないようにしてやるハンジ分隊長。そんな彼女たちのそばで、リヴァイ兵長がいつもよりその鋭い瞳を細めて、副官を見つめている。

そこには、十日あまり前に、彼女のクルトへの暴行を過激に叱咤した彼らの姿はなかった。それは、長く連れ添った仲間を氣遣う兵士たちの姿だった。

\*\*\*

チリリ、とろうそくの炎が揺れて、部屋の中の世界がゆらりと歪んだ。そのろうそくのわずかな光のもと、椅子の上に後ろ手を縛られて拘束されているのは、ユデイ調査兵である。

「さて。事情はよくわかった。安心しろ。お前の言ったことは全て信じよう」

ふう、と珍しく大きな息を吐いて言ったのはリヴァイ兵士長である。部屋の中に据え置かれている豊かなクッションのあるソファに、腰を下ろした。

イリヤは、そんな上官の様子を直立不動の姿勢で見ながら、ユデイに対して行なわれた尋問をついに最後まで見届けることとなった。

場所は、ダリス伯爵の屋敷のとある一室である。クシエル副官が起こした騒ぎによって、伯爵の開いた宴は強制的に終わりを迎えた。違法な酒宴の参加者たちは調査兵たちによって「保護」という名目で取り押さえられ、クシエル副官に薬物を投与した伯爵のご子息もまた、その責を問われるか、と思われたが。

エルヴィン団長は、朗らかにダリス伯爵へと部下の非礼を詫びた。リヴァイ兵長曰く、その笑顔はとんでもなく黒いものだ、ということだった。

終始朗らかに笑っていた団長は、ダリス伯爵が顔を青くして彼との「交渉」に応じることを承諾したのを確認して、「保護」した貴族を第四分隊の兵士たちに屋敷の外までお送りさせるよう命令した。

そのまま、団長は伯爵の私室に「交渉」のため姿を消した。

第四分隊の兵士たちは、貴族の見送りと副官によって散々に荒らされた広間の片付けや怪我をした使用人の手当などに追われ、薬の副作で吐き気までももよおした副官には、ハンジ分隊長と数人の女性兵士が付き添った。盛られた薬が媚薬であったこと、思いの外その薬の作用がひどかったことから、男性兵士は団長や兵長をふくめ、彼女から遠ざけられた。

結果として、ダリス伯爵と共に地下の大広間にいたユデイ調査兵への尋問は、手の空いていたリヴァイ兵長と、イリヤの二人で行なわれたのだ。

そして、その尋問は今、ようやく終わりを迎えた。

ユデイの自慢の長いブロンドの髪は、一糸乱れることなく、炎の光のもとでわずかに輝いている。彼女の衣服にも、身体のどこにも乱れも傷もなかった。

「裏切りが事実なら、お前はもう退団だ。人類へ捧げた心臓ってやつも、もう誰のもんでもねえ。お前のもんだ」

「心臓は捧げたままです。裏切りなんかじゃないわ」

リヴァイの言葉に、それまで俯いてただ黙っていたユディが突然反論した。

「私は……私の心臓は、最初から人類に捧げたままです。ただ、それがエルヴィン団長のやり方と違っていた。それだけです。私は人類に心臓を捧げた兵士です。それは退団させられても変わりはないわ」

睨みつけるその瞳には、強い意思がみなぎっている。イリヤはその瞳に、壁外で飛び回っているときの彼女の生き生きとした強い瞳を思い出した。

「……そうか。そりゃあ、残念だ」

リヴァイはそのまま、感情の読み取りづらい表情を崩すことなく、彼女の手首を縛る縄をほどき、イリヤに声をかけて部屋に鍵をかけて退出した。

部屋を出る前、一瞬だけイリヤが盗み見たユディは、深く項垂れており、その表情は見る事ができなかった。

「……リヴァイ兵長」

壁も天井も、そして床も、見渡す限りありとあらゆる装飾が施されたその屋敷の廊下は、兵団施設のようにただまっすぐに続いている。

夜の闇にどつぷりと静まり返るその廊下を、リヴァイはただ黙して歩くばかりである。イリヤはその上官の背中を見ながら、裏切りの仲間たちの顔を思い浮かべる。

前回の壁外調査の際、本隊からはぐれたイリヤたち三人が、巨大樹の枝の上で励まし合ったのは昨日のことのように鮮明に記憶している。

しかし、共に支え合った彼らは、今や兵団の「裏切者」であった。

「リヴァイ」

不意に、廊下の奥から低い声が呼びかけた。イリヤの目の前の上官の小さな頭が、わずかに揺れた。

「エルヴィン」

その廊下の先にうずくまる暗闇のなかに立っていたのは、エルヴィン団長だった。ダリス伯爵との「交渉」は終えたらしく、礼服の上着を脱いで無造作にその分厚い肩にかけていた。

団長に常よりも柔和な笑みが浮かんでいることが見て取れるほど近づいたところで、リヴァイ兵長はようやくその足を止め、舌打ち交じりに「交渉は成功したようだな」と頷いた。

「ああ。クシエルが薬を盛られた上に暴れ倒してくれたおかげで、こちらに有利に話を進めることができた。次の壁外調査用の物資はかなり潤いそうだ」

もともとの金策という目的は成功したらしい。イリヤの目から見てもそれとわかるほど、団長は嬉しそうに笑って、「そちらはどうだ」と兵長と、その背後に控えるイリヤに一瞥を加えた。

「ユデイは黒だ。うまくやりやあ、ここの変態親子からまだむしり取れるかもしれないな。……だが、クルトは無関係だった」

「クルト・ウエルナーはダリス伯爵とグルではなかったと？」

「奴を兵団の地下牢から逃がしたのはユデイで間違いない。だが、奴が何者だったのかは、ユデイは知らないようだった」

その報告を聞いて、エルヴィン団長はふむ、と少し考えるそぶりをした後、イリヤに目を向けて、その大きな手を彼の肩に置いた。

「イリヤ。今日はクシエルだけでなく君の功績も多い。伯爵の地下での酒宴に紛れ込めたのは、君の知人がいたからだということらしいな。ありがとう。感謝するよ」

青く澄んだ瞳が、夜の闇の中でもしっかりと自分を見つめていることを感じ、イリヤは息を飲んだ。

「……団長。いくつか、質問を宜しいでしょうか」

どうぞ、と末端の兵士にも気安く発言の許可を出すエルヴィン団長は、兵士の中でも憧れの存在である。そんな団長は、確かにイリヤにとっても憧憬の的であった。しかし、今の彼はその憧憬すらかすんでくるような心持に襲われていた。

「……今回の護衛に俺とユデイが選ばれたのは、ダリス伯爵への情報

漏えいの疑いをかけられていたから、ということでしょうか」

「ああ。疑わしきは、君とユディだった。結果、君には悪いことをしてしまったな」

まるで申し訳なさそうに眉をひそめた団長に、兵長がわずかに鼻を鳴らす。

「もうひとつ……。クシエル副官は、わざと薬を盛られて、暴れたということですか？」

こちらの質問には、兵団の頭首たちは顔を見合わせた。「どうだな」答えたのはリヴァイ兵長である。

「だが、わざわざ拳銃を撃つたのは俺たち地上の調査兵に居場所を知らせる心づもりがあったからだろう。暴れたのも、そうすりや時間稼ぎができるとふんだのかもしれないねえが……。どこまで意図していたのかは、あんな調子だからな。本人もわかりやしねえだろう」

「リヴァイ兵長。では、どこからが……。いや……。もしかして、地下牢でのリヴァイ兵長の制裁も、内通者を炙り出すための演技ですか？」

クルトを暴行したとクシエルに、容赦なく顔面にまでケガを負わせたのはリヴァイ兵長だが、先ほど意識を混濁させた彼女を心配そうに抱き上げていたのもこの彼だった。

しかし、イリヤのその問いには、リヴァイ兵長は「さあな」とそっぽを向いて答えることはなかった。

どこからが彼ら上層部の考えていたことなのかは、一兵卒のイリヤ

には全く分からない。しかし、それでも、その行動は、あまりにも「暴力」的だった。

「クシエル副官が可哀想です」

内通者を炙り出すためとはいえ、壁外調査のための金のためとはいえ、あまりにも一人の兵士をモノのように酷使しすぎている。

兵団のために、彼ら上層部は部下を足蹴にしたり、得体のしれない薬物を飲ませるまで追い込んだり、誰とも知れぬ男の手に遊ばせたりするものなのか。

思わず放ったイリヤの言葉に、あからさまに不快な反応を示したのはリヴァイ兵長であった。

「どの口が偉そうなこと言ってる」

「いや、だって。副官ってこんなことまでしなきゃいけないんですか？ここまで体張って、ちよつと犠牲が大きすぎやしませんか。俺は上官がこんな辱めを受けるような仕事をしているのを見てられません」

ここに他の兵士がいれば、即刻イリヤのその無礼な口は閉ざされたであろう。しかし、彼を止めるものはいない。

「男に体を差し出すような真似までさせて、こんなこと他の兵士に知られたら、」

己の正義感を、疑うことなく「正しい答え」だと信じているのは、イリヤの最大の利点でもあり、最悪の欠点でもあった。だが、それは彼

の知る由もない己の欠点である。

一兵卒の無礼極まりない発言に、リヴァイ兵長はそれでも彼の胸ぐらをつかみ、にらみあげる、という程度の制裁にとどめながら、

「じゃあなんだ。お前は成果を得るために、何の犠牲も払いたくありませんとでもいうつもりか？お前は壁外で一体今まで何を見てきた」と地響きのような低い声で言った。

小柄で細身の体のどこにそんな力があるのか、と問いたくなるばかりの馬鹿力で首元を締め上げられ、イリヤはう、と唸った。上官に無礼を働いている自覚はそれなりにあったものの、それでも彼は叫んでいた。

「俺は……俺は犠牲は払いたくありません！死にたくないし、誰も死なせたたくない！そんなの当たり前じゃないですか!!」

「テメエは……!」

イリヤの視界の隅で、リヴァイ兵長の左こぶしが強く握りしめられたのを認めて、わ、と彼は目をつぶった。マズイ。これは非常にマズイ状況だ。しかし、イリヤは「言ってやった」と心の中で自分を肯定しながら、その上官から下されるであろう制裁に身を固くした。

しかし、その一撃は振り下ろされる——正確に言うならば、背の低い兵長ゆえ、振り上げられると言うべきか——ことはなかった。

「……っ。」

「まあ、リヴァイ。その辺にしてやれ」

いつまでもやってこない衝撃に、おそろおそろイリヤが目を開ければ、リヴァイ兵長の肩に手をかけてなだめるような姿のエルヴィン団長が視界に入った。リヴァイ兵長は、こぶしを握り締めるだけで、その腕をぴくりともあげていない。

「イリヤ。君の言い分はわかった。しかし、クシエルはシガンシナ陥落以前からの古参兵だ。五年以上、献身的にその身を人類へと捧げている。その働きは私も頭が上がらないものだ。仲間としてとても尊敬している」

静かな声が廊下に響く。行軍の先頭で放たれる偉丈夫な堅いそれではなく、ゆっくりと温度のある声だった。

「だからこそ。「可哀想」だなどと、彼女を貶める発言はやめてくれな  
いか。それは彼女への最大の侮辱だ」

柔らかな声に反して、その鋭い瞳に一蹴され、イリヤは己の失態を恥じた。まさか、それが「侮辱」になろうなどと、思いもよらなかつたのだ。イリヤは「申し訳ございません！」と敬礼をして、二人に頭を下げて、逃げるようにその場を去った。

大人っぽい相貌にそぐわず、やけに軽率なその少年兵の逃げ去る背中を見ながら、エルヴィンは少しだけ笑った。暗闇でもわかるほど顔を赤らめたその率直さは、「率直」なるものからほど遠い位置にいる彼にとってひどく新鮮だった。

「おい、何笑ってやがる」

「いや、すまない。クシエルが彼に下した評価表を思い出してね」

不機嫌という感情をそのまま鋳型に流して固めたような腹心の男に、こらえきれない笑いを漏らしながらエルヴィンが言えば、その男は怪訝そうに眉をひそめた。

「彼女曰く、イリヤは「率直で正義感にあふれた好漢」だが、それ故に「使えない」ということだ」

その発言に、リヴァイは蔑むような笑いをこぼした。

「だろうな。よくあんな甘っちょろい考えで生きてこれたもんだ。上官に反論するのも考えてからにして欲しいもんだな」

「その豪胆さがあるから、お前はクシエルの班に彼をつけたんだろ？」

「あんなクソガキだと知ってりゃ外してた」

その発言に、今度こそエルヴィンは声をあげて機嫌よく朗らかに笑った。

未だ行方も目的も知れないクルト・ウエルナーの件も、今まさに薬の副作用で苦しんでいる副官のことも、心配事は尽きないが、それでも今宵はエルヴィンにとって良い夜だった。

数か月間、悩まされていた機密情報の漏えいも解決し、おまけに資金も獲得できた。それだけではない。今後の動きによっては、ダリス伯爵とは「より良い関係」を構築できるかもしれない。

「ああ。今日は良い夜だな」

嬉しそうに窓の外の星空に視線をうつした彼に、腹心の男は忌々し  
そうに何か小言を言っていたようだが、彼はあえて耳に入れずに無視  
した。

その夜からおおよそひと月後。

第56回壁外調査は、エルヴェイン団長のもくろみ通り、何の滞りも  
なく行なわれることとなった。

## 四章

### トロスト区攻防

一

日が昇り始めて、壁の中に広がる兵团施設も、ゆっくりと鮮やかな色を取り戻していく。

自由の翼があしらわれた深緑の色をした外套や、硬質な鋼色の巨人殺しの装置も、その英雄たちの切迫した瞳も、壁の中に訪れる一日の始まりに照らされていく。

「ではリヴァイ兵長。一次作戦が終わりましたら、旧市街地の中央で司令班と合流してください。私が生きていたら司令班の援護は研究班がしています。指示を出しますので、特別作戦班はその通りにお願います」

「ああ。わかった」

行軍のための隊列を組む前に、そこかしこで兵士たちが最終の打ち合わせを行なっている。

これから壁の外へ、彼らの戦場へと旅立つために、放たれた一矢となる覚悟を練り固めていく。

そんな緊迫した、そして同時にどこか清廉とした空気の中、少年は最後の機会を失うまいと走り出した。

「クシエル班長!!リヴァイ兵長!!イリヤ・ツェラン調査兵、準備できました!俺も、グえ」

小柄だが熟練のその上官たちをめぐけて勢いよく走り出した少年を掴み上げたのは、研究班——今回の調査では司令班の護衛班として配属されたクシエル副官率いる班である——の一番の古株、エーミール調査兵だった。長身のイリヤと肩を並べるほど長身痩躯な兵士だが、齢30も近い生熟した青年の筋肉は、イリヤのそれとは比べものにならないほど硬く、しなやかに彼の体を軽々と放り投げた。

「いい加減にしろ、イリヤ」

「エーミールさん！俺も連れて行ってください！なんで俺だけ留守番なんですか!?調査兵が外に出なくて一体何のための調査兵なんですか!!」

「クシエル班長の判断だ。お前は今日は衛生兵と一緒に内門の中で、負傷兵の看護だ」

「だからそれが納得いかないんです！」

清廉な空気をぶち壊すかのような少年の我儘な叫びと、古参兵の応酬が繰り返される。それを横目に、他の兵士たちは怒るでもなく、苦笑を浮かべたり、あからさまに笑ったりしながらそれぞれの準備を進めていた。

イリヤ・ツエランのこの間かん坊な要求は、ここ一月余り何度も繰り返され続けていた光景だった。

「またやってるな。あいつ」

「まさか出陣前にまで……。兵長、彼、どうしましょうか」

エーミールとイリヤの応酬に嘆息しながら言ったのは、特別作戦

班、通称リヴァイ班のエルド・ジンとペトラ・ラルだった。風紀を乱すようなイリヤの行動に眉をひそめるエルドとは正反対に、ペトラは待機を命じられた彼の心持ちに同情しながら、彼女の敬愛する上司に問うた。

ペトラの呼びかけに、リヴァイはちらりとその騒ぎの中心にいるイリヤに視線をやったものの、まるで何事もなかったかのように、班員たちに作戦中の行動予定の確認を促した。

「リヴァイ兵長!!俺も、俺も調査に参加させてください!俺はこんなところで、」

「おい、お前!いい加減に!!」

エーミールの腕から逃れたイリヤが、地面に這いつくばりながら、その人類最強の男の外套にすがりつく。そのあまりに無礼な働きに、黙って見守っていたエルドも流石に声を荒げたが、リヴァイは特に気にする風でもなく、足元のイリヤに一瞥すら加えることなく言った。

「イリヤ。お前の上官は俺じゃない。お前の出陣の許可を出せる権限は俺にはない」

「そんな!!」

するりとイリヤの手を抜けて、その上官が身を引いた瞬間、悲しみに打ちひしがれるイリヤの腹を強烈な蹴りが襲った。

ぐえ、ともんどりを打って倒れたイリヤが痛みに耐えながら顔をあげれば、そこには無表情ながらに怒りを宿した彼の上官が仁王立ちしていた。冷徹に澄まされた表情は、彼女の整った相貌に壮絶さを添えている。

「クシエル班長……！」

「イリヤ。問1。旧市街地での交戦中、背後より巨人三体が向かってくるのを確認。味方は存命五名。うち二名は重症。ガスも刃も残りわずか。この状況下での最善の行動は」

「一名につき一体を討伐目標に応戦します！」

「不正解!!」

上官の答えと共に頭に落とされた踵の衝撃に、イリヤが悶絶する。その姿に、周囲の兵士から失笑やら揶揄するような口笛やらが起った。ここ数日繰り返されているこの光景は、もはや調査兵団の中のひとつの余興にすらなっている。

うう、と涙をこらえて悶えるイリヤをエーミールが見兼ねて手を貸す。「リヴァイ兵長にまで迷惑かけるからこんなことになるんだ」とエーミールはその軽率さをいつも通りに諭す。そう。調査への出陣を許可されないことがわかってから、イリヤはその判断を下したクシエルだけではなく、リヴァイ兵長にも再三泣きついていた。

それは、普段温厚そうに微笑むクシエル副官が、実はかなり短気で怒らせると容赦なく手が出ることで、そしてそれに反して粗暴で威圧感の強いリヴァイ兵長は、存外怒ることは少なく、暴力も少ないからだと気付いたからである。

絆す機会があるならば、リヴァイ兵長だ、とイリヤは思ったのだ。リヴァイ兵長が許可すれば、流石のクシエル副官も、その上官の判断に従わざるを得ないだろう、と。

しかし、未だその目論見は成功していない。

「死にたくないし、死なせたくなかないなんて馬鹿を言う兵士は連れて行かない。何度も言ってるだろ。お前は今日は内門待機だ。さっさと失せろ」

彼女の普段丁寧な口調が、怒ればぞんざいでそれこそ粗暴になるとイリヤが知ったのも、この数日である。

エーミールが、「今日は大人しくしとけ」と彼の肩を叩いてその場を去る。遠くでエルヴィン団長の声があった。それに応じるように、リヴァイ兵長やクシエル副官、そして他の分隊長たちも部下を連れ立つ。その上官たちの後ろ姿を見ながら、イリヤはぎりりと拳を握りしめた。

\*\*\*\*\*

「来たぞ!! 調査兵団の主力部隊だ!!」

「エルヴィン団長!! 巨人共を蹴散らしてください!!」

英雄の行軍に、いつもは静かな街がざわめきたつ。背中に双翼を背負った兵士たちが、馬で黙々と行軍するのを、トロスト区の住民たちは期待と羨望にあふれた視線で見送っていた。

シガンシナ区ではあり得なかった調査兵団への歓喜に満ちた送迎に、エレンたちは高まる興奮を抑えきれずに、人混みの最前列へと人を押しやって躍り出た。

行軍の先頭の金色の兵士は、調査兵団の団長の、エルヴィン・スミスだ。その背後の黒馬に乗る黒髪の兵士を見て、エレンは胸が踊った。

「オイ……見ろ！人類最強の兵士リヴァイ兵士長だ!!一人で一個旅団並みの戦力があるってよ!!」

後ろの幼馴染たちを振り返れば、普段と変わらない無感動なミカサはさておき、アルミンもその大きな空色の瞳に喜色を滲ませて英雄の凱旋に興奮していた。

「あ!!エレン！戦女神のクシエル副官もいるよ!!」

アルミンがリヴァイ兵長や分隊長の後ろについている斑らの馬の兵士を指差した。短い黒髪の女性兵士は、役職付きではないながら、そのシガンシナ区陥落の際の功績で良く知られる兵士の一人だ。

彼女の人並み以上の美しさもまた、その英雄譚に拍車をかけている。

「アルミンはほんと、あの女神様が好きだよな。俺は断然リヴァイ兵長だけど、」

「このクソ女神め!!」

やっぱり英雄と言えば、チートな強さを誇る兵長だろう、とエレンが幼馴染に言いかけたとき、彼らの隣でその「女神」を罵倒する声があった。

え、とエレンたちが振り返れば、そこには長身痩躯の男が突っ立っていた。兵団の上着は着ていないが、体をめぐらせているその立体機

動のベルトは、紛れもなく兵士のものだ。何だ、と思った矢先、

「この英雄気取りの勘違い野郎め！今に見てろよ!!」

どこの所属の兵士か。とんでもない侮辱発言を大声でした彼に、思わずエレンは憤りを感じ、彼に掴みかかった。

「オイ、お前！なんてこと言うんだ！」

「エレン!!」

アルミンが止めようとしたとき、エレンの後ろでずっと黙っていたミカサが驚いたように「笑ってる」とぼつりと呟いた。そのミカサの呟きに、その視線の先の行軍へと目を向ければ、まるで笑いをこらえるように、その戦女神たる副官が肩を震わせている姿があった。戦女神は、ちらりとその黒い視線を罵倒を発した兵士へと向け、にやりと一笑した後、そのまま背中を見せて去っていった。

「笑った……」

頭上の呟きにエレンが顔をあげれば、罵倒を浴びせた兵士はその表情に喜色を浮かべている。わけがわからない、という風に不機嫌に首を傾げたのはエレンである。

「何だ？おい、お前、」

「放せ。訓練兵」

「何!?!お前、あんな罵倒しておいて何様だ!!?」

調査兵団への悪口は己への悪口だ、とでも言わん限りに、目をぎら

つかせて兵士に掴みかかるエレンに、アルミンは「エレン！ダメだよ！」と彼を背後から抑えにかかった。この幼馴染はかなり短気で血の気が荒い。

「エレン。今日は解散式。こんなところで問題を起こしては駄目」

冷静に言ったのはミカサである。ただ、残念ながら彼女の言葉は得てしてエレンの炎に油を注ぐことの方が多い。

「うるせえ！だからってこんなこと言われて黙ってられるかよ！調査兵団は命を賭して戦ってるんだぞ！それをお前、勘違い野郎だど!!？」

「本人が言ってるんだから、そうなんだろう」

エレンの腕を振り払いながら、その兵士は言った。栗色の短く切り込まれた頭を振りながら、エレンの突然の暴挙にも特に今のところ気を悪くしていないようだった。その兵士の言葉に勘付いたアルミンが、必死にエレンを抑え込む。ミカサの手を借りて、ようやく兵士からエレンを引き離したのを見て、アルミンは敬礼を贈った。

「先輩へのご無礼、申し訳ございません！」

「いや、いいよ。俺も悪かったな。つと。こんなことしてたらまた怒られるな」

兵士は、何故かにこやかに笑いながら、人混みをかきわけてその場をあとという間に去っていった。

行軍はまだ続いている。妙な兵士に、エレンたちは毒気を削がれたように、「何だあれ」と呟く以外になかった。

\*\*\*\*\*

「ほんっと、クシエルはあの子のこと甘やかすね」

行軍の最中、緊張感なく言ったのは、ハンジだった。彼女が後ろを振り返れば、まだその団長付きの副官である女性は笑いを堪えることに必死になっていた。クシエルの後ろで、呆れたようにため息をついているのはエーミールである。

「ありや懲罰もんだな。問題行動もいい加減見飽きてくるぜ」

ハンジの隣でリヴァイが舌打ちした。「だって、「英雄気取りの勘違い野郎」ってさ……」と彼の真後ろの馬上で、クシエルは笑っていた。

——英雄気取りの勘違い野郎。

それは、クシエルが好んで使用する調査兵団のあだ名である。罵倒にも聞こえるそれは、彼女のシガンシナ区陥落からのお気に入りである。

「ああ、笑った。面白かった。無事に戻れたら、イリヤにはとっておきの懲罰をくれてやろう。ああ、楽しみだなあ」

「悪趣味め」

リヴァイの一言は、しかしクシエルの耳に拾われることはなかった。

「第56回壁外調査を開始する!!」

エルヴィンの行軍を率いる将たる声がこだまする。門扉が轟を上げながらゆつくりと外の世界への道を開けていく。

外の風が、開いていく門扉の隙間からひゆるりと吹きすすび、調査兵たちの首元を撫でていく。

さあ、出陣だ、と誰かの声が聞こえた気がした。

ハンジもいつもの能天気な笑みは引つ込めて、その先の景色を門扉越しに食い入るように見つめ、リヴァイはきり、とその手綱を握り直した。

「前進せよ!!」

その声に、馬の腹を蹴って彼らは壁の外へと放たれた。

第56回壁外調査の朝である。

それはつまり、トロスト区攻防の朝であった。

彼らが壁の外の死地へと向かったその数時間後、その門扉の中は地獄絵図へと化すことになる。

五年前の再来となるこの日。

イリヤ・ツエランは一度死んだ。

悲鳴と怒号が街を襲う。

トロスト区へと続く内門から住民がローゼ内地へと避難を終えてから、しばらくが経っていた。

今や巨人の領域と化したトロスト区との境目の門扉付近は、一般人の立ち入りは禁止され、兵士たちが右往左往していた。

薔薇の紋章と、立体機動の刃の紋章を背負った兵士たちは、一様に絶望の表情をのせている。そのなかで、たった一人だけ、双翼の紋章を背負った男は壁を命からがら越えてきた兵士たちに手を貸しては、負傷兵を衛生室へと運んでいた。

「クソっ。こんな事になるなんて……」

呟いたのは、その双翼の兵士か、それとも他の誰かか。

見上げた空は、いつそ清々しいほど青く澄み渡っている。流れる雲に、少しばかり暁の朱が差していて、夕刻の到来を予感させた。

双翼の兵士、イリヤ・ツエランは周囲を見渡した。

内門からほど近いその場所で、多くの兵士が顔を青くしてうずくまっている。その多くは刃の紋章を背負った訓練兵である。

超大型巨人が出現し、トロスト区の門扉が蹴破られた。

その報告が内門内の兵団施設まで届いたのは、数時間前である。立体機動装置を即座につけて出撃準備をしたイリヤは、しかし、駐屯兵団の上官によつて待機を命じられた。

本日の壁外調査は大規模なものである。故に、主力部隊は軒並み壁外へと出撃している。そんな中、動ける調査兵がイリヤたった一人とあらば、むやみにその双翼を出撃させることはできない、との判断だった。

五年前から何度もシミュレーションされている超大型巨人出現時の動きでは、調査兵団は駐屯兵団との相互協力のもと動くこととなっている。調査兵団の機動力を有効に活用させるため、その指揮系統は完全に独立させることが意図されていた。

しかし、有事の際、各々の調査兵が本隊の指揮系統から外れた場合は、その身柄は各地域の駐屯兵団の傘下に入ることが明確化されていた。それもこれも、膨大な兵力と人力を持つ駐屯兵団と、機動力が高い故に、死亡率も高く、有事の際に真つ先に瓦解する恐れのある少数精鋭の調査兵団の性格を考慮したものであった。

その規則にのっとり、駐屯兵団の指揮下にくだったイリヤは、内門から、兵士たちの死体や負傷兵が運び込まれてくるのを、ただ歯を噛みながら見守っていただけである。

トロスト区の門が破られてから数時間。まだイリヤはそれを見ないが、街の中はきつとあの巨人共がひしめきあっている筈である。

——内門へ避難してきた訓練兵の数が少ない。

トロスト区内の本部にいた訓練兵は、総勢数百名はいたはずだ。実戦経験のない彼らが最も犠牲になっている。

それは、火を見るよりも明らかであった。

——そういえば、あの訓練兵たちも見ていない。

朝方、調査兵団の凱旋を目を輝かせて見ていた三人の訓練兵の姿がイリヤの脳裏に蘇る。嫌な感情に襲われるのを、頭を数度ふって振り切って、イリヤは内門の方向へと走っていく駐屯兵たちの前に出た。

「イリヤ・ツエラン調査兵だ。今状況はどうなってる!?!訓練兵や前衛の兵士がまだ壁の向こう側にいるんじゃないのか!?!救援に行きたい!どうしたら、」

「調査兵!?!……いや、そんなことより、それどころじゃないんだ。内門に巨人に、」

「おい、止めろ!」

駐屯兵の一人が話し出したことを、背後の兵士が止めた。

「内門に巨人?おい、どういうことだ、それは」

壁のこちら側に巨人が出たということか?それは内門が破壊されたということか?否、そうだとするならば混乱は現在の比ではないはずだ。ならば、

イリヤが問い詰めようと、その駐屯兵ににじり寄ったとき。

「その話。詳しく聞かせてもらおうか。儂をそこに案内せよ」

老齡の声に振り返った先。見慣れぬ赤のループタイの石と目があった。いつもイリヤが行軍の指標としている、あの壁外の山々の色を湛えた石ではない。

「ピ、ピクシス司令……」

それは、壁の中の民を最前線で守る、薔薇の花の色と、彼らの誇りを象った石の色だった。

\*\*\*

ピクシス司令に声をかけられ、その部下たちと共に内門付近へと歩を進めながら、イリヤは冷や汗が顔を伝うのを感じていた。

内門から少し西、水門のほど近くから砲弾の音が聞こえたのはつい先ほどである。ピクシス司令と向かうその先には、砲撃音の後に上がった大量の蒸気が空に上がっていた。

突如として起こったその異常事態に、周囲の駐屯兵たちに動揺と恐怖が走っていた。

恐怖は伝染する。まさに、それをイリヤは身をもって知っている。

その恐怖は、伝染するが故に、屈服させることは困難である。じわりと体を蝕み、いつの間にやらその怪物に己の精神は喰われている。

そうならば、空を飛ぶことはもう出来ない。

イリヤはすでに、その恐怖を知っている。

だからこそ、その水門付近の壁に向かって刃と砲口を向ける駐屯兵たちの中にある恐怖に、マズイと舌打ちした。ピクシス司令の後ろに控えて歩きながら、周囲の駐屯兵を見れば、彼らは必死に震える両手を叱咤して刃を構えていた。

その先にいるであろう前線の兵士の恐怖は、後衛で控えている彼らのそれより大きなものだろう。

怪物のように大きな恐怖は、知れず判断力を低下させる。そうなれば、食われるだけだ。巨人に。イリヤは焦る気持ちを抑えながら、冷静な老人の背中の薔薇を見て頭を振った。

冷静にならなければ。

「証拠は必要ありません!!」

少年独特の、少しだけ高い声がイリヤの耳にも届いた。次に、視界に壁近くで俯いたような巨人が見えた。

反射で思わず立体機動のトリガーを取り出そうとしたイリヤに、斜め前を歩いていた司令の付き人の女性兵士が「大丈夫よ」とその動作をたしなめた。

よくよく見れば、それは骨が浮き出た巨人であった。先程から上がっていた蒸気はこの巨人の残骸から発しているらしい。上半身の大きさは15メートル級以上はあろうか。それにもかかわらず、背がやけに低い。近づいていくごとに、それはその巨人に下半身がないか

らだということがわかった。

あれが、トロスト区内で出現したという、巨人を襲う巨人だということだろう。

「大勢の者が見たと聞きました！ならば彼と巨人が戦う姿も見たはずです！！周囲の巨人が彼に群がって行く姿も！！」

耳に、少年兵の壮絶な声が聞こえる。

あれが、その巨人の中から出てきたという少年と、その友人たち、ということだろうか。

「つまり巨人は彼のことを我々人類と同じ捕食対象として認識しました！！我々がいくら知恵を絞ろうともこの事実だけは動きません！」

ひらけた視界に、その演説の主を見る。可愛らしいとも形象できそうなその少年の容姿と、背後に控える顔色のひどい少年。そして脇で彼を支える殺伐とした雰囲気をもった少女。

あれは。

「あいつらは……」

朝方。調査兵団の凱旋を、無邪気に眺めていた訓練兵だった。

「迎撃態勢をとれ！！」

隊長らしき人物の焦ったような指示。その指示に、壁と建物の上に設置された砲口が、彼ら三人の訓練兵へと無慈悲に向けられた。恐怖

に食われた人間の指示に、イリヤの耳は危機を察する。その声は、調査兵団では巨人に食われる人間の発するそれだった。

「おいおいおい。マズイだろ」

恐怖に喰われ、思考力を失った指示は、即ち死を意味する。壁外の経験から、その迎撃指示にイリヤの本能が警鐘を鳴らす。そんなイリヤの焦燥にチラリと視線を寄越したのはピクシス司令である。老兵はふむ、と何やら思わしげに頷いて歩を早めた。老齡とは思えない速さである。

司令の後を追って、駐屯兵の間をくぐり抜け、開けた場所に出た時、その少年の声がイリヤの耳を打った。

「私はとうに人類復興の為なら心臓を捧げると誓った兵士!!その信念に従った末に命が果てるのなら本望!!」

その声は、恐怖にとらわれながらも、生き抜こうとする思考の在り処を、これでもかと主張する強いものだった。

「彼の持つ「巨人の力」と残存する兵力が組み合わされば!!この街の奪還も不可能ではありません!!」

心臓を捧げた敬礼で、叫ぶ少年兵の後ろでは未だに巨人が蒸気をあげている。その錯綜した景色に、イリヤは頭の芯がくらくらするような気がした。

「人類の栄光を願い!!これから死に行くせめてもの間に!!彼の戦術価値を説きます!!」

——巨人から街を守るために、巨人の力を利用する？

少年兵の言葉に、ピクシス司令がわずかな笑みをこぼしたのが、後ろについていたイリヤにもはつきりと聞こえた。

「生来の変人」。そう呼ばれるピクシス司令が、その柔軟な発想と強固な指揮権でもって、巨人化できる少年の力で壁に開けられた穴を塞ぐという計画を兵士たちに話すことになるのは、それから数十分ほど後だった。

巨人化する能力をもつ少年は、エレン・イエーガーといった。

\*\*\*

「死に行くせめてもの間に……か」

先程、駐屯兵たちにエレン・イエーガーの利用価値を説いた少年兵の言葉を思い出し、イリヤは立体機動装置のトリガーを調整しながら呟いた。

振り返った先、壁の上ではその少年、アルミン・アルレルトが参謀たちと話している姿がある。

「おい、あんた……」

少年兵と参謀たちの最終打ち合わせの様子を離れて見ていたイリヤに、後ろから声をかけてきたのは、「人間兵器」たるエレン・イエーガーだった。

「あんた、調査兵团だったのか……」

「ん、ああ……」

その日の朝、壁外へと向かう調査兵団の行軍を見送っていた少年。彼の右腕と左足の衣類が不自然に千切れている。そこから伸びる細い四肢は、傷ひとつない。

報告通りだとすれば、それは巨人に食われた後、再生したということだ。

「エレン・イエーガー、だったか。俺はイリヤだ。イリヤ・ツエラン。……お前の先輩にこれからなるだろうな」

「先輩に？」

「お前、調査兵団志望なんだろう？」

そうでなければ、イリヤの調査兵団への暴言に、あれほど怒りをあらわにするはずがない。しかし、エレンは困惑したように眉をひそめた。

「いや、しかし、今はそれどころじゃ……」

「何だお前。失敗するつもりか？お前はここで穴を塞ぐ。明日の入団式ではお前は調査兵団に志望する。それを俺がエルヴィン団長やリヴァイ兵長たちと迎える。そうじゃないのか？それとも、そうならないうちでも？失敗するつもりか？」

「いやー俺はやる。やるんだ……」

「頼むぞ……イエーガー」

自分に言い聞かせるように、もう一度「やるんだ」と呟いたエレンに、不安を覚えながら「頼むぞ」とその肩を叩こうとしたとき、イリヤは自分に注がれる視線に顔を上げた。

「……何か」

じつと彼を見つめていたのは、彼の後ろにずっと付いていた目つきの悪い少女だった。エレンと同じくらいの体格だろうか。見慣れぬ東洋系の顔立ちに、切れ長の黒い瞳は、整ったものだったが、いけません、殺意丸出しの視線は少々いただけくない。

「あなたも、出撃するんですか？」

確か、エレンは彼女のことをミカサ、と呼んでいたか。三人で凱旋を見にきていたうちの一人だったことから、エレンとは単なる同期、という間柄ではなさそうだと思った。

「ああ、もちろん。巨人を前に待機だなんて、調査兵団失格だろ」

その言葉に応答したのは、エレンでもミカサでもなく、打ち合わせを終えた駐屯兵の参謀だった。

「そう言ってもね。……ツエラン調査兵。……やはりあなたには壁の上での待機をお願いしたいのだけど……」

「いえ。アンカ駐屯兵。俺は調査兵です。ここで最も実戦経験の多い兵士を使わない手はありません。どうか、先ほどの立案通りお願いします」

参謀の一人、ピクシス司令と共に内地から出戻ったという女性にイ

リヤは笑って言った。エレン・イエーガーが街の大岩を持って壁の穴を塞ぐために巨人化する。そのエレンを守る駐屯兵団の精鋭班とは別に、イリヤを班長に手練れの駐屯兵を班員とした即席の班が、壁に寄せられなかったあぶれた巨人の対応をすることになった。

指揮系統の違いと、イリヤが調査兵としてまだ一年足らずの若手であつたことから、ピクシス司令はイリヤを前線に出すことには難色を示した。しかし、ここで唯一実戦経験のある調査兵を前衛に出せば死ぬ命は少なくなるだろう、とイリヤが自身で駐屯兵を説得したのである。

ピクシス司令の付き人であるアンカは、「わかつたわ」と肩をすくめながら頷き、イリヤと共に戦う兵士たちを紹介した。

「よろしくお願いします」

「いちらいつ」

イリヤと共に編成された班員たちは、皆彼より年長の男性兵士だつた。丁寧に頭を下げたイリヤに、「頼むぞ」と彼らは握手を求めた。年端もいかない、実力もわからない兵士の指揮下に入ることになるが、彼らの表情には懐疑や恐怖は見られない。厳しい表情をのせながらも、任務として割り切ることができているのは、彼らが優秀な兵士であることの証左だつた。

エレンを先頭に、大岩に最も近いあたりまで、壁の上を走り出した精鋭班の後ろにつき、イリヤたちも走り出す。

正直なところ、イリヤの思考回路も感情も、現状を正しく理解しているとは言い難い。

いきなり現れたわけのわからない巨人の訓練兵。そいつに全人類

の命運をのせて抗うしかない選択肢に絶望を覚えなわけではない。

その細い後ろ姿に一抹の不安を覚えながら。それでも。

——生きているうちに最善を尽くせ。

走りながら、イリヤは胸元に飾られた双翼のエンブレムを握りしめた。

それは、その自由の翼をもつ兵士たちの合言葉だった。皆、たった一人になっても、どんな絶望的な状況においても、屈することなく「生き残る」ために戦うのだ。

壁の外に視線をやれば、はるかマリアの領土の向こうで、太陽がゆっくりと傾き始めている。青い空にも、茜が混じり始めていた。日の入りまであと少し。

わずかに目を細めて遠方を見たが、今頃マリア領土で巨人たちと交戦しているであろう、仲間たちが上げる色とりどりの狼煙を見つけることはできなかった。

たった一人でも。

それは合言葉だ。死ぬためではない。

生き残るために。

生きていくために、調査兵は抗い続けるのだ。

破壊された街を足下に、イリヤたちは少年兵を先頭に壁の上から飛び降りた。

朝までは何事もなかった平穏な街並みが破壊尽くされ、そこかしらに咲く生々しい赤い血が上空からはよく見えた。「地獄」とやらを体験したようなその景色はいつそ、現実味が乏しいほどであった。

今こそ、人類存亡の瀬戸際。

イリヤは視界の隅で少年が巨人と化す様を認めながら、刃を抜いた。

「そのまま動かないで！援護はいりません!!」

15メートル級相手に真っ向から飛び込もうとしていた班員二名に叫びながら指示して、イリヤは一人の兵士を握りしめている巨人の背後に回り込んでうなじを削いだ。

「やったー!」

屋根の上に倒れこんで蒸発していく巨人と、その手の中でかろうじて息をしている兵士を助け出して、駐屯兵たちが喜びの声を上げる。

イリヤは、そんな彼らの対面の建物の屋根に着地して、ボロボロになった刃を捨てた。息が上がって、身体中骨が軋む音がしそうなほど痛い。腕もそろそろ上げるのが億劫になるほど重たくなってきていた。

見れば、グリップを強く握りしめていた右手の小指の付け根が、皮ごとえぐれて血が滲んでいた。

「ツエラン！やったな!」

能天気な喜ぶ駐屯兵に手を振って返しながら、イリヤは舌打ちした。

アルミン・アルレルトの立案によって、街の中に侵入した巨人の多くは壁の上の兵士に誘われて壁の一箇所に集まっている。

しかし、巨人化したエレン・イエーガーに誘われているのか、何体

か壁には引き寄せられずに、エレンたちのもとに足を運ぶ巨人がいる。それに応戦してきたイリヤは、これで三体目のうなじを削いだところである。

市街地での交戦は、立体機動には有利であり比較的被害も少なく行なえると、今までの経験で感じていたイリヤの予想は外れに外れていた。

「駐屯兵どもめ……ぜんっぜん、動けねえじゃねえかよ……」

口をぱっくり開けている巨人の顔めがけて飛ぼうとしたときは、さすがのイリヤも年上の兵士たちに怒号を送ったものである。彼らを囿に、もしくは補佐を任せて何とか班員の死者を出すことなく巨人をしのげているのは奇跡的でもあった。

——死にたくないし、死なせたくない。

そうイリヤが言った時、「甘い」と叱咤してくれたのは、リヴァイ兵長だったか、それともクシエル副官であったか。

残念なことに、全くもってその通りなのだろう、とイリヤは今にして思う。今までイリヤが生き延びてこられたのは、要は、調査兵団の先輩方に守られていたのだ。

仲間たちの補佐と庇護があつたからこそ、自分は若いながらに多くの巨人を削ぐことができたし、生き延びることができた。

まあ、運が良かったのだ。要は、ただ、それだけだったということなのだ。

「ツェラン！骨が折れている」

イリヤが駐屯兵の班員たちのいる屋根へと飛びうつれば、一人の兵士が顔を青くして言った。先程、巨人の手に捕まっていた兵士が腹を抑えてうずくまっていた。あばらを砕かれたか。

「……二人で抱えて壁の上まで行けますか。離脱させてください。あとの三人は俺と一緒にイエーガーのところに。何か……、うまくいっていないようです」

振り向けば、巨人化したはずのエレン・イエーガーは大岩にもたれてぐったりと倒れこんでいる。まるで使い物にならないデグの棒のようではないか。

トリガーを握る手に汗が伝うのを感じながら、イリヤは班員たちと共に、その場所へと状況確認のために飛ぼうとした。

その時、その場所から、赤の、作戦失敗を告げる信煙弾があがった。

「何があつたんですか!?!イエーガーは?」

精鋭班たちのもとへと降り立ったイリヤたちに、リーダーとして指揮を任されていたイアン・デイトトリツヒが振り向いた。

「イリヤ。作戦を変えるぞ」

「え?」

「リコたちも聞け。エレンを回収するまで彼を巨人から守る。下手に近づけない以上、エレンが自力で出てくるのを待つしかないが……彼は人類にとって貴重な可能性だ。簡単に破棄できるものではない。」

俺達と違って彼の代役は存在しないのだからな」

赤い信煙弾を放ったのは、作戦中止の意図ではなかったのか、とイリヤが見れば、眼鏡の女性兵士、リコ・プレツェンスカが渋面で反論した。

「この出来損ないの人間兵器様のために……今回だけで数百人は死んだろうに……。コイツを回収してまた似たようなことを繰り返すっての？」

「そうだ……何人死のうと何度だって挑戦すべきだ！」

「そ、そんな……!?!」

イアンの言葉に、思わずイリヤは反対の声をあげてしまった。他の班長たちは顔を青くして黙り込んでしまっている。瀬戸際で、ここまでできて、仲間割れか、とイリヤは息を詰めた。

「イアン班長!しかし、イエーガーがいつ出てくるかもわからない状況で、この場に留まり続けることは危険です。……全滅の可能性も高いと思います。ここは一旦体制を整えるのが妥当ではないでしょうか……」

「そうしている間にエレンが巨人どもに食われたらどうする!?!そこそ人類存亡の危機だろう!一旦体制を整えたからといって、一体どう事態が好転するのか、俺には全くわからない!」

「イアン!?!正気なの!?!」

彼の反論に息をつまらせたイリヤに続いて、さらに反論したのはりコ班長である。が、イアン班長は逆に問い返してきた。

「では！どうやって！！人類は巨人に勝つというのだ！！リコ教えてくれ！！他にどうやったたらこの状況を打開できるのか！！人間性を保ったまま！人を死なせずに！巨人の圧倒的な力に打ち勝つにはどうすればいいのか！！」

「巨人に勝つ方法なんて、わたしが知っているわけない……」

「ああ……そんな方法知ってたらこんなことになっていない。だから……俺達が今までやるべきことはこれしかないんだ。あのよく分からない人間兵器とやらのために、」

イアン班長の声が揺れる。

「命を投げ打って健気に尽くすことだ」

命を。

その言葉に、イリヤの背筋に言い知れぬ悪寒が走った。

「悲惨だろ……？俺達人間に唯一できることなんてそんなもんだ……。報われる保証の無い物のために……虫ケラのように死んでいくだろう」

そうこうしているうちに、壁の穴から、数体の巨人がこちらに進ん

でくる。

もう、迷う時間すらわずかにしかない。

「さあ……どうする？……これが俺達にできる戦いだ……俺達に許された足掻きだ」

イアン班長の背後で、数体の巨人がこちらを認めてぐるりと薄気味悪い顔をこちらに向けたのが見えた。

もう、選択しなければならぬ。

最も早く選択したのは、リコ班長だった。彼女が背後の巨人を、もう一人の班長、ミタビが前方の巨人をうけもってその場を離れていった。

健気に、その命を投げ出して戦うために。

「おい、ツエラン。お前はどうか。……調査兵团なら、こういう時、どう動くんだ」

——誰も、死なせたたくない。

それは、イリヤにとって絶対だ。彼の屋敷の主人たちの声だ。平凡で退屈で、イリヤが毛嫌いしていた価値観だが、確かに彼の中に幼少期から存在する絶対的な価値観だ。あの主人の侍従であったケニーのような暴力を認めるわけには……。

巨人の足音がする。イリヤは顔をあげた。そこには、破壊の限りを

つくされたトロスト区の街並みと、命をつくした兵士を咀嚼する巨人の姿があつた。

「……エルヴィン団長なら、イアン班長と同じ判断を下すと思います……」

「そうか……。行けるか？」

「はい……」

負傷した兵士を離脱させてきた班員たちが戻ってきた。それを確認して、イリヤは彼らに声をかけてエレンに近づく巨人へと向かった。

——ただ、エルヴィン団長のやり方と違っていただけ。

そう言つて兵団を裏切った女性兵士、ユデイの顔が脳裏をよぎつた。彼女は結局、なぜ、何のために、調査兵団を裏切つたのだったか。何が、エルヴィン団長とは違つたのか。

イリヤは頭を振つて、脱線した思考を消そうとした。今は、それどころではない。

しかし、やはり世界は残酷なものである。

イリヤは必死に班員への指示を出しながら巨人に応じたものの、数人の班員がその命をまるで虫ケラのように散らせた。

ふと周囲を見渡せば、巨人の数は増えているにもかかわらず、残った人間の数はあとほんの数えるだけであった。

息も絶え絶えになりながら、ガスと刃の残量を確認すれば、もうあと僅かにしかなかった。とても、目の前に溢れる巨人どもに応戦できる量ではないことは、経験の浅い駐屯兵ですらはつきりとわかった。

潰えた希望に、イリヤが死を覚悟したその時。

「エレン・イエーガー……」

15メートル級の巨人が、大岩を持ち上げて進む姿が目に入った。

「おい、やったぞ……」

班員の一人が呟いた。皆がその巨人の姿に、わずかな希望を見出して、潰えかけた士気が、一気に沸き立つ。

そしてイリヤはそのとき。その人間兵器たる巨人の姿のはるか向こう。

壁の向こう側の遠い空に、か細く、しかし一筋しっかりと打ち上げられた赤い信煙弾の狼煙を見つけた。

「……帰ってきた」

調査兵団が。仲間たちが、帰ってきた。この危機に気づいて、駆けつけている。

「皆ーもうすぐだーあと少しーイエーガーを守れ!!」

イリヤの必死の声かけに、士気を取り戻した班員たちが応じる。生

き残って応戦していた兵士が、それぞれ巨人に応戦し、そしてエレンの行く手を阻む巨人を引き付けるために地面に降りて囮となっていく。

「リコ班長!!」

声の方向で、眼鏡の女性兵士に7メートル級が手を伸ばしているのを確認して、イリヤは死に物狂いでアンカーを巻き上げてそのようなじを削いだ。

その側で、負傷して倒れている兵士が二名。

「リコ班長!ここは俺が!エレン・イエーガーを!!」

「わかった!」

地面に降り立って、負傷した兵士を生き残った班員、二名と共に抱き上げたとき。

背後から巨人の足音が無情に響いた。振り向けば、15メートル級が三体。しっかりと彼らを見つめていた。

ここは、エレンに誘われずに自分たちに食いついたことに喜ぶべき場面だろうか、とイリヤは思う。このままでは五人とも食われる。

「問1だ」

その状況は、朝に調査に出る前にイリヤの上官、クシエルが彼に出した問いそのものだった。

——旧市街地での交戦中、背後より巨人三体が向かってくるのを確

認。味方は存命五名。うち二名は重症。ガスも刃も残りわずかなこの状況で、最善の行動は。

一人一体討伐を目標に応戦、は、

——不正解!!

耳の奥で、上官の音が響いた。

命の数をかぞえろ。

最優先すべきは、「生き残る」ことだ。俺は、やっぱり死にたくないし、死なせたくないんだ。

「ツエラン調査兵!!」

班員たちが叫ぶ声に、意を決したイリヤは最後の刃を抜いて、ワイヤーを高々と上空に向かって放った。

## 四

調査兵団の主力部隊は、旧市街地での交戦中、巨人たちが突然南に向かつて歩き出したのを認めて、エルヴィン団長の指示で急ぎよ、トロスト区への道を引き返していた。

団長の予想通り、その壁にシガンシナ区に開けられたそれと同じ穴が開いているのを確認したときは、さすがの調査兵団の兵士たちも、大きな絶望に襲われた。

行軍の先頭に行く団長の後ろについていたクシエルもまた、五年前に襲われた街の様子をまざまざと思い起こしながら、こみ上げる激情を抑え込むように、馬の腹を蹴って速度を上げた。

早く。一刻も早く。

そんな思いを込めながら最速力で、門扉であったはずのその穴へと行軍が入ろうとしたその時だった。

「な!!?」

「なんだ!!?」

一瞬見えた巨人の姿。その次の瞬間に、穴が塞がれたのだ。行き場を失った馬が悲鳴をあげる。行軍は急停止を余儀なくされた。

「なんだ!!?何があった?!駐屯兵が穴を塞いだのか!?!」

「まさか!そんな技術ないはずでしょ!」

ハンジ分隊長とその部下が戸惑いの声をあげる。行軍全体が困惑に包まれ始めたとき、誰よりも早く反応して、その壁を一気に駆け上がったのは兵団随一の戦力を誇るリヴァイ兵長だった。

「皆、リヴァイ兵長に続け！今は何よりも街の中に侵入した巨人の討伐と住民の避難が最優先だ!!」

エルヴィン団長の素早い指示に、兵長のあとを追うように、緑の外套の影が一斉に壁を駆け上がっていく。

団長とともにその壁をあがったクシエルの視界に入ったのは、信じがたい光景だった。

「巨人!?!」

彼女がその異様な光景を確認したのは、門扉付近の人間に誘われた巨人二体を、リヴァイ兵長が討伐し終えたところであった。

その門扉の穴には、トロスト区にあったと思われる大岩が。そしてその側にうずくまる、巨人の死体。

クシエルが門扉付近に降り立ったそこに、その巨人の死体を守るように駐屯兵と数人の訓練兵があった。

「リヴァイ」

「…………エルヴィン。この巨人が…………いや、このガキが穴を塞いだらしい…………」

巨人の臭気があたり立ち込める中で、その両手の巨人の血を拭うことすらせず、リヴァイが困惑気味に舌打ちしながら言った。

「え？巨人が？」

消えつつある巨人の足元で、三人のまだ若い訓練兵がリヴァイとエルヴィンを見つめていた。クシエルは全くその報告の意図がつかめず、ただエルヴィン団長の後ろに付き随うだけである。ふと見れば、彼らのそばにいた小柄な眼鏡の駐屯兵が、

「穴は塞ぎました。あとは、駐屯兵の救援と、巨人の討伐です」

と、視線を街中へと向ける。その視線の先には、巨人と応戦する駐屯兵の姿があった。よくよく見れば、そこいらは駐屯兵のものと思わしき死体と血で溢れかえっている。

その報告を聞いて、エルヴィン団長はすぐさま、壁を越えてきた調査兵たちに駐屯兵の援護を命じた。うち数人の兵士が、帰還の報告と状況把握のために、内門方向にいらっしゃる司令部へと飛んでいく。

クシエルはもう一度、振り返って大岩を運んだと思われる巨人の死体を見上げた。

15メートル級ほどの何の変哲も無い巨人の死体に見える。少しずつ蒸発しているようで、蒸気と臭気が凄まじい。

ふと見れば、巨人の死体の足元にいる訓練兵の一人は、装置もつけない。その姿から、わずかに蒸気が放出されている。

「このガキが巨人になってやったらしい」

「彼が？」

巨人に？人間が巨人になったというのか？とクシエルはその黒い瞳を大きく見開いた。

否。

可能性は考慮できたはずだ。

五年前の襲来。

超大型巨人。鎧の巨人。門扉を狙ったように破った巨人。壁の外からやってきた異形の巨人たち。

そして、巨人になった少年。

「クシエル。今は考え事をすべきときではない。君も駐屯兵の援護に回れ！」

は、と見上げた先で、彼女の考えを見透かしたような青い瞳があった。エルヴィンのその指示に我に返ったクシエルは、彼女の近くにいた部下のエーミールを伴って、その場を離れた。

「クシエル班長。これは、」

「エーミール。団長の言う通り、考えるのはあとだ。っと」

門扉近くに群がっていた巨人に、先に援護に回った調査兵たちが交

戦している。視界の隅で、常人離れた速さで飛ぶ黒い影が、さらに巨人をそぎ落としていく姿をとらえながら、彼女は周囲の状況を走りながら確認する。

人類最強とされるリヴァイ兵長をはじめとする調査兵の加勢に、駐屯兵たちが歓声を上げていた。

駐屯兵たちは平地での交戦に苦戦していたのだろう。常に平地での戦闘を考慮に入れている調査兵たちは、白いガスを幾重にも吹かしながら、巨人どものうなじを次々に削いでいく。

歓声をあげながら建物の近くまで退避して、立体機動で高所へと避難する駐屯兵たちのなかで、地面を負傷兵をそれぞれ背負って歩く駐屯兵二名を見つけて、クシエルは声をかけた。

「大丈夫か。壁まで飛べるか」

「ああ。大丈夫だ。あんたたち、調査兵か……」

助かった、と周囲の兵士たちが喜色を浮かべて壁や建物の上へと避難していく中、クシエルとエーミールの兵服を見て、バツの悪そうにその駐屯兵たちは言葉を濁した。それにクシエルが首を傾げれば、

「イリヤ・ツエランを知ってるか。彼が俺たちを指揮してくれたんだ」

「イリヤは私の部下だ」

「すまない……。彼が、囹になってくれた。だから、俺たちは助かった」

彼女の部下の名を呼んで、彼ら生き残った駐屯兵たちは、顔を青くしたまま視線を落とした。

「クシエル班長！ちよつと、待ってくださいよ！……副官!!」

エーミールの制止を聞かず、駐屯兵の援護にも回らずに、彼女はその部下を探していた。駐屯兵たちの言っていたあたり。建物の間を飛び回りながら、散らばる死体に近づいてはその顔を確認する。

必死に飛び回る上官に、エーミールは「命令違反ですよ!」と声を荒げたが、彼女はその声に耳を傾けるそぶりすらせずに、急に小さな路地の間でスピードを落とした。

彼女は、その見慣れた顔を、建物の陰になっている場所で見つけて地面に降り立った。近くには、巨人の気配はない。

「イリヤ……」

そこには、巨人どもが食い散らかした人間の残骸があった。

長身瘦躯であったはずの彼の下半身がまるつきり欠損した死体だった。しかしその顔は全く傷がついておらず、まだ血の気もひいておらず、顔だけ見れば寝こけているような静かな顔である。

残された上半身にくっついて両手に、しかと握られた刃が、彼の武勇を伝える唯一だった。

「副官……」

「……静かな表情だ。戦っていたとは思えないな」

彼が出したのだろう、その血だまりの中に躊躇いなく膝をついて、彼女はその部下の少年の顔を撫でた。まだ、少し暖かい。それは、ほんの少し前に彼が絶命したことを証明していた。

ぎり、と唇を噛み締めた彼女に、部下のエーミールは、「行きましよう。遺体の回収はあとです」と肩に触れる。しかし、彼女は全く動かない。

いつもいつも、絶対にエーミールの言うことを聞こうとしない彼女に、さすがのエーミールも業を煮やして、震える声で再度彼女の名を呼んだ。

「死体に構うなどいつも言ってるのはアンタでしょう!？」

そう言っつて、エーミールが彼女を後ろから抱えて立ち上がらせようとしたとき、ようやくクシエルが彼の名を呼んで答えた。

「エーミール……。これは……。何?」

クシエルの黒い瞳が、これでもかというくらい驚きに見開かれている。

「こ、これは……!!」

下半身が欠損したその死体。

その部下の死体から、大量の蒸気が突然放出しだした。その蒸気と、鼻をつくような腐ったような臭気は、巨人のそれと同じ。

クシエルとエーミールが言葉を失ってその死体を見つめる中、それは蒸気を放出しながら、みるみるうちに「元の姿」へと戻っていった。

血だまりの中、ちりりと焼けるような熱さを発しながら、死体の下半身が生まれてくる。それこそ、本当に、文字通り生まれて、再生されていったのだ。

「う……、」

彼女たちがあまりの驚きに固まっている中、その死体はあつという間にもとの欠損なき完全な人型へと戻っていき、声を発した。

「イリヤ?!」

「う……ク、シエ……」

それはもう、死体ではなかった。

クシエルは慌てて、その部下の手を取る。両手で握れば、わずかに握り返してきた力があつた。

「どうして……?」

困惑に思考が止まる。しかし、その両手にしっかりと握りしめた少

年の手からは、確かに生きる者の脈動が伝わってきた。

その血潮の動きに、暖かさに、クシエルの頬を一筋の涙が伝った。

それは、トロスト区攻防の終わり。

巨人化した少年とは別に、突如として現れた、世界の謎のひとつだった。

## 五章 バケモノの子どもたち

一

あれから、すでに三日が経過していた。

それにもかかわらず、未だエレン・イエーガーの処遇は決定していない。

地下牢へと続く長い廊下を歩きながら、リヴァイは見張りの憲兵団へと目配せしながら、中央の連中は仕事が遅い、とひとりごちた。

「面会時間は一時間。面会許可がおりているのはエルヴィン団長とリヴァイ兵長だけです。私は外で待機していますので、何かありましたらお声掛けください」

並んで歩くりヴァイとエルヴィンの後ろで、団長付きの副官である女性が書類を片手に報告する。

「エレン・イエーガーの様子は」

「意識はまだありませんが、呼吸、心音ともに正常だそうです。作戦時に負ったと思われる擦傷などの外傷も全て三日前に跡形もなく完治しています。もういつ目が覚めてもおかしくないようです」

「たった1日で全ての外傷が完治したというのは事実か」

「事実です。それどころか訓練兵、アルミン・アルレルトの証言によれば、身体欠損ですら完治しているということなので、巨人同様の再生

能力を有していると考えられます。それが巨人時に限る能力なのか、人間態でも起こりうるものなのかはまだ検証されていません。ですが……例の件もふまえると、おそらくは後者かとハンジ分隊長は推測されています」

団長の言葉少なな質問に対して、淀みなく答える副官にリヴァイがちらりと視線をやれば、感情の読み取りづらい無表情がそこにあった。

トロスト区の壁に穴が開けられたあの日から、壁内へと侵入した巨人の掃討、死体の身元確認などの残務処理に追われた調査兵団である。リヴァイもまた、寝る間も惜しんで奔走していた故か、その副官の顔を見るのはかなり久方ぶりのような気がした。

「リヴァイ兵長。何か」

斜め後ろを歩く彼女が、リヴァイの視線に気づいて声をかけてきた。よそよそしい対応だ、とリヴァイは思う。

まあ、ここが中央の審議所の地下であること、周囲には数人の憲兵がいることもあり、当然の対応ではある。だが、この女のすかした猫かぶりな態度は、リヴァイにとってはあまり好ましいものではなかった。彼女が、気心知れた者の前で見せる人懐っこい笑顔や、獰猛さを孕んだ瞳は、こうした任務のときにはすっかり鳴りをひそめてしまふ。

「お前はどうか。巨人化したガキと行方不明のその親父。そして巨人の謎があるという地下室。どう考える」

情報を共有しているとは言え、分隊長や兵士長のような発言権はない副官の彼女に、先ほどの会議での案件について問う。

「エルヴィン団長と同じです。それこそ、人類の勝利のためのカギになると思います」

「そうじゃねえ。お前は何を考えてるのか聞いてんだ。壁に穴が開けられて人類存亡の危機つてときに、お前、あれからやけに楽しそうじゃねえか。それともそれは俺の見間違いか？」

瞬いた黒い瞳が、一瞬、ぎらりと確かな熱量をもって輝いたのを見逃すリヴァイではない。ここ数日、リヴァイが彼女の姿を見かけなかったのは、彼女が仕事を放棄して自室に閉じこもって何やら調べ物をしていたからだ。そして久方ぶりに今朝姿を見せた彼女は、攻防の後の残務処理で披露しきっている兵士を前に、やけに晴れ晴れとした顔をしていた。

他の者ならわからぬかもしれないが、リヴァイにはそれとわかるほど、彼女は機嫌が良さそうだった。

このクソみてえな状況下で、何を考えてやがる。

そのご機嫌な表情に、舌打ちをこらえたのはつい先ほどのことである。

「リヴァイ」

しかし、彼女が何やら答える前に水をさしたのは、隣でずっと黙って歩いていたエルヴィンであった。

「もう着く。無駄話は後にしろ」

有無を言わさぬ冷たい声と、リヴァイにちらりとも視線をよこさないその男の態度に、リヴァイは本日何度目かの舌打ちをこらえなが

ら、黙して従った。

前を見れば、牢へと続く扉の前で憲兵が敬礼をしていた。

「お疲れ様です。エルヴィン団長、リヴァイ兵士長」

「ああ。申請していたエレン・イエーガーとの面会だ」

「存じております。準備が整うまで、あと少しお待ちください」

憲兵はまだ若く、実直そうな見目の男だった。彼は好奇心に満ちたような瞳を扉の前で立つ調査兵団団長と兵士長へと注ぎ、「調査兵団は死亡者は出なかつたんですね」と話しかけてきた。一兵卒のくせに態度がなっていない、トリヴァイは見咎めようとしたが、エルヴィンは待ち時間の暇つぶしだと言わんばかりに、適当にそれに答えた。

「トロスト区内で死亡したのは一名だけだった。もちろん、壁外で死亡した者は多数いるが」

「一名？出撃した調査兵の中から、死亡者はいなかつたとお聞きしていますか」

「出撃した者は、な。彼女の部下が一人死んだ」

エルヴィンが背後に控えていた副官のクシエルに視線をやる。その若い憲兵が不思議そうに首をかしげたのに対して、副官は、

「死亡は確認していません。行方不明です」

と抑揚ない声で反論した。

「あの日、壁内での待機命令を下していた兵士が一人。駐屯兵と協働してトロスト区奪還作戦に参加した後、行方不明となりました」

「死体が見つかってねえなら、十中八九跡形もなく食われたんだろうよ」

リヴァイが言えば、憲兵はなるほど、と頷いた。

「ちなみに、その勇敢な兵士の名前は？」

「イリヤ・ツエラン調査兵です」

副官の声と同時に、牢へと続く扉が内側から音を開けて開いた。

「お入りください」

中から少し年のいった憲兵が彼らを呼ぶ。扉の外の若い兵士は、無駄口を慌てて塞いで背筋を伸ばした。

エルヴィンに続いてリヴァイが牢の中に入る。ちらりと振り返れば、閉まる扉の隙間に一瞬、副官の女のぎらついた眼と視線があった。

\*\*\*\*\*

ちりりと焼けるような微かな痛みと、風呂のお湯のような温かな感覚を感じ、イリヤ・ツエランは夢心地からゆっくりと浮上するように目を開けた。

ぼやけた視界と、呆けた思考でまず認識したのは、目の前の茶色い

塊である。それが何やら生暖かい呼吸をしていて、ああ、犬でも自分の上に乗っているのか、と瞬きしながら思った。

犬でも、と思ったのは、その息遣いがやけに荒かったからである。

そして次に認識したのは、犬にしては大きな瞳と、それとイリヤの間を隔てるガラスの存在である。

きらりとガラスが反射して、ぬらぬらと輝いていた瞳が隠れる。

「ああ。イリヤ。起きたかい？どう？気分は？何か感じない？痛みは？暑さは？それとも今から巨人化できたりしちゃう？」

「ふあっっ!!」

顔のすぐ前にあつた「犬」と思わしきその正体に気づいたイリヤは、一気に覚醒して思わず寝たまま後ずさった。

「ハ、は、ハ、ハン、」

「なに？ハン？ハ？何何？」

後ずさった彼にさらに迫ってきたのは、見間違えようもない。第四分隊の分隊長、ハンジ・ゾエその人だった。

しかしいつもの温厚そうな笑顔ではなく、今日の前にいる彼女は、鼻息荒く、瞳孔を開ききつた瞳で、イリヤを見つめていた。興奮して開けられた口から、だらりと一筋よだれが垂れたのを見て、イリヤは「あ、食われる」と命の危険を感じた。

「ハンジ分隊長！こら。私の部下が怖がってるじゃないですか。下

がって。抑えて」

「あああああああ、クシエル。でもこれ見てよ。こんな奇跡を目の当たりにして冷静にいられるかい？いや、いられないよ!!これは人類の奇跡だ!!」

ぐい、と迫ってきたハンジを抑えたのは、彼の上官のクシエル副官だった。その彼女と、目の前で息を荒くして興奮している分隊長の視線を追って、イリヤはひい、と心臓を冷やして小さく叫んだ。

「なんですか!?!これは!?!?」

ベッドの上で寝ている自分の左腕から、白い蒸気がもうもうと上がっている。先程から感じていた温かな感覚はこの蒸気の故だったのだ、と気づいてイリヤは混乱した。

その蒸気は、巨人が上げるそれに酷似していたのだ。その臭いも、巨人のそれと一緒にようである。

「ああ、イリヤ。怖がらないで。順を追って話すからさ。まずはこれ、ごめんね。あなたの再生能力を検証するために、ちよっと腕をナイフで切らせてもらったんだ」

「再生能力? ナイフで?」

「ああ!心配しないで!黙って君の腕を切ることはさすがに悪いと思っただね。君の上官の許可をもらってから切ったから大丈夫。安心してくれ」

「はあ?」

わけがわからない。分隊長は変人で、その思考回路は一切理解できないと思っていたが、その発言の全てが理解できないのはこれが初めてだ、とイリヤはさらに混乱した。左腕から上がる蒸気は少しずつ量を減らしている。見れば、「ナイフで切った」という傷は、どこにも見当たらなかった。

「ハンジ分隊長。さらに混乱してますよ。イリヤ、悪かったね。あなたは壁に穴が開けられてから、数日間眠ったままだったんだ。少しずつ話すから。その前にまずはしっかり水分と栄養を補給してくれ」

ハンジ分隊長のひとつでまとめた髪を無造作に引っ張って、後ろに彼女を後退させた副官に、分隊長は「ぎゃあ」と何やら奇声を発している。まるで上官と部下の関係性には見えない彼女たちは、確か古い友人のような関係なのだ、と以前教えてくれたリヴァイ兵長の声を思い出す。

直属の上官であるクシエル副官の、労わるような声音に少し安心して、イリヤが半身を起こしたとき、勢いよく後頭部を鷲掴みにされた。

「はい。なかなか自分でも水も飲めないだろ。少しずつ飲むんだよ」

無理やり口を開けさせ、そこからコップに入った水を押し流してきた副官に、イリヤは殺意を覚えながら、それを必死で飲み干した。

\*\*\*\*\*

「以上だ。だいたいこの状況は把握できたかな？」

「……はっ」

クシエル副官と、ハンジ分隊長の説明を一通り聞いて、イリヤは力なく頷いた。

「壁の穴を塞ぐ作戦は成功。それから今は一週間近く経過して……俺は作戦中に一度死亡。しかし再生して、蘇生したと」

「そう。蘇生したと言っても、全く目を覚まさなかったから仮死状態のようなものだったのかもしれないけどね。今見るに、栄養失調にもなっていないし、全く健康状態は問題なさそうだ。体調も問題ないだろう?」

「はい。特に……」

ハンジ分隊長は、彼の左腕を手にとって、「再生能力は確かだ。さっきの傷もすっかり治ってる」と、今はもう蒸気も発していないその腕をまじまじと見つめて言った。

「……イリヤ。あなた自身は、この現象に心当たりはないんだね?」

問うてきたのはクシエルである。ハンジの後ろで腕組みをしている彼女は、イリヤが頷いたのを確認して、大きなため息をひとつ漏らした。

「謎は謎のまま、か。エレン・イエーガーの件といい、分からないことだらけだね」

「それでもエルヴィンの言う通り、これは人類の奇跡であり、勝利への第一歩だよ!イリヤやエレンの体を徹底的に調べ上げれば、何か巨人の謎に迫る手がかりがつかめるかもしれない!!ねえ、イリヤもそう思うでしょ!!協力してくれるよね?!」

「……………それが、人類の前進に繋がるのならは何なりと」

心臓を捧げる敬礼をして、歓喜にむせびく分隊長に答える。調査兵にあるまじき躊躇いは、ハンジ分隊長には気づかれなかったようである。しかしちらりと視線を上げて副官を見れば、彼女の方はイリヤの逡巡に気づいたようで、呆れたような表情をして口を開いた。

「……………あなたが巨人に応戦したときの状況を報告書で確認した」

「あ、そうですか……………」

「後方から巨人三体が接近。負傷兵二名と部下二名がいるなか、あなたは一人で巨人の囿になった」

「そ、そうです。調査前に出された問題と同じ状況でした。……………問題の答えで、俺は三人で応戦すると言いましたが、それは「不正解」だと副官が仰ったので……………とっさに、判断しました」

恐る恐る答える。彼女のもとについてからというもの、何度も巨人応対時の判断を問われていたが、今まで一度もイリヤは正解をもらえていない。

「……………命の数だ」

クシエル副官が言った。窓から差し込む斜陽に、黒い瞳がしっかりとイリヤを見据えて輝いていた。

「巨人との遭遇時は、自分を含めた全員の命の数を考えるんだ。どう動けば死ぬ人間は少なくて済むか。……………エルヴィン団長はいつもそ

う判断している。イリヤ。あなたの判断は間違っていない。自分の命を切り捨てることで、他の四名の命が助かった。数としては圧倒的に「正しい」判断だ」

「正しい」と言われて、イリヤはほっと安心して息を吐いた。

「でも、それは結果論だ。あなたが言ったように、巨人と応戦した方が助かる命が多い場合もあるかもしれない。あなたが困りなつたとしても、全員死ぬこともあるかもしれない。全ては予想できない。本当は、答えなんてないんだ」

それでも。と彼女は言う。

「それでも、判断するときには必ず命の数を数えろ。誰一人死なせず、自分も死なないなんて選択肢は滅多にない。死にたくないし、死なせたくないなんて、通用しない。よくわかつただろ？」

あのトロスト区での攻防。一体、何人の命が散つたのか。自分はその作戦に参加して、一体誰を守れたというのか。精鋭班の大半は、あつけなく戦死したのだ。

否応ない不条理を思い起こし、イリヤが頷こうとしたとき、副官が一転して軽い口調で言った。

「ま、今のあなたなら、そんな無茶な願望ももしかしたら叶えられるのかもしれないけどね」

「えっ？」

「確証はないけど、あなたは不死に近い能力があると考えていいだろう。巨人と同じく、急所を狙わない限りは再生し続ける能力だ。あな

たは死なない兵士。そんな兵士を、今までと同じように遊ばせておくと思う？あのエルヴィン団長が」

少し自嘲気味に笑って、クシエル副官が言った。意味がわからずハンジ分隊長に視線をやれば、彼女の方は神妙な顔をしてイリヤを見つめるばかりである。

何を、と問おうとしたとき。

不意に、扉を叩く音が聞こえた。ハンジ分隊長の応答の後、扉が開いて、そこからリヴァイ兵長が顔を出した。

「起きたか、イリヤ」

低い、不機嫌そうな声はいつもの兵長だ。鋭い三白眼に、部屋の空気がぴりりとこわばったような気がした。

「許可が下りたぞ。クシエルとイリヤ。お前らは明日から俺の班と同じ行して、古城待機だ」

わかりました、と頷く副官と、なるほど、と得心したように頷く分隊長。わけがわからないのはイリヤだけなようである。彼が目を瞬かせていると、兵長がその鋭い瞳で睨みつけるように言い放った。

「イリヤ。お前は明日からエレンの護衛だ。何度死んでもあのガキを守れ」

「え、は、え？」

「エレンが人類の矛なら、お前は盾だ。駐屯兵团や憲兵团には行方不明で報告しておいたからな。お前はもう死んだことになっている。」

「これでお前は心置き無く何度でも死ねるってわけだ」

ツカツカと踵を鳴らしてリヴァイ兵長はベッドのそばまで来て、冷たい視線でイリヤを容赦なく見下ろした。

「せいぜい、本当に死んじまわねえようにうまく死ねよ。イリヤ」

小さく丸められた背中を、エレンは見つめていた。その背中の主は、波風立たぬ穏やかな湖面を眺めている。

湖を囲む森の木々たちも、穏やかな風にその木の葉を揺らすだけで、あたりは静謐な雰囲気に包まれていた。

背中の主が振り返るが、顔は見えない。

まるで顔だけが霧に隠されたように、その主の輪郭はぼんやりとしている。

誰だろう。あれは、誰だっただろうか。

——  
××××。我が一族の盾。

違う。それは俺のことじゃない。あんだ、

「これは持論だが躑に一番効くのは痛みだと思う」

よく研ぎすまされたナイフのような硬質で、それでいてひんやりと冷たい声が頭の上から降ってきた。頭と顔と腹を襲う痛みに、世界が回る。なんとか視線だけでも上げれば、それこそナイフのような鋭利な顔つきの兵士が俺を見下ろしていた。

憧れのリヴアイ兵長は、流石、切れ味が良い。俺が幼い頃にミカサと握った果物用のナイフじゃなくて、人の肉を切るためだけに研がれたナイフのように、一途に、美しく研ぎすまされたナイフだ。この人

はそんなナイフのような顔をしている。

再び数発蹴り上げられて、そんな思考もどこかに吹き飛ばされた。痛みと朦朧とする意識と、心の臓から湧き上がる熱さに、リヴァイ兵長や周囲の人の声が遠くなっていく。

コノヤロウ、と抑えきれない熱さになんとか顔をもたげれば、冷えた切ったアイスブルーの目が忌々しげに細められていた。この人、まるで人をゴミかなんかのように見るんだな。

その彼の背後には、審議所の天井に描かれた壁画が見える。数人の男に囲まれた一人の人物が、地面に膝をついていた。両手を鎖で拘束されたそいつは、罪人なのだろう。

どうやらそれは、俺の姿のようだ。

「結論は出たな」

リヴァイ兵長が何やら言い放った後、審議所に響いたその声で、ざわめきは一瞬にしておさまった。押し殺したような静けさに、顔を上げれば、ザツクレー総統が机を一つ叩いた。

「エレン・イエーガーを調査兵団預かりとする」

命が繋がれた。

俺がそれを理解した時、リヴァイ兵長の一声で俺を地面へと拘束していた杭が外された。

「手当を」

その兵長の呼びかけに応じるように、俺のすぐそばに駆け寄ってきて、膝をついた兵士がいた。体を起こすために差し出された腕が予想以上に細くて、驚いて見たら、それは黒髪黒目の女性兵士だった。

ああ、「女神様」か。

「彼の手錠を外してくれ」

「いや、しかし」

「彼はもうこちらの管轄だ。手当をしたい。外してくれ」

「女神様」——クシエル副官の言い分に逡巡する憲兵団に、リヴァイ兵長が畳み掛けるように睨みをひとつきかせれば、彼らは躊躇いながらも俺の両腕を解放した。クシエル副官は俺の両手首の手錠による擦り傷に、「可哀想に」とその優しい手を重ねた。

驚いてその顔を見れば、脱脂綿を口に容赦なく突っ込んできて、「歯が抜けただろ」と眉をひそめて言った。

その後の傷の処置は、簡易的であり、そして少し強引ではあったものの、迅速であった。彼女は終始労わるような視線をくれていたが、「可哀想に」と撫でた傷は、両手首のそれだけであった。リヴァイ兵長の一方的なリンチによる傷には、何も言わなかった。

その後、審議所の控え室に通されて、ハンジ分隊長が用意していた医療箱によって傷は再度処置された。巨人狂いと訓練兵団にも聞こえの高い分隊長の手当は、副官のそれとは違い、完全に「処置」であった。リヴァイ兵長の暴力を「やりすぎ」というふうの評して心配そうに目を細めてくれたが、その栗色の瞳からは俺への好奇心が隠しきれずにこぼれ落ちていた。

「君に敬意を」と握手を求めてくれたエルヴィン団長も、隣で横暴な素振りや座しているリヴァイ兵長も、目の前で爛々と目を輝かせているハンジ分隊長も、俺を調査兵団へと迎え入れたことに、安堵を覚えているようだった。

ちらりと窓際に視線をやれば、寡黙に腕を組んでいるミケ分隊長が俺に一つ頷いた。その隣では、クシエル副官が少しだけ笑いかけてくれている。

少なくとも俺は、この人たちには拒絶はされていない、らしい。

「ねえエレン。口の中見せてみてよ」

リヴァイ兵長と何やら問答をしていたハンジ分隊長が不意に好奇心に満ちた顔を向けてきた。はい、と従順に口を開ける。リヴァイ兵長は隣で何やらエルヴィン団長に言っている。ミケ分隊長とクシエル副官が一言二言、言葉を交わしている。

「あつー！」

部屋の中に流れ始めた幹部と部下同士の、賑々しい空気は、ハンジ分隊長の驚愕の声で一瞬にして掻き消えた。

「歯が、生えてる……」

震えた声に、わずかに俺は肩を震わせた。

実は何となく。何となくその感覚はあった。何やら口の中と手当てされた傷の部分だけ、やけに暖かくなってきたのは審議所をで

た頃からだっただろうか。気のせいかとも思っていたが、もしそれが傷が治る過程に生じた温度だとするならば。

「あ!!傷も!!」

確認のために頬に貼られた傷宛を外せば、瞬時にハンジ分隊長が叫んだ。驚愕と、少しの恐怖に似た感情を浮かべていた顔が、みるみるうちに嬉しそうに輝いていく。

「エ、エレ、」

「ハンジ。大きい声を出すな。抑えろ」

明らかに興奮した様で叫びだした分隊長の肩をもって抑えたのは、エルヴィン団長だった。団長の冷静な叱咤に、さすがの彼女は大人しく黙して頷いた。だが、興奮は冷めやらぬようで、鼻息だけは犬のように荒い。

「人間態でも再生能力は巨人並みということだな」

落ち着いた声音の団長は興味深いなとうなずいた。しかし、どうにも俺には団長の顔から驚きや好奇心を感じ取ることができずに、「はあ」と間抜けみたいに答えてしまった。

「気持ち悪い……」

ぼそりと呟いたのはリヴァイ兵長である。絞り出したような、小さな声は彼の本音を表していて少しだけちくりと胸が痛む。見れば、俺を無表情に蹴り上げていたナイフは、今はまるで人間のよう感情豊かに歪められていた。

めつちや気持ち悪い。

そう、はつきり顔に書かれている。さすがにちよつと傷つく。下衆でも見るようなその顔つきに、「ブククツ」と鼻を鳴らして笑ったのはクシエル副官である。しかし彼女はリヴァイ兵長が何か口を開く前に、「失礼をいたしました。申し訳ございません」とすぐさま取り澄まして背筋を伸ばしたので、悶着は起きなかった。

一瞬、沈黙が訪れたのは、たぶん、その調査兵団の中心人物たち全員がすごい勢いで何やら考えていたからだろうと思う。一番最初に口を開いたのは、意外なことに寡黙を貫いていたミケ分隊長だった。

「あいつと同じか、クシエル」

「……おそらく。彼にはあれ以来、試していませんので確証はできませんが……。まだ、あれから一度も目を覚ましていないので」

「確認は必要だな。彼とエレンの能力の相違を早急に調べ上げることが先決だ。できるか、ハンジ」

「もちろんさ、エルヴィン!! そうと決まれば早速彼のところに戻らなきゃね!」

「おい、眠っている兵士に実験するのか。それはあんまりじゃないのか?」

「大丈夫です、ミケ分隊長。私が責任を負います」

唐突に繰り広げられた会話に、戸惑って言葉を失っていれば、隣で同じように口を噤んでいた兵長が、元のナイフのように研ぎすまされた視線を投げてきて言った。

「あいつ」とやらが気になるか」

「……ええ。俺と同じように、巨人化する、んですか？」

まさかと思って問えば、リヴァイ兵長は一瞬、団長の方へちらと視線をやったあと、すぐに真っ直ぐに俺を見つめた。

「あいつは巨人化はしねえ。今のところ、な。……あいつは、お前の」

\*\*\*\*\*

「あいつらはお前の監視係だ」

古城の窓から外を覗きながらそう教えてくれたオルオさんは、物憂げを装ってふう、とわざとらしくため息をついた。

「あいつらはクシエル副官率いる研究班。表向きは団長や司令班の補佐、壁内資料の歴史研究が主な任務だが、裏の顔は兵団内部の兵士たちの素行や内通者を監視する奴らだ。要は監視のプロってわけだ。……気をつけろよ。お前のような小便臭いガキなんぞ、少しでも怪しい動きをすれば、俺たちが手を下す前に、あいつらがお前を消すだろうからな」

古城の二階から見下ろした先には、黒髪の女性兵士と、二人の男性兵士が荷馬車から大量の荷物を古城に運び込んでいる姿があった。あれが、リヴァイ班とともに古城待機を命じられたクシエル班の精鋭だ。

振り返れば、「兵長の真似はやめて！」とオルオさんの腹に掌底をお見舞いしているペトラさんと、それに白目を剥き出している三角巾クラバットのお掃除姿のオルオさんが遊んでいた。

「クシエル副官は、そういった任務もされているんですね……。仲間  
の監視だなんて……」

「意外だった？」

「あ、まあ。「女神様」の噂の印象が強くて」

クシエル副官。五年前のシガンシナ陥落の際、放棄された街から見捨てられた負傷兵と民間人を救出した英雄譚は有名である。それこそ、一個旅団並の戦闘力をもつと伝説化したリヴァイ兵長と同じくらい、彼女は民間におけるヒーローなのだ。危険を犯してまで人命を救った彼女の英雄譚は、兵団旗を掲げて人類を率いる慈愛の女神として絶大な人気を誇示している。

聖母とまで評される彼女は、リヴァイ兵長が無双の戦いの神様のように讃えられるのと、まるで対になっているようだ、と話してくれたのは、女神様ファンのアルミンだった。

俺の感想に、ペトラさんはうん、と少しだけ考えて、

「うん。クシエルさんが優しい人だというのは本当だと思うよ。いつも末端の兵士にも笑いかけてくれるし、部下思いの人だと聞いたこともあるわ。まあ、リヴァイ班はあまりクシエルさんと仕事をすることがないから、人づてで聞いた評判だけど」

「リヴァイ班とは関わりはなかったんですか？」

「そうね。リヴァイ班は他の班とは別行動が多いし……。連携するのはハンジ班がほとんどだしね。クシエルさんとリヴァイ兵長が仕事以外で話しているところもあまりお見かけしないし……。あまり知らない、というのが本当のところなんだけど……」

でも、と少しだけ言いよんだペトラさんに、「それだけじゃないだろうよ」と口を挟んだのはオルオさんだ。彼はそのとても小さな目をさらに小さく細めて、厳しい声で言った。

「ただ優しいだけの人間が五年以上生き延びられるほど調査兵団は甘くねえ。それに、ただの慈愛に満ちた「女神様」を、あのエルヴィン団長が側近として重宝する筈がない」

「エルヴィン団長が、クシエル副官を重宝する理由とは、何なのでしようか」

「わからないのか？まあ、お前のような小便臭いガキならわからないだろう、ツグ!!」

オルオさんの話の途中、厳しく形相を歪めたペトラさんが彼の肩に体当たりした。哀れなオルオさんは、舌を嚙んだようで、激しく悶絶している。この二人の先輩方は本当によく遊んでいる。

「エレン。コイツの言うこと、気にしなくていいからね。ほんっと、変な喋り方!」

「オイ、ペトラ。お前、そんなに俺の手綱を握りたいのか？」

「気持ち悪いって言うてんのよ!!」

「ペトラ、オルオ。何してる」

おみつき徳利よろしく、仲良く言い合いを شدした二人が、部屋の入り口で響いた低い声に、瞬時に直立不動の姿勢をとった。エレンも思わずつられて、雑巾を片手にしたまま背筋を伸ばした。

「エレン。お前にクシエルの班を紹介する。お前ら全員降りてこい」

口を覆っていた白い布を下げながら、我らが兵士長は静かに言った。

\*\*\*\*\*

「趣のある城ですねえ。ちよつと調べてみてもいいですか？私、こういう建造物興味あるんです」

「却下だ。それよりお前たちも早急に準備して掃除に取りかかれ」

「ですって、エーミール。頼むね、お掃除」

「ですってじゃありません、クシエル班長。あんたもですよ。……と、言いますかね。リヴァイ兵長殿。こんなときにまで掃除なんて……。大方掃除されたようですし、十分だと思いますが」

「エーミール。お前の目は節穴か？壁の溝に埃が溜まってるのが見えねえのか？床の端にはカビが生えているところも多い。窓なんて雨の跡がこびりついてやがる。こんな場所で息をしると？」

「今、息してるじゃないですか。もういいですか？早くしないと日が暮れてしまいます」

「待てクシエル。お前は人の話を聞け」

「クシエル班長。ほんと、頼みますよ。リヴァイ兵長、ちょっと、班長の胸ぐら掴むのやめてもらえませんか」

エレンはその三名の上官方のやりとりを、目を丸くしながら直立不動の状態で見守っていた。

荷下ろしが済んだらしいクシエル副官率いる研究班の三名との顔合わせである。が、リヴァイ兵長はエレンに簡単に彼らの紹介をした後、早々に掃除の催促をし出した。リヴァイ兵長の潔癖ぶりは、このたったの数時間で嫌というほど味わった。エレンが驚いているのはそれではない。畏怖の対象たるリヴァイ兵長への、研究班二名の態度である。

「あの三人は五年以上前からの付き合いらしいよ。あの中ではリヴァイ兵長が一番、在団歴が短い」

瞠目しているエレンに、解説するようにペトラが耳打ちしてくれた。なるほど。意外なことだが、彼らはリヴァイ兵長の新兵の頃を知っているということだ。それから何度ともなく死地を共にくぐってきたのだろう。それなりの付き合い、というのがあらしい。

「クシエル班長。研究書、部屋へ全部運び終わりました」

彼ら五年以上生き残っている猛者たちが、やんややんやと問答している部屋に、若い兵士が入ってきた。

その兵士の顔を見て、エレンは「あ」と思わず間抜けに声を発した。

エレンの声に、その若くて背の高い兵士は少しだけ眉をひそめて、リヴァイ兵長に敬礼した。

「遅くなりました。準備は全て終わりました」

「ああ。エレン。こいつがさっき言っていたイリヤだ」

「ああ……はい。どうも、えっと……」

「エレン。元気そうだな」

「ああ……お前も、生きてたんだな。良かった」

それは、トロスト区攻防の際、駐屯兵団の精鋭班と共に、エレンの護衛へと回っていた調査兵だった。凱旋のとき、クシエル副官に「英雄気取りの勘違い野郎」と暴言を吐いていた兵士だ。

「ああ、二人はトロスト区の作戦の時に顔を合わせてたんだったね。ちようどいいですね、リヴァイ兵長。日が暮れる前に、エレンやリヴァイ班の皆さんに彼のことを伝えておきたいんですが、どうですか？」

明るい声でクシエル副官が言った。丸くて大きな瞳がきらきらと無邪気に輝いていて、その真意はイマイチ読み取りづらい。

提案されたりヴァイ兵長は、エレンや黙して付き従っていた班員たちが目配せした後、しばらくして諾と頷いた。

「イリヤ？」

リヴァイ班の副官的役割のエルド・ジンがクシエル副官の発言と、

イリヤの思いつめたような表情に違和感を覚えて首をかしげた。

イリヤは答えない。エルドやペトラが知っている、自信家の傲慢な少年の姿はそこにはなかった。

「俺の能力については何もわかっていません。所以も、その意味も……」

こつりと、靴底が古城の堅牢な床を叩く音が響く。イリヤは部屋の奥へと歩きながら、班員たちから距離をとった。懐から小さなナイフを取り出して、左手でその刀身を握りしめた。

「だが、エレン・イエーガー。お前の巨人化能力とは無関係ではないと思っっている。俺がここに配属された理由はそれだ」

薄いブラウンの瞳が不安げに揺れながら、それでも力強くエレンをまっすぐに見つめる。次の瞬間に、イリヤがナイフの刀身を思い切り引いた。

赤い鮮血が、彼の左手のひらから、ボタタ、と音を立ててこぼれ落ちた。古城と兵士たちのモノクロな色合いのなかで、イリヤの血だけが、鮮明に色だっていた。

「な!?!蒸気が?」

「何だそれは!?!」

「エレン、下がちなさい!」

エルド、オルオ、ペトラが声をあげて一斉にイリヤに対して構えをとった。

「再生してるのか？」

一人、イリヤから距離を保ちながらも冷静に言ったのはグンタ・シユルツである。彼らが見つめる先、イリヤが彼らに向けた手のひらから、大量の蒸気が放出されていた。

そのつん、と鼻をつく臭いは、彼らにとっては馴染み深い。巨人のそれであった。

「はい。再生しています。俺はこれで、巨人に食われた腰から下を全て再生させました」

蒸気の下で、肉が蠢き、皮が躍動している。ちりちりと少しずつ、しかし猛烈なスピードでそのナイフによる傷が徐々にふさがっていく。

驚くべき現象に一同が声を失っている間に、蒸気は少なくなり、いつの間にかすっかり傷跡もなくなっていた。

確かに傷があつたことを証明しているのは、床に広がる赤い血の水たまりだけである。

蒸気が発してからずっと息をつめていたエレンは、ひゆる、と勢よく止まっていた息を吐いた。再生のスピードは、エレンの知っているそれより、幾分も早いように思えた。

「こいつの能力のことを兵団内で知っているのは分隊長以上と、ここにいる奴らだけだ。俺の班には言い忘れていたが……俺たちはエレンだけでなく、こいつの能力の監視も任務に含まれている」

リヴァイ兵長が、呟きながらイリヤのもとへと歩み寄った。誰も何

も言葉を発しない。リヴァイ班の面々も、エレンも、完全に驚きのうちに言葉を忘れていた。

「能力の意味がわからねえなら、自分で作ればいい。……そうだろう、イリヤよ」

「……はい。リヴァイ兵長」

顔を青くして頷いたイリヤに声をかけながら、リヴァイ兵長はエレンにそのナイフのように研がれた視線をやった。

「お前らはこれから「人類」のために働いてもらう。「バケモノ」だろうがなんだろうが、どっちでもいい。身を粉にして尽くせ、エレン、イリヤ」

緑色の瞳に狂気を孕ませた少年と、淡い茶色の瞳に少しの迷いを隠している少年。

二人のバケモノの子どもたちが、人間の形をした、しかし実のところバケモノのようなその上官に、心臓を捧げる敬礼で答えた。

バケモノの子どもたちが抱くそれぞれの迷いに、大人たちはひっそりと耳打ちしてそれにフタをさせた。

エレンは敬礼をしながら、頭の隅からじわりと浸食するような痛みを耐えていた。

さざめきすらない穏やかな湖面が、視界の裏に映る。まるで脳にそのまま映像をぶち込まれたようなその景色が見えた瞬間、強烈な頭痛

がエレンを襲った。

霧に隠されたような顔が見える。

——可愛い私の盾。

お前は誰だ。振り返った先に、淡い栗色の大きな瞳をした幼子が立っていた。

その映像に、エレンは思わず叫び声を上げてその場に倒れた。意識を失う前。脳裏に映されたその映像には、

その幼子に振り下ろされた、皮膚が露わになった赤くて巨大な拳があった。その拳の下では、幼子を守るように、栗色の長い髪の女だったものが潰れている。幼子は、エレンを、否、その拳の主を見つめていた。

その幼子の右足は、巨大な拳に潰されて、赤く染まっていた。

エレンがふと目を開ければ、まず視界に入ったのは古びた石造りの天井だった。眠っていたのか、と記憶をたどりながら首を動かせば、ベッドの側で椅子に座ってうたた寝をする男が目に入った。

白いカーテンが、風に吹かれてふわふわと揺れている。

その風は、男の淡い栗色の髪もかすかに揺らしていた。兵士らしく、清潔に刈り上げられた短い髪の色は、夢うつつで見ただような既視感がある。

「おい、イリヤ」

エレンは半身を起こしながら、うたた寝をしている兵士の名を呼んだ。ぱちり、とその兵士、イリヤは目を開けて、ひとつふたつその髪と同じ色の瞳を瞬いて、エレンを見て辛辣に言った。

「よう、起きたかバケモノめ」

「そりゃこっちの台詞だ。このバケモノ」

売られた喧嘩は根こそぎ買う。否、むしろ売られていない喧嘩も器用に買うのがエレンである。イリヤに告げられた言葉に、ほぼ間髪入れずに言い返した。

しかしイリヤは特に怒るそぶりも見せず、むしろ少しだけ口角を上げて頬をさすっただけだった。

「悪い……イリヤ」

「何が」

「いや……」

ぼんやりとした頭を振って、エレンは記憶を辿る。先ほど見せられたあのイリヤの再生能力。あれを見て驚きに声を失ったところまでは覚えていた。そのあと、耐えられないような頭痛に襲われて。

その後のことはほとんど記憶にない。

ふと窓の外を見れば、世界が少しだけ褐色に色づき始めていた。倒れてからそれほど時間は経っていないようである。

「大丈夫か」

呆けていたエレンに、イリヤが無愛想な表情で聞いてきた。先ほど、彼が目の前で切りつけた左手のひらはすっかり綺麗に元どおりである。

——バケモノだ。

エレンは思った。傷を再生させるなど、そして体の半分を食われていながら蘇生するなど、最早人間ではない。それはもう、バケモノだ。そう思った瞬間、エレンの胸の底で何かがじわりとにじみ出てきた。

「お前は巨人化できないのか」

「……ああ。何度か試したが、ダメだった」

「巨人化しねえのに、巨人みたいに再生できんのかよ」

「……バケモノだからだろ」

言ったイリヤが、ふいとエレンの視線から逃げるように顔をそらした。エレンは再度、「悪い」と買った喧嘩を、丁寧に丸めて送り返した。

「正直、俺は嬉しい。バケモノが俺一人じゃなくて」

「俺は嬉しくねえよ。第一、俺は巨人化しねえ。お前とは違う」

「まあ……、まあ、そうだよな。……巨人は、人類の敵だ。……一匹残らず、駆逐しねえと……そのためには、この力を……」

「……………」

二人の間に落ちた沈黙が、重苦しく部屋に充満する。エレンはその右拳を口に近づけ、何やらぶつぶつと不穏な発言を繰り返していた。イリヤはそれを頬杖をつきながら、興味なさそうに見つめている。

「お前さ、何でそんなに巨人を駆逐したいんだよ」

イリヤの問いかけに、エレンは一瞬、何を聞かれているのかわからなかった。何を分かりきったことを、とその大きな瞳を瞬かせた。

「そんなの……あいつらが害虫だからだろ？」

「……………いや、それは、まあ、」

「なんだよ。それ以外になんか理由でもあるってのかよ」

「いや、そういうことじゃなくて……違うな、ええつと……」

エレンはイリヤの歯切れの悪い応えに眉をひそめた。

「一匹残らず？」

「当たり前だろ。何だよさつきから」

イリヤは何か得心がいかないのか、首をひねったまま唸っている。

「もしかして、お前あれか？巨人が人の形をしてるからちよつと可哀想とか、そういうこと、」

「そんなわけねえだろ!?俺は一年調査兵团やってんだぞ!」

「……悪かったよ」

突然声を荒げたイリヤに、思わずびっくりしてエレンは反射的に謝った。

「巨人がいなくなれば人類は喰われなくてすむし、壁の外にもいつでも行けるようになる。何が問題なんだよ。害虫以外の何者でもねえだろ、巨人なんて。なんか間違ってるか？」

「……いや、間違ってる。間違ってるが、お前、あれだろ。変だつて言われねえか？」

「は？何がだよ」

エレンはさらに首をひねった。

「……そんなに巨人にこだわるのは、やっぱり母親が原因なのか？」

唐突なその問いかけに、ひゅ、と一瞬息が詰まるような苦しさに襲われる。胸に去来する激情を押しさえ込みながら、エレンはイリヤを見た。彼は、自分のその目が獯猛に見開かれていることを知らない。イリヤは、その視線に少し驚きながらも、「そうか」と頷いた。

「そんなもんかね」

「……お前は、あれを見てねえから言えるんだ」

「別に親が殺されたからって、必ず巨人をぶっ殺したくなるとは限らねえだろ?」

「そんな奴がいるとして、俺はそいつの気持ちがあんまり分からん。理解できない」

イリヤは、ふうん、と興味なさそうに視線をそらした。

「不幸自慢するわけじゃないけど、俺だって巨人に母親を殺されてるが……。別に、巨人を殺したいと思っただことないけどな」

「はあ!？」

「巨人に憎悪なんて……それほど、な。俺にとっちゃ、お前の気持ちが理解できねえ」

「は?お前、調査兵やってて巨人をぶっ殺したいとも思わねえのかよ!？」

「そりゃ、奴らを前にして戦わないなんておかしい話だと思うけど。……だからってお前ほど殺したくて仕方ないなんて思ったことないからな……」

「じゃあ、なんでお前は調査兵やってんだよ!？」

驚いて声を張り上げたエレンに、イリヤはまるで子供のよういきよとん、と目を丸めた。

「母親を殺されて、仲間を殺されて、自由を奪われて!なんでお前は巨人を憎まずにいられるんだよ!お前は何のために調査兵団にいるんだ?!」

「……………そういえば、どうしてだったっけ」

「はあ!!?」

平行線を辿るイリヤとの会話に、心底わけがわからん、とエレンは首をひねった。どうにもこの一年上級の先輩とは話が合いそうにない。

イリヤとの会話に、エレンが疲れてひとつため息をついたとき、ノック音がして扉からペトラが顔をひよこりと顔を出した。

「エレン!起きたんだね!どう?夕食ができたけど、食堂まで来れそう?」

「はい。もう大丈夫です」

「じゃあ行こう。イリヤ。兵長たち呼んできてくれる?」

「わかりました」

エレンはベッドから立ち上がり、まだ椅子に座ったままのイリヤを見下ろした。

イリヤの淡い栗色の瞳と視線が交錯する。

——どうして。僕の……。

まだ幼い少年の栗色の瞳が、一瞬、エレンの脳裏をよぎった。

赤い、血にまみれた人間のようなものが、瞬きの間にまぶたの裏に映る。

「エレン？」

は、と我に返ったエレンを、イリヤの栗色の瞳がいぶかしむように見上げていた。

「どうした？」

「……………いや？…何も？」

\*\*\*\*\*

——何のために調査兵団にいるんだ。

つい先ほどの、エレンの問いかけがやけに耳の奥でこだまして離れない。改めて問われれば、その理由はよくわからない、とイリヤはた

め息をついた。

古城の廊下を、中庭の馬小屋へと進みながら、昨年解散式のことを思う。

イリヤは103期訓練兵団を首席で卒業した優秀な人材である。憲兵団への入団権を確保した彼は、迷うことなく調査兵団を志願した。

それは単に、シーナ内地の屋敷から一番遠い場所を選んだだけのことだったように思う。

「……………し……………だ」

悶々としながら中庭へと出た瞬間、女の声が耳に入って、イリヤは思わず壁の陰に身を隠した。その女の声はよく見知ったものだったが、それは聞いたこともないほど沈痛な響きをしており、まるで知らない人の声のようで、反射的にイリヤは息をひそめてしまった。

「……………心配しなくても……………私は兵士だ」

「ならいい」

女の声に応えたのは、聞きなれた兵士長のものだ。女の声に反し、その男の声はいつものように落ち着いた響きをしていた。

イリヤはちらりと彼らの声の方向が見えるように、体の位置をずらした。まるで盗み見るような姿勢に少しのためらいを感じながらも、どうにも女の声の沈痛な響きが気になった。

いつも冷静で、どこか朗らかさを保ったまま話す女性だったと思っ

ていた。叱るときも、真面目なときも、淀みのない冷静さを崩さない印象があつた。だが、今イリヤの耳に届いているそれは、まるで少女のように感情をあらわに、しかし静かに揺れる声だった。

「心臓を公に捧げる意味を忘れたわけじゃないよ」

「当然だ。忘れてもらっちゃ困る」

リヴァイ兵長の声は常と変わらないように聞こえる。いつもの、低く起伏の乏しい落ち着いたそれだ。

「クシエル……。お前が壁の外の記憶を取り戻したのなら、それがどんな些細なことであっても俺かエルヴィンに話せ。何度も言うようだが、俺たちはお前が壁の外から来たことは疑っちゃいねえんだ」

「……わかつてるよ。あなたたちの信頼は裏切らない」

壁の外。

壁の外の世界。壁の外から来たという女。

いつかの夜。シーナの貴族の屋敷で女が告げたことをイリヤは思い出した。あれは冗談だったのではないのか。だが、調査兵団の希望である兵士長は、冗談を滅多に言わない男でもある。

「本部に一旦戻るのは許可するが……。くれぐれも勝手なことはするなよ。お前はいつも独断専行しがちだ。戻ったら必ずエルヴィンにまず報告しろ。エーミールのやつを付けたいが、イリヤを見る奴がいなくなるのも困る。いいな。勝手な真似はするなよ」

「リヴァイ」

「第一お前は、俺たちに信頼しろと言う割に、俺たちを信頼しているようには思えん。一体何年、お前みたいな猫かぶりと付き合っていると  
思ってる。今更何を言われようと、俺やエルヴィンが、」

「リヴァイ」

やけに冗長に話している兵長に、クシエル副官は言葉少なに、彼の名を呼んだ。その声が、優しく丸い弧を描いて、イリヤの耳にまではつきりと届いた。

「……不安にさせてごめん。大丈夫だ。本当に。……大丈夫」

盗み見ているその視線の先で、副官の役を担う女が、兵士長の肩に手を伸ばして何度も頷くのが見えた。彼女はイリヤに背を向けていてその表情は見えないものの、泣き笑うような、そんな声の響きをしていた。

その女の言葉に、ひとつ頷いた兵長の表情を見て、イリヤは思わず目を逸らして、その場からそそくさと逃げた。

鼓動が早鐘のように打っているのを隠しながら、イリヤは足早に廊下を戻る。

見てはいけないものを見てしまった。

そんな思いに駆られ、イリヤは顔を何度もさすった。

「兵長も、あんな顔、するんだな……」

なんとも形容しがたい、まるで怒っているような、不安を隠しているような、心配しているような、そして慈しんでいるような。

そんな表情を、あの兵長が。

「……壁の外……」

この世界には大きな謎がある。エレンや自分の体はそのひとつであることは確かだと思っていたが、イリヤにはまだ知らない謎が多くある。彼が身を置く調査兵团にも、その謎のひとつはあるのだ。

団長付きの副官クシエル。

壁の外から来たと自称する女。

その正体と目的。

それは、最も短にあり、そして最も壁の外の世界に近い謎である。

そのことに、初めてイリヤは気づいた。

それは古城待機一日目の夕刻のことである。

その日の夕刻、彼の上官であるクシエル副官は単身、何かの用事で本部へと戻った。ちょうど、トロスト区で捕獲した二体の巨人の実験を終えて、ハンジ分隊長が単身で古城へと向かっていたのと入れ違いになるようなタイミングであった。

本部で二体の巨人が殺害されたのは、その数時間後の朝方のことであつた。

## 第六章

### マールレの戦士

一

本部で拘束されていた巨人二体は何者かに殺されたのは、明け方近くのことだった。駐屯兵団の見張りが気付いたときには、犯人は立体機動ではるか遠くに逃げおおせていたという。

二人以上の兵士による犯行であると推測された。

「ソニー!! ビーン!! 嘘だろ! 嘘だと言ってくれええええええええええ」

巨人二体の死体から蒸気が上がるなか、ハンジ分隊長の取り乱した泣き声が大きくこだましている。

「見ろよ。ハンジ分隊長がご乱心だ」

オルオの皮肉るようなつぶやきに、すかさずペトラが叱咤の肘打ちをかます。相変わらずの先輩兵士のやり取りを横目に、イリヤは息をのんだ。

「貴重な被験体なのに……一体どここのバカが……」

泣き叫ぶハンジ分隊長は、副官であるモブリットの制止をもものともせず、その場で泣き崩れている。彼らの傍では、昨夕本部へと戻っていたクシエル副官が、何やら憲兵団と話していた。

「一体誰が……」

呟いたのは、イリヤだったか。それとも、隣で同じように息をのん

でいたエレンだったか。しかしその眩きは、突如かけられた声によって遮られた。

「エレン……君には何が見える？ 敵は何だと思う？」

振り返れば、そこには青く、全く揺らぎのない瞳。

それは、エルヴィン団長だった。

瞬きすらも許さないようなその視線に、エレンは言葉をつまらせた。

「敵……？」

その問いかけの意味に戸惑い、イリヤが眩く。

エルヴィン団長はその迷いなき視線を、イリヤにもまっすぐと向けてきた。

数秒。エレンとイリヤは息をするのも忘れて硬直していた。呪いにもかけられたように固まった空気をほどいたのは、問いを発したエルヴィン団長その人だった。

「……すまない。変なことを聞いたな」

その声は、問いかけの低く抑えられたそれとは違い、厳格さの中に柔らかな響きを宿した、いつもの団長の声だった。

「エルヴィン団長」

エレンとイリヤの後ろからかけられた声に振り向けば、団長付きの副官、クシエルが記録用紙を片手に立っていた。兵士にしては小柄なその女性兵士に、団長がひとつ頷く。それを見て副官は、心得たとは

かりに彼の隣へと歩を進めた。

優れた屈強な体格のエルヴィン団長の斜め後ろに並べば、副官の身体の線の細さが際立つ。団長を挟むように、リヴァイ兵長もその脇に並んだ。

ちらりと兵長がエレンたちに視線を投げたが、団長と副官は、エレンたちを振り返ることなく、そのまま現場をあとにした。

イリヤが隣にいるエレンを盗み見れば、彼もまた、困惑したような、何とも言えない表情で突っ立っていた。

「敵って……なんだよ……」

イリヤが誰に言うでもなく呟く。

その周囲では、駐屯兵たちが、「貴重な被験体を殺してしまったバカ」について、噂していた。

\*\*\*\*\*

「五年前だな」

リヴァイの呟きに、エルヴィンは「ああ」と同意を示して頷いた。トロスト区内の本部にある、団長室である。

執務机に両ひじをついた姿勢で、目線だけ動かして、エルヴィンは腹心のミケとハンジにも同意を促した。

「もちろん。異議なしだよ」

「妥当だろうか」

腹心たちが全員同意を示したのを確認して、エルヴィンは顔を上げた。それが合図であったかのように、クシエルはリヴァイたちがくつろぐソファの間のローテーブルへ、その手元に持っていた書類を広げた。

「五年前。シガンシナ陥落のあの日以前からの兵士は全体の三分の一にも満ちません。こちらがその名簿になります。……ミケ分隊長、ハンジ分隊長の分隊は、結構生き残っていますね」

「名簿？もう準備してたのかい？さすが、仕事が早いね」

ハンジたちがそれぞれ、クシエルの用意した名簿を手に、その人員を確認する。

「そこに名前のない兵士は、「敵」である可能性がある。……おそらく、今回被験体を殺害したのも「敵」であろうと考えられる。それをふまえて、今度の壁外調査では大きく編成を組み替える必要があるだろう」

「……多いな」

エルヴィンの言葉に、小さく呟いたのはミケである。彼が率いる直属の班員たちは、全員が五年前からの仲間である。問題は、リヴァイ率いる特別作戦班と、その補佐にまわっているクシエル率いる研究班であった。

「俺の班は全員ダメだ」

「私の班はエーミール以外ダメです」

書類を片手にリヴァイが、直立不動の姿勢で立つクシエルが、それぞれ言った。

「エレンを囿にして敵を誘き出す作戦だと言ったな、エルヴィン」

「ああ。そうだ」

「なら、エレンを守るためにある俺たちの班員はどうなる」

「リヴァイとクシエルの班は引き続きエレンの護衛に回ってもらおう。しかし、彼らもまた「敵」である可能性は考慮しておいてくれ」

「……つまり、命をかけてエレンを守るあいつらにも、エレンを狙う敵を誘き出すための作戦は話せない、と」

「その通りだ」

リヴァイの確認に、エルヴィンはためらいなく頷いた。

「クシエル。イリヤもだ。彼も「敵」である可能性はゼロではない。気をつけておけ」

「……わかりました」

リヴァイやクシエルは、その答えにほとんど抵抗も動揺もあらわにできなかった。ほんの一瞬の沈黙の後、彼らは同時に、承諾の頷きを返した。

ミケもハンジも、その厳しい判断に異論を唱えることはない。

「敵」は何なのか。一体どこから来て、何が目的なのか。

彼らもほとんどわかっていない。ただ、五年前、シガンシナを侵攻した「敵」が今、動きだしたことは確実であった。

トロスト区は守りきれたが、おそらく次の攻撃もそう遠くないはずだ。

今、人類は、その喉元に研ぎ澄まされた剣の切っ先を突きつけられている状況なのだ。

しかし、それを正しく理解しているのは、ごくわずかな数の人間だけだろう。そしてそのなかでもエルヴィンは、誰よりも深く、広く先を見出している。

それだけは、その場の誰もが分かっていた。だからこそ、彼らは兵団の多くの兵士を「敵」と想定した厳しく、非情な判断を下すエルヴィンを信頼している。

「ハンジ。君は巨人拘束用の資材の準備をすすめてくれ。知性巨人でも捕まえられるやつをだ。ミケは私と陣形の再構成だ。各分隊の兵士を一兵卒まで性格と名前を教えてくれ。リヴァイ。お前は引き続きエルレンの護衛を。ハンジと協力して彼とイリヤの能力についての調査も続けろ。ハンジには仕事に集中して申し訳ないが……」

「問題ないよ！エルヴィンの抱えてる仕事に比べればどうってことな  
んや」

「エレンとイリヤに関する報告書の作成と、本部と古城の連絡事項の

伝達は私が行ないましょう。ハンジ分隊長の実験も私ならある程度理解していますし、事務仕事は私が」

クシエルの提案に、エルヴィンがひとつ頷いて承諾した。

「ああ。そうしてくれ。君には一日のうちに何度も古城と本部の往復をしてもらうことになるだろうが……。そうならばハンジの仕事もはかどるだろう。リヴァイも……」

「ああ。掃除がはかどって助かる」

「まあた言ってるの？リヴァイ。あなた待機中、ずっと掃除でもしてるつもり？」

「黙れクソメガネ。あの古城の汚さは異常だ。壁外調査までに綺麗になるかどうかもわからねえほどだ。それを放っておけと？」

「え!?本気かよ!?めんどくさいなあ……」

「何言ってやがる。俺の班のやつらは全員、やる気だ。何しろ、兵団のなかで一番掃除の腕があるやつらだからな。おいクシエル。お前らの班もだ。分かってるな？」

うげえとカエルが潰れたような声をあげながら天井を仰ぐハンジを横目に、リヴァイが隣で席に座らず立っている彼女に問えば、その副官はにこやかな笑顔で頷いた。

「ええ。イリヤとエーミールにはよく言っておきます。私は伝達係があるのですが一緒にできませんが、彼らならきつと兵士長殿のお眼鏡に叶う働きをしたいと思います。イリヤは成績優秀の優等生、エーミールはあなたもよくご存知のとおり、優秀な兵士ですから」

猫を百匹でもかぶつていそうなその笑顔に、リヴァイが舌打ちしたのは言うまでもない。ミケは鼻を鳴らして「なるほど。逃げられたな、リヴァイ」とにやりと笑った。

「さあ、今日はここまでだ。五年以上の兵士を集めての作戦会議については、また追って連絡する。それぞれ仕事に戻ってくれ」

リヴァイたちによる、喧嘩の体をしたささやかなじやれあいを中断させて、エルヴィンは立ち上がった。

シガンシナ陥落以前から生き残っている調査兵は、それ以降に入団した者とはまた違う絆がある。今では、調査兵団は、鎧や超大型などに対抗するための唯一残された人類の矛として、ある程度の支持を得ている。入団者の多くも、あの惨劇を繰り返すまいと、巨人と戦おうという崇高な理念をもった若者ばかりである。

それに対して、シガンシナ陥落以前――調査兵団が完全に世論から見放されていた時代――の入団者は、崇高な理念ばかりではない、何らかの「妙な部分」をもっている。

その「妙な部分」を持つ兵士たちを、自虐的に「飛び出し野郎」「英雄気取りの勘違い野郎」などと揶揄したのはクシエルである。誰も出て行こうとしない地獄の地へ、誰にも求められていないのに出て行くこととする古参兵は、やはり「妙」なのだろう。

しかし、エルヴィンにとつては古参兵こそ、信頼に足る優秀な兵士であり、誰よりも尊敬する兵士たちであった。

この団長室に集う者は、その兵士たちのなかでもとりわけ優れて「妙」な者である。

だからこそ、彼らの信念は鋼のように強く、絶望的な状況下でも決して折れることがない。

そんな信頼する兵士たちが部屋を出て行くのを見送りながら、エルヴィンは己の副官を呼び止めた。

ハンジやミケ、そしてリヴァイが退出するなか、最後に扉をくぐろうとしたクシエルが振り向いた。

「クシエル。君には話がある」

壁内では珍しい、漆黒の瞳が、きらりと窓から入る陽光に反射した。黒曜石のような、心中の読みにくい瞳だった。

\*\*\*\*\*

憲兵団による立体機動装置の取り調べを終えたアニ・レオンハートは、兵舎へと戻る道中、一人鬱々とした気持ちを胸に、ひそやかに嘆息した。

——アニってさ。実は結構優しいよね。

同期の少年の声が頭の中で反芻する。胸焼けがして、苦々しくその薄い唇を噛み締めた。

ふざけるな、とあの愚鈍でありながら根性のある少年に言っただけのたい気持ちだった。もちろん、「兵士」であるアニに、それは許されな

い。

「……アルミン」

あんたは、私の正体を知ったらどんな顔をするんだろうね。

まるで女の子のように無垢で優しい笑顔を思い出す。嫌いじゃなかった。虐げられた弱者で、臆病で、実際に身体能力も劣っている。せに、自分で道を選ぶ強い精神は、決して嫌いじゃなかった。あんな心の在り方は、自分の故郷にもそうそう見ることのなかったものだとアニは思った。

あれも、あのバカの影響なんだろうか。

優しい相貌の彼と一緒にいた、空気も女の子の気持ちも読めないバカを思い出して、アニは再び小さく、しかし深くため息をついた。

周囲の訓練兵たちの喧騒が遠い。

焼け落ちそうな胸の重みに耐えかねて視線を落とせば、足元をアリの行列がちろちろと行進していた。

その行進の真ん中に、無遠慮に足を踏み降ろす。踏みにじったアリの命はいくつだったか。小さすぎて、踏みしめた感触すらなかった。

行進を遮られたアリは、うろたえて右往左往していた。

五年前、あの街を破壊したとき、壁の上からベルトルトが見た景色もこんなものだったのだろうか、と何となく思った。

「アニ・レオンハート」

不意に呼びかけてきた声に、一瞬にしてアニはぼんやりとした思考を引き戻した。それは、この数年間全くと言っていいほど聞いていなかった声だった。

「顔はあげないで。周りの人にバレてしまう。そのまま、顔をふせたまま聞いて」

声に従って、顔を伏せたまま、アニは意識を集中させた。声は、兵舎の物陰から聞こえてくるようだった。視線だけその方向に寄せたが、声の主の姿は見えなかった。

「あんた……まさか」

「ああ。久しぶりだね、アニ」

「私たちが訓練兵団に入って以来だね。調査兵団にいることは知ってたけど……音沙汰がなかったから死んだんだと思ってた。生きてたんだね」

その声の主が少しだけ笑った。ひそめられたその声の主は、「色々大変だったな」と労わるような優しい声で言った。

「トロスト区の壁をやぶったこと、ハンジ分隊長の被験体の巨人を殺したこと。とうとう動いたんだな」

「ああ……遅すぎたくらいだ」

「うん。長かった」

沈黙が続く。アニはそのまま、足で土をいじるふりをしながら、その続きを待った。

「もうすぐ望月だ」

ぴくりとアニの眉が動いた。

それは、約束の日だ。

「報告のために戻る。エレン・イエーガーのこと、そしてこの作戦のことだ」

「一人で戻れるのかい」

「わからない。けどやらなきゃダメだ。援軍を要請してくる。お前らの力を見くびってるわけじゃないが、調査兵団もそう甘くはない」

「……そう」

「戦士長を呼んでくる。次の満月の夜までに、必ずだ」

力強く続けられた言葉に、アニはもう一度、「そう」と頷いた。

「もう行くの?」

「……いや。エレンの奪取はお前たちに任せるが……、もう一人、連れ帰りたい奴がいる」

「はっ」

「あの、「出来損ない」の末裔がいる。それを連れ帰る」

その言葉にアニははつと顔を上げた。まさか。

「あんた、ちよつと……」

焦ったように声のする物陰の方へと足を進めようとしたとき、

「おい、アニ。何してんだ？ 招集かかってるぞ」

不意に背中に投げられた声に振り向けば、同期のコニー・スプリングァーが首をかしげてアニを見ていた。

「何でもないよ」

「早く行こうぜ」

迫り来る兵団選択の時期を前に、流石のコニーもいつもの覇気はない。しかし、鈍感なところは相変わらずで、アニは自分が「仲間」と会話していたことを悟られなかったことに、心中安堵した。

素知らぬふりで、コニーの後をついていく。

アニがちらりと背後を盗み見たときには、物陰にはもう、人の気配はすっかりなくなっていた。

ふと見下ろした足先では、アニが踏みにじったアリの行進が、再び綺麗な列を作り、淀みなく歩き出していたところだった。

日もすっかり落ち、周囲はすっかりと夜の空気に満ちていた。演台のある演習場では、松明の火がそこから炊き上げられている。

真つ暗な夜の底で、橙色の炎が揺れている。まるで、世界の輪郭もあやふやになるようで、イリヤは少し不安な心持ちになった。

被験体である巨人二体の殺害の件はまだ解決していない。だが、訓練兵が所属兵団を選択するその式は、通常通り行なわれることとなった。

「イリヤ。地図、持ってきてくれる?」

「はい。ペトラさん」

エレンを引き連れて、特別作戦班もその式の準備に忙しい。イリヤは資材の中から大きな地図を取り出して、特別作戦班の紅一点であるペトラに手渡した。

あたりでは他の兵士たちも一様に忙しそうに準備をしている。

兵団勧誘式は、今年もまた調査兵団が一番最初に行なう。イリヤがここでエルヴィン団長の演説を聞き、心臓を捧げたのはもう一年も前のことだ。

あの頃、共に心臓を捧げた同期たちは、もう誰一人残っていないかった。近年稀に見る、生存率の低さだった。多くの同期は、初陣で命を落とした。その後生き残った奴らも、この一年の間にあつという間になくなった。

最後に残っていたのは、イリヤとクルト。

クルト・ウエルナーだった。

数ヶ月前、共に壁外に取り残されたものの、リヴァイ兵長やクシエル副官の指示のもと、なんとか生き延びた奇跡は未だに記憶に新しい。

彼は、兵団の情報を漏洩させた罪で拘留され、そして逃亡してしまった。もうあれも、トロスト区攻防の前のことだ。

「イリヤ」

呼ぶ声に振り向けば、そのクルトを拘束した上官の一人、リヴァイ兵長が立っていた。

「お前はエレンと舞台袖にいろ。訓練兵には姿を見せるな。お前は死んだことになってるからな」

「あ、はい。承知しました」

最近、他兵団の兵士のいる場では常に緑の外套のフードを被せられている。もともと他兵団に知り合いも少ないからか、それほど行動を制限されているわけではないが、こういうとき、自分の戸籍の状態に胸が痛む。

父のいる屋敷には、自分がトロスト区で行方不明になった報せは、もう届いているのだろうか。

「リヴァイ兵長。もう始まります。あなたもこちらへ」

クシエル副官の声に、リヴァイ兵長がひとつ頷いて舞台の脇へと歩を進めた。彼らが視線を合わせて頷き合う。

ペトラは彼らが仕事以外でほとんど会話することがないと言っていたが、本当のところはどうなのだろう、とイリヤは無粋にも思った。リヴァイ兵長やクシエル副官に家族がいる話は聞いたことがない。彼らが他の上官のように、故郷へ帰省する様子は今まで一度も見たことがない。リヴァイ兵長が休みの日は、兵舎の隅から隅を思う存分掃除して回るのは有名にすぎる。クシエル副官にいたっては、その休日やプライベートなど、ほとんど謎である。休みをとっているのかどうかも怪しい。

彼らもまた、こんな風に兵団選択を行なったのだろうか。

なぜ、彼らは調査兵団を選んだのだろうか。

舞台の前に、訓練兵たちが並ぶ。まだ線の細い者が多い。そんな少年兵たちの姿を、炎の色だけが染めている。

「エルヴァイン団長。そろそろです。お願いします」

「ああ」

クシエル副官が団長の脇でささやいた。彼女の持つ演説用の原稿を断り、エルヴァイン団長は手ぶらのままに舞台中央へと歩いていった。

彼の演説は聞く者の心を揺さぶる。それは悪い意味でも良い意味でも。イリヤにすれば、他兵団の誰よりも彼の演説は素晴らしいものだと思う。

地獄を見た104期生だが、エルヴィン団長の演説を聞けば、その意思を揺さぶられて調査兵団に入団する者も出てくるだろう。そう、イリヤは疑いなく思っていた。

しかし。

当のエルヴィン団長が話したことは、勧誘というよりも、脅しに近いような内容であった。

「トロスト区の扉が使えなくなった今、東のカラネス区から遠回りするしかなくなった。4年かけて作った大部隊の行路もすべてが無駄になったのだ」

恐ろしいほどの沈黙が、演習場に満ちている。訓練兵は、さすがにすっかり躓けられており、どの者も身じろぎひとつせずにエルヴィン団長の言葉ひとつひとつに耳を傾けている。

「その4年間で調査兵団の6割以上が死んだ。4年で6割だ。正気の沙汰でない数字だ」

イリヤの隣で、ペトラが地図を片手に顔を伏せた。確か、先日のトロスト区攻防の際の遠征では、特別作戦班の一人が死亡していたはずだ。

4年で6割。

実際に兵団に身を置いていれば、もっと多い気もする。

日々、イリヤたちは別れの連続に身を置いている。

その事実を聞かされた新兵たちは、動揺を隠しきれないようで、か

すかにぎわめきが生じていた。それでも、エルヴィン団長は隠さずその過酷さを告げることをやめようとしなかった。

「今期の新兵にも一ヶ月後の壁外調査に参加してもらうが、死亡する確率は3割といったところか。四年後には殆どが死ぬだろう。しかし、それを越えた者が生存率の高い優秀な兵士となってゆくのだ」

もはや演説などではない。これは、ただの恐怖を煽るための脅しだ。

「この惨状を知った上で、自分の命を賭してもやるといふ者はこの場に残ってくれ……。……。自分に聞いてみてくれ。人類のために心臓を捧げることができるのかを」

訓練兵たちが壮絶さに絶句しているのが舞台袖にいるイリヤにもはつきりとわかった。エルヴィン団長は、全く感情をあらわにしない厳格な表情のまま「以上だ。他の兵団の志願者は解散したまえ」と号令した。

「団長、必要以上に脅しすぎではありませんか？一人も残りませんよ」

団長付きの副官のひとりである男性兵士が、たまらず声を上げる。全くもつともだ、とイリヤも無意識に頷いたが、隣にいる女性副官、クシエルは何も言わずに黙したままであった。

「クシエル副官。団長は一体何を考えているんですか？こんなことしたら、残る者はほとんどいませんよ……」

ただでさえ、調査兵団なんて人気がないのに。イリヤの問いに、クシエル副官が振り向いた。その表情が、いつもより少しだけ悲しそうに見えたのは、気のせいだろうか。

「エルヴィン団長の言うことは嘘偽りない事実でしょ？」

「でも……そんなことしたら、新兵が……」

「イリヤ」

彼女が、イリヤの肩に腕を回して、高い位置にある彼の頭を下げさせてそっと耳打ちした。

「よく見ていて。あれがエルヴィン・スミスだ。見せかけの希望で夢をちらつかせるような真似はしない。彼は、いつでもどんな人間にでも自分で「選ぶ」ことを優先させる人間だ」

「はい？」

「見せかけだけの判断で団長への評価を決めてはいけない」

耳に直接語りかけられたその言葉に、イリヤはぎくりと肩を強張らせた。クシエルの真つ黒な瞳が、肌に触れそうな距離で彼の瞳を覗き込んでいる。

自分の中にある、エルヴィン団長への不信感を見抜かれたような気がして、冷や汗がにじんだ。

「少し残ったようだな」

眩いたのは、クシエルの向こう側に並んで立っていたリヴァイ兵長であった。ふと見れば、演習場には二十名ほどの訓練兵が残っていた。常より少ないが、思った以上の多さに、瞠目していれば、クシエルはイリヤをつかんでいた手をようやく解放させた。

松明の火が爆ぜる音に混じって、すすり泣く声が聞こえる。抑え込  
むような嗚咽もわずかに漏れている。

その訓練兵たちの姿は、まさに命を賭した選択をしたツワモノたち  
のものだった。

「君達は、死ねと言われたら死ねるのか」

「死にたくありません!!」

恐怖に怯えた声が答える。

イリヤは息をのんだ。皆、泣きながら、歯を食いしばりながらその  
場に立っていた。その光景は、一年前にはなかったほど壮絶さと悲壮  
さを極めていた。

「そうか……皆……良い表情だ」

「では今……ここに居る者を新たな調査兵団として迎え入れる！これが  
本物の敬礼だ！心臓を捧げよ!!」

「ハッ！」

誰も、調査兵団の者たちは声をあげなかった。トロスト区での地獄  
を既に経験しながら、その場に残った新たな調査兵たちに、それぞれ  
の思いを抱きながら静かに見守るのみであった。

「よく恐怖に耐えてくれた……君達は勇敢な兵士だ。心より尊敬す

る」

団長の声が、夜の底に響いて、勧誘式は幕を閉じた。

\*\*\*\*\*

「お前の同期は今、何人残ってるんだ」

そうエレンが聞いてきたのは、古城の地下室へと戻ってきたときだった。エレンの就寝の部屋は地下にある。クシエル副官と打ち合わせがあると言うリヴァイ兵長の代わりに、イリヤが彼を地下にある牢へと送っていた時だった。

エレンがベッドに腰を下ろすのを確認して、牢の鍵を片手に背をむけたとき、ずっと黙っていたエレンが言ったのだ。

「何だよ。さっきの勧誘式で同期が恋しくなったか」

「そ、そんなんじゃない！」

ちやかせば反射的にその反抗的な後輩は顔を上げたが、すぐに気弱に顔を俯かせた。

「……いや、そうだな。その通りだ。あいつらが、入団してくれて嬉しい反面……」

「怖いのか」

問えば、その細い肩がびくりと震えて、イリヤはため息をついてエレンに向き直った。

「俺にはこの力をどう使えばいいかわからない。なのにまた、あの時みたいに俺を守るために誰かが死ぬんじゃないかって……。もしかしたらそれは、あいつらなんじゃないかって思うと……」

「……………」

「お前言ったよな。お前のその力は意味もまだわからないって。俺にとってもそうだ。この巨人の力は……」

「巨人を駆逐するためだろ？」

「だけど、」

「俺の同期はもういない。ほとんど死んだよ」

最初の問いかけの答えを返せば、エレンが弾かれたように顔を上げた。大きな瞳が、さらに見開かれて大きくなって、放っておけばぼろりと落ちそうだな、とイリヤは頭の隅で思った。

「そんなもんだよ。調査兵団ってところは。別に、お前を守ろうが守るまいが、皆んないずれ死ぬ」

「そ、そんな……」

「何だよ。お前知らないわけじゃないだろ。違うか？」

「……………いや、違わない……」

イリヤのもつランタンの炎が揺れて、エレンの姿もぐらりと揺れて見えた。光に透かし見れば、顔が青くなっているようだった。イリヤはため息をついて、踵を返した。

「もう遅い。休め。あまり考えるな。お前はやれることだけやってればいいんだ。それしかないだろ」

「イリヤ」

「なんだよ、まだ何か、」

「お前は、どうして目的もないのに死に行けるんだ」

「は?」

振り返った先に、まるで獣のような獰猛な瞳があつて、イリヤは思わず言葉を失った。先ほどまで、まるで弱りきったウジ虫のような顔をしていたガキが、今はどうだ。その代わりように、イリヤは思わず目を奪われた。

「前言ってたよな。調査兵団にいる理由は特にないって。でもこの兵団にいる人は皆んな何か目的がある。リヴァイ班の先輩も、あのハンジさんも。……きつとリヴァイ兵長だつて……。そうでなきややつてられねえだろ? どうしてお前は、理由もないのに巨人のいる壁外に出れるんだよ」

「……………そんなの、知るかよ。ここしかいる場所がないから、そうしてるだけだろ。別に、死ぬかもしれないのはどこにいても同じじゃねえか」

イリヤは胸の底に、つかえのようなものを感じながらも、エレンの

その視線から逃げるように、身を翻して牢を出た。

まるで逃げるように階段を駆け上がり、石造りの廊下を走って、一番近い戸口から外に躍り出た。

ひやりと、初秋の心地よく冷たい風が、頬を撫ぜた。ランタンの炎が乏しくなるほど、やけに庭の草木が明るいと思って見上げれば、空にはほとんど満ちようとしている大きな月が浮かんでいた。その冴えた白い光に、ようやくイリヤは自分の息が上がっていることに気づいた。

「……はっ、情けねえ」

柄にもなく、動揺したのか。

ランタンの炎を消して、思わずその場にうずくまりながら、己の不甲斐なさに失笑がこぼれた。

——何のために。

イリヤが調査兵団にいる理由など特にない。それは、単に屋敷から最も遠い場所が調査兵団だった。それだけのことだった。

屋敷にいたくない理由など、大人を自称するイリヤにとっては、もうどうでもいいことのはずだった。それなのに、理由を聞かれれば未だにこうして動揺する。そんな自分が情けなくて、頭を抱えながら笑いをこぼした。

脳裏に、母の姿が浮かぶ。

巨人の拳から自分を守って死んでくれた母親。もう、ほとんど記憶

も薄れてしまっているにもかかわらず、彼女が死んだあの光景だけは今でもはつきりと思い浮かぶ。

「イリヤ」

不意にかけられた声に、イリヤは顔を上げて勢いよく立ち上がった。

風はいつものように穏やかにそよいでいる。月の光の底にある中庭では、いつもと変わらず、草木や井戸などが静かに佇んでいる。

そんな静かな夜に、もう一度自分を呼ぶ声がこだまして、イリヤは思わず体を強張らせた。

それは、ここにはいないはずの人物の声だった。

「お前、どこにいるんだ……。おい、なんで、」

「ごめん。驚かせて」

声の主が、井戸の影から姿を現した。

それは、数ヶ月前、兵団を脱退したはずの彼の同期、クルト・ウエルナーだった。

「どうして……。お前、今までどこ行ってたんだよ、あれから」

「ごめん。今はまだ話せないんだ。それよりイリヤ。俺と来て欲しい」

「はあ？」

思わず声を荒げたイリヤに、クルトはしいつと人差し指を立ててあたりを見渡した。そうだ。彼は今、兵団を逃亡した兵士。リヴァイ兵長やクシエル副官に見つかればタダではすまない。そう気づいて、イリヤは口を己の手で塞ぎながら問うた。

「来て欲しいって……。どこにだよ」

「それもまだ言えない。でも、きつとここよりマシなところだ。ここにいたらお前、近々死ぬだろう？」

「……っ！いや、そうと決まったわけでは」

「エレン・イエーガーの件は俺も知ってる。今回はそのエレンを伴っての遠征だろ？あのエルヴィン団長だ。またよくわからん作戦をして、兵士が大勢死ぬに決まってる」

「いや、しかし今回は俺は団長の副官の班だし、まさか死亡率の高い場所に配置されることはないと思うし……」

「何言ってる。次生き残っても、その次があるかどうかわからないだろ？なあ、イリヤ。お前のそれは、不死身ってわけじゃないんだ。死ぬことだってあるんだよ」

イリヤの両腕を握って、クルトが必死の形相で言った。

調査兵団に所属していた頃から、クルトには臆病なところがあった。エルヴィン団長の指示が理解できず、不信感を募らせていたのも同期の中では一番であった。そんな彼が、今、何と言ったか。

「……クルト。お前、何か知ってるのか。俺の、この……」

「知ってる」

強く頷いたクルトの顔は、イリヤが知っている臆病なだけの同期ではなかった。どこか強い意思が、その双眸に光っていた。

「エルヴィン団長やリヴァイ兵長のことだ。お前のその能力とここにいるところから見て、エレンの護衛につかせるためなんだろう？お前、そんなことしてたら真っ先に死ぬぞ」

「何を、お前、何を言って……」

「お前死にたくなんかなくて言ってたじゃないか！俺と一緒に来い！そうしたら死ぬ可能性は低くなる。俺はお前をこんなところで無意味に死なせたくないんだ。だから、」

突然、クルトがはっとしたようにあたりを見渡し、声を潜めて早口で言った。

「いいな。明日の夜、二〇〇〇に本部の近くの内門付近で待ってる。死にたくなかったら……必ず来てくれ。くれぐれもバレないように……特に、あの女には気をつけろよ」

「は？あの女？」

「クシエル副官だ」

それだけ囁いて、クルトはあつという間に中庭を抜けて姿を消してしまった。あつという間の邂逅に、イリヤが言葉を失って呆けていると、中庭に続く木戸が開けられて、中からリヴァイ兵長が顔を出した。

「おい、イリヤ。そんなところで何してる」

「……リヴァイ兵長」

「?どうした。何かあったのか」

相変わらずの厳しい表情はそのままに、リヴァイ兵長が中庭へとおもむろに出てきた。夜も更けているからか、兵団服ではあるものの、ベルトを外し、上着も、首元のクラバットもしていない軽装だった。

「イリヤ?」

リヴァイ兵長は、イリヤが今まで出会ってきた人間のなかで最も人相が悪い。まるで人殺しでもしてきたのかというような鋭い目つきに、万年寝不足という哀れな体質が表れているひどい隈。小柄で身体の筋肉もそう大きくないのに、にじみ出ている圧迫感。そして、何よりその口を開けば出てくる粗暴の悪い言葉たち。

部下思いの上官だとは聞いていたが、何よりその風貌と、訓練時における厳しい態度から、どうしても憧れと同時に畏怖の念を抱いていたのも否定できない。

だが、クシエルの班に配属されて、その見た目に反して、彼の心根が決して畏怖の対象となるものではないということが、イリヤにも何となくわかってきていた。

「オイ。何ぼうつと突っ立ってやがる。情けねえ面さらしてんじやねえぞ」

ツカツカと近づくとその人が、咎めるためではなく、自分を気遣うためにそこにいるのだと、それがわかるくらいには、イリヤはリヴァイ兵長のことを理解できるようになっていた。

「オイ」

呼ばれて、はと気づいてその上官を見下ろせば、彼は今まで見たことのないような、微妙な顔つきをして自分を見上げていた。

「イリヤ。何を泣いてる」

「え？」

アイスブルーの三白眼が、困ったように細められたのを見て、イリヤはようやく自分の頬を濡らすものに気づいた。

両の目からぼたぼたと落ちる涙に、イリヤはこの夜、わけもわからないまま嗚咽をもらした。

トロスト区の壁を破られてから、状況はクソだ。

しかし、そのクソな状況を打破するためにエルヴィンが立てた作戦は、かなり画期的であった。これならば、人間に混じっているであろう、巨人の野郎どもに一泡吹かせることは可能かもしれない。

だが、それ以上に、死ぬ予定の人間が多すぎる、クソみたいな作戦だった。

「リヴァイ。最近ちゃんと寝てる？また隈がひどくなってるよ」

朝の清々しい陽光のなかで、その女が気さくに笑った。古城に設けた女の個室だからだろうか、業務中の猫かぶりなすました顔は鳴りを潜めていた。

「お前も人のこと言えねえだろ」

そうかな、とその頬を触りながら鏡を見つめる様子は、何の変哲も無いただの女だ。町娘というにはそろそろ歳も怪しいが、街にいる女どもとそう変わらないように見える。

だが、こいつは心臓を公に捧げた調査兵。いつ絶えるとも知れぬ命だ。

否、こいつの命は次の壁外調査までだ。

「私のことは心配しなくて大丈夫だから、しっかりと体調管理してくれよ」

「ああ」

まだ起き抜けの時間帯を狙って部屋に訪れたからか、兵団支給の白いスラックスに、無造作にシャツを羽織っているだけのラフな格好だった。エルヴィン同様、部下の前に出るときはその第一ボタンまで締め上げている姿とは程遠い。

鼻歌を歌いながら、机の上の書類を片付けている手が、小さな箱を手に取ったのを見て、俺はその箱をかすめとった。

「リヴァイ」

「痛むんだったら、俺がやる」

「……じゃあ、頼もうかな」

その箱の中には、もうすっかり見慣れた注射器が収まっていた。書類仕事のしすぎか、研究のしすぎか、この女は昔から手首をよく痛める。その治療のために注射器から薬を打つ姿は、初めて出会った時からのものだ。いつしか、その注射を代わりに打ってやるようになっていたが、それも最近はめつきりなかったことだ。

透明の清潔なガラス瓶を日にかざせば、宝石のようにきらりと輝いた。その細い右手首に鋭利な針を差し込み、ガラス管の薬を体内へ流し込めば、女の顔が苦痛に歪む。何度やっても痛みは慣れぬものらしい。

「エーミールの奴はどうだ」

「……私の前では普通だね。でも、半年前に二人目が生まれたばかりだし……酷なことになっちゃったな」

「仕方ない。エルヴィンの立てた作戦だ。エルヴィンはお前の班からエーミールを外す気はないみたいだしな」

一ヶ月後に控えた作戦内容を、エルヴィン直々に伝えられたのは昨夜、勧誘式の後のことだった。

エレンを囮に敵を誘き出し、巨大樹の森で捕らえるという突拍子もない作戦であったが、古参兵は一樣にその作戦内容に同意を示した。古参兵は、その捕獲作戦実行のために、多くが荷馬車班や陣形中央付近に配置された。安全性の高い配置であったが、それは同時に、作戦内容を知らない兵士たちの生存率が格段に下がる配置でもあった。

右翼・左翼の索敵班は死ぬだろうと計算された。

問題は、巨大樹の森の中でのエレンの護衛であった。

中央後方の特別作戦班がポイント地点にたどり着くまで、どうしても護衛が薄くなる。そこを狙われてしまう可能性は非常に高かった。とはいえ、荷馬車護衛班を全てエレンの護衛につかせることは困難であるし、巨大樹の森の入り口で巨人をひきつける役も多くいなくてはならない。

そうした考慮の結果、巨大樹の森における護衛には、特別作戦班の補佐に回っているクシエルの班に任せることとなったのだ。

エルヴィンの冷徹な思考で計算されたクシエル班の生存率は、わずか30%にも満たなかった。

——死ねと言われたら死ぬのか。

勧誘式でやつが言った言葉だ。

「うっし。ありがとうリヴァイ」

針を抜いてやれば、クシエルが嬉しそうに笑った。こいつも、死ぬと言われたら死ぬるクチだ。当然だ。それが調査兵だ。命の優先順位で言えば、この女のそれはそれほど高い位置にあるわけではない。

「イリヤ、昨日あなたのところに行ってたんでしょ？ エレンも不安定だし……。あの子たちは色々大変だからね……。そろそろ精神状態が不安定になる頃だろう。……あの子たちのことは任せたよ」

「俺に子守はむいてねえ」

「私よりあなたに懐いてる二人だ。兵士だが……まだ子どもだ。支えてあげてほしい」

消毒液を手に、女が笑った。

俺は吹きすさぶような感情の波を抑えながら、その笑顔を記憶に焼き付けるよう、見つめることしかできなかった。

\*\*\*\*\*

勧誘式の絶望から一夜明けて、ジャン・キルシュタインは調査兵団の兵舎の共同部屋で目を覚ました。二段ベッドの下の段が、彼に与えられた就寝場所である。見慣れぬ上段のベッドの染みに、自分が調査兵団を選択したことが夢ではなかったのだ、と思い知って、朝からため息が漏れた。

「……うう、サシヤ、そりや俺の足だ……」

上段で寝ているコニーが何やら夢うつつでうなされていいる。昨夜は一丁前に落ち込んでいたが、夢の中ではすっかりいつものお気楽バカに戻っているようだった。

まだ、起床時間は来ていないようである。

ジャンは顔を洗うために表の井戸へとふらりと出た。新兵たちが眠る部屋は静かであったが、食堂の方では人の気配があった。食事係の先輩方はもう起きているのだろう。外へ出れば、馬小屋の方へ駆けていく斑らの馬が一頭。確か、古城待機のはずのクシエル副官であった。上官たちはもうすでに仕事に取り掛かっているらしい。さすが、調査兵団は働き者が多い、とあくびを噛み殺しながら思った。

「……クルトが来たらしい」

「でも、本当に……」

「心配するな。あいつならきつと大丈夫だ」

「よう、ライナー、ベルトルト」

井戸の方から聞き慣れた声がして、いつものように寝起きの足を引きずりながら声をかけた。

呼ばれた彼らは、驚いたようにジャンを振り返り、その眠そうな顔を確認して、「ああ、おはようジャン」と笑って挨拶を返して来た。

彼らもまた、ジャンと同じく、憲兵団志望から調査兵団へと鞍替え

した命知らずの人間である。自分よりも優秀な彼らの声を聞き、ジャンは少しだけ憂鬱な気分が晴れるのを自覚した。同期がいるというのは心強い。それだけ、あの訓練兵の頃と変わらないものに縋ることができる。

訓練兵の頃のくだらない記憶を思い起こしながら、それでも今は亡き親友のそばかすの顔が脳裏にちらついた。心臓がじくりと痛むような思いがして、ジャンはライナーの横にある桶の水を顔に思い切りかぶった。

「おいおい。豪快だな。風邪引くぞ」

「……つぶはっ。ああああ。俺、やっぱり調査兵団にいるんだな」

「何だ、後悔してるのか、今更」

ちらりと見上げれば、余裕をかましたようなライナーの笑顔があった。「そんなんじゃねえよ」とジャンは舌打ちした。

「後悔なんてするかよ。これは俺が選んだ仕事だ」

「そうか」

井戸の水は皮膚を引き締めるかのように冷たい。もう一度丁寧に顔を洗い流したジャンに、ライナーがまだ清潔そうなタオルを差し出してくれた。この同期は、いつも頼れる上に、気がきく。だいたい全員のことを下手に見るクセのあるジャンからしても、ライナーだけは（ミカサは置いておいて）一目置く存在である。

「しかし、巨人殺しの達人集団は、一体どんな訓練をやるんだろうな。なあ、ベルトルト」

ライナーに突然話をふられた大男、ベルトルトは、その体格に似合  
わぬ小さくうろたえた声で「さあ？」と返した。

「ジャンはどう思う？」

「別に何だっていいさ。どんな訓練だつてこなして、絶対生きて帰る  
んだ。それより俺は、あの死に急ぎ野郎に言いてえことがあるから  
な。早くあいつに会つてあのツラぶん殴りてえぜ」

乱暴にタオルで顔を拭つて、息を吐きながら空を仰いだ。

光に満ちた空は青みを増して、いよいよ一日の始まりを告げてい  
る。のどかで、美しい一日の始まりを象徴するかのような穏やかな空  
だが、地獄はこんな日にこそ到来する。

解散式のあの日も、こんなよく晴れた、気持ちのいい一日だった。

マルコが死んだのも、こんな良い日だったのだ。

死んでたまるか。

ジャンはもう一度頭を振つて、拳を握りしめた。

\*\*\*\*\*

ジャンの「死に急ぎ野郎」に会いたいという願いは、その日のうち  
に叶うことになる。その日、21名の新兵たちは、教育係のネス班長

により、自分の相棒となる馬をあてがわれた後、長距離索敵陣形の座学を受講するという行程で一日を終えた。

その日の夕方、本部付近で訓練を行っていた特別作戦班の面々と会した際、上官の許可を得てエレンと彼らの時間が設けられたのである。

許可を与えたオルオの判断を、リヴァイは特に咎めることはしなかった。だが、エレンに迫る女性兵士の鬼気迫る表情や、エレンと話す目つきの悪い少年兵の切羽詰まったそれに、見張りの必要性を感じた。

「クシエル」

側にいた同僚へ目配せすれば、彼女はリヴァイの意をすぐさま悟って、ひとつ頷いた。

「イリヤ、来なさい」

エレンと新兵たちが数人連れ立って倉庫の方へと歩いていくのを確認して、クシエルはイリヤを伴ってその場を去った。

「あまり、こういうの良くないような気がするんですが……」

「そうだね。バレたら嫌われそうだし、バレないようにね」

本気なのか冗談なのか。クシエルは倉庫の一角に身を隠して床に腰をおろし、しいっと人差し指を立てた。ちらりとエレンを囲む10

4期生の数と顔を確認した後、柱に背を預けて目をつむった。イリヤもまた、その近くに腰をおろして、息を殺す。

しばらくして、ジャンという目つきの悪い少年と、ミカサという少女が言い合う声が聞こえて、イリヤは滅入ったように頭を抱えた。

新兵たちはやはり動揺している。それはそうだろう。今まで訓練を同じくしていた同期が、いきなり人類の希望とやらになって、しかもそれを守るために死ぬと言われているようなものなのだ。

今まで死ぬ気で命の優先順位を叩き込まれてきた既存の調査兵とはわけが違う。

「ジャン……今ここでエレンを追いつめることに、一体何の意義があるの？」

「あんなミカサ。誰しもお前みたいになあ……エレンのために無償で死ぬるわけじゃないんだぜ？」

厳しくも的を射た確認に、イリヤは息をつめて柱の影からジャンと呼ばれた彼を盗み見た。

「知っておくべきだ。エレンも俺たちも。俺たちが何のために命を使うのかをな……。じゃねえといざという時に迷っちゃまうよ。オレ達はエレンに見返りを求めている。きっちり値踏みさせてくれよ。自分の命に見合うのかどうかをな……」

エレンの顔色がみるみる蒼白になっていくのが、遠目で見てもよくわかった。なるほど、とイリヤの隣でクシエルが小さく頷いた。

「だから……エレン。お前……本当に……頼むぞ？」

「新兵らしい会話だったね。……これなら特に問題はないかな」

エレンたち104期生の新兵たちの会話は、それからほどなくして終わりを迎えた。彼らが倉庫から出て行ったのを確認し、イリヤとクシエルも裏口からその場を去った。

倉庫脇にともる松明の炎のもと、クシエルは何やらぶつぶつと言いながら懐から取り出した紙にペンを走らせていた。

兵士たちの監視。ヨゴレ仕事をするのが彼女の班のもうひとつの任務であると、イリヤがクシエル班に配属になったとき、教えてくれたエーミールの言葉を思い出す。

とんでもない仕事内容だ、とわきあがる嫌悪感をおさえながら、イリヤはその上官の細い後姿に続く。

外は夜のとばりが落ちており、トロスト区の籠の中の世界は、まるですっぽりと夜の藍色をかぶせられたように暗い。ふと見上げれば、空のはしっこ、壁との境目は、藍色と橙色がせめぎ合っていた。

きつと、壁の外にはまだ夜は到来していないのだろう。

本部にほど近い内門は、ここから数十分ほどで着く場所にある。約束の時間までは、まだ二時間ほどあるか。

イリヤは、昨夜のクルトの言葉を思い出す。

——お前、真っ先に死ぬぞ。

「じゃあ、イリヤ。私は団長に報告してから戻るから、先に行つてくれるかい？」

振り返つた上官のくるりとした大きな瞳に、思わずイリヤは言葉を詰めた。この上官は、めつたに柔和な笑みを崩さない。新兵たちへの監視も、「女神様」と評判の、人好きのする笑顔を浮かべたままに行なうことのできる人物である。

そんな上官が何を考えているのか、自分をどのように「使おう」としているのか、イリヤには分からない。

「イリヤ？」

「あ、いや。失礼しました。はい。先に戻ります」

ほんの一瞬の空白だったが、その上官はイリヤの返答を流すことなく、観察するようにその真つ黒な瞳でじいっと彼を見つめてきた。後ろめたいような心持に襲われて、うぐ、と息をのんだイリヤに、彼女はわざとらしく呆れたような溜息をもらす。

「何を悩んでるのか知らないけど、そんな顔するくらいなら、好きなように動いてみたらどう？」

「はっ？」

松明の炎が揺れて、彼女の黒い瞳がまるで熱をもつたようにきらりと輝いた。その瞳のまま、ぐい、と彼女がイリヤに近づく。

「悔いの残らないように。そうだろう？」

「いえ……。しかし、俺はめったなことでは死にそうにありませんし……」

目の前まで顔を近づけてきた上官に、思わずのけぞって言えば、その黒い瞳が再び呆れたように細められた。あ、と思った瞬間には、胸ぐらをつかまれて、片方の手でうなじをがっちり掴みこまれていた。さすが、熟練の調査兵。細いようできて、思わぬ強い力に、首がごきりと嫌な音を鳴らした。

「巨人でもここを削げば死ぬ。お前もここを削いだり、頭をぶちぬけば死ぬかもしれない。違うか？」

「あ……」

ぎりりとうなじに女の細かな爪が立てられる。痛みに呻けば、ようやくその小さくも強い手から解放された。

「そんな顔するくらいなら、思うように動きなさい」

どんなひどい顔をしていたのか。イリヤが思わず自分の顔をさすっている、その上官は小さく笑った後、背中を向けて兵舎の方へとさっさと姿を消してしまった。

あつという間に小さくなるその背中は、どうやら自分を心配していたらしい。そう解して、イリヤは踵を返して足早にその場所を去った。

ぐずぐずしている暇はない。

クルトとの約束の時間は、こうしている間にも迫ってきていた。

「……まあ、こちらが、思うようにさせるかどうかはまた別の話だ  
ど」

イリヤが立ち去った後、兵舎の陰で、そう呟いたのはクシエルであ  
る。

彼女が懐に隠し持つ、愛用の小銃の安全装置を外して動作確認をし  
たのを、もちろんイリヤは知る由もない。

## 四

人は誰しも、何かの奴隷として生きている。

そう言ったのは、屋敷の主人の侍衛であったケニーだった。でも、それはおそらく違う。少なくとも、俺にとっては違う。

人は誰しも、自分自身の主人になることができる。

己の手綱を、他人に譲り渡すことなく、自分自身で握りしめることができるのだ。

——オレたちは知るべきだ。自分の命をどう使うのかを。

そうやってエレンを問い詰めていたのは、104期の新兵だった。そうだ。その通りなのだ。

俺は、この能力を知る必要がある。己の手綱を、兵団へと明け渡さないために。自分の命がどう使われるのかを、知るために。

喉からせりあがる呼気が荒くなる。なぜか涙がこみあげる気配がして、俺は走りながら首をふった。

クルトとの約束の時間は、刻一刻と迫っている。俺の力についてあいつは「知っている」と言った。ならば、そこに向かう必要がある。

知った後、どうするのか。それまで考えはまとまっていらないが、そ

れでもこみ上げる焦燥にも似た感情に突き動かされて、俺はひたすら足を前へ前へと動かした。

人目をさけて、兵舎の裏手に広がる小さな森から本部を抜ければ、誰にも見られずに内門へと向かうことができるだろう。そう考えて、必死に、愚直に、その森の中を駆けていた。

だからだろうか、その人の気配に、声をかけられるまで全く気付くことができなかった。

「オイ、イリヤ」

高いようできて、低く落とされたその声に、動かしていた足が石のようにびたりと地面にはりついた。

「……………り、リヴァイ兵長」

「イリヤよ……………。そんなに急いでどこに行く。クソでも漏れそうなのか？」

おそろおそろ振り返った木の陰から、その兵士が姿をあらわして、ゆっくりとした口調で問うてきた。ほとんど真つ暗闇にも近い森の中でも、彼の鋭い眼光がまるで獣のように俺をとらえているのがわかり、ぶわりと身体中から汗が噴き出る。

「そ、そんな、ところですよ」

「ほう……………。それにしちゃ、方向が違うがどうした。便所は向こうだぞ」

「へ、兵長…………。どう、したっていうんですか…………。」

喉から出た声が、からからに乾いてかすれている。

獣の眼は、獲物をまつすぐにとらえて離さない。さしづめ、俺は蛇に睨まれたカエルののように、肩を震わせるのを抑えて、精一杯平常心を装うことしかできなかった。

にじり寄ってきた兵靴が、森の地面を踏みしめる。半歩下がりがら、ようやく俺はその人に聞いた。

「どうして、そ、そんな……フル装備で、い、いるんですか」

木陰からにじり寄ってきた彼の両腿の横には、刃の格納箱が、両脇のホルスターには立体機動装置のグリップが収まっている。彼の背には、おそらくあの空を飛ぶための装置が備えられているのだろう。

「気にするな。ちよつとした狩りだ」

「か、狩り?」

「ああ」

一步、狼の眼をした男が、俺に近づく。逃げるな、と思いつつも、本能的な恐怖が思考をくゆらせて、思わずまた半歩下がってしまう。

鋭い眼光はそのままに、男はいつもよりゆっくりとした口調で話し始めた。

「地下街では一風変わった「狩り」がある」

「え?へ、?」

「拾ってきた猫や犬を使った狩りだ。自分の分け前を与え、従順に飼いならしたそいつらに、獲物を獲らせる。ネズミでも迷い込んだ鳥でも、死にかけの人間でもいい。なんでもいいから獲らせる。そして、そいつらが大物をとって戻ってきたところで狩りは終了だ」

「……………」

そりゃあ、そうだろう。狩猟民のなかでも、自分は一切動かずにパートナーたる猟犬などに獲物をとらせるスタイルで狩りをする者も少なくないと聞く。それが何だ、とその話の意図を探る。

人類最強たる彼の話は、少し迂遠なところがあるが、彼自身は決して意味のない会話を好む人ではない。

「とつてきた獲物と、その犬やら猫を同時に締め上げて殺す。そうすりゃ一石二鳥ってやつだ」

「……………はっ。そ、そんな狩りが地下ではあるんですか。そ、そりゃあ、面白いですね。ただ、もったいねえ……………です、ね。せつかく仕込んだやつを、」

なんとか答えて言ったとき、彼が大きく一歩踏み出して俺のすぐ目の前まで迫ってきた。思わず息をつまらせてしまう。心臓の音だけが、静かな森のなかでひどく荒々しく響いてうるさかった。

「そりゃあ、地上の……………、安全な場所に生きているやつが思うことだ。地下の奴らのように、明日をも知れねえ命のやつはそうは思わねえよ。もうすぐ死ぬのに、大きな獲物をみすみす見逃すことなんざできやしねえ。……………そんなバカげた狩りだ」

つまり、俺はその、仕込まれた獣だというわけなのか。

目の前の三白眼が、俺を凜猛に睨みつけたまま、立体機動装置のグリップへと伸ばしたそのとき。

「そのバカげた狩りを横からかつさらうのが、あなたのやり方ってわけだ」

背後から、高めの、しかしそれとすぐわかるほど苛立った刺々しい声が背中を叩いた。跳ね上がるような心臓をおさえて振り返れば、やはりそこには先ほど別れたはずのクシエル副官がいた。

無造作に乱れた黒髪。その隙間から垣間見える大きな黒曜石の瞳が、見たこともないくらい険しくリヴァイ兵長を見据えていた。

「ここで何してる、リヴァイ」

「素行の悪い部下への躰だが」

「……何のつもりだ」

まるで地獄の底から響くような、低く感情を抑えた彼女の声は、明らかに怒りを孕んでいる。

いつもと違ってつけたような笑顔と、崩さぬ礼儀正しきは、見る影もない。彼女は、上官であるはずのリヴァイ兵長をにらみ見据えたまま、聞いたこともないような乱暴な口調で言った。

「話にならないね。さっさと古城へ戻れ」

「お前こそ戻れ。わざわざお前の手を煩わせるほどのことじゃねえ」

俺を挟んで、上官二名の静かな攻防が行なわれる。あからさまに舌打ちをして苛立ちをあらわにするクシエル副官に対し、リヴァイ兵長は鋭い眼光であるが、声の響きはゆっくりとひとつひとつを確認するようなものであった。

こんなに感情をあらわにするクシエル副官は珍しいが、真つ向から彼らに対立する様など、誰が予想しえただろうか。なんだかんだ言いながらも、深く信頼し合う様子は、常の業務の合間からも感じられるはずであったのに。

彼らがにらみ合う中で、俺はその視界から逃れようと、一步後ずさった。このまま彼らのもとから逃げる道をちらりと確認したが、人類最強と女神様はその鋭い眼光から俺を逃してはくれなかった。

「イリヤ。あなた、どこに行くつもり？」

「は、いや。く、クソが漏れそうで」

「ならここで漏らせばいいだろう？」

なにを言うのか。

クシエル副官はリヴァイ兵長に向けていた体を、俺の方へと向けて、その懐から無造作に黒い小銃を取り出した。

それは、兵団を害する者を彼女が裁く際に用いるものだ。

その銃口が、俺の額へと容赦なく向けられた。

「な、何を……!? なんなんですか、クシエル副官!!」

「あなたは可愛い部下だ。私は結構あなたのこと気に入ってるんだ。だからもう一度聞いてあげよう。……どこに行くつもりだ？」

「お、俺はどこにも行くつもりありませんっ!!」

必死に上ずる声で叫んだとき、耳元を轟音が通り過ぎた。次の瞬間、焼けるような痛みが左耳に走った。

思わずその千切れそうな痛み膝につけば、暗い森の地面に、真っ黒の液体がぼたぼたと流れ落ちた。

左耳が撃たれたのだ、と悟った瞬間、その上官であるはずの女性への恐怖が心を侵食する。何がどうなっている。

「オイ、クシエル。可哀想じゃねえか」

「口出しするなよ、リヴァイ。内部統制の権限はあんたにはないはずだ。」

……イリヤ。質問の意図が分からないなら教えてあげよう。……「誰に」、「何のために」会いに行こうとしていた？」

見開かれた黒い瞳が、まるで狂気を孕んでいるかのように、ららんと輝く。燃えるような熱い痛みを放つ左耳からは、大量の蒸気が上がり始めていた。

回復するそのバケモノの耳を押さえながら、俺はとっさに答えていた。

「し、知りません！なんのことですか、クシエル班長!!」

「イリヤ……」

「イリヤ。狩りの話だが……。お前はどっちだ？」

不意に背後で、場違いなことを尋ねてきた兵長に、「はあ？」と俺は無礼も気にせず振り返った。その姿に、思わず絶句する。

「そのまま苦しみながら飼い主に殺されるか。それとも必死に尻尾ふって命乞いするか。どっちだ」

がちり、と聞きなれた硬質な音が冷たく響く。その人は、俺に向かって対巨人用の刃を二本、情け容赦なく抜いていた。

後ろには刃を抜いた人類最強。

前方には銃口を向ける女神様。

なんだ、この状況は。

喉から、恐怖で胃液が逆流してくるような感覚に襲われる。巨人と対峙したときよりも、恐ろしい。

何を考えているのか分からないもの。理解できないものは、何よりも恐ろしいのだ。

「お、俺は、死にたくない、です」

「まだそんな甘っちょろいことを……」

苛立ちに満ちた声で、女神さまがその美しい顔をゆがめる。俺は、もう、ただただ思いのままに、叫んでいた。

「何が悪いんですか!?俺は人間だ!人間なら死にたくないって思って当たり前だろ!?死ぬために俺は生きてるんじゃないんだ!!」

「それが戦場で通用しないとお前は十分わかったはずだろ?!」

「だからって、死ぬと言われて死ぬなんてバカなことあるか!!俺の命は俺のモンだ!」

「っ!!口を慎め!イリヤ・ツエラン!!」

驚くほど大きな声で怒鳴った彼女が、やおら俺の胸ぐらをつかみあげて、鬼の形相で言った。

「その発言を撤回しろ。お前のそれは、今まで死んできた調査兵たちに対する侮辱だ……!皆、「人類」のために健気に命を差し出してきたんだ……!!お前はなんだ!?自分の命がそんなに可愛いならなんでこんな兵団に来た!!!」

知っている。

そんなことくらい、知っている。

俺が俺の命可愛さに生きたいと。そんなささやかな願いは、この兵団で命を賭している多くの人間の生き方を否定する願いだ。

そんなことくらい、とうにわかっている。

それでも俺はやっぱり生きたいし……。

——クルト。

三年間、苦楽を共にした同期の顔が浮かぶ。きっとあいつは兵団とは方向性が違うが、何か、俺にはない目的を背負っている男だ。

それが何かは分からないが、俺はあの臆病でいながらも、必死に戦場に立っていた男が、俺はうらやましかつたんだ。

自分よりも劣る、あの男が。

俺は、やっぱり死にたくないし……。死なせたくもないんだ……。

クルトの顔が浮かび、置いてきたはずの訓練兵の頃の懐かしい思い出に胸が焦げ、死んでいった同期たちの声が蒸気を上げる耳の奥で聞こえた。

結局のところ、臆病だったのは、俺だったのだ。

勇敢な兵士は、あの死んでいった同期たちに違いない。

そう気づいた矢先、両の目からとめどなく涙があふれてとまらなかった。嗚咽がこぼれて、夜の森に情けなく響くが、そんなことももはやどうでもいいと思えるくらい、俺は情けなさに齒を食いしばった。

後ろで、兵長がクシエル副官を呼ぶ声がする。

彼らがいっただい何を目的としてここにいるのかはよく分からない。ただ、俺ができることは、クルトのことを話さないというだけだった。

あの、勇敢な友人のために。

俺ができるのは、俺の力のことを知る機会を、手放す事しかなかった。

かちり、と頭の上で冷たい金属音が響いて顔を上げれば、真っ暗な小さく丸い銃口とぴたりと目があつた。

「殺されるか、命乞いするか、か……。選ばせることすら勿体ないね。イリヤ。試してみようか。お前の頭をぶちぬいても、再生するのかわか。どっちにしろ、お前のような兵士はただのお荷物だ」

冷たく黒い瞳が、そう言つて、場違いに少し笑つたのが、涙に滲んだ視界のなかでもはつきりとわかつた。

背後で、兵長の声が聞こえたような、気がした。

\*\*\*\*\*

満月の夜は、彼らマーレの戦士にとっての約束の夜だ。

マガト隊長率いるエルディア人の戦士とマーレ兵は、パラディ島の

海沿いに建てられた壁の上にはいた。

何度目かの夜だった。

今夜、壁の中へ侵入した戦士たちに動きがなければ、調査のために二人の戦士が送り込まれることになっていた。

その戦士のひとりであり、若い戦士たちの長でもあるジークは、夜行用の双眼鏡から目を離して、隣に立っていたマガト隊長へと進言した。

「クルト・ウエルナー諜報員が戻りました」

島の内地から、一頭の馬が駆けてきていた。それは、エルディア人であり、戦士候補生でありながらも巨人継承者たちと共に壁内へと侵入したクルトであった。

「背が伸びたね」

水を飲みながら、船内の一室で体を休めていたクルトに、そう言ったのはピークである。長い髪をけだるげに耳にかけながら言った彼女の隣では、ひげを蓄えた丸メガネの男、ジークが座していた。

「ああ……。ピークは……。綺麗に？ なった、な？」

「あら。おばさんになったってはっきり言っていないのに」

まだ16歳の少年然としたクルトと、五年ぶりの再会。彼の帰還

で、壁内にいるアニ・レオンハート、ライナー・ブラウン、ベルトルト・フリーバーの作戦と状況を知った彼らは、現状で壁へと向かうのは得策ではないと判断して、マガト隊長の指揮のもと、帰還の航行の中にいた。

「壁の中も、いろいろと厄介そうだねえ。帰ってくるのも大変だったでしょ？苦勞したんじゃない？」

「……はい」

言葉少ない仲間の応答に、ジークが首を傾げる。その戦士長にクルトは言った。

「壁の中は予想外のことばかりでした……。ここへ戻るとき、あの「出来損ない」の一族を見つけたので、連れ帰ろうと思いましたが無理でした。……すみません。俺は結局何もできないまま、のこのこと帰ってきてしまいました……」

「出来損ない」？まさか。眉唾もんだと思ってたけど」

「ええ……。巨人研究の一環で作られたとされる一族。人間態のまま、巨人の再生能力を持った不死の戦士を作ろうとした結果生まれた「出来損ない」です」

ジークとクルトの話に、ピークはふうん、と興味があるのか、ないのか分からないけれど、口調で相槌する。椅子の上でしなだれる様子は、まるで獣のようである。

「でもアッカーマン一族ならまだしも、あの「出来損ない」ならそんなに脅威じゃないね。だって、ただ「再生する」だけの人間なんて、戦場では何の効率性もないんだもの。それこそ、一個旅団全部が「出来

損ない」でもなければ、ね」

その通りだ、と頷いた戦士長に、クルトは友として四年間を共にした「出来損ない」を思い出す。結局、彼を壁の中の地獄から救い出すことは叶わなかった。「出来損ない」は、約束の場所へは来なかったのだ。

「アツカーマン一族がいたらちよつと怖いよね。どう？クルト。そんな奴はいた？」

「さあ……。俺の知る限りではありませんでした。まあ……。とんでもなく強い兵士がいたことはいましたが、たった一人ですし……。そいつもまさか戦士長やア二たちの脅威になるとは思えません」

それに応じる二人の戦士の声は間延びしていて、緊張感に欠ける。この二人は昔からそのマイペースを崩さない。変わらぬ二人の様子に、クルトは帰還を実感しつつ、頷いた。

壁の中の元上官たちのような、緊迫感に満ちた声とは大きく違いな、と眠気に襲われる思考のなかでぼんやりと思った。

規則的なエンジン音が船内にとどろくなか、クルトは夢の中で、いつしか巨人に食われかけたところを救ってくれた、黒く小さな影が空を飛ぶ様を見ていた。

クルトは、この時ももちろん、その小さな影の姓を知る由もなかった。

その壁の中に、「アツカーマン」と「出来損ない」がいることに、彼らマーレの戦士が気づいたのは、それから数カ月先。

敗走の船の中であつた。

## 七章

### 王家の依代

一

「二人とももう休んだよ。あなたももう休んでくれ」

広間へ戻ってみれば、まだその場にいた男に、ハンジはうんざりしたように言った。世界の終わりのような、辛気臭い顔に青みが差しているような気がするのは、蠟燭の炎しかないからだろうか。

「……………」

その太く骨ばった指が、空のカップの縁を手持ち無沙汰になぞっている。彼はハンジに一瞥を加えて何か言おうとしたが、その開けられた口からは何の音も形にならなかった。

存外おしゃべりな男なのに、こんな大切なときばかりはその口下手に磨きがかかるのだ。相変わらず不器用なことこの上ない。

「イリヤもだいぶ落ち着いたみたいだ。…………念のため、今日は地下牢で休んでもらってる」

「…………クシエルはどうだ」

「いつもどおりに見えるけどね。彼女の思惑通り、エルヴェインがイリヤの退団、もしくはクシエル班からの除名を許せば、あなたへの機嫌も直るんじゃない？」

スラックスのポケットに無造作に突っ込んだ使用済みのガーゼを机の上に放り投げながら、ハンジはぞんざいに言った。手元の救急箱

の中身を片付けながら、少し血のついたガーゼを数枚、処分するためにまとめていく。

わずかな炎の光に、赤い血が色濃く存在感を示している。それは、クシエルの血である。その血を流させたリヴァイは、ガーゼを見ながら黙したまま、椅子に座って、カップの縁をなぞるのみである。

所在無さげな旧友の珍しい姿に、ハンジはどうとう根を上げて彼の向かいに座った。

「はいはい。わかったよ。なんだい？私でよければ何でも聞くよ。人類最強のグチなんて滅多に聞けないからね。喜んで拝聴しよう」

「巨人なんて捕獲してやれねえぞ」

「なんだよ、せっかくの人の好意を！無償で聞いてやるって言うてんだよ。私たちの仲だろうか？」

そりゃあ、もしお礼に巨人を捕獲してくれるというなら、次は5メートル級を三体くらいは欲しいもんだけど、と言えば、苛立ったような舌打ちが返ってくる。ようやく、いつもの傍若無人っぷりな態度が戻りつつある、とハンジは笑って続きを促した。

「結局、あいつの思うようになったってわけか？」

「……さあ。エルヴィンがどう判断するだろうね。イリヤの能力は調査兵団としても手放しがたい。彼の思惑がどこにあるのかわからないとはいえ、彼が「心臓を公に捧げる」兵士であることを自ら辞めないう限り、エレンの盾として利用するのが得策だろうからね。クシエルの要望通り、除名が通るかどうかは怪しいね」

リヴァイに引きずられて、イリヤとクシエルが、ハンジや特別作戦

班が待機していた古城へと戻ってきたのは、ちょうど夕飯が終わった頃だった。

クシエルは完全に気を失っており、その左頬から血が出ていた。夜半にかけてひどく腫れあがるだろうことは、一見してすぐわかった。対するイリヤは無傷であったものの、その表情はひどく暗鬱に満たされていた。肩にクシエルを担ぎ上げ、イリヤを引きずりながらフル装備で帰ってきたリヴァイに、その場は一時騒然となった。

状況の報告を受けて、念のためイリヤは地下牢へ。クシエルは彼女の自室でハンジによって手当をうけて目を覚ましたが、先ほど、ようやく眠りについたところであった。

「クシエルは短気なのが損だね。イリヤの言い分は私も領けないけど……彼女には特にこたえる価値観だ」

「……それにしても、あいつは過激すぎる。こいつを取り上げるのもえらく手間がかかった」

懐から、リヴァイは小さな黒い小銃を取り出した。兵団で支給されるような単発式の散弾銃ではなく、それにはいくつかの弾丸がおさまっているようだった。

「取り上げちゃったのかい？……それが彼女にとっての大切な人の形見だってわかってるだろう」

「……あいつはイリヤを信用しすぎだ」

「私からすれば、あなたはクシエルを心配しすぎだと思うけどね」

イリヤが何者かと接触しているという疑いは、昨夜、中庭で彼が誰

かと話していたところを見たというリヴァイの言による。

「敵」がイリヤに接近している可能性があるかと判断して、彼を焚き付けて尾行し、その何者かに迫ろうとしたのがクシエルである。しかし、それはイリヤが「敵」と通じているという可能性を考慮しなかった故の行動だ。イリヤが「敵」とすでに内通していたのなら、単騎尾行するのは非常に危険な賭けだった。クシエルの行動を予測したリヴァイが、何者かの正体よりも、彼女の身を案じて邪魔したというわけだ。

そもそも、そんなことしなくても、直接「心配だからやめておけ」と言ってしまうえば、クシエルも単独での行動を改めただろう。他人からの好意を無碍にはできないのが彼女だ。短い付き合いでもないのに、わかるだろうに、とハンジはため息をつく。

リヴァイも、クシエルもお互い不器用で、それ故に、盛大にすれ違ふことがある。

「イリヤが内通者ではないことは、信じてもいいと思うよ。何か隠しているようだけど、彼自身必死に「兵団を裏切るつもりはない」って言ってたしね。信じていいんじゃないかな」

「……ああ。そうだな」

「何か納得いかないって顔だな。明日は巨人でも降るんじゃない？人類最強がそんな顔してちゃ、士気に関わるよ。なに、それともクシエルに蹴り上げられた急所がまだ痛むかい？」

ハンジの言葉に、さあつとわかりやすくリヴァイの顔が青ざめた。

そう。

クシエルは、自分の頬をグーで容赦なく殴りつけてきた男に対し、

その右足で一矢報いたらしい。

女の顔をぶん殴った代償を、リヴァイは払ったわけだ。しかし、人類最強でも等しく軟弱であったその急所を蹴り上げられながらも、なんとか起き上がって、鳩尾を狙って彼女を昏倒させた彼の剛腕ぶりにも舌を巻く。

筆舌に尽くしがたい痛みと屈辱に耐えたリヴァイに、ハンジは賞賛を送るとともに、大人しく没することなく情け容赦なく蹴り上げたクシエルにも、拍手を送った。どっちつかずな対応に、エレンをはじめとして、オルオやエルド、グンタたち男陣は怪訝そうにしていたが。ペトラだけは、「流石の兵長でも女性の顔を殴るのはよくありません」と珍しくリヴァイに対して鼻息を荒くしていた。

たぶん、人類最強がいつもより落ち込んでいる要因には、可愛い女性部下の珍しい叱咤も少しはあるだろうと思われた。ハンジからすれば、案外、この男は繊細なのだ。

「……クソメガネ。お前は俺のグチを聞くのか、自分が話すのかどっちかにできねえのか……」

「聞いているじゃん。これが私の相談事の対応さ！皆、私に話すと「なんか悩みなんかどうでもよくなってくる」って評判なんだよ」

「……あながち間違いじゃないが……そこは怒るところだ」

「そっつてどっ」

「……どうでもいい」

リヴァイが深く息を吐いてうなだれたので、ハンジは思考を戻す。イリヤが裏切るつもりはなかったことは、彼の切実な訴えの通りだろう。ただ、何かを隠している。それを頑なに隠そうとする限り、今はあまり掘り下げない方がいいだろう。彼に接触していた「何者か」の

正体は不明だが、今はそれについて詳しく突き詰めるほどの余裕も時間もない。

それより、ハンジの興味の対象は撃ち抜かれたという彼の左耳のみに終始していた。

「ああ……エレンみたいに巨人になれるわけでもないのに再生できるなんて……。なんて素敵な能力なんだろうね。その仕組みってどうなってるんだろう？ 今回の傷なんてものの数分で治ったらしいじゃないか。聴覚にも問題は出てないようだし、本当に素晴らしいよね！」

その仕組みはどうなっているのか。巨人と同様なのか。それともまた別の仕組みなのか。そもそも、再生した細胞は新たな構成なのか。それとも、元の細胞と全く変わらないのか。不思議は尽きない。惜しむべらくは、直属の上官であるクシエルから人体実験が許可が下りないことだろうか。ハンジの知的好奇心を追求するのみの実験は不可だ、とはつきり最初に突っぱねられている。

「ああ、でもクシエル班から除名されれば、実験の機会は巡ってくるかな!? せっかくだし、私の班に来てくれたらいいのになあ。それなら、朝からみっちり思う存分、彼の体を調べ上げるのに……」

「イリヤは辞めねえだろうよ」

「え?」

リヴァイは迷わず断言した。

「あいつはクシエルの下から逃げない。絶対にだ」

「どうしてそんなこと言えるのさ。あの子の顔見たかい？完全に怯えちゃってさ。自分を撃つてきた上官につきたいと思うようなマゾには見えなかつたけどね」

「あいつは「死にたくない」と言っていた。クシエルのもとにつく前から、ずっと奴が言ってることだ」

「ああ。だから、クシエルは自分の班から外したがってるんだ。次の壁外調査では……、彼女の班は生存率が低いからね。「死にたくない」という兵士を死なせたくないんだろう。クシエルは甘いから。前は壁外にも連れて行かなかつたから、相当可愛がってるんだろ。まあ、愛情が屈折しすぎて伝わってないけどね」

「お前、並の兵士が、憲兵団に所属して「巨人を駆逐してやる」なんて言えると思うか？」

「はあ？エレンみたいにしていうこと？そんなこと、」

そこでようやく、ハンジはリヴァイの言わんとしていることに気づき、はっと息をのんだ。

「そうだ。人間、仲間がいりやなんだって大きなことは言えるもんだ。しかし、集団の中でたった一人、対立するような考えを言うことなどは、並の人間にはできない。エレンがそうだったように……あいつは、銃口をつきつけられても、上官に囲まれても「死にたくない」とほざきやがった。そんなこと、できる人間は限られている」

「……言われてみれば、そうだね。「死にたくない」なんて、調査兵団で声を大きくして言えることじゃない。皆んな、多かれ少なかれ思ってることだけだね」

「あいつは、あいつが自身が思っている以上に調査兵らしい奴だ。舐めてかかってりや……いつかクシエルも、あの甘い手を噛みちぎられることになるだろう」

ほお、とハンジは思わずまああるく奇声を発した。リヴァイがそうも一人の兵士を評価するなど、なかなか珍しい。

「えらく買ってるじゃないか。クシエルが噛みつかれてもいいのかい？」

「イリヤはガキだが……その前に兵士だ。それが分からないクシエルは、いつそのこと食いちぎられちまえばいい」

おお怖い、とハンジが茶化すように笑えば、リヴァイは忌々しそうに舌打ちを返してくる。そのやり取りはいつもの彼らの定番と化しているものであったので、ハンジは少しだけ安心して、そのままケラケラと笑い続けた。

その無邪気な笑いに、リヴァイもまた、毒気が抜かれたのか、何も言わなかった。そういえば、と彼が次に口を開いた時には、先ほどまでの暗鬱な表情はすっかりと姿を消し、いつもの、人類の英雄、リヴァイ兵士長の顔つきに戻っていた。

「イリヤのあの情けねえツラを見てて思いついた方法がある。それがうまくいけば、巨人化したエレンを人間に戻すこともできるかもしれないねえ。……ハンジ。お前、どうする？」

「ええ!? そんなことできるんだったら、聞くまでもないよ! いいんだね? 私はやるよ?」

身を乗り出したハンジの勢いに、リヴァイが夜半にその質問をした

ことを後悔するのは数時間後。逃げ場をしつかりと奪われて、ひたすら彼女の仮説を聞かされるハメになってからだだった。

\*\*\*\*\*

「お前を半殺しに止める方法を思いついた」

翌日、午前の訓練の行程を終えた後、特別作戦班とクシエル班の三名、そしてハンジ分隊長を集めて、リヴァイ兵長がそう言った。

昨夜の騒動については、リヴァイ兵長からもクシエル班長からも、ハンジ分隊長からも特にお咎めも追求もなされなかった。

朝から、いつもどおりの訓練が行なわれたことに対して、イリヤは逆に戦々恐々としていたところであった。結局昨夜はクルトに会うことは叶わなかった。己の能力について知る機会も、もう得ることはできないかもしれない。

イリヤは、兵団の犬として、何も分からないままに日々をやり過ごしていくしかないのだろう、と暗鬱な気持ちのまま、ぼんやりとリヴァイ兵長の話を聞いていた。

「巨人化したお前を止めるには殺すしかないと言ったが……」

物騒な物言いでありヴァイ兵長が黒板に絵を描き始める。ちらりと隣のエレンを見遣れば、困惑したような顔を浮かべていた。それはそうだ。「半殺しに止める方法」など、恐ろしいことこの上ない。

「このやり方なら重傷で済む。とは言え、個々の技量頼みだがな。要はうなじの肉ごとお前を切り取ってしまえばいい。その際、手足の先つちよを切り取ってしまうが……」

リヴァイ兵長が振り返る。エレンを見て、その後、イリヤにも一瞥を加えて言った。

「どうせまた、トカゲみたいになってくるんだろ？……気持ち悪い」

「ま、待ってください。どうやって生えてくるとか、分からないんです。何か他に方法は……」

エレンが動揺して首を横に振ったのを見て、リヴァイ兵長が鋭くその目を細めて、イリヤを指差した。

「こいつは耳が欠けても一瞬で生えてきたが」

「いえ、イリヤは巨人化できませんし……。俺の能力とどこまで共通項があるかは……」

なおも拒否の態度を示すエレンであるが、それは当然だろう、とイリヤは思った。自分でも把握できていない能力なのだ。半殺しにならないければ、実際に死んでしまう。そんな確証の低い実験を、二つ返事で承諾できる方がおかしい。

手足の先っちょが切れる。

イリヤは想像する。

昨夜、耳を撃たれて気づいたが、おそらく痛覚は通常よりも少々鈍化している。それでも痛みに変わりはないが、耳の半分が欠けていながら、普通に会話できたのは、おそらくそういうことだろうと思われた。

そしてもし仮に、両手足が欠損したとしたら。

——おそらく、最大30秒もあれば全て再生できる。

なぜか、そう「わかった」。

しかし、エレンにはまだその感覚がないのだろう。もしかすると本当に再生は困難なのかもしれない。そう思っリヴァイ兵長を見れば、彼はナイフのように鋭く研ぎ澄まされた視線をエレンに向けて、低い声で言った。

「何の危険もおかさず、何の犠牲も払いたくありませんと?」

「え、う、い、いえ」

エレンが萎縮してたじろぎながらも、否定した。

「なら腹をくくれ。俺たちも同じだ。お前に殺される危険がある。だから安心しろ」

「……はい。分かりました」

「じ、じゃあ実験していいよね?」

エレンの控えめな承諾に、興奮を抑えようとした声で言ったのはハンジ分隊長である。メガネが光を反射して、その瞳が見えないが、あの狂ったような目がその下にはあるのだろう。

「ああ。リスクは大きい。かと言って、こいつを検証しないわけにもいかないからな」

「計画は私がやっていいよね」

ハンジ分隊長が、エレンにその視線をやる。

「エレン……。分からないことがあれば分かればいい。自分たちの命をかける価値は、十分ある」

その言葉に、イリヤは冷や汗が背中をつたうのを感じた。エレンは、戸惑いをその表情に浮かべながらも、強く。ひとつ、頷いた。

「エレン！どういうことだ!?なぜ今許可もなくやった!?答えろ!!」

「答えろよエレン!!どういいうつもりだ!!」

突然の爆発音のあとに広がった蒸気が薄らぐより前に、いち早く反応したのは特別作戦班の班員たちだった。

赤い筋がむき出しになった巨大な拳が、鼻孔をつくような異臭を放っている。それを取り囲むようにして、特別作戦班の面々は刃を両手に臨戦態勢に入っていた。

「リヴァイ！下がれ！」

耳元で怒鳴ったその声に、イリヤはようやくやく声の主——エーミールが自分の半身を支えてくれていたことに気付いた。

そして次に、自分の腕の中にあるものに、目を奪われた。

「お、おかあさ、ん」

長いブロンドの髪に、使用人の黒い洋服。その色彩が、大量の真紅に塗り上げられていた。まるで絵の具でもまき散らしたかのように、その赤い血が己の身体にも滲んでいる。

黄金色と黒、そして鮮明な赤の色彩のコントラストに、頭の奥がぐらりと揺れるような、不確かな感覚に襲われる。

見れば己の右足がつぶれて、肉片が草に絡んで跡形もなくなってい

た。

巨人の拳が、ブロンドの母と己の足をつぶしたのだ。そう悟って、巨悪の根源を見据える。

目の前で異臭を放つ皮膚のない巨大な手の上。そこに、手の持ち主がいた。

色素の薄いその髪色には幼いころから見覚えがある。あいつは、

「ウーリ!!」

「イリヤ?」

拳の持ち主の名を呼んだ瞬間、腕の中でつぶれていたはずの、赤に染まった人間が顔を上げて自分を呼んだ。

「兵長! エレンから離れてください! 近すぎます!」

「いいや。離れるべきはお前らだ。下がれ」

特別作戦班とリヴァイ兵長の緊迫したやりとりが、やけにはつきりとイリヤの耳を打った。頭の上から冷水でも被せられたような心地に襲われ、イリヤの意識は鮮明に現実へと戻される。先ほどまで右足から身体全体を切り裂くように襲っていた痛みも、いつの間にか消えている。

つぶれていたはずの右足は、無傷のまま兵団用のブーツに包まれて

いた。

「リヴァイ！離れろ！」

「エーミール。お前も落ち着け」

「エーミール！下がって！！兵長の指示に従え！」

腕の中からするりと抜けて立ち上がって男の名を呼んだのは、黒髪の短い髪の女だった。その背中には、自由を象る双翼が躍っている。先ほどまで腕の中で息絶えていた長いブロンドの髪の女ではなかった。

「あんたは下がっててください！ケガしてるのに！」

「下がるのはあんただ、エーミール」

黒髪の女、クシエル班長と、その部下エーミールの攻防の向こうでは、特別作戦班の面々が、巨大な拳に刃を抜いている。その拳を守るように彼らと相對するのは、リヴァイ兵長である。

「エレン！」

「ちよつと……」

「エレン！！答えろ！お前は人類にとっての——」

「ちよつと！！黙っててくださいよ！！」

拳の持ち主のその悲痛な叫びに、イリヤは耳を疑った。

「エレン……?」

先ほど見た、色素の薄い髪の老人ではない。それは、困惑の中にも深い攻撃性を孕んだ少年だった。

当然である。

ここは、兵団の演習場で、今はエレンの巨人化実験を終えたところなのだ。イリヤが見たのは、イリヤが幼いころから憑りつかれている、妄想そのものだった。稀に夢に見る、屋敷の主人、ウーリ・レイスと母の、妙な妄想。もしくは悪夢。

夢から覚めたような感覚に、イリヤは目を瞬かせた。

「エレン!!その腕、触っていいいい!!」

どこからともなく寄生を発しながら登場したハンジ分隊長の熱に、特別作戦班やエーミールの緊迫した警戒心が溶解していく。それを肌で感じながら、イリヤは立ち上がった。

己の身体に滲んでいた血もどこにもついていない。それこそまるで、夢幻のように、一滴の赤も残すことなく消えていた。

「イリヤ?」

黒髪の上官が、ひとり己の両手を見つめているイリヤを訝しみ、声をかけた。

リヴァイ兵長に殴られたという彼女の左頬が痛々しく腫れ上がっ

ている。その無残な顔を見ながら、イリヤは幼いころに亡くなった母を思い出した。

彼女の両手が、赤く火傷でただれている。

ようやく、イリヤはその母の面影とは到底似てもいない女が、自分をかばってくれたのだと悟った。

エレンの右腕が巨人化した際、最も近くにいたイリヤを守るために。

それは、母の死に際の状況と、酷似していた。

\*\*\*\*\*

「実際に敵意を向けられるまで、気付きませんでした……。あそこまで自分は信用されてなかったとは……」

膝を抱えて言ったのは、エレンである。古城の地下で、リヴァイ兵長の監視のもと、ハンジ分隊長とクシエル班長の実験結果報告の帰りまで待機していたときである。

イリヤがその孤独な少年の顔を横目で見れば、巨人化したときの顔色の悪さは幾分マシになっていたが、表情自体は暗鬱としたままだった。

ハンジ分隊長の計画した巨人化実験は、エレンが巨人化できないという結果で失敗に終わった。

にもかかわらず、その後の休息時間に突如としてエレンはその右手のみを巨人化させたのである。巨人化に伴う爆風によるケガ人は、エレンの近くにいたイリヤをかばったクシエル班長だけであった。幸い、彼女の負った火傷は、軽傷であったが、エレンの巨人化はそれよりも精神的な禍根を兵士たちに負わせることとなった。

特別作戦班の面々が、エレンに刃を向けたのは、つい数刻前のことである。

エレンの呟きに答えたのは、彼をはさんでイリヤの反対側の壁に背を預けていたリヴァイ兵長であった。

「当然だ……。俺はそういう奴らだから選んだ」

暗い古城の地下では、炎の揺らめきだけが視界を照らす唯一の光である。その明かりのもとだと、その上官の表情筋ひとつ動かない顔つきは、まるで人形のように冷え切っているように見えた。

「生きて帰って初めて一人前」ってのが調査兵団の通説だが……。巨人と対峙すればいつだって情報不足。いくら考えたって何一つわからない状況が多すぎる。ならば努めるべきは迅速な行動と、最悪を想定した非情な決断だ」

兵長が努めるべきとする行動指針の后者は、明らかにイリヤには欠如していた。彼が兵士としての技術的な能力が高かろうと、そこが欠如している以上、特別作戦班へのお声かけはないものと言える。自分が選ばれなかった異動の理由を知り、イリヤの捧げたはずの心臓がちくりと痛んだ。

「……かと言って血も涙も失ったわけでもない。お前に刃を向けるこ

とに、何も感じないってわけにはいかんだろう」

仲間を切り捨てるような非情さを持ちつつ、その痛みを抱えもする。そんな兵士を求める兵士長の言葉に、イリヤはぞっと背筋が凍るような心地がした。

それは、まるで兵士長の行なう掃除そのものだったからだ。

埃一つ見逃すまいとする潔癖さは、その精神にまで及んでいるというわけだ。人間としての矮小な弱さを、彼は自分の班員には許すことはないのだろう。

まさに、高潔なまでの在り方だ。

「……イリヤも、皆さんと同じ任務なんですよね？」

不意に話題にのぼった自分の名前に、思わずイリヤはエレンを振り返った。エレンは、兵長を見ている。

「そうだ」

「……………」

「それがなんだ」

黙り込んでしまったエレンに、不審に思ったのか、リヴァイ兵長が問う。

「いえ……。エーミールさんは俺に刃を向けましたが、イリヤはそうではなかったのです……」

「そりゃこいつが呆けていたからだろう。お前の一番近くで巨人化の爆発に巻き込まれたんだ。クシエルがかばわなければ、どうなっただかわからんが」

「ほ、呆けていたわけではありませんよ……」

疑うように眉を曲げてイリヤを見つめたその上官に、「……ちよつと、クシエル班長の行動に驚いただけです……」と苦し紛れにイリヤは言い訳した。あのと看見た幻のことなど、言えるはずもなかった。

「昨日は耳を撃たれたのに、今日はかばわれるなんて……。意味が分かりません」

「別に深く考えて出した結果の行動じゃない。あいつは命の優先順位をよく分かってる。それだけだ。……職歴も判断力も分隊長クラスのあいつが、エルヴィンの副官でとどまっているのも、そのためだ。あいつは命の優先順位が高いやつを身を挺して守ることができる優秀な副官だ。それこそ、お前をかばったのもほとんど脊髄反射だろうよ」

「そ、そうですか……」

脊髄反射のように危険に身をさらすことができるならば、それは確かに特別優秀な副官だろう。乾いた笑いをこぼして、イリヤは曖昧に返事をした。相変わらず、彼にはあの班長たる女性も、目の前の人類最強のことも、到底理解できない様だった。

「あれは……、お前の母さんが死んだときに似てたな」

そうしたイリヤの思考は、エレンの突然のその眩きに、制止を余儀なくされた。その言葉の意味が飲みこめず、イリヤはエレンの顔をま

じまじと覗き込む。

「……は？何言ってるんだ？」

「いや。だから、お前の母さん、巨人に殺されたんだろ？お前をかばって」

「……………なんでお前がそれを知ってるんだよ」

「……お前が、話してくれたんじゃないか？」

「言ってるよ。そんな状況まで話すわけないだろ」

「じゃあなんで俺が知ってるんだよ」

「いや。だから、」

「リヴァイ兵長。ハンジ分隊長がお呼びです」

イリヤとエレンの食い違う会話を中断させたのは、地下への階段を下りてきたハンジ分隊長の副官、モブリット・バーナーだった。

「わかった。……おい、お前ら。その話は後にしろ。今は任務に集中しろ」

二人の会話を黙って聞いていたリヴァイ兵長が、彼らの疑問にふたをするように言い放った。

兵長の後をついてくエレンの後姿を見た時、イリヤは頭の奥がちくりと微かに痛む気がしたが、わずかな疑問と共に、それを振り払って、彼らの後を追った。

\*\*\*

エレンの想定外の巨人化についての報告から、ハンジ分隊長とクシエル班長が古城へと戻ったのは、もう夜も更けつつある頃合いだった。

いつものようにクソネタで軽妙なやりとりをする兵長と分隊長を横目に、クシエル班長だけは黙したまま、会話に混ざろうとはしなかった。

昨夜、イリヤをめぐるって暴力沙汰にまで及んだりヴァイ兵長とクシエル班長の間には、わずかながら禍根が残っているようだった。それぞれ心的ダメージの大きい急所を狙い合ったのだ。まあ、当然と言えば当然だろう。

自分の浅薄な行動のために上官同士が険悪になったことを気に病んだイリヤだったが、二人の部下でありながら、二人の新兵の頃を知り、旧知の仲でもあるというエーミール曰くは、「気にするな。放つとけ」ということだった。なので、イリヤはその二人の中に流れる微妙な空気には、見て見ぬふりを貫いた。

「エーミールは謝罪しないのかい？ エレンに」

彼女がようやく口を開いたのは、ペトラやエルドたち作戦班が、エレンに刃を向けたことを謝したときのことだった。

——私たちが信じて。

そう言ったペトラの気持ちは、どれほどエレンの孤独に沁みただろうか。己の非を恥じ、謝罪して、自傷行為を真似ることで誠意を示そうとした特別作戦班の若き精鋭たちに、クシエル班長はひどくご満悦なようだった。

彼ら特別作戦班の潔癖なまでの誠実さに、ハンジ分隊長は目を白黒させていたが、彼女をはじめとして、そこにいた古参兵の皆が、彼らの兵士としての技量の高さに感服したことは疑いがない。

そんな彼らとは異なり、何も言わないままの己の部下、エーミールに、クシエルは揶揄するようにいたずらっぽく笑いながら聞いたのだ。

彼もまた、エレンに刃を向けた人物だった。

「俺は謝りませんよ。俺がエレンに刃を向けた判断は正しかったと思います。後悔もしていませんし、反省もしてません」

エーミールの清々しいほどの断言に、落ち込むようにその凛々しい眉を下げたエレンに、彼は「勘違いするな」と言葉をつなげた。

「お前が巨人だとかそんなこと、関係ないぞ。俺は俺の上官がケガさせられたから、お前に刃を向けたんだ。不可抗力であれ何であれ、自分の上官が危険な目にあつたときに動けない部下なんざ、ゴミみたい

なもんだ。違うか？」

「そ、その通りだと思います……」

すこむように顔を近づけたエーミールに、エレンが思わずのけぞりながら答える。エーミールは歳も三十を超えているが、そこらの若者より整った顔つきの俳優のような男である。そんな美形が顔をすこめれば、それはリヴァイ兵長やミケ分隊長のようなあつさりとした顔つきの男がすこむよりも幾倍も恐ろしい。

クシエル班長が「いじめるなよ」と笑って、ペトラたちもつられて笑い、ようやく場が和んだ。厳しい顔を崩せなかったエレンやイリヤも、少しだけ破顔したとき、その緩んだ空気を遠慮なくぶち壊したのは、ハンジ分隊長だった。

「エレンが巨人化するのに、目的が必要なのだとしたら、実験の後、自分でつけた傷が治らなかったのも巨人化の条件と連動すると考えられるね」

「なんだ突然。クソメガネ」

「だからさ、治癒能力にも「目的」が条件となるってことだよ」

「だから何だ」

苛立ったように、リヴァイ兵長が問うた。だからさ、と詰問された分隊長は興奮気味にイリヤを見て言った。

「イリヤの再生能力も、そうだと考えられないかな？つまり、再生する、しないを自分の意思でコントロールできるかもしれない。エレン

が巨人化するのと同じようにね」

話の中心として持ちあがったイリヤに、その場にいた面々は一斉に彼を見た。が、当のイリヤはエレンと同じく、ただその視線にたじろぐしかできない。

「でも……それは考えにくいと思います。イリヤが初めて再生能力を発揮したのは、トロスト区防衛戦の最中です。あのとき、彼は意思が云々という状況ではなく、明らかに「死んで」いました。ねえ、エーミール」

「ええ。俺もクシエル班長と同じように思います」

下半身を食われてもなお、彼が再生して蘇生した現場をその目で見た二人が言った。だがそれに対して、「待て」とリヴァイ兵長が何やら思案するようにイリヤに問うた。

「イリヤ。なぜお前はあのとき、巨人と戦った？」

「へ？いや、あのときはただ、死に物狂いで。駐屯兵を助けることが目的でした」

「死にたかったのか？」

「いいえ！まさか！生き残るためにそうしたんです！死んでたまるかって！絶対生き残ってやるって思ってた……」

問いかけに、イリヤは必死になって答えた。

その解答に、その場の全員が得心したように「ああ」と間延びしたような声を発した。

「え？」

「なるほどね。そういう意味じゃ、イリヤの意思はかなり強いものでしょうね」

「そうだねえ。なかなかないくらいの「死にたくない」マンだもんね。イリヤは」

「兵長の足にすがりつくほどだもの。死んでも死にきれなかったんじゃないかしら？」

「おい、ペトラ。それはさすがに面白すぎだろ。幽霊みてえじゃねえか」

クシエル班長や、ハンジ分隊長、ペトラやオルオがおかしそうに言った。困惑気味なのは当の本人、イリヤだけである。

「死にたくない」と公言しつつつけてきたイリヤならば。意識がなくなると、「死んで」いようとも、その目的のために再生させることは可能なのかもしれない。

「そうだとしたら、イリヤにもまた実験させてもらいたいな。どう？クシエル？」

「ええ。その実証は必要だと思います」

女性の上官二名は、イリヤをそっちのけに、二人して実験の計画についての話題に花を咲かせ始めた。

そんな上官たちを眺めながら、エレンは、

「お前も大概だな」

イリヤにそう言った。すぐさま、イリヤから「お前が言うな」と否定の言葉が投げられたのは言うまでもない。

\*\*\*\*\*

再生能力の実験の協力、一日の行動から、イリヤは地下牢から自室での休息が許可された。

リヴァイ兵長とクシエル班長はまだ広間で「会議」と称した、ハンジ分隊長直々の巨人講座を受講中である。

エレンが現れてから。否、自身の不可思議な能力が露見してから、物事は多忙を極めている。

エレンの巨人化。イリヤの再生能力。  
裏切者クルト・ウエルナーが知るといふイリヤの能力。

しかしそればかりに気を取られてはいけな。次の壁外調査までは一か月を切っている。エレンを連れた試験運行的な小規模な調査とはいえ、自分はいざという時、この身を投げ出して彼を守れという任務を言いつかっている。

考えるべきは、調査のことだった。

「……俺の能力の意味なんて、考えてもわかんねえだろ」

なぜこの能力が自分にあるのか。それをどう使うべきなのか。その力を得た意味とは。

イリヤは首を振ってその考えを否定した。その問いかけは、能力の詳細すらわからないイリヤにとっては、深淵に近い答えのない問いだ。

自室へと続く廊下を歩きながら、古城の窓からのぞく空の白い月を見上げた。ほぼ満ちたその月も、壁外調査の頃には新月に近くなるのだろう。

ため息をついたとき、不意に、冷たく硬質な感触が、首筋に触れた。

「その意味、俺が教えてやってもいいぜ？イリヤ」

長身のイリヤより、さらに高い位置から落ちてきたその声は、渋くひしやがれた初老の男の声だった。

首につきつけられたそれが、ナイフだと悟ったのと、背後に立つ男の正体に気づいたのは、ほぼ同時だった。

「ケニー……」

「よう、久しぶりだな」

見えないはずの頭上の男が、にやりと道化のように笑ったのが、闇  
の中でもはつきりとわかった。

窓から差し込む銀色の月光に、深い黒みがかつた赤い血がぬたりと輝いている。はたた、とその色が古い石の廊下へと落ちる音が、静かな古城の夜に響いた。

イリヤはその赤を見ながら、巨人のように血は蒸発しないんだな、と他人事のように思った。

「はっ！こりや傑作だぜ。あつという間に治りやがった」

首をその鋭利なナイフでかき切った初老の男は、まるで子供のようにはしゃいだ声で笑った。

「……ケニー。なんだ。一体何の用なんだよ。お前」

「オイオイ、怒るんじやねえよ。いきなり切っちゃまって悪かったな。まあ、もう治っちゃまったし許してくれよ。なあ？」

「ケニー……」

振り返れば、男は口角を上げてにやにやと笑っていた。イリヤが幼い頃からよく見知っている、道化のように底の知れぬ笑みは変わらぬ。顔に刻まれた皺は記憶の中のそれよりも深く、多くなっていたが、その猛禽類をも想起させる瞳は以前よりも狡猾に光っていた。

「もう一度聞く。何の用なんだ。ここは兵団の施設だぞ。無断の侵入は、」

「おっと。面白みのねえ堅物みてえなことは言うなよ。俺はただ、あれだ。プライベートってやつだ」

「は？」

ケニーは頭に乗せた帽子を目深にかぶりなおして、イリヤにぐつと顔を近づけて、「お忍びってやつだ」とまるで内緒話でもするかのように囁いて笑った。

「レイスの屋敷にお前の行方不明通知が届いたがな。俺あ、きつとテメエのことだから生きてると踏んで、様子見に来てやったんだよ。優しいだろ？」

不敵に笑みを浮かべるその長身の男は、イリヤの世界の「異分子」である。使用人の一族の者たちとも、主人であるレイス家の貴族とも、その貴族の知り合いの金持ちたちとも、稀に出入りしていた憲兵達とも、男はどこまでも違う生き物だった。

主人の侍衛であつた男の異質さは、イリヤにとって畏怖の対象であると共に、侵しがたい憧憬の領域の者でもあつた。

その男が、今、何と言つたのか。

イリヤは耳の奥でケニーの言葉をひとつずつ反芻して、そしてひとつの答えに行き着いた。

「お前、俺のことを知ってるんだな？つてことは、俺のこれは、もつとガキの頃からのもんなのか？……あいつは……親父は知ってるのか？」

イリヤがすがりつくように、問いつめる。その姿に、ケニーの目か

ら猛禽類のような色は鳴りをひそめ、冷たく観察するような、それ  
いて奥の読めない影がさしたように見えた。

「俺やテメエの親父は、「知ってる」。だがそれだけだ。お前のそれを  
「理解してる」やつは……、もう、いねえ」

笑わずに、ケニーは言った。

「テメエの母ちゃんには俺の家族が世話になつたからな。少しは恩返  
しだ。教えてやるよ。俺が「知ってる」ことをな」

そのために来た。

男は、銀色の月光に当たらぬ影の中で、ナイフを遊びながら、そう  
言った。

\*\*\*\*\*

「どうかしましたか？リヴァイ兵長？」

不意に、懐かしい声が聞こえた気がして足をとめれば、後ろをつい  
てきていたクシエルの声が背中を軽く叩いた。

周囲にも、古城の外にも、人の気配はないように思う。それぞれの  
班員たちも皆、自室で休みをとっているはずだ。

振り返れば、余所余所しい言葉遣いの割に、心配そうにひそめられ  
た眉の女の顔があった。

「……いや。何でもない」

昨夜、勢いに任せて殴った左頬が痛々しく腫れている。その傷が両腕の火傷とあわせて、先程からひどく熱をもつて痛んでいるという理由で、ハンジの巨人談義から逃れてきたのはつい数分前のことだ。今頃は、ハンジの相手はいつも通り、モブリットが受けもっているだろう。あいつは、いつのまにか副官どころか、ハンジの飼い主か何かのように奴に付き添っている。その献身さはエルヴェインに対するクシエルのそれに似ていた。

「……悪かったな」

その痛々しく腫れた頬に、さすがに喉から言葉が漏れた。女はしばらく何を言われたのか分からないとでもいう風に見開いて白黒させていたが、「ああ」と少しだけにはかむように笑った。

頬が痛むのだろう。ひきつったその笑顔は、腫れ上がった顔とあわせて、非常に不細工だったが、それ故になかなか良かった。

「……あなたは、どう思う？あの子たちは、人類の「英雄」になれるかな？」

唐突にそう言ったクシエルは、窓の外に視線をやっていた。廊下から差し込む月の光は、冴えわたって、女の黒髪をなめらかに照らしている。

「なれるかどうかじゃねえだろう。あいつはらそう、ならなきやいけねえんだ」

「本物に」

「そうだ。俺たちみたいなの偽物の「英雄」じゃなくて、あいつらには「本物」になってもらわなきゃいけない。……なれなけりや、どっちみち人類は終わりだろう」

そう。

ただ単に生き残ることが得意な己と、事実の誤解によって英雄と称された女。俺たちは、象徴として「英雄」となった。用意された器はからっぽであったが、それでも俺たちは器としての役割を求められた。

その要望に応えるために、ひたすらに、必死こいて飛び回ってきたのが俺だ。

だが、どうだ。

いきなり現れた巨人のガキと、不死身のガキは、確かに人類存亡のカギを握る。その働き次第で、彼らは本物の「英雄」となるだろう。

俺たちは、そのガキで何もわかっていない幼い彼らに、情けなくすがりついて頼るしか生き残る道がないのだ。

「俺たちにできることは今、やれることをやるだけだ。命がある限りな」

無様な生き様だと、他の奴らが見れば笑うだろうか。

この壁の中の人類とやらが「英雄」と拝む男は、そんなものでしか

ない。ただの、人より少しだけ速く飛ぶことが出来るだけの、良い歳したおやじだ。

「報われるといいね。人類」

まるで他人事のように言った女は、蒼い夜の空を見上げていた。

あまり壁の中では見ないその黒い瞳は、月の裏側を見つめるかのよう、ここではないどこかを思っているように見えた。

\*\*\*

男が語った物語は、禁書の中にあるような少し危険で、でも100年以上前ではどこにでもあったのでは、と思わせるようなありきたりなおとぎ話であった。

多くのおとぎ話がそうであるように、むかしむかし、という決まり文句から、その物語は始まる。

むかしむかし。

とある国の王様の家来には、とても強い侍従と、とても思慮深い詩人がおりました。

侍従は誰よりも強い力を持ち、王様を守っていました。詩人は不死の力を持っておりました。その力で、王様の身代わりともなる「依代」として、王様を支えていました。

王様に危険が訪れたときは、詩人が「依代」となって王様の身代わりとなり、侍従が王様をその強い力で危険から守ってきました。

それは、もう何年も何年も繰り返されてきたことでした。

しかし、彼らは「巨人」をめぐる脅威には太刀打ちできませんでした。その脅威から逃れるため、107年前に王様たちは一族を引き連れて三重の壁を築きました。その壁の中で、王様は一時の平穩を守るために生きましたが、侍従はそれに反対しました。脅威には立ち向かわなければならぬ、と。結局、意見が対立した王様は侍従を追放しました。

友である侍従を失った詩人は、悲しみに暮れ、王様のもとを離れて行ってしまいました。

「そのなれの果てが、ツエランの一族だってわけだ」

ケニーが両手を広げて、子供にするように物語の終わりを告げた。見れば、聞き手であるイリヤは粗末な椅子の上で怪訝な表情をしていた。苛立っているのか、それとも困惑しているのか、その手がひっきりなしに机の上のペンをいじっていた。

「信じられねえってツラだな」

「そりゃ……そうだろ。何だよその話」

イリヤの手の中で、みしりとペンが軋んだ。

「それが本当だったとして……。結局、この能力を持つ一族であるツエラン家は、結局「脅威」に屈したんだろ？……そんなの。今のこの状況で……そんな役立たずの「詩人」なんて必要ねえだろ……」

頭を抱えた少年に、ケニーは「はあ？」とバカにしたように彼を嘲

笑った。ケニーからすれば、この少年は本当に甘っちょろいクソガキだったからだ。

「なんだテメエ。世界を救う「英雄」にでもなりたかったのかあ!?!」

黙したままのイリヤに、肯定ととったケニーは「こりや傑作だ!」とおかしそうに声をあげて両手を広げて笑った。

「今年一番の傑作だぜ! 何様だテメエは!?! 力にすがって、その力任せにでかいツラしようってのかよ!?! とんだフザけた野郎だな!」

「ケニー、静かにしろ……」

「その力がお前にあるのは、お前が選ばれたからだとても思ってたのか!?! その意味があるとしても? テメエはほんつっとお気楽なヤツだな。こりやあ脳みそもピンク色でもしてんじやねえか?」

「ケニー!! 黙れ!!!」

イリヤの声が、彼の狭い自室の中で乾いたように響いた。凶星をつかれて、声を荒げるとは、とんだクソガキだ、とケニーは心中で嘆息した。兵士になって少しはマシになったかと思っただが、少年はまだまだ変わらず大人たちに守られている子供のままだった。

「オイ、イリヤ。先輩である俺様が助言してやるよ。この世界は力だ! 何よりも力が強いもんが勝つ! それだけの単純な世界だ。だがよ、力はただ単に「在る」だけじゃどうにもなんねえらしいぜ。それを己の中で屈服させたヤツだけが強えんだ」

臭い息を吐き散らしながら、ケニーがイリヤに顔を近づけて大仰な

手振りで語る。まるで、それは道化のようだった。

「だが可哀想なことによお、誰もが奴隷なんだ。世界で一番強い王様だって、奴隷だったんだよ。女も、男も、ガキも全員な！」

誰も自由じゃなかった。

そう言った時のケニーの表情が、やけに悲しそうで、肩を落とした姿はまるで気弱な老人のようでもあったと、彼自身は知らない。イリヤは困惑したように、ケニーを見つめるばかりである。

栗色の髪と瞳は、少年の父親、つまりツエラン家の血を色濃く継いだ証だ。だが、その顔つきは、母親と似て一見大人しそうな風貌だ。性格も、あの頑固でどこか子供っぽく、理想主義な女と良く似ている、とケニーは過去を思い返してイリヤを見つめ返した。

「テメエの母親はいいオンナだった。地下街の娼婦にしておくのはもったいねえくらいだった」

狭い部屋の机のランタンがともす光に、ケニーのくたびれた長いコートが揺れていた。ケニーは、まるで自分の輪郭が夜の暗闇とにじんで溶けていくように感じた。

曖昧な感情が、彼を芯から揺さぶる。イリヤは何も言わずに、ケニーの言葉にじっと耳を傾けていた。母親の過去を一字一句聞き逃さんとするような姿勢だった。

「俺の家族が地下街で世話になった。同じ娼婦仲間だったよしみでらしいが……。俺は恩返しのためでやつを地上に案内して、ツエランの家に紹介したんだ。……。数年後、テメエが生まれたんだ」

ブロンドの、髪の毛長い女だった。特別器量好しというわけではなかったが、面倒見が良く、そして強情で意思の強い女だった。

ケニーは壁に背を預けたまま、ちらりと簡素で固そうなイリヤのベッドに視線をやった。そう。そのくらいの大きさだった。

彼の妹はそんな場所でガイコツのようにやせ細って死んでいった。幸せだったかなど、聞くまでもなかった。

闇の中から、あのとときの死臭が香り出てくるような気がして、ケニーは俯いて、その気配から逃げるように瞼を閉じた。

「地上の居住権は地下街の人間からすりや天国に行くより欲しいもんだ。……だが、結局、あいつはガキを生んで数年後にあっさりおっ死んじまった」

「……俺をかばって」

「そうだ。お前をかばって。母親って言ったって、女も人間だ。どの村でもテメエの命欲しさに子供を売っぱらうなんてよくある話だが……。お前の母親はそういう種類じゃなかったみてえだな」

妹を、そしてその忘れ形見の甥を、面倒を見ていたというその女は、結局のところ、幸せになれたのか。それはもう、ケニーの知るところではない。

ただ、彼はその女が自分の一人息子を「ツエランとレイスの血から守ってくれ」と言い残したそれだけを守ろうと思ったただけだった。

だが、こうして顔を合わせてみて、それがどうすればできるのか、ケニーには分からなくなった。イリヤは、その不可思議な力に呑み込ま

れて、ただ翻弄されているばかりである。それから救う術など、この兵団にいる以上、あり得ないようにケニーには思えた。

「俺あもう帰るわ」

「は!!?」

まあ、話すことは話せた、とケニーがあっさりと部屋を出ようとしたとき、イリヤの慌てたような声が追いかけてきた。

「おい、お前このタイミングで帰るのかよ!?!話は!?!」

「は?終わっただろ。もういいだろ」

「いやいやいやいや。俺はそんな昔話なんて聞きたかったわけじゃないぞ。俺はこの力の意味が、」

「まだそんなこと言ってるのかあ?」

ケニーはドアの方へと足を向けながら、右手で拳銃をかたどって、イリヤに銃口にあたる人差し指を向けた。

「テメエが自分の存在の意味を求めてんなら、そりや俺に聞くのはお門違いってもんだぜ。それはテメエが泥水すすつても見つけるもんだ。もしくは、そんなもんは、ハナっからねえか。どっちにしろ、さっさとしねえとあつという間に、自分の内臓の色見ながら死んじまうことになるぜ」

バキューン、とやけに楽しそうにイリヤに向けて拳銃を撃つそぶりをしたケニーは、

「テメエの大好きな母ちゃんも、大嫌いな父ちゃんも……、ウーリもお前が自由になれるようにその力のことは話さなかった。それでも知っちまったんなら、仕方ねえ。お前が決めて、自分で選べ。それで死んじまうなら、その程度のこった」

「え……？それって、」

「じゃあな」

来たとき同様、イリヤの都合もおかまいなしにドアから出ていこうとするが、あ、と忘れ物に気付いてケニーは振り返った。そこには、イリヤが口を大きく開けた間抜けな顔があった。どうやら制止の声をかけようとしたときに、突然ケニーが振り返ったので、声は行き場を失って呑み込まれてしまったのだろう。「大事なことを忘れてたぜ」と言いながら、そのガキ臭い顔つきに、思わずにやりと笑ってしまった。

「テメエの父ちゃんから伝言だ。死にたくなかったら帰ってこいだよ」

それだけ言い置いて、ケニーはイリヤの顔も、返事も聞くことなく、部屋をするりと出て行った。

\*\*\*\*\*

自分が生きていることに、何の意味もない。

しかし、その意味のない人生を豊かにすることはできる。それには、まあ、趣味が第一だ、とはケニーの口癖である。

ケニーには趣味とやらの大いなる夢がある。

その夢の道路に、どれだけ邪魔があろうと、殺しまくりに死体を積み上げる。ケニーはそんな人間だ。

そしてそんな人間をクソだとも思っている。

即ち、自分はクソ野郎だと。

ただ、その夢の道中には、この古臭い城に寄るなどなかったはずだった。ただ、それは彼の知己の女のためだけ、それだけだった。

「神様の真似事はやっぱ性に合わねえな」

女の残した約束は、実はケニーとの間のものではない。それは、ケニーの「友人」であった、あの神様と女の間で交わされたものだった。そしてそれを、あの「友人」がいなくなった今、勝手にケニーが受け継いで、なんとなく守りたくなった。そんな気まぐれな訪問であった。

ケニーがイリヤに話した昔話は虚構がある。それは、昔、彼の甥っ子に話したような、子供だましの寝物語に近い。

ツエランとは、確かに壁成立以前の著名な詩人の名であるが、それは本来のイリヤの一族の名ではない。

もちろん、ツエラン家と名乗る彼ら不死の一族は詩人ですらない。

だが、それがアツカーマンと並んで、王家の双翼としていたことは確かな事実である。それを誰が知らなかりとも、それは紛うことなき王家の記憶である。

ケニーはウソは言っていない。だが、また口を閉ざしただけだった。

ケニーは廊下を歩きながら、瞼を閉じた。その闇の中に、声が聞こえて足を止める。

「リヴァイ。ありがとう」

「ああ。おやすみ、クシエル」

「おやすみ」

男と女の声だった。ケニーは壁の陰にかくれて、その曲がり角の向こうにいるであろう人間の声に耳をそばだてた。

ドアの閉まる音が聞こえ、しばらくして、兵靴が床を叩く一人分の音が廊下を遠のいて行くのが聞こえた。男が女の部屋まで送った後、そのまま奥へと立ち去ったようである。

——こっちのクシエルはまだご存命らしい。

閉じた瞼の裏に、初めて口をつぐんだ日の、彼の妹——クシエルの死体と、甥のリヴァイの死体のように落ち窪んだ瞳が、浮かんでは消えていった。

もしかすると己は、あのブロンドの女に死んだ妹を、一人息子にあのチビの甥を重ねていたのかもしれない。

そういう思いに至ったとき、ケニーはなんだかおかしくなって笑ってしまった。廊下の奥へと消えていった人類の「英雄」、彼の誇りたる甥は、彼が仕込んだ通り、堪の鋭い男である。少しでも過剰な息をもらせば、あつという間にあの甥は自分を不審者として捕らえ、拷問でも加えて血祭りにあげるだろう。

それは避けなければ、とケニーは必死に笑いをこらえながら、急いでその場を去った。

名乗れない辛さと、たった一人の家族への愛しき。そしてその愛しさに身を浸すことの恐ろしさに、久しぶりにケニーは身を炙られた。

古城を囲む森まで出てきたとき、ケニーはようやく大きく笑い声をあげた。

まるで子供を心配する親のような真似事に、おかしくて仕方なかった。

それは、ケニーとイリヤの最後の邂逅の夜となった。

## 八章

### 女型の巨人

一

右翼索敵から、度重なる赤と黒の信煙弾が上がるのを確認して、配置から離脱した荷馬車護衛班六班は、最速力でその場から撤退を余儀なくされていた。

「班長!!まだ戦えます!右翼索敵がこのままでは壊滅してしまいます!!」

先頭に行く斑らの馬に乗る女に、イリヤは必死に叫んだ。身体中から大量の蒸気が上がっているが、その蒸気の下は無傷で完全に再生しきっていた。先ほど、四肢をバラバラにされたとは思えない回復能力だった。

「イリヤ!お前は十分よくやった!!俺たちの仕事を忘れるな!」

イリヤと並走して言ったのは、同じ班の先輩であった。黒く短い髪を刈り上げたゴーグルの兵士だ。頭から血が流れている。そんな怪我の様子が気になるが、それすらもその兵士は後回しにして、イリヤに声をかけつつづけていた。唇を噛み締めながら前を見れば、淡いハチミツ色の長髪の男と、漆黒の色の短い髪の女が先に行く。

彼らはイリヤたちを振り返ることなく、ただただ前を見て、馬をひたすらに駆けさせていた。

「バケモノめ!!ここで息の根とめてやる!!」

はるか背後で、置いてきた仲間たちの怒号が聞こえて振り返れば、平原の只中に立つそいつの顔が見えた。

金色の髪に、筋肉がむき出しになったピンク色の肌。

小ぶりながら形の良いふたつの乳房に、引き締まった尻は、女を思わせる形容だ。にもかかわらず、その体つきに魅惑すら覚ええないのは、そいつが規格外にでかいからではない。

「や、やめろおおおおお!!!」

断末魔が遠く。

そいつが踏みつけた仲間、昨日の夜に隣で酒を煽っていた男だったか。

女の形をとったそのバケモノは、右翼索敵の兵士たちのワイヤーをつかんで放り投げ、つかんでは放り投げていた。

緑の平原に、ゆらりと立つその14メートルもの巨体。その巨大な眼球が、イリヤたちをとらえたような気がして、立ち向かわねばという使命感よりも、生存に根ざした恐怖が体中を駆けめぐった。

「全速力で中央後方へ逃げ!!」

先を行くエーミールが叫んだ。先頭のクシエル班長が方向転換をしたのに続いて、彼らもまたそれに続く。方向をかえたその一瞬に見えた班長は、恐怖や憎しみとは違う、爛々とした光を抱いた瞳で、遠くで仲間たちを容赦なく潰している女型の巨人を見つめていた。

\*\*\*\*\*

イリヤたちが右翼索敵で女型の巨人と交戦したときより、時間は遡る。

そのとき、調査兵団の本部中央の広場では、まだ荷馬車班を中心とした数十名の兵士たちが準備に追われていた。

アニ・レオンハートは双翼の翼があしらわれた外套のフードを被ったまま、黙々と立体機動装置の点検にいそむふりをしていた。

どうやら何事もなく潜り込めたらしい。同期の調査兵たちが皆、すでに行軍の列へと並んでおり、広場にはいなかったのは運が良かった。さすがに、顔見知りに見られてはエレン・イエーガー捕獲の作戦が無に帰してしまう。

——約束してくれ。帰ってくるって。

故郷の父の声が耳の奥でしたような気がして、アニは首をふって立ち上がった。巨人化能力者であるエレン・イエーガーの捕獲。彼を連れ帰れば、彼女たちは任務途中とは言え、故郷に帰ることができる。全ては、これからのアニの働きにかかっている。

「アニ。良い子にしてろよ。ママの言うことよく聞くんぞぞ」

不意に呼ばれた自分の名前に、思わず肩を震わせておそるおそる振り返れば、どうやらそれは見送りに来ていた兵士の家族のようだった。アニ、と呼ばれたのは女の腕に抱かれている赤子だった。

「ミーアも、妹とママのこと、頼むぞ」

「うん！パパもお仕事頑張って！」

その父親らしき調査兵に抱きあげられているのは、その赤子の姉、まだ三つか四つほどの少女だった。

一般人がなぜ兵団施設まで見送りに来ているのか、と少し訝しんで見ていると、その女が夫である男にむかって右手をあげて敬礼を送った。その兵士の誓いの姿がやけに美しかったので、なるほど、とアニ

は頷く。おそらくは、その女は元調査兵というところなのだろう。

男が、敬礼を返しながらくしやりと笑った。

それは、今にも泣きそうな、情けないものだった。

「エーミール。そろそろ」

「はい。クシエル班長。今行きます。ナタリア。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

夫婦のそばに控えていた女性の調査兵は、上官だったらしい。彼女が男に声をかけると、その家族は手をふりあつて別れた。なんとも呆気のないものだ、と思いつながら広場の方へと足を向けようとしたとき、一瞬だけ、子供を抱いた女と目があつた。

バカバカしい、と踵を返して振り切つたのは、夫婦の別れだっただろうか。それとも、アニの中にある微妙な感情の揺れだろうか。

「バカバカしいったらないね」

もう一度、今度は口に出して呟いて、懐から銀色の指輪を取り出した。くるりと回せば、鋭い針が現れる。動作は問題ない。これがあれば、エレンのように指の付け根を噛みちぎるといふ労力なしに、容易に巨人化できる。パラディ島への出立前、これをたくした父の思いがどこにあつたのかはアニには知る由がない。

それが、巨人化の際の痛みを少しでも和らげたいとする親としての気遣いだったのか、それともどのような状況下においても、効率よく巨人化できるようにと考えられた名誉マーレ人を目指す父の功利的な思惑だったのか。

アニには、分からなかった。

その、立体機動装置の操作には邪魔にしかならない指輪を人差し指にはめて、目立たぬように荷馬車の荷物が置かれた広場の影に足を向けた。

「毎回、毎回、こんときはたまりませんねえ。俺、泣いちゃいそうです」

「ナタリアはとても優秀な……いや、違うな。なんだろ、すごい？ 奥さんだよね」

人がいないと思ったその柱の陰には、数人の兵士がいた。気づかれぬよう、さりげなくその近くに足を運ぶ。死に急ぎ野郎たちの身の上話を聞く趣味はなかったが、そこに足を向けたのはわけがある。

「ナタリアには頭が上がらないな。君の家族には悪いようにはしないから」

「頼みますよ、団長。ナタリアは団長の元部下ですしね！ あ、いや……でも、未亡人になっても手え出してもらっちゃ困りますよ!!」

「エーミールでもあるまいし、この堅物がそんな真似するかよ」

そこにいたのが、調査兵団団長エルヴィン・スミスとリヴァイ兵士長だったからだ。エレンを伴っての壁外調査。その計画内容などが伺えれば、アニの仕事もしやすくなると踏んで近づいたが、彼らは気さくに、エーミールという男性兵士と、その上官であるクシエルという女性兵士と死んだ後の話ばかりをしている。

先ほどの父親。エーミールという兵士は、どうやら死ぬらしい。

「クシエル。エーミール」

団長の声に、呼ばれた二人が敬礼を返す。

「君たちには苦勞をかけるが……」

「そんなことはありません。命令してください、団長」

屈託無く笑って言ったのは女だ。それに答えて、エルヴィン・スミスの硬くて低い声が非常な命令を下したのが、アニの耳を貫いた。

「人類のために死んでくれ。頼むぞ、二人とも」

「ハッ!!」

ちらりと、柱の陰から二名の兵士の顔をのぞいたら、その顔には晴れ晴れとした表情がのついていた。男の方も、先ほど妻に見せていたものとは思えないほど精悍な顔つきをしている。

死ねと言われて死ねる人間とは、想像を絶する。そんな命令をされて、どうしてその顔ができるのか。何をすれば、自分の命をそうも投げ出すことができるのか。「人類」とは一体、彼らにとってなんなのか。

アニは嫌気がさして、その場をひっそりと後にした。

——帰ろう。俺たちの故郷へ。

約束した。この島に来たときに。それも、ほとんど死にものぐるいの真つ黒な約束だ。死にたくない。その一心で、三年間も兵士ごっこを勤め上げた。でももうそれも、終わりが近い。

ここで私たちは何を切り捨てても帰るのだ。生き残るために。誰のためでなくても。

それが、どれほど利己的なわがままだったとしても。この壁の中の

人間を何人殺しても帰るのだ。

アニが顔を上げれば、自由を象徴するという翼の背中がいくつも見えた。三年間を共にしたあの「友人」たちもまた、これを背負っているのだろう。

でも、己はこの「悪魔の末裔」を殺して帰るのだ。

そして、きつとその人殺しは「英雄」になる。あの海の向こうで。

人差し指にはめた銀色の指輪に触れながら、アニは振り返った。

そこにはまだ、兵士の妻が子供を抱いて立っていた。

それは、第57回壁外調査の出立の朝だった。アニがエレン捕獲のために、調査兵団を奇襲する、数時間前のことである。

\*\*\*\*\*

「女型の奇行種が出た。右翼索敵。陣形はそのまま進行だ」

落ち着いた声で、クシエル班長はリヴァイ兵士長率いる特別作戦班へとその情報を告げた。イリヤたち荷馬車護衛班六班が、その機動力を活かして作戦通り、異常のあったと思われる初列あたりの右翼索敵へとむかって得た情報だ。

クシエル班五名は、その巨人の急襲をイリヤの機転でかろうじて乗り切つて、仲間を見捨てて後衛まで下がって来たところである。どれもこれも異常事態発生時の予定通りの行動だ。

兵団随一の速力と脚力を持つ馬を操る班。それがクシエル班である。壁内にいるときは、文献研究と、仲間の監視が主たる任務である

が、一度壁外に出れば、クシエル班はその機動力を活かして、縦横無尽に陣形内を走り回る任務が多い。それは、特に司令班の補佐としてつきしたが、異常発生時は、伝達を担うことが多いからでらる。クシエル班の馬の利点と、エルヴィン団長の意図をよく理解しているクシエル副官だからこそ任される動きであった。

このときも、荷馬車護衛の任についていたクシエル班は、右翼索敵から何度もあがる黒と赤の煙弾を確認して、陣形内を行ったり来たりしたところだった。

「このまま進むのか」

「ええ。陣形に変更はありません」

リヴァイ兵長の短い問いに、すみやかにクシエル班長が答えた。仲間を見捨ててきた割には、その表情には一切の変化はないように見えた。むしろ、全速力で馬をかけさせていたとも思えないほど、汗のひとつものにじませていない涼やかな表情だった。

「報告します!!口頭伝達です!!」

並走するリヴァイ班とクシエル班へ、右側から連絡兵が来て、班員たちの空気に、さらに緊張が走った。

「右翼索敵、壊滅的打撃!!一部索敵機能せず!以上の伝達を左に回してください!!」

イリヤたちが右翼索敵から離脱してそう時間も経過していない。つまり、イリヤたちが離脱してすぐ、彼らは壊滅したということになる。

衝撃に息をのんだイリヤの隣で、エレンもまた、絶望的な表情でそ

の伝達を聞いていた。しかし、リヴァイ班も、クシエル班も、班員たちは顔色を変えはしない。

「聞いたかペトラ。行けー」

「はいー」

馬を翻して、リヴァイ班のペトラ・ラルが伝達のためにその場を離れる。

「イリヤ」

その後ろ姿を見送りながら、上半身を浮かせていたイリヤに声をかけたのは、そのリヴァイ兵長だった。アイスブルーの薄い瞳が、睨みつけるように振り返ってイリヤを見つめていた。

「守る相手を見誤るなよ。お前はお前の仕事をしろ」

その言葉に、ちら、とクシエル班長が反応して、イリヤを振り返った。

先ほどの伝達が正しければ、イリヤがその身を呈して守った右翼索敵班の兵士は、死んだことになる。

もうすっかり再生しきった手で、手綱を握り直した。

\*\*\*\*\*

「見誤るな。イリヤ」

珍しく感情がのったその声に、イリヤは身を固くした。怒りが滲ん

でいるようなその声色が、激しい雨音を響かせる静かな礼拝堂のなかでおそろしく近くで聞こえた。

兵団全体における、陣形訓練の最中であった。

突然の強い雨に打たれて、行軍は近くの古い城跡に避難し、そのまま雨が弱くなるまで待機命令が下されたところである。イリヤは、その命令に従って、先輩方の休むのを確認してから、上官に報告しようとしていた。

その上官が、古城の礼拝堂と思わしき場所で地面をはいつくばるようにはしていたのを見て、「みつともない」と怒ったときだった。

その女性の上官以外、誰もいないはずの礼拝堂には、その兵士長もいたようだった。彼にいつのまにか後ろをとられて、すぐ近くで囁かれたとなったら、調査兵二年目のイリヤは身をすくませるしかなかった。

「り、リヴアイへいちよ、」

「アレは放っておけ」

細められたその視線の先では、イリヤの制止の声も聞かなかった黒髪短髪の女性が四つん這いになって、礼拝堂の床を調べていた。雨で濡れた兵服に、砂と埃まみれの床の汚れがつくのもおかまいなしである。

女はふと立ち上がると、今度はメモを取り出して天井に描かれた巨大な絵画を見上げながら、何やら書き出している。

「しかし兵長。あんな姿、他の兵士に見られるのは……。第一今は休息時間です。あの人が休まないと部下が休めません」

「放っておけ」

そのまま、リヴァイ兵長は、ため息をつきながら、礼拝堂の椅子へと腰をかけた。背もたれに片手をつきながら、気だるそうにその女性が一心不乱にあたりを調査しているのを見つめていた。

「ああなればもう声も届かん」

「はあ……」

そういえば、ハンジ分隊長も古城の内部にあつた書齋に閉じこもってしまつたと、副官のモブリットが言っていたことを思い出す。壁内には、こうした古い遺跡が点在している。その多くは、壁成立以前の古い文明のもので、多くは謎に満ちた文字と絵によつて構成されているという。

「見誤るなよ。アレは、兵団にとつても欠かせないもんだ」

「え?」

先ほど言われたことと同じ言葉に、イリヤはリヴァイを振り返つた。相変わらずそのアイスブルーの瞳は、一途に女を見つめている。

「アレは病気のようなもんだ。アレがなけりやあいつは普通の兵士だが……。あの知識欲は底がねえ。それこそ、ハンジやエルヴィンの比じゃない」

「え?どういう意味ですか?」

「あいつが、壁の外から来たこと、聞いただろ?」

初めて、そのアイスブルーがイリヤを見つめてきた。しかしあれ

は、単なる戯言ではないのか。そう問い返せば、「わからない」と妙な答えがかえってきた。

「だが、あれは壁の中の記憶がない。兵団に入るまでの記憶が欠けてやがる。おまけに奴がエルヴィンに拾われたのは、壁の外だ」

「……は、初耳なんですが……」

エルヴィン団長に拾われた？記憶がない？いや、そもそも壁の外に？

常識はずれの言葉の羅列に、イリヤが動揺すれば、リヴァイ兵長は「機密情報だ」とこともなげに言った。彼が見上げた天井には、昔の「宗教」とやらで語られた、死後の世界が描かれている。善人が行ける「天国」と悪人が堕ちる「地獄」という場所だ。

「あいつはその欠けた記憶とやらを取り戻すために、ああやって壁内にはないものを必死にかき集めてる。壁の外に出るのもそのためだ。壁内の本を読み漁って、壁外へ出て死にかけて、それで自分の中にある「違和感」とやらの正体をつきつめようとしているらしい」

だから、と言う兵長の声が静かに響く。雨音だけがやけにうるさい。

「あいつが調査兵をやってるのは、本当は「人類」のためでも何でもねえのかもしれない。単に自分のためだけに、あいつはああしてるのかもしれない」

「はは……。それは、「機密情報」ですね。……戦女神の英雄がそんなだと、皆が怒りますよ」

「だろうな。だから、あいつは「英雄」なんかじゃねえんだ」

利己的な願望だけで部下を死地に向かわせる者がいたとしたら、それはどんな悪魔だろうか。

それは、「人類」だけでなく、仲間への最大の裏切りではないのか。

イリヤは上官であるその女性の後ろ姿を見つめる。みつともないほどシャツとパンツを汚している彼女は、イリヤたちを認識しているかどうかとも怪しい。礼拝堂の大きさを今度は測り出しているようだった。その目に、爛々とした光が満ちている。

彼女のそれが、リヴァイ兵長の言うように、彼女のためだけのものだったのなら、きっとそれは「地獄」へ堕ちるほどの裏切りだ。

「だが、見誤るな。アレは俺たち調査兵团にとっては必要だ。あいつの視点は他のやつとは違う。その全てはあのキチガイじみた知識欲からくるものだ。それは否定できん。いずれお前もわかる時がくる。あいつの必要性にな」

偽物だという英雄の女を見ながら、もう一人の英雄が言った。

人類最強の男。彼こそは兵团の、そして人類の英雄だった。その英雄が、こうして自分のためにしか生きていないという女を許すのは何だか意外だった。

「兵長はどうなんですか？」

「あ？」

「兵長は、どうして調査兵团に？あの人みたいに、自分のためなんです

か？」

誰よりも献身的に身を捧げている兵長ならば、それは「天国」行きだろう。世辞ではなく、本音でそう言ったが、その英雄は鼻で笑うだけだった。

「そんな死後の世界なんざ知らねえがな。……もしあったとしても、俺はどちらかに行けるような大層な人間じゃない」

その英雄が、女の背中を見て、そして思案するように少し唸った後、「今、俺は「地獄」行きになるために健気に働いているところだ」と呟いた。

そのアイスブルーの瞳が、すう、と細められた。

古城の礼拝堂の屋根に、打ち付けるような雨音が響く。

そのただっ広い空間を上から圧迫するように、その天井一面は巨大な絵画で満たされていた。100年以上も前の文明の証であるそれは、一方は光溢れる「天国」を、もう一方は暗い闇に支配され、悶え苦しむ人々が沈殿する「地獄」が描かれている。

クマのひどい目を上げて、その上官は「俺は「地獄」とやらに墮ちるために懸命に働いている」と呟いた。

まさか、と乾いた笑いを返したイリヤに、人類最強の名をほしいままにしているその英雄は鼻で笑うだけだった。

「俺は、兵長のような「英雄」になりたかったんです」

空を誰よりも高く、速く飛ぶその姿に、憧れない調査兵はいない。イリヤもまた、調査兵団に入団してすぐに、その魅力に虜になった一人である。

彼の潔癖で近寄りがたい粗暴な性格は、世間で言われる「英雄」像とは程遠かったが、その異質さもまた、人を魅了してやまないものでもあった。それほど力を持ちながらも、何故か自分の力を卑下するようなところも、実力者であるにもかかわらず、団長へと寄せる信頼感も、全てがイリヤにとっては憧れだった。その小柄な体格すら、羨望の的になるのだから、憧れとはまさに盲目的であると、イリヤもさすがに自覚している。

「俺は、内地にある実家が嫌で仕方ありませんでした。つまらない常識ばかり重んじるところで……。俺はこんなところで平凡に死に

たくないってずっと思っていました。だから調査兵団に入って、一旗あげてやるんだって思ってたんです」

イリヤは、生存率の著しく低い兵団を志望しておきながら、死ぬつもりなどなかったのだ。そこにあっただのは、子供じみた虚栄心だけだったのかもしれない。それは、まさに目の前の生きる「英雄」によって、夢物語に終わらずに育てられていったのだ。イリヤの兵士としての実技的能力が高かったのも、その高いプライドから出る夢を見せ続けるのに一役買った。

そんな彼にとって、自分の再生する能力は、混乱だけをもたらしたものではなかった。その所以と意味を知れば、自分もまた「英雄」になれるのでは、と夢を見たのだ。

「でも、この能力には意味がありません。俺はただの出来損ないです。エレンのように巨人化して戦うこともできないし、あんな覚悟を決めることもできない……。中途半端な出来損ないだったんです」

「まあ、お前は確かに中途半端だな」

イリヤの呟きを、まるで興味もなさそうに聞いていたリヴァイ兵長が、ようやく口を開いた。見れば、いつのまにかイリヤの上官の女性の姿はなくなっている。しかし、兵長は話を中断させるつもりはないようだった。

「俺が兵団にいる理由なんて、他のやつらとそう変わらない。ただ、俺は「英雄」なんて器でもない、ただ生き残ることが他より上手いだけの兵士だ」

「謙遜です。誰もそうは思っていないですよ」

「ああそうだ。誰も俺を「ただの兵士」だと思ってない。だから、俺は

それに応えるためにいる」

アイスブルーの細い瞳が、まっすぐにイリヤを見上げてきて、背筋が伸びる。やけに眼光が強いのは、この上官の特徴だ。

「この奴らは皆、暑苦しいほど「人類」のためになんてご大層な大義のために戦ってる。俺はそれが悪くないと思った。しかもこの両手はどうやら巨人殺しには向いてるらしい。他に特技もねえクソみたいな人間だが……、ここでは出来ることがある。だからやっている。それだけだ」

大層な理由など自分のような人間にはない、と言い切った上官の青白い顔に、礼拝堂のガラスの天窓から差し込むわずかな虹色の光が差し込んだ。

いつしか、雨音が遠のいている。色とりどりのガラスをはめこんだその天窓の光に、小柄な兵士長は、眩しそうに目を細めた。

その姿は、まるで神に懺悔する矮小な人間のように、それでいて、とても敬虔な信徒のようにも見えた。

「イリヤ。お前は何のためにここにいる？」

実際のところ、神など信じてなどいないであろう兵士長が問うてきた。

「俺は……」

「お前は死にたくないし、死なせたくないなどと言いやがった甘ったれだ」

「は……」

「なら、中途半端な甘ったれらしく、それを守れ」

咎められるのかと思った矢先の言葉に、思わず顔を上げる。兵士長は立ち上がって、尻の埃をはらって舌打ちした。懐のハンカチを取り出して、手を拭こうとして、そのハンカチも雨で濡れているのに気づいて、哀れにも、苛だたしい表情を一瞬見せた。

「お前がそうありたいと願うなら、死ぬ気でやってみろ。俺やクシエルを黙らせるくらい本気でな。……お前の、「それ」は、そのためのものじゃねえのか？」

「え……」

「再生できるなんてそりや気味悪いことには違いないが……。俺は、ずっとそんな、」

「兵長？」

珍しく歯切れの悪い上官は、しかしその先を言葉にすることはなかった。さつさと彼は礼拝堂の入り口に向かい、「あの野郎、また勝手にどっか行きやがった」と、消えた女性の部下に悪態をついて、イリヤを振り返った。

「オイ。どうなんだ。やるのか、やらねえのか」

問われて、その上官が、自分に兵団への在籍の如何を問うているのだと初めて理解した。問うた上官の影はやはり小さい。イリヤは、一歩踏み出して、答えを口にした。

\*\*\*

馬ごと兵士を蹴り上げた瞬間、視界の隅にふたつの小さな影が迫るのが入った。それが立体機動をつけた兵士だと察知して、体を浮かせてそのワイヤーの軌道を狂わせる。叫び声と共に一名、躍り出てきたのを右拳で叩きつけ、左側から刃を振り抜いてきた一名をつかみあげた。

ア二は、ライナーとベルトルトの密告通り、エレンが配置されているという右翼索敵を襲っていた。兵士たちの顔を確認しながら、それをひとつひとつ潰していく。

やはりというべきか、調査兵団の兵士たちは訓練兵とは比べものにならないほど、練度が高い上に度胸もある。何人が殺してしまえば、立ち向かつては来ないだろうと踏んでいたが、彼らは何人殺しても、次々に立ち向かってくる。

恐ろしいほどの勇氣と行動力だ。一人一人を潰すのは虫を殺すのに等しく、造作もない。

しかし、それが幾重にも重なれば、邪魔なことには違いはなかった。思いの外、時間を食っている。まだエレンは見つけられていない。初列を潰すだけで、こうも時間がかかるとはア二の想定外であった。

「こつちだバケモノ！」

思考していた隙に、新たな兵士が一人、左手首の腱を削いできた。その急な襲撃に、思わず左手の中に握りしめていた先ほどの一名を取りこぼす。

煩わしいその兵士を捕まえようと手を振り上げたが、予想外にその兵士が顔めがけて飛び込んできたので、一瞬反応が鈍る。その隙に、取りこぼした兵士を保護して、退却しようとする兵士たちが足元で右往左往しているのが見えた。

足元でたむろする数人を一気に潰そうと、手を上げれば、再び顔をめがけてとびこんできた兵士が、今度は左耳を削いできた。

急所を狙っていないのか、狙うほどの技量もないのか。しかしその兵士の飛び方に、あの同期の「死に急ぎ野郎」を想起させて、アニは手をとめた。

「早く！今のうちに逃げてください！」

「イリヤ！あなたも早く撤退しなさい!!」

「死に急ぎ」な兵士は、どうやらエレンではないらしい。彼が囷になることで、数人の索敵班と思われる兵士がその場を離脱していた。また数名、彼を見捨てられないのか、近くで残っている兵士もいる。

目標のエレン・イエーガーではない。そう分かるや否や、アニは煩わしく飛び回るハエのようなその兵士を右手で勢いよく地面に叩きつけた。

「イリヤ!!」

「クシエル副官！ここを離脱してください！こいつは、俺たちが!!」

一旦離脱したはずの兵士たちが、そろって戻ってくるのが見えた。なぜ、こうもこの兵団の兵士たちは戦い続けるのだろうか。

アニは、その思考を閉じた。考えていては、もう殺せなくなるのは承知の上だったのだ。

彼女は、長く兵士ごっこを演じすぎた。

「クシエル班長！」

足元から声が聞こえて、アンカーが巻き上げられる音がアニの耳に

も届いた。見れば、それは先ほど潰したはずの兵士だった。

その体から、大量の蒸気が濛々と上がっている。その蒸気が、自分たち巨人のものと同じである。と一目見てわかった。兵士を潰したはずの手のひらを見れば、一面に赤い血が咲いている。間違いない。狙い変わらず、あのハエのような兵士は叩き潰したはずなのだ。

「イリヤ！よくやった！離脱する!!」

「しかし！」

「イリヤ！班長の指示に従え！索敵班の命を無駄にするな!!」

叩き潰したはずの兵士が、体から蒸気をあげて生き延びている。その事実、アニはひと月ほど前に先に海の方こうに帰ったであろう、クルト・ウエルナーの言葉を思い出した。

——あの「出来損ない」の一族がいる。

巨人科学の研究の副産物。

王家の伝承でしか伝わっていない、眉唾もの一族だ。しかし、あのアッカーマン一族とも思われる同期の存在。それに、今日の前で起こっている事実、アニは確信した。この壁の中には、伝説が息づいている。

——でも、こんな聞いてない。

無我夢中で遠のいていくその兵士に手を伸ばしたが、右翼索敵の兵士たちが一斉にそれを邪魔する。

「出来損ない」の一族。だが、それは、単に再生能力があるというだけ

だったはずだ。致命傷を負ってまで蘇生するような能力など。ましてや、あんな一瞬で致命傷を再生できるような能力など、聞いたことがない。

その中途半端な再生能力ゆえに、戦闘にも利用しづらい「出来損ない」だったはずだ。

困惑の中、アニが周囲の兵士を一掃できた時には、すでにその「出来損ない」は、遙か遠くに数人の兵士たちと走り去ってしまっていた。

\*\*\*

その女型の巨人の姿が見えなくなった時、イリヤたちは、班長のクシエルの指示のもと、負傷した兵士の手当のために一度馬を止めた。

「血は出ていますが、傷は深くないみたいです。これなら、まだ大丈夫です」

「イリヤ……。すまない。お前が盾になってくれたから……」

「いえ……」

ゴーグルを外して、その黒髪の男性兵士がイリヤに礼を述べた。彼もまた、長くクシエル班に所属する兵士だ。彼ら五名の班員は、右翼索敵へ向かってあの巨人と交戦した。結果、一名の班員を失ったが、イリヤが身を呈したおかげで、瓦解は免れた。

「お前、確かに潰されたと思ったが……あの蒸気は一体……。お前、」

「イヴオ。悪いが詳しく説明している暇はない。が、これがイリヤが私たちの班に配属された理由だ。彼の力は、エレンを守るためにある。「人類の盾」として……」

イヴオ、と呼ばれたその負傷兵の戸惑いを制したのはクシエル班長である。彼女が「生きて帰れたら、必ず説明する」という言葉に、その兵士は困惑を追いやって、「はい」と強く頷いた。そのやりとりに、彼らの長い兵務から培われた信頼関係がうかがえた。

「あと、イリヤ。よく頑張ったと言いたいところだが、あまり無理はしてくれないよ」

手当を終えて立ち上がったイリヤに、クシエル班長が困ったように言った。

「あなたのおかげで私たちは助かったけど……。あなたはこの中では一番命の優先順位が高いんだ。これからは、自分の命を守ることを頭に入れて動いてくれ。あなたが身を呈してその力を使うときは、エレンの命が危うくなった時だ」

わかったね、と念を押す上官に、イリヤは拳を握りしめた。不意に、一週間ほど前の兵長の言葉が脳裏をよぎる。

「俺は、守られてばかりは御免です」

「え？」

「……あなたは、弱いただの人間だ。だから、」

「だから、あんたが身を呈して守るっていうの？ 自惚れも大概にしろ。あんたのその能力はまだほとんどわかっていないんだ。エレンと同

じでね。それに兵团として頼るわけにはいかない。自分の仕事のことだけ考えてなさい」

「守ります!!」

喉から出した声は、予想外に大きな響きをもってあたりの草原に響いた。驚いたのはイリヤだけではない。言われたクシエル班長も、目を丸めており、離れた場所で監視をしていたエーミールもまた、その大きな声に振り返っていた。

「俺はエレンも、班員も守ります！守ってみせてやる！だから!!」

自分が何を言っているのか。イリヤは分かっている。こんなワガママに近い戯言は、また彼女の逆鱗に触れるかもしれない。今度こそ、その隠し持っている小銃で頭をブチ抜かれるかもしれない。

でも、子供じみていようが、イリヤにはそれしかできなかつた。

大人しく、守られて、意味ばかりを求めているだけではいられなかつた。

「あんたはせいぜい大人しく見てればいいんです！俺がこの班も、エレンも何度死んだって守ってやるから!!死ぬことに美徳なんて見出してんじやねえよ!!この、」

イリヤの言葉に、そばにいた黒髪の負傷兵がおい、と止めに入るのを振り払って、渾身の力で彼は上官に怒鳴った。

「この英雄気取りの勘違い野郎め!!」

その言葉に、上官が黒くて大きな瞳を、さらに大きく見開いて、息を飲んだのがわかつた。

\*\*\*

「背後より増援！」

「兵長！指示を！！」

後方で仲間たちの叫び声がこだまする。穏やかな木漏れ日をこぼす巨大樹の森で、恐怖は皆の心を完全に侵食していた。

エレンを指指して迫る女型の巨人が、すぐ背後まで迫っている。イリヤたちがリヴァイ班と合流し、巨大樹の森へと進入してからすぐのことだった。

イリヤたちクシエル班は、リヴァイ班の後ろに控えてその追跡から逃れて一心不乱に馬をかけさせていた。

「お前ら、耳を閉じろ」

静かな、しかしよく通る声で振り返って指示したのは、先頭をいくリヴァイ兵長である。その指示に耳を塞げば、彼が右手を高らかにあげて音響弾を放った。

「お前らの仕事はなんだ。その時々感情に身を任せるだけか。そうじゃなかったはずだ。この班の使命は、そのクソガキに傷一つつけないよう、尽くすことだ。命の限り」

イリヤの前で走るエレンが、戸惑いを隠せていないのが背後からでもはつきりとわかった。しかし、彼を守るリヴァイ班は、先ほどまでの狼狽を追いやって、冷静さを取り戻したようだった。兵長がこのまま馬でかけるよう指示を出せば、それぞれ「了解」の強い合図を送った。

「かけるって一体どこまで……。それに、奴がもうすぐそこまで」

振り返ったエレンの顔が引きつった。その様子に、その後ろを走っているクシエル班長も、背後を振り返る。

数名の兵士が、女型へと刃を向けて行く様子が見えた。

「また……。増援です！早く援護しなければ、またやられます!!」

「エレン！前を向け！」

「グンタさん!!」

「歩調を乱すな！最高速度を保て！」

「エルドさん!?なぜ!!?リヴァイ班がやらなくて、誰があいつを止められるんですか?!」

エレンの戸惑いは正しく、彼らの背後で増援の兵士たちが悲鳴をあげて次々になぎ倒されていく。まるで、虫けらのように。

「荷馬車護衛班！援護用意!!」

その瞬間、叫んだのは、リヴァイ班のあとにしていたクシエル班長だった。彼女は背後の増援の様子を見ながら、身を起こして立体機動装置のグリップを構えている。その声に、エーミールやイヴオもま

た、身を起こす。彼女が一声あげれば、彼らはアンカーを放って女型へと向かっていく姿勢だ。

「イリヤー」

エーミールが叫ぶ。は、とグリップを握り直したイリヤが前を向いた時、エレンの戸惑う表情と目があった。

「イリヤー！やめろ!!」

巨人になれるその少年兵が悲壮に叫ぶ。行くな。そんな生意気な後輩の表情に、イリヤは息を詰めた。

「荷馬車護衛班！どうか！どうか、ここで死んでくれ!!」

クシエル班長が放った言葉は、命令ではなく、懇願だった。

顔を伏せて班員を振り返ることなく放たれたその悲壮な懇願に、エーミールとイヴォが強く頷く。そんな、とイリヤが彼女を見た時、その顔は穏やかに、否、どこか楽しそうに笑っていた。

「リヴァイ」

打って変わった静かな声であったが、それでも届いたようでリヴァイ兵長が振り返る。

「あとは頼む」

班長のその静かな声に、「……了解だ」と頷いた兵長の表情は、常と変わらない。

しかし、その視線が一心に彼女に注がれているのに、イリヤは気づいてしまった。

——ああ、やっぱり。やっぱりあんた間違ってるよ、リヴァイ兵長。  
あんたたちは、何故死ねるのか。何故、死ぬために生きていけるのか。大切なものを切り捨てて、そこに何が残るのか。「人類」の幸福を願うあんたたちの思い描く未来には、あんたたち自身の幸福はあるのか。

イリヤは悪態をつきながら、刃を構えた。

「荷馬車護衛班！何としてもエレンを守れ！！女型の巨人を足止めしろ！！」

鬼気迫る班長の指示に、先輩方の低い声が応える。

ふざけるなよ、この勘違い野郎め。

イリヤは約束を思い出す。それは、リヴァイ兵長との、そして自身との約束だ。

守ってみせる。何度死んだって。この人たちを、勘違いの英雄にさせたままに終わらせるものか。

クシエルがアンカーを放ったのを皮切りに、続いてイヴオとエーミールも馬を離脱する。

「なあおいエレンー！」

最後に残ったイリヤは、やめろと情けなく叫ぶエレンに怒鳴った。

「お前ー間違うなよ！！頼むぞおい！！」

そして、アンカーを背後の巨大樹めがけて放った。

異能の力をもった少年兵たちは、そろって頑固で、そろって甘いクソガキだ。

それが、リヴァイが抱いた二名の能力者の印象だ。エレン・イエーガー、そしてイリヤ・ツエラン。このクソガキたちに人類の未来を託さなければならぬほど、調査兵団にはもう手がなかった。

しかしそのうちの一名は、その甘さと頑固さ故に、調査兵にはとことん向かない人間でもあった。なぜ調査兵団を志望したのか、正直全く理解できなかったが、先ほど、礼拝堂で聞いた話でなんとなく察した。

要は、思った以上にこのイリヤという男はクソガキだったということだ。だが、現状を嘆いてガキさながらにもがく様は、大人しく諦めるような人間よりも幾分、リヴァイの目にはマシに見えた。

「エルヴィン。イリヤだ」

陣形訓練の一旦中止を指示したその上官の名を呼べば、その金色の指揮官は、ん？と碧眼を丸めて振り返った。副官の一人もつけずに、古城で一番高い塔にひきこもるとは、この上官も困ったものだ、と心中で嘆息する。

何をしているのか問えば、ここからは良く壁内が見えると子供のよう嬉しそうにその男は返してきた。

「ここは戦時での監視棟の役割を果たしていたんだろう。ほら、見えるかリヴァイ。ここからは四方がよく見える。特に、あれだ。シーナ内地の方角。ここは王政と戦うことになったとき、良い拠点になるだろうな」

「オイオイ。不穏な発言は控えろよ団長様。タダでさえ、エレンの件

で王政から警戒されてるって時に」

「何。問題ないさ。聞いてるのはお前と」

ようやく振り返った男が、笑いながらそいつの名を呼んだ。

「イリヤだけだろ」

その邪気のない信頼感にむず痒くなりながら、それすらもこいつの人心掌握術か、とも疑いながら、リヴァイは「お前が呼んだんだ。連れてきてやったぞ」と困惑するイリヤの背中を押した。

敬礼して団長に向かうイリヤは、まるで真面目な新兵だ。その態度に、自分を含めて、こいつの近くにいる上官は少し舐められてきているのではないか、と思った。少なくとも、彼の直属の上官であるクシエルと団長への態度が違いすぎる。躰は必要か、とリヴァイは不穏な思考にひたりかけた。

「すまない。そう緊張しないでくれたまえ。君は古城勤務だからね、そうそう会って話す機会がなかったから。この休息時間を良い機会だと思って呼ばせてもらった。すまないね」

「いいえ。滅相ありません。用件とは、一体……」

エルヴィンは、怖がらせまいとしてか、やけに優しく柔和に笑いかけた。先ほどまで、鬼の形相で指揮をとっていた者とは同一人物には見えない。

「君のお父上から手紙が来ていてね。君が行方不明ならば、遺品をひとつでも返して欲しいという旨と、そして生きているならば、帰ってくるようにとの」

「父から」

「ああ。それと、君の意志を聞かせてもらいに呼んだんだ」

塔の外で降る雨が、再び強くなるのを聞きながら、リヴァイは腕を組みながらその話を聞いていた。

「君の上官から、君の除隊、もしくは異動の願いが出ていることは知っているね？」

「はい……」

「その意志を、聞かせてほしい」

リヴァイからすれば、そんなもの、言い聞かせて従わせれば良いだけだとも思う。しかし、それはどうやらエルヴィンのやり方ではないらしい。もしイリヤが脱退を願い出たらどうするのか。せつかくの力をみすみす手放すことになるというのに。

それを一度言った時は、「だめだ」と一蹴されてしまった。何か、考えるところがあるのだろうか、とリヴァイは計り知れない男の脳内を思う。

「俺は、今のままで結構です。クシエル副官のもとで、働かせてください」

「いいのかい？君はあまりクシエルをよく思っていないようだが」

「……俺は、あの人を……」

口を噤んだイリヤに、リヴァイは後ろから蹴りを入れてやる。さつき言っただろう、と何度もその尻を蹴ってやれば、「うう」とためら

いながらイリヤは団長へと本音を述べた。

「俺は、あの人を見返すまで、あの人のもとで働きます」

この優等生め、トリヴァイはもう一度強くその少年兵を蹴り上げた。

「違うだろ。もっとはつきり言え。さつき礼拝堂で言ったみてえに」

「なんだ、リヴァイ？ どういうことだ、イリヤ」

「だから、エルヴィン。コイツは、要はクシエルを泣かせて、あのすました顔を跪かせてやりたいと、」

「それはあんたじゃないんですか、兵長!? そうじゃなくて、俺はただ、あの人を心底ぶちのめすまでは、!!」

イリヤがしまったという風に口を塞いだのを見て、思わずリヴァイは鼻で笑った。馬鹿だ。

「ぶちのめす」

「申し訳ございません団長! 上官への侮辱罪として、甘んじて処罰を受ける所存です!!」

そしてクソ真面目だ。

確かに、侮辱罪ととられてもおかしくない言葉を発したイリヤに対して、しかしエルヴィンは可笑しそうに声をあげて笑った。

「ああ、なるほど。そうか。君の気持ちはよくわかった。君の意志が重要だ。配置換えはしないでおう。なるほどな……クシエルが可

愛がるわけだ」

「こんな奴が良いとは、あの女も変態だ」

「え？・え？」

菌向かうばかりの可愛くない上に、使い勝手の悪い兵士をあえて可愛がるなど、趣味の悪いのが団長付きの副官だ。被虐趣味も大概にした方がいい、トリヴァイは思う。すました顔の彼女を屈服させたいという、後ろ暗い己の欲望は柵に上げて。

「しかし、君の表情を見て安心したよ。報告では、かなり迷っていると聞いていたからね」

「迷っていないわけではありませんが……。もう、自分のよくわからないこの能力に意味を求めようとするのはやめようと思って」

エルヴィンが首をかしげれば、イリヤは顔を上げてはつきりと述べた。

「俺が、俺の意味を決めようと思ったんです。俺がここにいる意味も、この力がある意味も。誰に決めてもらうんじゃない、俺が」

「そうか」

「はい」

その意味がわかったのかどうかはリヴァイの知るところではないが、確かにリヴァイの目には、エルヴィンが満足そうに頷いたのが見えた。わがままで甘く、生意気なクソガキは、どうやら団長のお眼鏡にはかなったようだった。

「もし、君が守ってやれるなら、あの子をどうか……守ってやってほしい」

「はい！エレンは俺の命を尽くして守ります！」

「いや、エレンもそうだが、クシエルだ」

その言葉に、思考を止めたのはイリヤだけではない。リヴァイもまた、その名前に眉をひそめた。

「ク、クシエル班長ですか？あ、ええ、上官をお守りするのには。確かに、部下の務めです」

「オイ、違うだろ、イリヤ。エルヴィンよ。お前、どうした。クシエルの命よりイリヤの方が優先順位は高いはずだが？」

は、とエルヴィンが息をのんで口を噤んだ。

らしからぬ失態に、その場に沈黙が落ちる。雨音は止まぬ。

何を今更言っているのか。彼女が死ぬ配置を考えたのは、お前だ、とリヴァイはエルヴィンを見つめた。その鋭利な思考でそう決めておいて、今更何をその口はほざいたのか。

「いえ、しかし、リヴァイ兵長。クシエル副官は、お二人にとって大切な友人だとお聞きしました。ならば、」

「オイ、イリヤ」

気づけば、リヴァイはその生意気なクソガキの胸ぐらを掴み上げていた。

「ここは友人ごっこをやる場所じゃねえだろ。お前は、お前の友人が、上官の友人ごっこに巻き込まれて死ぬのを指を咥えて見ていられるのか」

「やめろ、リヴァイ」

制止の言葉を吐いたその声は、迷いのない、いつもの団長エルヴィン・スミスのものであった。

「すまない、イリヤ。リヴァイの言う通りだ。さっきの発言はどうか忘れてくれ」

「だ、団長。しかし、」

エルヴィンは笑って、もう一度「忘れてくれ」とイリヤに言い聞かせた。その、否定を許さない様に、イリヤが頷いたのを見て、リヴァイはすぐさまイリヤを配置に戻るよう指示した。

後に残ったエルヴィンに、リヴァイが舌打ちしながら見上げれば、彼は先ほどの団長としての表情ではなく、少し困ったような、珍しく役割をとったような顔をしていた。

「悪かった、リヴァイ。寝不足が続いてるからかな。妙なことを言った」

「本当にな。……お前がそんなにあの女の命を優先してるなんて、知りたくもなかった」

「ああ。本当に。俺もだよ」

雨は止まない。まだ、行軍は組めない。エルヴィンは、その塔の上から、壁の中の景色に視線をうつした。

「まだ止まないな。……ここは檻のようだ。早く出たいものだな」

その檻が、一体何を指しているのか。リヴァイは想像して、気が滅入る心地になって舌打ちを返したただけだった。

\*\*\*\*\*

「脚の腱を狙え!!」

巨大樹の森で、クシエル班長の声が響く。それは、女型の巨人を少しでも足止めせんがための指示だった。

ここからは、イリヤの見た景色だけを述べていこう。

クシエルの指示で、まず動いたのはエーミールだった。彼が女型の前に躍り出て、気をひいたすきに、低空を飛行していたクシエルとイヴオがそれぞれ右足と左足の腱を狙った。イヴオの攻撃は、女型の硬化能力で塞がれ、クシエルはその巨大な足払いを受けそうになったが、ワイヤーをその足にまきつけて方向転換することで、右足の腱を削ぐことに成功した。

流石、五年以上の兵士は高度な技を使う、とイリヤが関心したときには、女型は膝をついていた。

その姿に、イヴオがうなじを狙った。その判断は、決して悪いものではなかった。

しかし、その攻撃はまたしても硬化の防御をうけた。次の瞬間に、そのうなじを狙った兵士のワイヤーが巨大な右手に掴まれたのを、イリヤははつきりとその目で見た。

そしてそのときに、クシエルが、エーミールに離脱を命令したのもはつきりと聞こえた。

その後のことははつきりと見えなかった。

ただ、イリヤが抜いた刃はイヴオ同様、硬化の能力によって塞がれたのと、クシエルが指示を出した一瞬の隙に、その体の上に大きな足が振り下ろされようとしたのだけは、はつきりと見えた。

そのあとは、もう無我夢中だった。

初めて、死をその身にしっかりと感じた瞬間だった。

兵士たちの激しく狼狽した声だけが、耳の奥に残った。

目を覚ました時には、すでにその巨人は姿を消していた。

「あ……」

身体中を襲う激しい痛みと、頬に触れる地面の硬さに、混濁する意識を集中させれば、イリヤの体から一気に蒸気が噴出した。

体を焼くような暑さに耐えていれば、数秒後には立ち上がれるほど痛みは回復した。どんどん早くなるその再生能力は、今のイリヤにとっては好都合だった。体中から出る蒸気の色を見るに、どうやらまた一回踏み潰されたらしい。

晴れてきた視界に、振り返って。

息を詰めた。

巨大樹の森に走る一本道。そこに、仲間たちの無残な死体が点在していたからだ。にじみ出てくる涙の気配を押し殺しながら、イリヤは立ち上がった。

「クシエル班長……!!」

すぐ近くに転がるその身体に、すがるように走り寄った。

\*\*\*\*\*

森の中に轟いた爆発音の残響がおさまり、硝煙の大量の煙が晴れる頃、エルヴィンが待機する巨大樹の枝に、リヴァイが合流した。

「動きは止まったようだな」

「まだ油断はできない」

森の中、何人もの兵士をなぶり殺しにした巨人が、拘束されている。ハンジが考案した通り、その巨人の身体に貫き通した無数のワイヤー付きの槍は、もがくほどにその肉をえぐっているようだった。

「しかし。よくこのポイントまで誘導してくれた」

ろうエルヴィンに、リヴァイは彼の顔をちらりと盗み見る。

「……後列の班と……、クシエルの班が命を賭して戦ってくれたおかげで、時間が稼げた」

リヴァイの脳裏に、勇敢に立ち向かい続けた仲間たちの最後の姿が

よぎる。そして、最後に馬を離脱して飛んで行った旧知の友の班の姿も。

「あれがなければ不可能だった」

「……そうか」

「そうだ」

エルヴィンの視点は女型の巨人から一切逸れない。リヴァイもまた、その「敵」を見据えた。

「彼らのおかげで、こいつのうなじの中にいるやつと会える」

二人の眼差しは、等しくその「敵」をどうやってなぶろうか、と考えるような目をしていた。

「中で小便もらしてなきやいいんだが」

そして、その捕らえた巨人から中身が漏らしているのかどうかを確認するのは、リヴァイとその次に実力を誇るミケ分隊長である。ミケが所定の位置で待機しているのを確認したリヴァイは、腰から刃を振り抜いた。

「待て、リヴァイ。念には念をだ」

それを止めたエルヴィンの第二波の号令によって、ありつただけの弾薬が投下される。

その爆音を聞きながら、そしてそれを真っ向から受けてもがく巨人

を眺めながら、二人は凍てつく思考を巡らせていた。見るものが見れば、その二人に、多くの兵士を失った、否、失わせた悲哀と怒りを感じ取ることができたかもしれない。

しかし、それを見る者にはいなかった。

ひたすら彼らは、その目の前の獲物を見据えていた。一人はその静かな激情をおさえた瞳で。もう一人は、わずかな歓喜を孕ませて。

「リヴァイ兵長！エルヴィン团长!!」

だから、二人がその兵士が近づいてきていたことに、気づいたのは、すぐ近くで声をかけられたときだった。その爆音と煙の中、現れた長身の兵士が、息を切らせながら二人がいる枝の上へとワイヤーを巻き取って上がってきた。

「お前、イリヤ」

驚きに目を見開いたのはリヴァイである。

呼ばれたその兵士は、肩に担ぎ上げたそれを下ろした。

「クシエル班、イリヤ・ツェラン戻りました！クシエル班長と、他一名存命です!!」

\*

そう叫んだときの、リヴァイ兵長の顔を、イリヤは生涯忘れないだろう。その驚きの中に、期待を滲ませた表情は、鋼鉄に張り巡らされた彼の心情をわずかながらに表すものだったからだ。

「オイ、クシエル」

踏み潰されそうになったクシエル班長は、イリヤが身を呈したおかげで、なんとか命をとりとめた。つきとばした衝撃で、どこかに頭を打ったらしいが、目立った外傷はない。それを告げれば、リヴァイ兵長は無遠慮に、その意識を失ったクシエル班長の細い肩を揺らした。

その乱暴ともとれる呼びかけに、わずかに班長が反応したのを見て、大きくリヴァイ兵長は息を吐いた。思わず漏れ出たともいうようなその息に、イリヤが顔を上げれば、その向こうにいるエルヴィン団長と目があった。

「イリヤ」

その顔は、先ほど、下から見上げた冷徹な司令官のそれと何ら変わらない。私的な感情など、一切かいま見ることでできないものだった。

だが、

「クシエル。イリヤ。よく生きて帰ってきてくれた」

その労いの言葉が、力強く。イリヤの耳に染み渡った。

イリヤの腕の中で、その上官が身じろぎをする。意識はまだ戻っていないが、目を覚ますのも時間の問題だろう。

生きていれば、彼女はまた再びこの戦いの場で指揮をとることになる。

しかし、それを求めた兵士たちが目の前にいる。その二人は、彼女とイリヤの無事を確認すれば、すぐに女型へとその鋭い視線を戻した。

その二人の背中に翻る揺るぎない双翼に、イリヤは胸が締め付けられるような思いに駆られた。

抱きしめた腕の中の体温はあたたかく、鼓動を伝えてくる。

イリヤはこのとき、初めて、守られて生き残り続けてきた自分を許せるような気がして、涙を落とした。

## 第一幕 序章

### 英雄の夢

ひととおり、今日の掃除を思う存分済ませた頃、家の扉を開ける音が聞こえてリヴァイは自分の部屋から飛び出した。

「いや。しかし、地下街はけっこう怖いところだな。まさかいきなり絡まれるとは思わなかった」

「オイ、ツエラン。それはお前がそんな良い身なりしてるからだ。襲ってくださいって言ってるような格好しておいて、そりゃねえぜ。あの野郎も可哀想になあ、殴られ損だぜ」

「殴ったのはお前だろ、ケニー」

数日ぶりに帰ってきたケニーの後ろから、こぎれいな格好をした男が入ってきたのを見て、リヴァイは思わず扉の後ろに体を隠した。ケニーほどではないが、身長のある男だが、一目見てわかるほど細く、弱々しい印象を受けた。

あれなら、自分でも殺せる、と判断して、リヴァイはその軟弱そうな客人のためにお茶を入れようと炊事場へと回った。

「で？どうだよ、地下街に初めて来た感想は？」

「ああ。何というか、彼女がこんな劣悪なところで過ごしていたなんて……本当に過酷な生活だったんだな」

「人の家を見ながら言う言葉じゃねえがな。……本当にお前のそういうところ、俺は嫌いじゃねえぜ」

隣の部屋で、ケニーと珍しい客人の会話が聞こえてくるのを、聞くともなしに聞きながら、リヴァイは湯を沸かした。そして、なけなしの紅茶の葉が入った缶を手取る。振ってみれば、わずかだがまだ残りはあるようだった。

一年以上前に、ケニーと仕事をした時に「拾った」紅茶だ。大切なときにだけ、大事に大事に飲んできた、初めての自分の紅茶だった。

「あの子を使用人として雇いたいなんて、御主人に言ったらなんて顔をなさるだろう……」

「はっ。あの王様なら、「奇跡」だのなんだの言って二つ返事で了承するだろ。ちよつと考えりやわかるだろ馬鹿かお前」

「しかし、お前が連れてきたあの子がどれほど魅力的で良い子だとしても、出自が卑しい者であることに違いはない。屋敷の者がそういうのを嫌うの、お前が一番よくわかってるだろう?」

簡易な茶器（と言えるものではないが）を用意して、リヴァイが彼らが話す居間に入れば、その客人らしき男が素つ頓狂な叫び声をあげた。

「おおおえええ?お前、ケニー!!」

「おお、リヴァイ。茶か?」

「そうだ」

豚のように耳障りな悲鳴だな、とリヴァイは聞いたこともない豚の悲鳴を想像しながら思った。自分には少し高い机に、客人とケニーに茶の入った器を出せば、その軟弱な男は「ありがとう。すまないね」と心苦しそうにリヴァイに頭を下げた。

「お前、ケニー！子供がいたのか!？」

「俺のガキじゃねえよ。……知り合いのガキだ。そいつが死んだから今、面倒見てるだけだ」

「まさか、彼女が地下街で面倒を見ていたという人の息子か?」

頭上でやかましく何やら言っている客人への礼は済んだ、とリヴァイは器を乗せた盆を引いた。

リヴァイがケニーに教えてもらったことはいくつもある。そのなかで、特に何度も言われたことに、客人のもてなし方がある。

家にやってくる客人には、種類がある。まず大きく分けて、ひとつが扉から入ってくる奴。もうひとつがそれ以外から入ってくる奴だ。どちらも丁寧な対応が必要だという。

後者はケニーに教えてもらったナイフで、前者はお茶で。

他にも、色々ともてなす相手の見極め方は聞いたが、ケニーが連れてくる相手には茶を、というのは初めて実践するものだった。何しろ、ケニーが誰かを家に連れてくるなど、今までなかったことなのだ。ケニーは、リヴァイが入れたお茶を一口飲んでから、「オイこれ、薄すぎだろ!」と声を上げたが、客人は、「美味しいよ」と笑ってくれた。

「オイ、お前は下がってる。ほら、土産だ。これでも読んでろクソガキ」

「絵本?」

「お前そんなもの買うのか?」

「ウーリが持たせたんだよ。俺が買うと思うか?これを?笑えるぜ!」

見たこともないような、そのキラキラとした装丁の、立派な絵本に、リヴァイは目を輝かせた。もう絵本を読むような年でもない。しかし、最近文字を学習したばかりのリヴァイにとっては、文字が載っているものは全て宝物のように見えていた。

「ガキだと言やあ、こんなもん持たせやがって。あいつはガキは等しく乳しやぶってる赤ん坊だと思ってるんじゃないやねえのか？こいつは見てくれはチビだが、もう兵士になれる年だぞ」

「ご主人のご好意をそう言うんじゃないよ」

「お前だって、あの女のガキが欲しいならそう言やあいいんだ。惚れた女と一緒にになれるってのは、幸福なことなんだろう？」

リヴァイが本を両手に見上げれば、客人が顔を赤らめて俯いていた。何の話をしているのか、正直全くリヴァイには理解できていない。

「お前が戦うべきは身分の差だけじゃねえだろ。その、ツエランの、いや。クルーガーだったか。その血とどう折り合いつけるのかってところだろ。ガキができりや、その血はそいつにも受け継がれるんだぞ」

「……………さすが、アッカーマンが言う言葉は重いな」

リヴァイはその理解できぬ会話を無視して、隣の部屋に戻ろうとして背中を向けたが、不意にケニーが「オイ！」と怒鳴ったので驚いて振り返った。

「お前な、」

「すまない。ケニー。ここではその名は厳禁だな。すまない。もう口にしない。私はこれでもお前を尊敬してるんだ。私と彼女の結婚が認められて、もし子供に恵まれたなら。私は必ずその子をこの理不尽な血から守るよ。平凡だが、安全で平和な世界で幸せになってもらうために。……なあ、君、リヴァイ君。こつちにおいて。本と一緒に読もう」

客人の誘いにリヴァイが戸惑っていたら、ケニーは黙っていたので、許しが出たと思って、椅子をひとつもってきて彼らと同じように机についた。

笑いかけてくるその軟弱な客人に請われて、絵本の表紙をめくれば、驚くほど鮮やかな色が目に入った。

地下街の薄暗闇のなかでは決して目にするのできない、花の赤、山の緑、そして空の青。

高価な本らしく、それらの色が散りばめられた絵本には、金色の王子様と、何人もの従者たちがいた。その従者の中には、一際小さな者がいた。それは、「英雄」なのだと言った。

物語は、本当にありふれた、しかし壁の中では滅多に聞かないような冒険譚であった。

金色の王子様が住む世界では、巨大な敵がいました。その敵を倒し、人々の幸せを守るために、王子様は家来たちをつれて戦うのです。その家来たちのなかには、皆から慕われる英雄もいました。

数々の戦いのなか、家来や英雄たちは死んでしまいます。しかし、王子様は彼らのために頑張って敵を倒すことに成功します。

平和が訪れた世界で、王子様はその平和を守るために、かつての英雄たちの墓をつくって、一緒に世界をおさめていくのです。そして、その世界は、未長く平和に暮らしました。もはや敵と戦うことなど、

誰もしなくてよくなったのです。

「平和な世界が一番ってやつだな。王子様に感謝しろってか」

「ウーリ様らしい」

リヴァイはその絵本の物語が特段面白いものとは思えなかった。敵など、巨大なものでもなく、ありふれてすぐそこいらにいるものであったし、平和な壁のなかでも、地下街では敵と戦うべく、日々命のやり取りがあるのだから。

その絵空事は、特に興味をそそるものではなかった。ただ、その金色にはひどく惹かれるものがあった。

「ケニー。こいつらは、どうして死ぬまで戦ったんだ」

金色の家来を指差してリヴァイは問うた。その従者たちは、一様に金色の王子様を守るために死んでしまった。なぜ、そんな生き方をするのか。リヴァイにはわからなかった。

ケニーは少しだけ考えた後、

「そうしても良いって思えたんだろ」

「そうしても良いってなんだ」

「その金色の王子様のためなら、死んでもいいって思えたんだろ」

ケニーは面白くなさそうに、その絵本の真ん中、金色の王子様と戦う、小さな英雄を指差した。

「こいつらは家来じゃねえ。きつとこの王子様と一緒に戦って、対等

になって、守って、知りてえって思えたんだ。そのためなら、別に何だってよかったんだ」

「どういう意味だ。何だそれ」

ケニーは、リヴァイの頭をくしやりと撫でて、「そう思える奴ができたらわかる」と呟いた。

「テメエみてえなクソガキでも、こんだけ立派になりや、御の字だろうな。オイ、リヴァイ。こんな英雄みてえに強くなれよ」

「……俺にはわからねえ」

「ケニー。難しすぎるだろう。何言ってるんだ、お前」

結局、リヴァイにはケニーの言わんとしていることは理解できないままだった。その後、その客人が彼らの家を訪れることもなかった。その名を知ることもなかった。

ケニーがリヴァイのもとを去ったのはそれからしばらくしてからである。そのときもらった絵本も、金に困った際に売り払って、もうリヴァイの手元にはない。

ただ、その金色の王子様と英雄の話は、今でもリヴァイの記憶の底にある。時折、底からすくい上げて、はっと目の覚めるような鮮やかな色彩の記憶に、身を委ねることがある。

リヴァイのほんの僅かな、幸福の記憶だ。

思えばあれが、きっかけだったのかもしれない。

「命令だリヴァイ。従え」

巨大樹の森。

目の前で巨人どもに、食われる女型を横目に、リヴァイが班員のも  
とへと行こうとしたのを止めたエルヴィンが強く言った。一刻も早  
くエレンたちの元に戻らねば、と気が焦るなか、ガスの補充を命令し  
たその金色は、揺るぎない視線でリヴァイを見下ろしていた。

「了解だ、エルヴィン。お前の判断を信じよう」

実物の金色の王子様は、絵本とは違い、傲慢で慈悲深さのカケラも  
ない。しかし、あの絵本の従者が、なぜ王子様のために命を投げ出し  
たのか。少しだけ、分からなくもない気が、今のリヴァイにはしてい  
た。

——強くなれよ。

そう言った父親だったのかもしれないあの男の期待には、どうやら  
自分は答えられなかったらしい。その証拠に男は自分のもとを去つ  
たが、今、ここではリヴァイを「英雄」としてその力を求める人たち  
がいる。

リヴァイは、金色の命令を信じ、補給兵のいる場所へとアンカーを  
放った。

\*\*\*\*\*

作戦は失敗に終わった。

多くの兵士を犠牲にして、調査兵団は敗走を余儀なくされた。その恐ろしいまでの敗北の感情に、クシエルは身を焦がすような思いをしながら馬の手綱を握っていた。

生き残った体はまだ重たいが、動けないほどではない。まさか、おめおめと生き残るとは思わなかったので、少し放心していた。

巨大樹の森からの敗走中だった。

その、巨人の声が森の中でこだましたのは。

「エレン!?!」

その声にいち早く反応して、馬の首を返したのは、隣を並走していたイリヤだった。クシエルが呼んでもどこ吹く風。その無鉄砲な兵士は、あつという間にその声の方向へと単騎で走り去ってしまった。

「団長！イリヤが離脱しました！追います！許可を!!」

前方に行くエルヴィン団長が許可の頷きを返したのを確認して、クシエルは最速力で隊列から離れた。

その無鉄砲な兵士の後ろ姿を確認できたのは、それからだいぶ走った後のことだった。

15メートル級はあろうか。その巨大な体から蒸気を発している、巨人の死体の前で、彼は止まっていた。

「イリヤー!」

その巨人の頭部は欠損している様子であった。あたり一体は、巨大樹がなぎ倒されている。その様に、その死体がエレン・イエーガーの

ものであることが推測された。

「クシエル班長！エレンの巨人の死体です！中身はありません！うなじごとかじられています！」

女型にやられたのだろう。そうあたりをつけたイリヤにクシエルもまた、その巨人の死体に近づいた。先ほど、リヴァイ班の面々の死体を見てきた。

あの死体は、女型にやられたと考えて間違いない。

そう、馬の速力を落として巨人の死体を見上げて、クシエルは驚きに言葉を失った。

「クシエル班長！早く！きつとりヴァイ兵長があとを追っています！援護に向かわなければ!!」

「エレン……」

「そうです！エレンですよ！」

「エレン・クルーガー………?」

クシエルの呟きが、森の中で小さく響いた。

あとがきとおさらいと、

ここまで読んでくださった方がいらっしやれば、本当に感謝です!!  
この辺境の地へようこそ。ようこそ!! (二回目)

『進撃の巨人』を読んで、たまらぬ!となつた感情を発散するためだけに書き始めた今作。もともと文章を書くことは多かったものの、二次創作とは言え、こうして長い小説?のようなものを書いたのは今年に入つて初めて。この『未来への進撃』が二作目です。

誤字脱字やクセのあるところもあつたりして、なかなか読みづらいことも多かったと思いますが、本当にここまで読んでくださった方には土下座の勢いで感謝です!!

さてここではまず、第一幕での設定について少し自分用のメモもふまえて書いていきます。

#### ①・イリヤとエレンの勘違い

イリヤの過去をめぐつて、第一幕ではまだ明らかにしていない伏線も多いです。そのひとつが、イリヤの母親が死んだ時のこと。「巨人に殺された」というその情報のみ、エレンはイリヤの口から聞いています。そこで勘違いが起きています。というより、エレンのなかで記憶と現実聞いたことの混在が起きていて、わけがわからないことになっていきます。「七章 王家の依代 二」での会話の不一致はそのためです。そこもまた、第二幕へ続けられたら、、、いいのになあ。

#### ②・クシエルの存在意義

正直、今作ではお前はいらんんじゃないかと思つてしまったクシエル。だからこそ、たくさん出したけど、結局彼女がどんな人物なのか、全くわからないまま第一幕が終わりました。彼女は、前作の『それは愛にも似た、』の主人公でしたが、なぜか迷子になってしまいました。イリヤの設定を掘り下げること、彼女の「壁の外から来たかもね」設定があやふやになったことが一番の要因かもしれません。彼女は、エルヴィンをはじめとした調査兵団の偉いさんたちを救いたいが

ただだけに誕生させたキャラなだけあって、設定に振り回されて中身がない。そこをなんとかできればと悔いが残ります。ちなみに、前作ではリヴァイと特別な関係になりましたが、その設定に関しては今回はどうでもよかったです。仲の良い旧友、というのでも十分だと思いますが。特別な関係でもどっちでも構わない。ただ、名前が名前なだけに、やはり特別な関係なのでしょう。うーん。でもそうだとしても、きっと二人とも真面目だし、幹部だし、かなりストイックになってそう。第二幕の展開次第で、彼女の他の兵士との関係は大きく変わりそう。

### ③・ハッピーエンドとは

世界が世界なだけに、難しいハッピーエンド。でも、『進撃の巨人』を読んで一番感銘を受けたのが、どんなに辛い状況下でも、精一杯生きようとする主人公たちの姿でした。だから、どんなに過酷でも、前を向いていなくても、もがき続けることができたらいなと思ってイリヤの重い腰を蹴り続けて書きました。最初は何の葛藤もなく、ただ単に父親とのいざこざや、母がいない悲しみ、内地の平凡で平和な生活から脱したくて、刺激の多い調査兵団に入った命知らずな子供だったイリヤ。むしろ「英雄」になってひと旗あげてやろうぜ、なんて思っていた世間知らずの坊ちゃんです。苦勞しまくったエレンとは正反對。なんやかんや能力も運もよくて一年間助かったけど、そこから後、なかなか上司に認めてもらえない。自分の思っていることが実行できない。むしろ組織の意思と反すると怒られる。そしていじける。そんな子供でした。だからこそ、突然発露した変な能力が自分にあることに「意味がある」と存在意義を求めようとしたり、その所以を知ろうと躍起になるのです。でもそれは結局、彼が何か自分で得たものではない。「何か」に頼って生きていこうとしていたこと。それがケニーから所以を聞いて、どうやらだいたいぶしようもない感じの力らしい、と知って、「英雄」になるなんて願いがただの夢想だったと思います。そこから開き直って、自分で自分の意味を見出していこうとするのが、女型の巨人との交戦。バンバン死にまくるのも、なんとか

自分の能力を「死なせたくない」という思いに繋がったからなんだと思います。そんな彼がクシエルを助けることができ、そしてそれを上司から認めてもらえて、初めて守られる子供の存在から、守る側の人間になったわけです。母親が自分を守って死んだときから、守られてばかりだったイリヤが、ようやく自分を許して、自分の意味を見出してあげられたのが、最後の場面でした。きつと、ずっと守られてばかりなわりに、自分の存在価値がいまいちつかめなかったから、いろんな「意味」を求めていたんだと思います。そんな彼にとっては、最後の展開は、ハッピーエンドというか、ひとつの区切りになったと思います。たぶん、アイテムひとつゲットしたくらいの成長だと思えます。ちつき。まだエルヴィンに褒めてもらって喜んでハッピーつてくらいじゃ、まだまだ子供です。勇者の剣はまだまだ先だぜ。

お父さんとの関係は、なんか仲悪そうに書きましたが、きつと大したことなかったと思います。たぶんお母さんという緩衝材がなかったから、不器用な父と息子がうまく会話できずにギスギスしちゃったんです。お父さんも、お父さんなりに息子のこと考えてたんだよ。ケニーに相談するくらいには。

#### ④・心残り

そんなの、104期のわちやわちやが書けなかったこと以外にないさ!!ハンジさんも書けなかった!そりゃ、オリジナルのキャラがキャラ立ってないから、大人しめで面倒見が良い兵長が一番動かしやすかったのさ!!それどころかリヴァイ班のみんなも全然書けなかったのはほんとに悔やまれる!アッカーマンズに全部持つてかれたわ!!ミカサいないし!ていうか、エーミールだってもっと書くつもりだったのに!主役のイリヤやクシエルよりエーミールの方が裏設定いっぱいあるんだぞ!!活かせなかったけど!エーミール!死んだのか!?!生きてるのか!?!どっちだ!?!ちなみに、彼は前作で死ぬ予定だったのに、殺すの忘れててそのまま今作に来たひよっこりキャラですが!!むしろ、もういつ死んでもおかしくないキャラなんだけど!いや、それはオリジナルキャラ全てに当てはまるんですが!!

オリキヤラ登場人物

・イリヤ・ツエラン

103期訓練兵団卒。調査兵団、クシエル班所属。16歳。

好きな食べ物……ソーセージ（使用人とはいえ生まれも育ちもシーナの坊ちゃんだから！）

嫌いなもの……クシエル班長。

今欲しいもの……エレンの敬語。もしくは先輩としての威厳。リヴァイ班転属への切符。

・クシエル（前・シグリ）

調査兵団、クシエル班班長兼エルヴィン団長付き副官。正直、聞き辛い年齢。

好きな食べ物……きのこ。

嫌いなもの……三徹目の団長の体臭。ミケ分隊長の女子力。

今欲しいもの……筋肉。『若い部下とうまくつきあう9つのルール』という本。

・クルト・ウエルナー

マーレのエルディア人。戦士候補生で、唯一のパラディ島計画参加者。16歳。

好きな食べ物……母親の作ったシチュー。

苦手なもの……ピーク。

気になるもの……友達のイリヤ。

## 第二幕

## 終章

### 英雄の決意

「じゃあ何か。俺は今まで……必死こいて……人を殺して飛び回ってた……ってのか」

英雄の沈痛な声が、穏やかな陽光の差し込む病室にぽとりと落ちた。

「……確証はないと言ったらろ」

人類の英雄の悲痛な思いに何とか言葉を返したのは、「巨人は人間である」という可能性を導き出したマッドサイエンティストだった。額に汗をにじませた彼女もまた、英雄と同じような痛みを味わっているのだろう。

そんな腹心の部下たちの心の機微にも、ベッドの上の彼は目配せひとつ寄越さない。ただ、その可能性に、夢見た真実の鍵を見出したのであるうか。わずかにその顔を綻ばせていた。

右腕を失くし、一週間も死の淵をさまよったにもかかわらず、その碧眼は意識を取り戻した瞬間から爛々と輝いている。

マッドサイエンティストたる分隊長が、坊主頭の新兵を引きつれて退出した後、残った英雄は、己の上司のその表情にようやく気づいたようだった。

「お前……何を……笑ってやがる」

「……………何でもないさ」

ベッドの上の彼はそうごまかしたが、英雄は凍りついた表情のまま、言葉を失っているようだった。きつと、彼のよき理解者である英雄のことだ。心のうちに隠していた碧眼の子供のような稚拙さと狂気、そして幼い夢は、英雄の理知的な観察眼によってしつかりと捉えられてしまったことだろう。

思えば、弱味を見せることをしないカツコつけの英雄は、このとき初めてその碧眼にすがったのではなかっただろうか。にもかかわらず碧眼は、その手が伸ばされたことにも気づかなかつたのだから、本当に彼らは救いようがないくらいすれ違っている。わずかなすれ違いが、信頼しあう二人だからこそ、そのズレははたから見えていっただけ愛おしい。

なんて人間らしく、どこまで不器用な彼らなのだろう。

「オイ、お前」

不意に英雄が振り返って己を見据えてきたので、その眼光の鋭さに背筋を正しながら返事をした。少しだけその眉が困惑に歪められているように見えたのは、ただの気のせいではない。

「お前は、」

「君は彼らと接触したんだろう？何か重要なことは聞かなかつたか」

英雄が何か言おうと口を開いたとき、かぶせて問うてきたのはベッドの上の彼だった。いつの間にか、その碧眼はいつもの迷いのない先導者のものにすり替わっている。幼く狂った夢に心躍らせる少年の瞳は、そこにはもうなかった。

それを少しだけ残念に思いながら、そして彼とは対照的に困惑と悲

痛さに胸を痛めているであろう英雄に同情を寄せながら、

「いえ。特にありません。ほとんど眠らされてしまったので……。思  
い出したことがありますら、すぐに報告いたします」

尊敬するその二人の上官に、二度目の嘘をついた。

## 第一章 帰還

一

目を覚ましたときにまず視界に入ったのは、黄色がかつた青い空だった。日の入りが近くなっているその空を認めた瞬間、頭を割るような鋭い痛みと、荷馬車の不愉快な振動が身体を襲って、思わず呻き声を上げた。

「クシエル副官。お気づきになりましたか」

半身を起こそうとしたとき、そつと手を貸してくれた手と、労わるような声が頭上から降ってきた。

「……モブリット」

「もうすぐ壁に着きます」

ハンジの補佐官である彼は、作戦途中に気を失ってしまった私に付き添ってくれていたらしい。同じ荷馬車の上には、何人かの負傷兵が膝を抱えていた。早朝に出立したときよりも、遥かに数を減らした行軍を組む兵士たちの姿は、一様に暗鬱たる雰囲気をもとっている。

「……死体は捨てました。副官の班員の遺体も……」

「ああ……。だから、やけに空の荷馬車が多いんだね……」

あたりを見回していた私に、なぜか申し訳なきそうに言ったモブリットを振り返る。いつも精悍にひしきめられた彼の顔が、苦渋に歪められていた。その後ろに、高くそびえる我らが壁。

自由を奪うと共に、私たちを守る忌まわしきもあり、絶対的でもある壁だ。

守られているときは忌まわしいだけのその壁は、この瞬間だけは誰もがほっと息を零す安息の印だ。

今日もまた、ここへ帰ってきた。

「クシエル。起きたなら壁の中では歩け」

「リヴァイ兵長。副官は頭を打っておられます。医者に診てもらうまでは安静にすべきです」

壁の前まで迫った行軍がその速度を落としたとき、荷馬車に馬を寄せてきて言ったのは、班員全てを失った兵士長であった。私がある上官の命令に答えるより先に、私の肩を支えてくれていたモブリットが異をとнаえる。的確かつひるみのない声に、流石、ハンジ分隊長が手放そうとしない優秀な兵士だ、と改めて思う。

「歩けないなら馬に乗れ。お前がエルヴィンの後ろにいねえと住民どもがうるせえ」

「しかし」

「モブリット。行軍の旗振りはいいつの役割だ。特に、「壁の中」ではな」

それは、確かに私の役割だった。壁を壊されたあの日から、奇しくも負ってしまった榮譽たる役割だ。

「モブリット、大丈夫。心配ありがとう」

「クシエルさん、ご自分ではわからないかもしれませんが、あなたは二度気を失っているんです。女型との戦闘で頭を打った際と、そのあとエレン巨人の死体を見たときと。脳に何か異常があったらどうするんですか!?!」

モブリットの制止に頭に巻かれた包帯に触れたとき、壁の鐘がとどろいた。門扉解放の鐘の音が、敗者たちの帰還を告げる。兵士たちを迎え入れる門扉がゆっくりとあがっていくのに合わせて、行軍がその歩みを止めた。

それに合わせて立ち止まった荷馬車から降りれば、兵士長殿が領く。見れば、私の馬は彼が持ってきてくれたらしい。なんとも、準備がいいことだ。

「クシエルさん!」

「ごめん、モブリット。ちゃんと生きて帰ってきたことを知らせたい人もいるんだ。馬に乗るから。ね?」

モブリットは納得のいっていない、という不服そうな顔をしながらも、ぐつと言葉を飲み込んで「気分が悪くなったり、頭痛がひどくなったり、異常があつた際はすぐに荷馬車に戻ること」と念を押した。繰り返すが、本当にハンジ分隊長が彼を手放さない理由がよくわかる。

そんな優秀かつ献身的な彼に笑みを返して、そのまま兵士長のあとに続いて行軍の先頭へと馬の腹を蹴った。

門扉が開き、兵士たちの間に一瞬、安堵のため息が漏れる。門扉の形に切り取られたカラネス区の街並みが、敗者たちの前に現れた。

その街並みが、我々を迎え入れているのか、それとも拒んでいるのか。考えたくもない思考に、いつものように一瞬とらわれて、いつものようにその思考を中断させた。

鐘の音が、重く、体の芯に響く。

英雄気取りの勘違い野郎たちの帰還だった。

\*\*\*\*\*

調査兵団にとって、帰還の際の行軍ほど、過酷なものはないだろうという兵士もいる。憎き巨人に立ち向かうときも、死の恐怖は常につきまといっており、その任務は苛烈きわまりないが、この帰還の行軍は違った意味で兵士たちの精神を蝕む。

巨大樹の森にて女型の巨人と交戦したものの、一步及ばず敗走。多くの兵士と多額の資金援助によって造った捕獲用の器具を失ったその日の壁外調査。街の住民たちの出迎えは、いつもよりもさらに兵士たちの弱り切った心に鋭く刺さった。

エルヴィン団長の副官のひとりであるクシエルが一瞬盗み見た団長の表情は、いつもよりも青ざめており、見開かれた瞳孔は何ものも見つめていないようだった。

馬から降りて歩く団長の3馬身後ろで、クシエルは馬の上から悪口雑言を吐く住民たちの姿にちらちらと視線を走らせていた。

「エルヴィン団長！今回の犠牲に見合う収穫は得られたのですか!？」

「死んだ兵士に悔いはないとおっしゃるんですか!？」

酒屋の主人らしき人物は口汚く調査兵団を罵っている。

年増の女が亡くなった兵士の最期を大声で聞いて回っている。

恰幅のいい若い男が、涙目に拳をつきあげて何か泣いている。

皆、一様に散った兵士の命を嘆き、調査兵団の存在意義を問い、その無為さに怒りを露わにしていた。その様々な感情に、クシエルたち調査兵団が返せる反論の余地などは、一切ない。それらは全て、彼らが壁の外に出る代償なのだ。

「クシエル副官」

小さいが、はつきりと耳に届いたその声に、クシエルは弾かれたように顔を上げた。住民たちの中に、赤ん坊を背負いながら、子供と手をつなぐ女性を認めて、彼女は思わず馬から飛び降りた。

「ナタリア」

「副官。よくぞご無事で。……あの人が、今日の作戦で死ぬ予定だから、と……。だから、副官のお姿ももう見れないものかと、」

「ナタリア。ありがとう。帰ってきた。私は、無様にも五体無事で怪我也も軽いものだ。……本当にすまない」

それは、クシエルが率いた班の班員の妻と子供だった。妻は昔、調査兵団で働いていた元兵士で、勇敢なる女性だ。そしてその夫は、女性捕獲のために捨て駒となったクシエル班の中で、唯一その作戦内容を知らされていた古参兵であった。

クシエルが謝れば、ナタリアと呼ばれたその女性は、彼女の手を両手ですくい上げて握りしめた。

「良いんです。あの人は、バカだから心配してたんです……。きちんとお勤めを果たしたんですね」

「違う。違うんだよナタリア」

「え？」

夫が上官を守って死んだと、まさに兵士の本分を果たしたのだと、喜びを表現するように笑ったのを見て、クシエルは首を横に振って、その柔らかな手を握りしめた。

「生きてる。生きてるんだ。エーミールは生きてる。重傷で起き上がれないが、意識もある。生きてるんだよ、ナタリア」

その言葉に、女が息をのんだ。震える息は、声にならない感情をのせてクシエルに届く。次の瞬間に、女はわっと涙をこぼしてその場に崩れた。

「ナタリア」

「副官。あの人は生きてるんですね。帰ってくるんですね!？」

冷静に、理知深く、慈悲を固めたような温かな笑みをこぼしていたその女が、顔をぐしゃぐしゃに歪めて、その喜びとも不安とも知れぬ感情に涙をこぼして言った。地面に膝をついた彼女を支えるようにしゃがみこんだクシエルの外套を、彼らの娘である3歳くらいの少女が遠慮深げにつかんだ。

「パパは？」

「……大丈夫。今は休んでるだけだ。しばらくしたら一緒に、トロス  
ト区の家に戻る」

確か、その少女は「アニ」と言っただろうか。その金色の髪は、父  
親譲りだろう。出立前に、父親を見送りにきていた彼ら家族の笑顔  
を思い出す。

死ぬ父を送り出す家族は、妻は、どれほどの苦痛に耐えただろう。  
どれほど恐怖を味わっただろう。

そして今、喜びと共に再度その恐怖に脅かされてはいないだろ  
うか。

待つ勇気など持たぬクシエルは、待つことのできるその強い女性の  
肩を一撫でした後、一言添えて行軍へと戻った。

「クシエル班長」

「イリヤ」

彼女が歩いて合流したのは、すっかり列の後ろの方であった。そこ  
に、クシエルの班のもう一人の生き残りが声をかけた。

栗色の髪の長身の少年兵は、出立前より、少しばかり精悍な顔つき  
をしているように見える。彼は、クシエルの命の恩人だ。

「班長。ケガ、大丈夫なんですか？後ろでモブリットさんが心配して  
ましたよ」

「大丈夫」

今回の調査で、おそらくは二度ほど死んだであろうイリヤ・ツエラ  
ンは、しかしその持ち前の不思議能力ですつかり元気に回復しきつて  
いる。その体には、擦り傷ひとつない。

「班長。あれ、一体何だったんですか？」

「あれ？」

「あれです。エレンの巨人の死体を見たときです。「エレン・クルー  
ガー」って誰なんです？」

「さあ。そんなこと私言っただけ？倒れる前に？」

とぼけたように、しかし本当に忘れていたかのように首をかしげた  
クシエルに、イリヤと呼ばれた兵士は「ええ？」と眉尻を下げて、口  
を開いた。

が、再度口を開こうとした彼の次の言葉は、彼らの数人前にいる兵  
士を呼ぶ声にかき消された。

「リヴァイ兵長殿！」

住民のなかから、先に行く小柄な兵士に駆け寄る姿があつた。その  
男の少し震えた声が、取り繕ったようにやけに明るくて、後ろにいる  
クシエルたちの耳にも届いてしまった。

「娘が世話になってます。ペトラの父です」

その名乗りに、イリヤが息を飲んだ。足を痛めたというその人類最  
強は、クシエルに乞うたとおりに、自らも怪我を隠して両の足でしっか  
りと行軍を歩いていた。

「娘に見つかる前に話してえことが。娘が、手紙を寄越しましてねえ。腕を見込まれて、貴方に仕えることになったとか。あなたに全てを捧げるつもりだとか。まあ、親の気苦労も知らねえで惚けていやがるわけですわあ」

死の匂いの濃い行軍に似つかわしくない、ペトラの父親の笑い声が響く。イリヤはその声に、顔をしかめて、耳を塞ぐようにフードを被って後ろに下がってしまった。クシエルは逆に、その遺族となってしまった父親と、その兵士の後ろ姿に近づくために歩を早める。

「父親としてはですね、まだ嫁に出すには早えかなと思うわけです。あいつもまだ若えし、これからいろんなことが」

父親の娘を思う言葉たちが明るく紡がれている。近づけば、その父親の口元がひきつって震えていること、そして顔にじつとりと汗が滲んでいるのがわかった。クシエルが声をかけようと口を開きかけたとき、じつと黙って歩いていたりヴァイ兵長がようやく口を開いた。

「また、後日。……お伺いに参ります」

歩きながら、それでも頭を下げながら小さく紡がれたその言葉に、父親は口を噤んで、足を止めた。

言葉の意味をしつかりと理解したのであろうその遺族を置いて、行軍は本部へと歩を進める。まるで、遺族や街の人々から逃げるように。

クシエルは目の前にいる小柄な兵士の横に並んだ。

ちらりと見れば、その顔は常よりも青ざめていた。一瞬、横に並んだクシエルに視線が投げられたが、すぐにそれは行軍の先に戻される。

明日からまた、遺族への死亡通知の巡回が始まるだろう。人類最強たる彼は四人の兵士の遺族へ。「戦女神」と称されるクシエルは二人の兵士の遺族の元へ。

クシエルもまた、行軍の先を見る。隣にいる彼女の旧知である人類最強の英雄には、言葉のひとつもかけることはなかった。かける言葉など、あろうはずもなかった。

いつでも調査兵は、死者の前に口を噤む。それは生き残ったものの業だ。紡げる言葉があるとすれば、さらに先へ進もうとする「誓い」のみであろう。

それでも。

——それでも、生きている。

遺族の悲しみを背負いながら、それでも、彼女は生き残ったという喜びを感じずにはいられなかった。決して口にはしない。その喜びは、芽生えて心を潤すと同時に、やましさに転換して身を切り裂く。だが、やはり生きているのだ。

クシエルは、その喜びとやましさに全身を預けながら、地面を踏みしめる感触に、夕焼けに染まる世界の色に、住民たちの罵倒と悲しみの旋律に、涙をこぼし続けながら歩いた。

850年。

トロスト区の壁が破られてからひと月あまり。

今回の壁外遠征にかかった費用と損害による痛手は、調査兵団の支

持母体を失墜させるには十分であった。

エルヴィンを含む責任者が、王都に召集されると同時に、エレンの引渡しが決まった。

諸々の雑事を済ませて古城に戻った頃には、夜の帳はどつぷりと落ち、堅牢な城の中には、暗い静けさだけが満ちていた。

ここを早朝に出た時には、十人はいた兵士たちも、帰って来たのはたったの四人だった。リヴァイ班は、班長である兵士長、そしてエレンを除き全員死亡。その補佐にまわっていたクシエル班は、班長とエーミール、イリヤ以外の二名が死亡した。エーミールは重傷のため、古城には戻らずにすぐに医療棟へと搬送されてそれっきりである。

リヴァイ班の任がエレンを守ることであり、クシエル班の任がそのために命を投げうつことであったことを考えるならば、半数近くが生き残ったことは奇跡にも近いと言える。

しかし、数字の上では良好な生存率も、実際の不在は重く生存者にのしかかる。

古城の中に満ちる「不在」という存在は、生存者の心を蝕むような闇だった。

クシエルは、部下であるイリヤとの簡単な打ち合わせを終えた後、上官であり古城の責任者たるリヴァイ兵長のもとへとあたたかな紅茶を差し入れた。

彼とクシエルはシガンシナ陥落前からの長い付き合いだ。その付き合いの中から、今日のような夜は、その上官がほとんど眠りを享受しないことを知っていた。

古城の厨房で紅茶を淹れるのは、もっぱらペトラの仕事だった。紅

茶の味にうるさい兵士長殿が唯一、その喉を鳴らせた腕の持ち主であった。かの女性兵士が兵士長を眺める熱い視線は、それはもう、尊崇にも届くようなものだったことは、クシエルもよく知っている。努力家の彼女だったから、神経質なその上官のために、きつと何度も紅茶の淹れ方を学んだのだろう。

その兵士長の私室の扉をノックして、少し明るめの声を出して入室をしたが、その上官は椅子の上に座って腕を組んだまま、うんともすんとも言わなかった。

眠っているのかと、うつむく顔をこつそりと覗き込めば、薄く開けられた鋭い瞳と目があつて、慌てて「紅茶です」と茶器を机の上に置いて顔を逸らした。

温かな茶をカップに注げば、上官は無言のままに、ひどく緩慢な動きで顔を上げた。部屋にはクシエルが持つて来たランタンの灯りしかない。窓のない牢獄のような真つ暗闇のなかで、男はまるで死んでいるかのように、呼吸すら響かせずにそこにいた。

クシエルがおそろおそろるカップを差し出せば、それでも男はカップを手に取った。いつものような妙な持ち方で、一口味わって。

言葉なく、眉をひそめた。

口に合わなかったらしい。こんなことならば、ペトラからうまい紅茶の淹れ方を教わっておくべきだった、とクシエルは少しだけ後悔する。その兵士長が新兵として入団してから、幾度となく紅茶を淹れてきてやった彼女だが、一度たりともその彼の「うまい」という言葉を引き出せたことがない。

むしろ、気心知れた頃からは、「まずい」とばかり言われるものだけ

ら、ここ最近はどんなついでの用事があっても、彼にだけは紅茶は淹れないようにしていたほどだ。

「あ、足はどうです？」

「……………ひと月は動かせないそうだ」

それはひどく厄介な。調査兵団の主戦力がひと月も動かせないとなると、かなり厳しい。しかし、それ以前に次回の壁外調査など臨めないかもしれない絶望的状况だ。これからどうなるのか。全く想像だにできない。そんな道行きのなか、彼の怪我はどう影響するか。

「お前は」

ちらりと、睨むような鋭い視線のまま問われて、クシエルは頭の包帯に手をやった。

「中身は異常なさそうです。怪我も血はたくさん出ましたが、傷は浅い。すぐ治ります」

答えに対して、その上官は何も言わなかった。暗い夜の底で、ただうずくまって体を強張らせているだけである。彼が動いたのは、そろそろ退出したほうがいいだろう、と彼女が踵を返そうとした時だった。背を向けようとした彼女の腕を無遠慮につかんで、ただ一言「また淹れる」と命令した。

お気に召したのか、と問えば「まずい」とだけ返ってくる。

「いつもお口に合いませんね。イリヤに淹れさせますよ。あの子の方が私より上手い」

「……………まずいとは言ったが、「淹れるな」と言ったことはない」

「……………おお……………」

まただ。上官の言葉の難解さに、クシエルは困惑しながら首をかしげる。長い付き合いにもかかわらず、いつまで経っても彼女は彼の言葉がうまく変換できない。

しかし、

「知った茶が飲めるのは悪くない」

その意味だけは、妙にあっさりと心の中に落ちてきた。

クシエルはそれに「ああ」とか「うう」とかよく分からない返事をして、逃げるようにその部屋を後にした。そのまま、早足で地下牢へと向かう。今日のエレンの監視の当番は、グンタだった。彼亡き今夜は、その役はクシエルが担うことになったのだ。

地下への階段を降りながら、クシエルは顔を手で覆った。

心臓の音がうるさい。

早鐘のように鳴るそれに合わせて、体の底から熱がせり上がってきて、涙がひとつだけ落ちた。

どうやら自分も、上官も、等しく弱りきっているらしい。彼が言わんとしたことは、つまり、彼女が生きていて良かった、という旨のことだ。死ぬ覚悟でいた彼女は、この半月あまりそのつもりで彼に接していた。それがどれだけ彼の優しい心根に傷をつけていたのか、今になつてようやく彼女は察した。

そして、彼女が生き残ったことに安堵しながらも、それに浸れない英雄の暗鬱さに、胸が締め付けられた。こういう時、彼の力強い翼が死者によって作られていることを、嫌というほど思い知らされる。

生き残ったことを素直に喜べるほど、この「不在」は小さくない。

クシエルは長く細い息を吐きながら、地下牢へと続く扉を開けて、お目当の少年のもとへと足を向けた。この古城の中で、もっともその「不在」に胸を痛めているであろう少年は、既に眠りについたようで、ベッドの上から規則正しい寝息が漏れていた。

ランタンの明かりを小さなロウソクへと移し、火をしばって彼の寝台の側まで寄る。覗き込めば、その目元が赤く腫れていて、ひどく泣いたことが伺えた。眠りこけた寝顔は、あどけない少年そのもので、クシエルはきゆうと胸がしぼられる。

貧乳な自分にはこれ以上、しぼる胸もないぞ、と思いながら、崩れかけた心を立て直す。

「エレン」

小さく呼んだ。反応はない。

エレン。エレン。エレン。エレン。

その名は、記憶の底から湧き上がるように、口元をつく。

否、それは実際に沈殿していた記憶だ。

「エレン・クルーガー……………」

少年の前髪をすきながら、少年とは異なる者の名を呼ぶ。

「あなた、なのか?……まさか、ね」

その眩きを聞く者は、誰もいなかった。自嘲気味に笑ったその女の表情の意味は、ただただ「不在」が占める古城の夜に、沈んで消えていった。

\*\*\*\*\*

翌日、あいもかわらず、地上に生きる人間どもの憂鬱など素知らぬといった顔で、太陽は朗らかにあたり一面を照らしていた。

うららかな秋の日差し。涼しげな気持ちのいい昼さがりに、イリヤ・ツエランは苛立ちながら古城の中を右往左往していた。

「班長!!はんちよう!!はんちようー!!」

広い古城の中、たった四人の住人。大声でその一人を探しても、誰にも顔を合わせることがない。調査前ならば、きっとオルオカエルドあたりが「うるさい」とそのイリヤの愚行をたしなめるところだが、今は彼の行動を諫めるものは誰もいない。

否、今はもういない先輩方よりもさらに口うるさく諫めてくるであろう者を、彼は探していた。

彼はその直属の上官である女性兵士の姿を、朝から全く見ていない。それはおそらく、日の登る前からいきなり部屋を襲撃してきた兵長のせいだと思われた。

「掃除だ」

まるで巨人を討伐した直後のように殺伐とした雰囲気、三角筋を頭と顔に巻いたお掃除兵長がベッドの上で寝ていたイリヤの腹を蹴り上げた恐怖は、今もなお体にしみついている。

そのあと、二人でエレンのいる地下牢へ、その監視をしているであろうクシエル班長のもとへと足を向けたときには、既に彼女の姿はなかった。座っていたのであろうベッド脇の椅子はまだ暖かかったので、兵長曰くは、「逃げやがった」とのことだった。

クシエル班長は、兵長の掃除のときだけ、何故かすぐに消えてしまう。彼女自身は綺麗好きで、どちらかというと掃除もマメに行なう人間なのだが、どうやら昔、兵長と掃除の件で大揉めしたらしい。

兵長とエレンは今、地下牢で昨日の調査の際のことを取りまとめている。エレンと女型の巨人との交戦についての報告書をまとめるためだ。

だからというわけではないが、怒られる心配もせずにイリヤは先程から、消えた班長の姿を探している。先程見れば、馬は小屋に繋がれていた。ならば古城のどこかにいるはずなのだ。何が悲しくて昼間から上官とかくれんぼをしなければいけないのか、とイリヤがふと森のほうへと視線を向けたとき。

「あ」

森の脇から、煙が一筋上がっているのが見えた。

「クシエル班長!!探しましたよ!あんた何やってんですか!?!」

古城の庭の隅っこ。森との境界線付近で、その黒髪の上官が大きな焚き火を行なっている姿が見えて、イリヤは無作法にも怒鳴りながら近づいた。

上官は胡乱げに彼に視線を寄越して、「なんだイリヤか」と失礼な言葉をぼそりと呟いた。

「なんだじゃありませんよ。何やってるんですか」

近づいて見れば、予想以上に大きな焚き火である。赤くまるで生き物のように蠢く炎の中で、ちりりと丸まりながら炭へと化しているのは、どうやら本や紙の塊のようだった。

「何、燃やしてるんですか……」

「研究班のみんなもいなくなっちゃった。これももう必要なくなっただ」

「は!?!これ、 研究報告書ですか!?!何やってるんですか!?!団長の許可をもらったんですか?!?!」

巨人や壁成立の歴史について、文献をもとに研究を進めていたのが彼女率いる研究班だった。彼女の研究成果は、エルヴィン団長考案の長距離索敵陣形や、ハンジ分隊長の巨人捕獲作戦の立案の素地にもなっていると聞く。それをあっけなく燃やす彼女の脇には、大きなリアカーがあった。もしかすると本部の研究室の書類をすべて火にくべているのかもしれない。

「これで最後だ」

彼女が懐から出した小さなノートを手に、小さく呟いた。それにあっさりとした火の中に投げ入れようとしたので、慌ててイリヤはその手

からノートを奪い取った。

「ダメですよ!!これはあんたたちの研究成果でしょう!」

「……必要なくなつたんだよ。もういらぬ」

「それを決めるのはあんたじゃないでしょう!?!第一、死んだ先輩方の苦勞はどうなるつてんです!?!燃やすつてんなら、俺が持つてます!!」

クシエルがいらぬと判断しても、他の者が見れば必要かもしれない。そう言つて、ノートのページを開いて、イリヤは絶句した。

「読めないと思うけど」

そこには、びっしりと文字が羅列されていた。しかし、その文字は彼の知るものではなく、暗号なのか、それとも古代文字なのか。全く読解できなかった。

「い、いいんです!俺が持つてます!燃やさんでください!」

彼女は少し驚いたように目を丸めたが、すぐに興味をなくしたように「ふうん」と呟いて手にしていた木の棒で、火のなかで炭になつていく本たちをつつき出した。

仲間たちとの努力の結集を燃やすその姿に怒りを感じながらも、イリヤは、彼女の表情にいつもとは違う暗鬱がのつていることに気づく。普段から、あまり笑顔以外の表情を出さない彼女だ。変わるときといえば、その案外短い堪忍袋の尾が切れた時くらいなのだ。その彼女の、落ち込んだような表情に、思わず同情心がイリヤの心に去来する。

「なに。メソメソしてるんですか」

「メソメソしたくもありませんよ。いいじゃん、たまにはメソメソ」

「いい年こいて気持ち悪いんで「メソメソ」とかやめてもらえませんか」

言えば、舌打ちが返ってきた。それ以上の追求がないところ見ると、やはり相当弱っているらしい。珍しい上官の姿にイリヤは驚きを隠せない。

「で、何か用？」

「あ、すみません。新聞社の方が朝、お見えになっていたんです。記事の催促の件、だそうです」

言った瞬間、はたと暗鬱な表情を一変させて、奇声を発した彼女が、弾けるように立ち上がった。

「ロイさん!?!」

「あ、はい。そういうお名前の方でした」

「まずい！連載の記事の件だ！ああああ！原稿燃やしちやっただよ！イリヤ、ごめん、あれ、あの中の燃えてる本に挟んでる！ちよつと取ってよ!!」

「はっ」

どうやら彼女は、本当に研究室のものをなりふり構わず火にくべたらしい。中身はよく知らないが、その連載記事の原稿とやらもまた、

一緒に燃やしたことを思い出して頭を抱えて発狂している。

「イリヤ！早く！」

「いや、火傷しますよ！無理に決まっています！」

「治るでしょ!?!いいじゃん、減るもんじゃないんだ！」

「減るわ!!なんて事言うんだよ、この人でなし!!」

イリヤの腕を掴んで火にくべようとするともない上官を、必死で抑えながら抵抗するイリヤ。やんややんやと騒いでいた時、森の中から一人の兵士が馬に乗って現れた。

イリヤとクシエルが大きな焚き火の前で取っ組み合いしている様を見て、その兵士は一瞬虚をつかれたように固まったが、すぐにクシエルに向かって敬礼した。

「クシエル副官！団長から召集命令が下りています。すぐに本部へ戻ってください」

「リヴァイ兵長は？私一人か？」

「リヴァイ兵長は引き続きエレンの監視にあたるように、このことです。副官のみの召集です」

クシエルはその伝令を聞き、イリヤの腕を放して厩のほうへと駆けていき、すぐに馬を引つ張ってきた。

「イリヤ、兵長への報告頼むよ」

「ハッ！」

「焚き火、兵長に見つからないように片付けといてね！」

「ハ、はあああ？  
!!!？」

イリヤが抗議の声を上げた時には、その上官は、伝令兵と共に森の中へと消えてしまっていた。

まだエレンと出会う前、祖父が話してくれた物語の英雄たちは、皆一様に仲間を重んじていた。

彼ら英雄は、仲間がどれだけ窮地に立たされても決して裏切らなかつたし、どれほど疑われても決して見捨てはしなかつた。

祖父もまた、いつもこう言ったものだ。

——仲間を疑ってはいけない。

「その女型と思わしき女性の名は………アニ・レオンハート」

エルヴィン団長の冷静な声が、かつての「仲間」の名を呼んだ。それは、古城における女型捕獲作戦の会議のことであつた。負傷中のリヴァイ兵長とエレン。そして、そのエレンの護衛を任されているというイリヤ・ツェラン。彼らの元へ、エレンが王都に召集される前に女型を捕獲するという作戦を説明するため、古城へと出向いたときのことであつた。

「ア、アニが女型の巨人？なんで、なんでそう思うんだよ、アルミン」

エレンの震える声が、アルミンの左耳を容赦なく突く。記憶の奥で囁いた祖父の言葉をかき消して、アルミンは答えた。

「女型の巨人は、最初からエレンの顔を知っていた。それに、同期しか知らないはずのエレンのあだ名、「死に急ぎ野郎」に反応を見せた。何より大きいのが、実験体であるソニーとビーンを殺したと思われるのが、アニだからだ」

「なんでそんなことが分かる？」

「あの二体の殺害には、高度な技術が必要だから、使い慣れた自分の立体機動装置を使ったはずだ」

「あ、ああ。だから装置の検査があつたら。アニは引つかかつてない」

訓練兵時代の同期が、調査兵団の仲間を無慈悲に殺し尽くした巨人である。その推測に、否を示そうとする幼馴染の動揺を肌で感じながらも、アルミンは抑揚なく、とつとつと仲間を疑う推理を並べ立てた。まるでそれは、エレンの狼狽を丁寧に否定していく作業のようだった。

「あの時、アニが出したのはマルコのだ。だから追及を逃れることができた」

「はあ!?なに言つてんだ。どうしてマルコが出てくる……?」

「……………わからない」

そう答えたアルミンの声が、初めて震えた。

古城の広間にアルミンとエレンの動揺の声だけが響く。王都に召喚される前に、エレンを囿にして女型と思われる憲兵アニ・レオンハートを捕獲する。その作戦内容を語ったエルヴィン団長も、昼間に古城から一度本部へ召集されたクシエル副官も何も言わない。否、アルミンとエレンのやり取りを通して、その場にいた104期新兵であるジャン・キルシュタインとミカサ・アツカーマンたちの様子を観察していると思われた。

しかし、アルミンが言葉を震わせたのはその緊迫した雰囲気からでも、アニが女型であるという推測からでもない。トロスト区戦にて死

亡した、同期のマルコ・ボットの死に、アニ・レオンハートが関係している、という恐ろしい推測に、彼は恐怖したのだ。

そして、仲間に対してそんな推測をできる自分の酷薄さにも、ひどく恐怖していた。

「おいガキ」

アルミンとエレンの会話が空中に浮き始めた時、粗暴な口調でそれを止めたのはリヴァイ兵長であった。

「それはもうわかった。他に根拠はないのか」

「ありません」

「アニは女型と顔が似ていると私は思います」

根拠とも言えない主観を述べたのは、ミカサである。それにエレンが激昂して立ち上がる。

「はあっ!?何言ってるんだ、そんな程度の根拠で、」

「つまり、証拠はねえがやるんだな」

アルミンが見遣れば、そう述べた兵長の視線は、すでに覚悟を決めた兵士のそれであった。その鋭い視線は、アルミンの頭上を越えてエレンを一直線に注がれている。

「証拠がない?なんだそれ……。何でやるんだよ。どうすんだよ、アニじゃなかったら」

幼馴染の震える声に、アルミンの胸がずきりと痛む。エレンはなんだかんだと言いながらもアニと仲良くやっていた。そして正義感の人一倍強いエレンに、アニを疑えというのは……困難なことなのかもしれない。アルミンにとって、やはりエレンは英雄らしい人物であった。皆の憧れの英雄は、仲間を疑うなどという、人道に外れるようなことを容易にはいけない。

「アニじゃなかったら、アニの疑いが晴れるだけ」

英雄を守る従者のような、幼馴染の少女が答える。アルミンもまた、それに続いた。

「そうになったらアニには悪いと思うよ。でも、だからって何もしなければ、エレンが中央の奴の生贄になるだけだ！」

でもその英雄の話は、単なる童話。子供騙しのフィクションに過ぎない。エレンを守るためには、陳腐な正義感は一切捨てなければならぬ。

肚をくくるべきだ。アルミンが見上げたエレンの瞳は、ひどく怯えたように揺れていた。

——あんな弱いくせに根性あるからね。

アルミンの耳の奥底で、いつかの日、アニが言ってくれた言葉が聞こえた気がした。

その言葉がどれだけアルミンの心を救ったかなど、大した問題ではない。そう、アルミンは自分に何度も言い聞かせた。

\*\*\*

「今回ばかりは、お前を信じていることができねえ」

広間の扉を出たとき、廊下の奥でエレンが呟いた言葉が、クシエルの耳に入ってきた。同じく廊下に出てきたイリヤと顔を見合わせる。暗い廊下の奥に視線をやれば、先に広間を出たはずの新兵たちが話こんでいる姿があった。

「うん。エレンの気持ちは分かるよ。僕だって、アニが女型だなんて思いたくない。だけど、」

「分かってるよ。可能性の問題だろ。俺だって……リヴァイ兵長の言ったことは理解しているつもりだ」

いまだ衝撃を隠せないでいるエレンを論しているのは、女型の正体を特定したアルミン・アルレルトである。ついひと月ほど前までは、彼らは皆、同じ屋根の下、同じ釜の飯を食っていた同期なのだ。エレンの動揺はごく自然な反応だろう。

酷なことをさせている自覚は、クシエルにもあった。エレンだけではない。彼を叱咤し、慰めているジャンやミカサにもまた、酷な覚悟を調査兵団は迫っているのだろう。彼らが優秀に、その覚悟が必要であると認識してくれたから助かっている。

「俺、エレンを地下室へ連れて行きます」

「うん、頼むよ」

イリヤが彼らのもとへと小走りで駆けていく。エレンの監視の任にあたっているはずの兵士長は、まだ団長と話し込んでいる。本日の監視役は、イリヤが代理で行なう予定だ。イリヤが声をかけたこと

で、エレンたち104期のやり取りは中断されたようで、一言二言交わした後、エレンとイリヤは廊下の奥へと消えていった。

後に残ったのは、眉間に皺を寄せて、景気の悪そうな顔をしてうつむく新兵たちだった。

「ミカサ。お前が心配してどうにかなるもんじゃねえ。こればかりはエレンが肚くくるのを待つしかねえ」

「……分かってる。けど、」

「信じてねえのか。エレンのこと」

新兵のわりに大人びた雰囲気の子の名は、確かジャン・キルシュタイン。彼がエレンの消えた後ろ姿を見つめ続けていた少女に言う声は、クシエルの耳にも届いた。少女は、ミカサ・アッカーマンという名だったか。リヴァイ兵長と共に、女型と交戦したという逸材だったと記憶している。彼女は、「信じていないのか」というジャンの言葉に動揺したように顔を上げて、その可能性を否定するように首を横に振った。

「ジャンの言う通りだ。私はエレンを信じる。大丈夫」

「……なら俺たちも戻るぞ。俺たちだって……肚あくくる必要はあるだろ。アルミンはもうくくっててみるみてえだが」

少年らしく揺れる声に、弾けたように顔を上げて反応したのは、この作戦を立案したアルミン・アルレルトだった。揺れる新兵の中でも、彼は確かに、覚悟が出来上がっているように見えた。

「アルミン・アルレルト」

彼らの会話を中断させて、その若き参謀の名を呼ぶ。新兵3名が、律儀にクシエルを認めて敬礼を返してきた。その右手を笑顔で下ろさせて、クシエルはアルミンと話がしたいと持ち込んだ。すぐに反応したのはジャン・キルシュタインだ。彼は誰よりも早くクシエルの要望に返事をして、ミカサに声をかけてその場を立ち去ってくれた。

訓練兵の頃はもっぱら憲兵団志望を公言してはばからない人物だったと聞いたが、なかなか空気の読める優秀な兵士のように思えた。

「あ、あの、クシエル副官。話とは」

「ああ、以前あなたにあげた本の感想でも聞こうと思って」

アルミンが入団してから初めての二人の会話にそぐわしくないクシエルの問いかけに、彼は一緒によとんとしたような顔をした。しかしみるみるうちにその頬を赤らめて、次の瞬間には綺麗な敬礼をとる。

「覚えていて頂いて光荣です！その節は大変ご無礼をいたしました！」

堅苦しい言葉と敬礼とは裏腹に、アルミンのその表情は年頃の少年らしくうろたえ、羞恥に赤らめてられていた。その豊かな表情に、クシエルは少し安堵して笑った。

「私の方こそ、悪かったね。あの後、「恩着せがましい」なんて怒られたからね」

それは、五年前の話である。

シガンシナ陥落の前日。調査兵団に出陣前の休暇が与えられた時のことだ。いつものように街において買い物をしていたときに、街中を走り回る子供たちとぶつかった。そのうちの一人が、アルミンだったのだ。ぶつかって尻をついたクシエルに、手を差し伸べてくれたアルミンは、子供ながらに紳士的だった。そのお礼に、と調査兵団について書かれた本をあげたのだ。

あのととき、クシエルはまだ調査兵団に入団してから数年と経っていなかったし、アルミンもまだ、10歳の子供だった。

「でもあ那时的には私服だったのに……私が調査兵団だったってよく分かったね」

「お名前は教えて頂いていましたし、シガンシナ陥落で副官の名前は内地にまで聞こえるほど有名になりましたので。……それに、一緒におられた方が印象的で……」

「ああ、リヴァイか。あの時からあの辛気臭い顔は変わらなかったもんねえ」

今は上官になったその同僚の顔を思い浮かべて、クシエルは思わず笑ったが、さすがにアルミンは乾いた笑いを漏らしただけだった。しかし、なんとも感慨深い。街が巨人に占領される前に話した子供が、生きていたというだけではなく、今、こうして双翼を背負って目の前にいるのだから。

年はとるものだ、とクシエルは感慨深げに頷いた。

「お会いしたらお約束した通り、あの本の感想をお伝えしようと思っております！」

目を輝かせて言った小年の顔に、クシエルは驚いて「一晩で読んだのか」と問えば、「はい」と元気に頷く。10歳の子供には少々難解な本ではないか、と思っていたのは杞憂だったらしい。クシエルの想像以上に、アルミンは優秀だった。

「調査兵团について書かれている本はいくつもありますが、あの本がそれらとは一線を画しているところは、壁外調査時の描写です。調査内容の列挙にとどまらず、その日の天候や風向き、ひいては兵士たちの精神状態まで事細かに書かれていて非常に興味深かったです。筆者は内地の研究者だそうですが、まるで本当に壁外に出たことがあるような描写が印象深かったので、あつという間に読んでしまいました」

早口で述べる小年の顔は、まるで初めての経験を嬉しそうに親に語る子供のそれのようだった。しかし、その表情はすぐに一変して、アルミンは顔を俯かせて言った。

「……あの調査兵团はとても素敵でした。カツコよくて、まさに僕にとって英雄でした。でも……今の僕は、あの憧れにはなれそうにもありません」

その表情は、アニ・レオンハートが女型の正体であるという推測を、本部でエルヴィン団長に語った後に見せたような、失望を孕んだものだった。

クシエルが思った通り、彼は仲間を敵として算段した作戦を立てながらも、そんな己に失望もしていたようだった。合理的な判断ができる人間は、その優秀さゆえに、時折己の感情をないがしろにする傾向にある。

クシエルから見て、アルミンはまさにそんな人間に見えた。

「……あなたが感じた通り、あの本は実際に壁外に出た調査兵が書いたものなんだ。だから、臨場感あふれる描写ができた」

「え？しかし、筆者は、」

「表向きは内地の者が書いたことになっているが、あれを書いたのは何代か前の団長についていた副官だったらしい」

調査兵団の団長は、代々癖のある人間がなっている。壁の外にわざわざ出ようというような人間をまとめ上げる者なのだから、一筋縄ではいかないのだろうが、今から数代前の団長は、その正義感の強さゆえに有名だった。おまけになかなかの色男だったというから、当時は流行りものの物語にも彼をモデルとした登場人物が起用されていたくらいだという。

そんな彼の副官は、これまた上手い話で、とても見目麗しい女性だったという。その女性副官は団長に傾倒しており、その作戦内容のこと細かに記述していたのだ。彼女が壁外調査で亡くなった後、その記述を団長が見つければ、彼女の遺志を残すために出版へと踏み切ったのだと、クシエルは関係者の話でそう伝え聞いていた。

「そんな裏話があったなんて……。でも、そうだとすれば納得がいきます。壁の外に出て確信しましたが、あの記述内容は、実際に出てみないとわからないことも多く書かれていました。しかし、どうしてわざわざ筆者の経歴を隠すなんて真似を」

「それは、その副官と団長が恋仲だったから。公にはしてなかったらしいが、暗黙の認識、というか。住民を含め、彼らがそういう仲だということを知る人は少なくなかったらしい。それに加え、副官の彼女

が死んだのは団長をかばってだったというから……。まあ、経歴を隠さずに出版した際、死んだ彼女へ妙な噂が立たないようにするためだったんだろうね。恋仲の団長を守って死んだ副官の本だなんて、壁の中の住民にとったら、格好のゴシップ以外にないからさ」

なるほど、と少しきこちなくアルミンが頷く。そういった男女の機微についての話は慣れないらしい。歯切れの悪い返事は、彼がその理由をしっかりと理解できていない所以だろう。

「だから、あの調査兵団は英雄ばかりが登場するんだ」

「え？」

「内部の人間が書いたものだから、英雄なんだよ。実際、あの頃から兵団内部には内地からの敵も潜り込むことがあったことは他の資料からも明らかだし、仲間を疑うなんて日常茶飯事に近い出来事だった。……調査兵団が英雄的な存在じゃないのは、昔も今も変わらないんだ」

アルミンの青い瞳がクシエルをまっすぐに見つめる。暗い廊下にとるその青い色は、今の団長のそれに似ている色だ、とクシエルはこの時初めて知った。

「あなたの今回の作戦立案。とてもよかった。あなたの推測通り、ア二・レオンハートが女型だった場合、死ぬのは兵士だけにとどまらないだろう」

その可能性に、アルミンはその青い空のような瞳を不安に揺らした。

「その結果、調査兵団が他の人類から糾弾されたとしても。……私は

あなたのことを誇りに思うよ。それは必ず人類の進撃の一步になるはずだから」

「はい」

まだ緊張に顔を強張らせているが、先ほどよりもよっぽどマシになった表情で、アルミンは頷いた。人類のために。その言葉に強く思うところがあるのだろうか。その少年兵は、やはり恐ろしいほど早く、切り替えることのできる優秀な人間だった。今、彼が切り捨てたのは、「英雄」という理想像だっただろうか、それとも彼の仲間に対する優しい思いだっただろうか。

「エレンを頼むよ。彼はあなたほど強くはないようだから」

「エレンは僕なんかよりよっぽど強いやつです。僕が何も言わなくても、」

「彼の重圧と一緒に背負ってあげられるのは、あなたたちくらいだ。私たちは彼に重圧をかける側だからね。……頼むよ」

その言葉に、今度こそしっかりとアルミンは頷いた。その瞳には強い光が宿っている。どうやら彼は自分のことより、他人のことにこそ力を出せる類の人間らしい。エレンのため、という名目の方がよっぽど自分を偽ることができるのだろうか。

まだ細いその肩に手を置いて、労われれば、アルミンは再び少年らしく顔を赤らめて敬礼を返してくれた。

新兵たちには酷なことを強いている自覚はある。さらに言えば、このアルミン・アルレルトという新兵には、さらに酷な覚悟を強いている。「頼むよ」と言いながら、そのときに感じた新兵への申し訳なさ

は、クシエルの心の奥底でわずかに傷をつけた。こんな傷を、エルヴィン団長はずっと負いつづけているのかもしれない。そう、思いながら、彼女は自分に真っ直ぐな信頼を預けてきてくれるアルミン・アルレルトに笑いかけた。

その三日後。

エレンと団長を含む調査兵団上層部は、王都に召集された。

アルミン・アルレルトの作戦通り、ストヘス区で目標のアニ・レオンハートと接触するため、エレンの代わりに変装したジャン・キルシュタインが馬車に。そして、囚であるエレンには、護衛としてミカサ・アツカーマン、アルミン・アルレルト、そしてイリヤ・ツエランが配置された。

リヴァイ兵士長の穴を塞ぐため、捕獲作戦の指揮は、第四分隊の分隊長ハンジ・ゾエに一任された。

そして、アニ・レオンハートが女型であった場合、104期の新兵に内通者がいる可能性があるとふんだエルヴィン団長の判断により、ミケ・ザカリアス率いる分隊が104期をウォールマリヤ内地の施設で監視するという任をかせられた。

ここに、調査兵団の主戦力が二分されることとなる。

クシエルは、ミケ・ザカリアスの分隊に配属された。

内地での監視と待機が任務であったはずのミケ分隊が壊滅する事態に追いつめられるなど、このときのクシエルは知る由もない。

じつとりと、緊張による汗が滲む。

緑色の外套の下で、イリヤは息を吐くと同時に、凝り固まった肩を少し鳴らした。

「そろそろか」

エルヴィン団長たちを載せた馬車がストヘス区の街並みを横切る。その馬の足音が迫ってくるのが、イリヤたちが潜む路地裏にも聞こえてきた。

「馬車が通り過ぎて憲兵団が動けば、目標に声をかけます」

イリヤに目配せして、アルミンが言った。緊張からか、その声がわずかにうわずっていた。イリヤの後ろには、エレンとミカサが控えている。皆、立体機動装置が見えないよう、長い外套に身をつつみ、フードで顔を隠していた。

女型を取り逃がした壁外調査から数日後。エレンと調査兵団の責任者の王都召集の日である。場所はシーナ内地を囲む壁の突出地区、ストヘス区である。

アルミンが立てたアニ・レオンハートの捕獲作戦は、今のところ滞りなく進んでいるように思えた。エレンを囷に、女型と疑わしきアニ・レオンハートを誘き出すという作戦。その実行部隊には、エレンとミカサ、アルミンが選ばれ、班長としてイリヤが任命されている。「人類の盾」としてエルヴィンが評するイリヤは、その再生能力でもつてエレンの護衛を果たす。それは先の壁外調査と変わらない。しかし、その配置に対して、反対したのは彼の直属の上官であるクシエル副官であった。

曰く、在団歴一年足らずの兵士に班長は務まらない。

曰く、甘い覚悟のイリヤに、人間相手の作戦は荷が重い。

要は、イリヤにはアルミンの立てた作戦の指揮をとるのは不可能

だ、とはつきりと否定したのだ。その抗議のせいかどうかは分からないが、結局クシエル副官はイリヤの上官からも、女型捕獲作戦からも外された。

——イリヤはエレンの護衛へ。君は待機だ。クシエル。

そう、団長に命令された時の、クシエル副官の絶望に満ちた表情たるや。

してやったり。

につつき上官の処遇にやりと笑みを零したのは、イリヤの秘密である。今回の作戦で功績をあげ、あの口うるさく乱暴な上官の鼻をへし折ってやる。イリヤは今回の作戦が決行されるまで、そう息巻いていた。

「大丈夫か、イリヤ」

悲しいことに、息巻いていたのは、作戦が決行されるまでだった。

イリヤの様子に案じて声をかけたのはエレンである。一年若年のくせに、なぜかイリヤに対しては全く敬語も使わないエレンは、目の前で手を震わせているその長身の兵士に言った。

「何言ってるんだ。俺は全然問題ない」

巨人相手の時よりも緊張している、などとは後輩たちの前では決して口にできない。

「イリヤさん。声が震えています」

ミカサの不安そうな視線が痛い。彼女は無愛想で、感情の起伏も激しくないようだが、ひどく正直だ。その視線が、イリヤに対する不安感を真っ向から表しており、イリヤはなんだか泣きそうな心持ちになる。

「来ました」

アルミンが足早に大通りの方へと駆けていく。その後姿には迷いが無い。エレンを背中を守るミカサも、立案者のアルミンも、その任務に全霊をかけているように見えた。先日、古城での会議で滲ませていたわずかな動揺も、既に消化されたようだった。

自分などよりよっぽど、彼らの方が覚悟がある。

イリヤはそんな事実を目の前にしながら、アルミンが「アニ」と目

標の名を呼ぶのを聞いていた。

イリヤには、同期を疑うなどという真似は、できそうもなかった。クシエルの言う通り、甘ったれたところは変わらない。そう、はつきりと自覚した。

\*\*\*

「さすが憲兵団様だ。日頃の仕事具合がうかがえる」  
「きよろきよろしない」

そう、憲兵団を揶揄したのはエレンであった。エレンのすぐ後ろにぴったりとついて歩くミカサが、彼の挙動を諫める。

それは、アニに、エレンを逃がすために憲兵団である彼女の助力を借りたいと説得し、合流したときである。彼女に疑いを抱かせないように、辺り一帯を調査兵団が監視している状況をごまかす演技の途中であった。

調査兵団の仲間たちは首尾よくやっているらしい。あたりには憲兵団どころか、一人の住人の姿も見えない。作戦通り、このまま地下通路へとアニをおびき寄せそうであった。

「あんたは？」

先頭をいくイリヤの背中に、落ち着いた声が届く。振り向けば、まるで鷹のように鋭い瞳と目があった。

「俺はイリヤ・ツエラン。あんたらの一期上だ。よろしく」

「……イリヤ・ツエラン……」

「ん？なんだ？」

一瞬その鷹の目に、光がきらめいた気がして、イリヤは首をかしげた。

「いや。なんでもないよ」

だが、アニはそのまま視線を落としてそう言った。長身の彼からすれば、女型と思わしき彼女はひどく小柄であった。こんなか弱そうな少女が、仲間を無慈悲に殺した巨人だとは、到底信じられない。

助けられなかった仲間たち、今もなおケガに苦しんでいる仲間たちを思い出し、イリヤの胸に怒りがふつつつと湧きあがる。だが、目の

前の小さな金色の髪の少女に、怒りと共に複雑な心持ちも去来する。まるで、鍋の中に怒りと困惑を一緒に、低温で煮ているような感覚だ。こんな小さな少女が、いったい何のために仲間たちを殺したのか。「……だ」

複雑な感情を腹の底に抱えながら、イリヤは目の前の階段を指して言った。ストヘス区の街並みにある、地下へと続く階段。今は既に廃棄された地下空間へと続くものである。そこに彼女を連れ込む。そうすれば、彼女が万一に巨人化したとしても、被害は最小限に抑えられる。

「……」

「うん。……を通る。この地下には昔計画されてた地下都市の廃墟があるんだ。これはちゃんと外扉の近くまで続いている」

アルミンの説明をうけたイリヤは、エレンたちに合図して、イリヤはその階段を真っ先に下りていく。目の前に広がる暗い地下へと続く階段。中腹あたりから、地上の光は途切れて、ただただ暗い闇が広がっている。ちょうど、イリヤの足がその闇の先端、地下から伸びる影を踏んだあたりで、エレンがアニを呼んだ。彼女は一步も、その階段を降りていなかった。

「アニ？ 何だお前。まさか暗くて狭いところが怖いとか言うなよ」

「そうさ。怖いんだ。あんたみたいな勇敢な死に急ぎ野郎には、きつとか弱い乙女の気持ちなんて分からないだろうさ」

「大男を空中で一回転させるようなやつはか弱くねえよ。バカ言ってるねえで急ぐぞ！」

「いいや。私は行かない」

再度歩みを進めたエレンたちに、アニが拒否をしっかりと示した。みるみるうちに、エレンの表情がこわばっていく。

「そつちは怖い。地上を行かないなら、協力しない」

「何言ってるんだお前は！ さっさとこつちに来いよ！ ふざけてんじゃねえ!!」

「エレン！ 叫ばないで！」

狼狽しきったエレンに、ミカサが叱咤する。が、アニは既に、気づ

いていた。

「大丈夫でしょ、ミカサ。さつきからこの辺には……なぜか、全く人がいないから……」

そう言ったアニの表情が、悲しげに歪められた。それは、年相応の少女のそれで、イリヤには到底あの女型の巨人のそれとは思えなかった。

「……まったく傷つくよ」

イリヤの目の前で、アルミンがそつと信煙団のトリガーに指を添える。その手が、震えているのが、イリヤの視覚からよく見えた。

「いったいいつからあんたは……私をそんな目で見るようになったの。……アルミン」

「……アニ。なんで、マルコの立体機動装置を持っていたの……？ わずかなへこみや傷だって一緒に整備した思い出だから、僕にはわかった」

「そう……あれは、拾ったの」

狼狽して言葉を失ったエレンの代わりに、アルミンが詰問する。それに、アニは顔をそらして答えた。アルミンの方を、見ようもしない。

「じゃあ、生け捕りにした二体の巨人は、アニが殺したの？」

「さあね。……でも、一ヶ月前にそう思っていたんなら、何であの時に行動しなかったの」

「今だって信じられないよ！ きつと何か、見間違いだって思いたくて……。そのせいで……!! でも、アニだって……あの時、僕を殺さなかつたから、今こんなことになっているんじゃないか……!」

徐々に、アルミンの声が震えだす。地下階段の入口に立つ彼女に叫ぶその姿は、罨をかけようとする兵士のそれではなく、まるで何かを乞い願う迷い子の姿のようであった。

「ああ。心底そう思うよ。まさか、あんたにここまで追い詰められるなんてね。あの時……何で……だろうね」

苦渋に歪められたそのアニの横顔に、イリヤは思わず息をのんだ。

「おいアニー！お前が間の悪いバカで、クソおもんねえ冗談で話を合わせてる可能性が、まだ！あるから!!とにかくこつちに来い！この地下に入るだけで証明できることがあるんだ！こつちに来て証明しろ!!」

「そつちには行けない。……私は、戦士になりそこねた」

エレンの叫びに静かに拒否を示したその声は、泣き出しそうな悲しい声だった。

「だから！つまんねえって言うてんだろぅが!!」

「レオンハート!!」

それまで黙って彼らのやりとりを聞いていたイリヤが、我慢ならずはその名を呼んだ。アルミンたちを見ようとしめない。否、見れないように顔を背けたその悲しげな表情に、いてもたってもいられなくなったのだ。そんな悲しい顔をしてまで、何を背負うのか。

「俺たちは君に危害を加えたくない！まだ話せる！まだ戻れるから、事情を話してくれ!!」

「もう遅い!!」

手を差し伸べたイリヤに、少女の鋭い怒声が返ってきた。彼女は忌々しそうに顔をゆがめ、イリヤを見据える。

「私は戦士じゃない。でも……あんたみたいな「出来損ない」にはなりたくないんだ！ツエラン！」

「は……!?!」

「私は……あんたたちみたいな「裏切者」にもなれないんだよ……!」  
「アニー！僕たちは話し合うことができる！こつちに来て話してくれ！」

アルミンの声に、それまで沈黙を守っていたミカサがしびれを切らした。

「もういい。これ以上聞いてられない。……不毛」

スラリと抜かれた刃に、話し合いの可能性は断ち切られた。

「おいミカサーやめろ！」

イリヤの制止にも、ミカサは一切耳を貸さない。階上の女性を睨み

つけたまま、

「もう一度ズタズタに削いでやる！女型の巨人!!」

その名を呼んだ。それは最早、同期の仲間を呼ぶ声などではなかった。

そのミカサの台詞に、アニー否、女型の巨人は突如、おかしそうに笑い声をあげた。場違いな、そして彼女らしからぬ笑い声に、一同が黙り込む。

「アルミン。私があんたの、良い人でよかったね。ひとまずあんたは賭けに勝った。……でも、私が賭けたのはここからだから!」

女型の巨人が右手をあげた。それと同時に、青い空に、アルミンが放った信煙団が立ち上る。それを合図に、彼女のもとに、仲間たちが一斉にとびかかる。か弱い少女の身体を、幾人もの大人たちが押さえ込み、猿轡をかませようとする。

その一連の流れを、イリヤは黙ってみていた。

否、呆然と、彼女の言葉を反芻していた。

——「出来損ない」。「裏切者」。ツエラン。

イリヤの能力を代々引き継ぐツエラン家とは、王家の従者ではなかったか。以前、それを教えてくれたケニー・アツカーマンの言葉がよみがえる。彼の話では、「出来損ない」などという言葉は一切出て来なかった。

何が。何を、知っているのか。

思考の波に飲み込まれそうになったイリヤを、叱咤するように呼んで浮上させたのはミカサだった。不意に振り返って、アルミンとエレンを引っ張って階段を駆け下りてくる彼女は、その勢いのまま、イリヤに突っ込んできた。

「イリヤさんー早く地下へ!!」

ミカサの背後で、オレンジ色の閃光がアニ・レオンハートの姿を包み込んだのが、イリヤの視界に一瞬だけうつった。

\*\*\*

退屈で死ねる。

窓の外に広がる穏やかな青空を眺めながら、ユミルは本日何度目かのあくびをかみ殺した。

場所はウオールローゼ内地の兵団施設の一室。隣では同期のクリスタ・レンズが他の同期の女性と談笑している。他の者も、本を読んだり、チエスをしたり、愚痴をこぼしたりとそれぞれに暇をもてあましているようだった。

それはちようど、エレンたちがストヘス区に入るより少し前の頃合いだった。

ユミルたち新兵は、早朝、エルヴィン団長をはじめとした兵団上層部とエレンが王都に召集されるより早く、突然号令されてこのローゼ内地の兵団施設へと連れてこられた。

日が昇る前に本部を出発し、この施設についたのは日が昇りきった頃だった。集められた104期は平服のまま、訓練すらも禁止されて待機を命じられて既に数時間が経過する。

否、104期の面々も数人欠けている。エレンを含めたあのシガンシナ三人組とジャン。四人の姿がない。

そして。

あくびで滲んだ涙をぬぐいながら、ユミルは窓の外を歩く兵士に視線をやる。上官たちは、こぞつて立体機動装置をつけたフル装備で待機している。その中の、ひときわ目立つ容姿の黒髪の女性兵士。

役者のように見目麗しい彼女は、立体機動装置に加えて、その肩にライフル銃を背負っていた。まるで、憲兵団の兵士のような出で立ちだ。あれは、対人武器であったはず。

「どうしたの、ユミル?」

隣で他の同期と話していたクリスタが、その大きな瞳をユミルに向けて首を傾げて問うてきた。その可愛らしい仕草に、ユミルはとろけるような気持ちで笑う。

「あ、「女神様」だ。クシエル副官も待機だなんて珍しいよね。いつも団長か兵長の近くでの勤務が多いのに」

その上官の通り名を呼んで、クリスタが無邪気に目を輝かせる。シ

ガンシナ陥落の際、住民の命を救ったとされる「女神様」は、どうやらクリスタの憧れらしかった。

「お前の方がよっぽど女神様だぜクリスタ」

「もう！ユミルはそればかり！冗談やめてっば」

拗ねて頬を膨らませる愛らしい女神様に、ユミルはからかいながら笑う。しかし、実際のところ、それは冗談ではない。

——あの上官が銃を持つてっばは、タダ事じゃねえだろうな。

兵団内の不穏分子の摘発。それが、「女神様」のもう一つの仕事である。「女神様」とはとんだふざけた名前だ。その裏では、兵団の仲間を懐疑の目で監視するのが彼女の仕事なのだから。クリスタが思うような、公平無私で勇敢かつ優しい「クシエル副官」など決して存在しない。それを、ユミルは知っている。クリスタの思い描く人間など、ユミルからしてみれば最早人間ではなかった。

「ユミル？どうしたの？」

「ん〜。何でもねえよ」

ユミルは窓の外のその上官の姿を横目で見ながら、クリスタの絹のような髪を撫でた。

\*\*\*

ユミルたち104期生の新兵が隔離されている一室の外。彼女たちの動向がよく見える場所で、クシエルは数人の兵士たちと見張りを勤めていた。

否、正確には見張りなどはしていない。ただ、そこに突っ立って、一枚の書類に書かれた文章に何度も目を通していた。

そこに書かれていたのは、クルト・ウエルナーの出身地の情報だった。

「アニ・レオンハートと同郷……」

まだトロスト区が破られる前、兵団に潜入した不審者であったクルト・ウエルナーは逃亡。それから憲兵団・駐屯兵団に要請して、彼の居場所を捜索しているが、未だその網に彼が引つかかったという情報

はない。壁が破られてからこのひと月あまり、トロスト区を中心として壁の防衛は少々難があるようだが、だからと言って壁の外には出れない。

「怖い顔だな、クシエル」

思考の底に沈みかけていたクシエルの頭上から、低い声が落ちてきた。聞き慣れたその声に、クシエルは苦笑しながら顔を上げる。

「悩み事が多いもんでね。ミケ」

アニ・レオンハートと同期の新兵たちの監視の指揮をとるその分隊長が、わずかに笑みをこぼした。

エレンたちを中心とするアニ・レオンハートの捕獲作戦とは別に、ミケ分隊には新兵たちの隔離と監視が指示されていた。憲兵団所属であるはずの彼女が女型であった場合、壁外調査の日程や細かな時間、情報を知ることが困難であったはずだ。しかし、女型は正確に調査兵団の隊列を追い、半壊にまで追いやった。エルヴィン団長は、それができた可能性のひとつとして、104期の新兵たちの中に、女型の仲間、すなわち超大型や鎧の巨人がいると考えたのだ。

「104期生の出身地はわかったのか」

施設の中で唯一の物見櫓である塔にアンカーをひっかけながら、ミケ分隊長が言った。大柄な体格には不利なはずの立体起動装置を、まるで自分の翼のように操ることのできる彼は、兵団の中でリヴァイ兵長に次ぐ実力者である。

「いや。そちらはまだだ。申請が遅かったからね、まだ手間取ってるらしい」  
「そうか」

ミケ分隊長に続いて、クシエルも放ったアンカーを巻き上げるために両手にもった装置のトリガーを引いた。

きゆるりと独特のワイヤー音と共に、体全体が宙づりになる。重力と引つ張り力、そして風力に逆らわないように体を預けて、彼女が塔の上に足をついたときには、すでに彼はアンカーを全て巻き終わり、装置のグリップを両脇に収めているところだった。

クシエルもミケ分隊長も、共に兵団を長く生き抜く猛者である。兵団の中でも特に女性らしさを残すクシエルもまた、その腕は確かなものであるが、二人の立体起動には違いがある。クシエルが非力な代わり、その身軽さと長けた空間把握能力を駆使して、上下左右、そして立体起動の特質上不得手になりがちな低空飛行が得意なのに対して、ミケ分隊長はスピードには劣るものの、パワーと瞬発力、そして持久力は、必ず抜けている。

彼は、その優れた屈強な体格故に、アンカーを巻き上げる際に体にかかる圧を、筋肉で耐え抜くことができるから、初速が速い。

一方のクシエルは、子供の頃から兵士として鍛え上げられた調査兵とは違い、成人してから訓練を受け始めたので、どうしても骨格や筋肉で他の兵士に劣る。元々のセンス故、空中に舞ってしまえば彼女の立体起動は流れるように速いが、もともと圧がかかる初速はお世辞にも速いとは言い難い。

そんな差が、こうしたわずかな上下の動きのみで、露呈するのだから、クシエルは少しだけ悔しく思う。

「あまり悩みすぎるな。お前は笑つてるときが一番いい」

わずかな時間で悶々と考え抜いたクシエルを見上げて、塔の中に降り立った彼が笑った。長い前髪の間からのぞく小さな目は、優しくゆるめられていたので、クシエルも思わず破顔する。

「どうしたの、ミケ。クシエル」

地上から塔へと登ってきた二人に、そう問うてきたのは彼の副官のナナバである。ミケと親しい仲のナナバは、短く刈り上げた髪が特徴的な、線の細い女性である。女性にしては少し低めの声と、端正な見た目で、毎年新兵たちに「男装の麗人」と噂される美丈夫だ。

「いや。クシエルがリヴァイやエルヴィンと離れて拗ねていただけだ」

「なんだ。いつものことじゃないか」

ミケの軽口に、ナナバが笑う。その後ろで遠くを見つめて見張りをしていたトーマが、つられて少しだけ口元を緩める。

「そうじゃないって！何言ってるの、ミケ！」

「確かに、エルヴィンに「自分も連れて行け」って食ってかからなかったのは偉かったね」

茶化すように言ったナナバに、「違うって!」とクシエルが顔を赤らめて反論する。彼らは皆、クシエルよりも在団歴も年も上の兵士である。だからだろうか、クシエルより後に入団したリヴァイヤ、先輩だが年下のハンジとはまた違った関係性が彼らの間にはあった。見た目よりも気さくな彼らに、やけにからかわれるのは、この七年ほど全く変わらない。

「クシエルは最近は何年下の男に夢中だからな」

「ああ、イリヤ?彼も個性的だよな。あんたも悪い女だね。乗り換えかい?」

「だから!」

黙って見張りを続けるトーマが、ぷつと吹き出す声をする。任務中とは言え、気心知れた仲間だけの塔の上に、穏やかな空気が満ちたとき。

突然、わずかに笑みをこぼしていたミケ分隊長の表情に緊張が走った。人よりも優れた嗅覚をもつ鼻をひくり、とひくつかせる。

「ミケ?」

鋭く視線を走らせて、彼が周囲を見渡す。辺り一帯は、何の変哲も無い草原が広がるばかりである。青い空の下に広がる緑の平原。そんな穏やかな光景を前に、ミケ分隊長が鋭く尖った声でクシエルを呼んだ。

「クシエル!早馬に乗って報告しろ!」

「え?」

南方の平原の向こう。その一点を見据えて、彼が顔を青くしながら言った。クシエルには、まだそちらに何も見えない。

「おそらく104期調査兵団の中に巨人はいなかった……!」

まさか。

ミケが見る方向に、クシエルは視線をやった。一瞬、何か蠢く虫のように小さな影が見えた。

「南より……巨人多数襲来!!ウォール・ローゼは……突破された!!」  
交戦の火蓋は切って落とされた。

端正な街並みが瓦礫に埋もれ、その隙間から、罪なき住民たちの赤い血がにじみ出していた。まさに、ストヘス区は地獄絵図と化している。

怒号と悲鳴が街中に満ちる。それは、五年前のあの日のシガンシナ区の悲劇を想起させる。しかし、エルヴィン・スミスは手錠をはめられた両手を握りしめたまま、微塵もその視線を揺るがせなかった。

「終わった」

彼と、彼を拘束する憲兵団の面々が見守る先、ストヘス区の壁付近の広場に、ひらりと見事な立体起動で舞い降りた鳥のような人物。人類最強と呼ばれる、エルヴィンの懐刀が街を破壊し尽くした巨人のうなじを削いだのが遠目からでも見えた。

「……エルヴィン。お前……!!」

呼ぶ声に振り向けば、憲兵団師団長であり、かつての友、ナイル・ドークが彼を怒りに満ちた目で睨みつけていた。街の安全を護る憲兵団の長だ。自分がしたこと全うたる正義感でもって憎んでいるのだろう、とエルヴィンはその友の正義感に少しだけ羨望を抱いた。

「目標の様子を確認したい」

エルヴィンは憲兵団の兵士たちに目配せして、両手に枷をはめたまま、さっさと足を広場へと向ける。勝手に歩き出す調査兵団団長たる罪人の行動に、兵士たちはうろたえながらそれを追うばかりであった。

イリヤを班長としたアルミンやエレンの班が、目標であるアニ・レオンハートを地下空間へとおびき出す作戦は、作戦の露呈によって目標が街中で巨人化したことで失敗に終わった。目標が巨人化したこと、そしてエレンの巨人化までに時間がかかったことにより、調査兵団は再び数班の人員を失ったが、イリヤ率いる班員たちは全員無事であった。

その後、女型の巨人はハンジ分隊長率いる第四分隊の罫をもかいく

ぐり、壁の向こうへと逃げようとしたが、巨人化したエレン、そしてミカサ・アツカーマンの機転によってそれは防ぐことができた。

だが、結果として、アニ・レオンハートの捕獲という作戦は失敗に終わったと言える。

「作戦成功、とは言えねえな」

憲兵団に拘束されているエルヴィンに、痛む足を引きながら近づき言ったのはリヴァイである。広間には、すっかり蒸発し、骨だけになったエレンと女型の巨人の残骸が大量の蒸気を放っている。

その足元で右往左往する調査兵の間に、アニ・レオンハートを包む結晶が見えた。彼女はエレンにうなじから出されそうになった時、そのまま透明の殻に閉じこもってしまったのだ。おそらく硬質化の能力であろうと考えられたが、結果として調査兵団は彼女を目の前に全てを失うこととなった。

透明の棺の中で、アニ・レオンハートは口を閉ざして眠りについて目を開けることはない。

調査兵団の一同が、ストヘス区の住民の命を奪ってまで得ようとしたものは、目の前ですり落ちていった。それに一同が焦る中、エルヴィンだけは希望を見出していた。

「いや。我々調査兵団の首は繋がった。おそらく、首の皮一枚で」

「……だといいがな」

リヴァイが目をそらして言った。

「エルヴィン。区長からだ。今から事情聴取をさせてもらう。リヴァイ、お前は待機だ。……いいいな!？」

苛立った声で彼らに言ったのは、ナイル師団長である。その師団長の指示で、エルヴィンの枷が外される。忌々しそうな顔のナイルを見るに、エルヴィンの言う通り、彼は「罪人」ではなくなったようだ。ここから先は、エルヴィンの口八丁の出番だろう。「異論ない」と答えたエルヴィンに、憲兵団たちは戸惑いを隠しながらも彼を区長のいる本部へと引き立てようとした。

そのとき、焦った声がエルヴィンの背中を叩いた。

「エルヴィン団長!!壁の中に巨人が!!」

振り向けば、そこにいたのは、イリヤ・ツエラン調査兵だった。顔面蒼白の若い兵士に、リヴァイが「落ち着け」と諭すように言う。彼は息を切らせながら、「壁に」と繰り返す。

不思議に思ってみれば、広間でアニ・レオンハートの結晶を運んでいた調査兵たちがざわついている。その中心で、なにやらハンジが分隊長らしく厳しい顔で指示をとばしていた。その側には、見慣れぬ格好の男が立っている。

「……ウォール教の？」

遠目からでも、首元に掲げた高価そうな金色の首飾りがよく輝いて見えた。あれは、ウォール教独特の信仰の証たる首飾りだ。

「女型の巨人が傷つけた壁がはがれて、穴から巨人の顔が見えました。今、ウォール教の司祭の指示でハンジ分隊長たちが壁の穴を塞いでいます」

息を切らし、汗をにじませてイリヤが報告する。その報告に憲兵団たちは一様に戸惑ったようにざわめいた。黙したままなのは、リヴァイとエルヴィンだけである。ちら、とリヴァイから視線を投げられたのを察して、エルヴィンは頷いた。

状況は混乱を極めている。

「そちらはハンジに任せる。司祭から情報をしぼり出せ。どんな手を使っても吐かせるんだ。イリヤ、君はハンジのもとにつけ。私は区長との事情聴取に赴く。リヴァイ。お前はハンジの代わりに目標の結晶を地下へ運ぶ指示を」

「了解だ」

「承知いたしました！」

指示をもらってその場を離れようとする二人。その姿に、エルヴィンはイリヤの名を呼んで止めた。イリヤが不思議そうに振り返り、リヴァイはちらりと視線だけエルヴィンに寄越したが、すぐにそのまま広間の方へと足を向けて立ち去った。

「今回は怪我はなかったかい」

「え？あ、はい！今回はミカサの援護もあり、怪我は一切ありませんでした」

「女型と交戦して無傷とは大したものだ。良かった」  
「え？」

「君に何かあれば、私はクシエルに合わせる顔がないからな。治るとはいえ、気をつけてくれたまえ」

ナイルがエルヴィンを催促する声がある。エルヴィンは、新兵とも言えるほど若いその兵士を労って、憲兵団のもとへと足を運んだ。言われた側のイリヤは首をかしげて意図を理解できていないような表情のまま、その場をあとにした。

高くそびえる壁の向こう。赤く滲んだ太陽が沈みかけている。その夕暮れの街の中は地獄に満ちている。しかし、エルヴィンだけは、その地獄の向こうの景色を見据えて、拳を今一度握りしめた。

\*\*\*

「簡易的ですが、穴は防げました。今夜は凌げるかと思えます」

壁の上。夜に沈みつつある街を見下ろしながら、イリヤは後ろに控えているハンジ分隊長へと告げた。彼の横では、身を乗り出してウォール教のニツク司祭が穴が布で塞がれていることを確認している。

「さて……。そろそろ話してもらいましょうか」

妙に緊迫した沈黙が満ちていた壁の上で、口火を切ったのはハンジ分隊長であった。

「この巨人は何ですか？なぜ、壁の中に巨人がいるんですか？そしてなぜあなた方は、それを黙っていたんですか？」

身をかがめて壁の下を覗き込む司祭に、常とは違ってゆっくりと、抑揚少なく分隊長が問う。珍しく汗に滲んだその横顔は、静かな戸惑いに満ちていた。ゴグルを外した彼女の緊迫した横顔に、平穏な静けさとは違う恐ろしさを、イリヤは感じつつ後ろに身を引いた。

「私は忙しい！教会も信者も、めちゃくちゃにされた。貴様らのせいだ！あとで被害額を請求する。さあ！私を下に降ろせ」

ニツク司祭が体を起こして何食わぬ顔でそう言った。イリヤがそ

の物言いに腹をたてる前に、明らかに空気を一変させたのはハンジ分隊長と、その隣で控えていたモブリット副官である。

「いいですよ」

が、先に動いたのはハンジ分隊長であった。

「ここからでいいですか?!」

彼女が、右手でニツク司祭の胸ぐらを掴み上げ、そのまま壁の端へと引きずり込んだのだ。彼女が手を離せば、真つ逆さまに司祭は地面へと叩きつけられるだろう。女性とは言え、鍛え上げられた分隊長に、司祭はなすすべなく手をばたつかせるだけだった。

「分隊長!」

「寄るな」

突然の上官の行動に止めに入ろうとした副官たちを、彼女は一言で制する。

「ふざけるな!お前らは我々調査兵団が何のために血を流しているのか知ってたか!?巨人に奪われた自由を取り戻すためだ!そのためなら、命だつて惜しくなかつた……」

彼女の声が、イリヤが聞いたこともないくらい怒りに満ちている。

その上官は、冷たく言い放った。

「いいか?お願いはしていない。命令した。話せと。そしてお前が駄目なら次だ。……何にせよ、お前一人の命じゃ足りないと思つていない!」

仲間の死を背負った彼女が、その司祭の体をさらに壁の端へと追いやる。もう彼の上半身のほとんどは空中に放り投げられていた。

しかし、情けない声を発していた司祭は叫んだ。

「手を離せ!」

「今離していいか?」

「今だ!」

「だったら死んでもらおう!」

そのやりとりに、モブリット副官が「ハンジさん!」と顔を青くして彼女を諫めようとするも、彼女は聞く耳を持たない。マズイ、とイリヤが思つた時。

「私を殺して学ぶがいい！我々は必ず使命を全うする。だから、今……」

司祭が声を震わせながら、それでも両手を広げて大きく叫んだ。

「この手を離せええええええ!!!!」

沈黙の中に、「かみさま」と願う男の声が小さく漏れる。それに、手を震わせた分隊長が、乱暴に彼の体を仲間の方へと投げた。ひっくり返って、命を救われた男はごろりと転げた。

「……ふっひひ。ウソウソ。冗談……」

分隊長が笑いながら壁に腰を下ろす。ニツク司祭が嗚咽をもらして涙を流す姿に、イリヤは同情心をそそられて、彼の近くに膝をついた。

「ねえ、ニツク司祭。壁って全部、巨人でできてるの……?」

わずかに震えた分隊長の問いかけは、泣く司祭には届かずに空中を舞ってそのまま霧散する。肩を震わせる信者の姿に、イリヤはハンカチを差し出した。

「顔をふいてください」

「……き、きみは」

「イリヤ・ツエラン調査兵です」

差し出したハンカチに顔を上げた司祭に名乗れば、彼の手がびたりと止まった。みるみるうちにその表情が一変する様子に、イリヤはどきりと胸を強張らせた。

「ツエラン……。救世主の末裔が……。死んだはずでは」

今度は「救世主」か。見知らぬ単語に、イリヤは動揺を隠しきれぬまま、息をつめた。ツエランの名前に反応した司祭に問おうと口を開きかけた時には、その男は「喋るまい」とでも言うように、イリヤから顔を逸らして口を真一文字に閉じてしまった。

自分のあずかり知らぬ肩書きに、イリヤは再び自身の由来の謎に身を焼かれる。

「詩人」、「裏切者」「出来損ない」。そして、「救世主」？

「分隊長？」

「ああ。いつの間にか忘れてたよ……こんな初めて壁に出た時以来の感覚だ……」

ハンジ分隊長のつぶやきが、静かな壁の上に響く。

「怖いなあ……」

その声が、イリヤの心中にも滲んだ。

知らないという恐怖が、彼の中を蝕み始めていた。

\*\*\*

「いつだってお前はそうだ。夢みたいな理想論で相手を丸め込みまう。まさかこんな罪人が野放しにされるなんて……」

薄暗い会議室で、部下たちと部屋を出ようとしたエルヴィンに、痛烈な批判がとんできた。

区長たちによる聴取が終わり、部屋に残ったエルヴィンにそう悪口を叩いたのはナイルである。副官を二名連れたエルヴィンに対し、師団長であるナイルは共を連れていなかった。エルヴィンは、副官二名に部屋を退出するよう命じた後、薄暗い部屋の中を振り返った。

夕暮れの最後の橙色の陽光が、細く部屋に差し込んでいる。その陽光に、わずかに照らされたナイルが悪態をつく。対するエルヴィンは、暗い影になった扉の前で、眩しそうに彼を見つめた。部屋には他

に誰もいない。

「ナイル。君の非難は正当だ。私はそれに報いるために人類のため、この身を捧げる覚悟だ」

「人類、か。……お前は変わらないな」

「君は内地の人間を守れ。私は私の仕事をする。それぞれの仕事をす。それだけだ」

そう言った時、壁の上にそなえられた鐘の音が鳴り響くのが部屋の中にも聞こえた。

それは、エルヴィンにとっては聞き慣れた、門扉解放の鐘の音だ。しかし、この内地のストヘス区には似つかわしくない音だ。壁が開くときだけ鳴らされるそれ。

つまりそれがシーナ内地のストヘス区に響くということは、異常事態の発生を告げる。

「ナイル」

鐘の音に緊張を走らせたエルヴィンが彼を振りむいた瞬間、強い力で右肩をわしづかまれた。

「エルヴィン！お前ら調査兵団が今、必要なことはわかってるがな！俺はお前がしたことを絶対忘れねえぞ。王政が許しても、俺は忘れねえ。今日のこととは絶対にな……!!」

肩を掴んで、睨みあげてくるナイルにエルヴィンは息を呑む。

その鋭く小さな目が、薄暗い部屋の中で自分を憎むように見上げている。その友の鋭い視線に、エルヴィンは場違いにも、安堵したように笑みをこぼした。

「ナイル。お前が憲兵団にいてくれてよかった。忘れないでいてくれ。俺を、許してくれるな」

そう笑って、部屋の扉を開けた。

ナイルが何か言うより早く、扉を開いた瞬間に、血相を変えたエルヴィンの副官たちが振り返った。やはり、何かあったのか。

「どうした」

「団長！先ほどミケ分隊からの早馬が！……ウォール・ローゼが突破されました！巨人が侵入したそうです！」

その報告に、背後でナイルが言葉を詰めたのが気配でわかった。エルヴィンはすぐに部屋を出て、頭の中で算段をたて始める。

「早馬は……クシエルか？報告を聞きたい。連れてきてくれ」「いえ！」

振り返った副官たちが、二人して言葉を少しだけ躊躇った。それに不思議に思い、どうした、とエルヴィンが再度問う。

「早馬はトーマです。クシエル副官は、ミケ分隊長たちと共にローゼに残っているようです。生死の如何はわかりません」

彼ら二人の副官の先輩格たるクシエルの不在に、彼らの声が震えた。エルヴィンの中で、少しだけ何かが音を立てた。

「クシエル!!」

上官のナナバさんが、地面に落ちていったその人の名を必死の形相で叫んだ。私は揺れる塔の上、クリスタを庇いながら、その小さな体がワイヤーの勢いを使ってくると反転し、着地する様をしっかりと見た。まるで黒猫のように体をしならせてギリギリのところに着地したのは、さすが調査兵団の歴戦兵、と口笛を吹きそうになったほどだ。

「後ろだ!」

ほっとした矢先、隣で叫んだのはコニーを抱えたヘニングさんだった。彼が叫んだのと、塔のへりにいたりーネさんが彼女の名を呼びながら下に飛び降りたのはほぼ同時だった。

「クシエルさん!」

思わず、私は叫んでいた。喉からほとばしったその声が、切羽詰まっついて我ながら驚いた。彼女から手渡されたライフル銃を握る手だけが、怯えたように震える。

私の声に反応したわけではないだろうが、その黒髪の彼女が、上を見上げて、まあるい目を瞬かせた、その次の瞬間。

とんでもなく素早い動きの巨人が、ぱくりとその口に彼女を一口に収めてしまった。私たちの視界から、あの「女神様」の姿が消える。「クシエル!!」

ナナバさんとゲルガーさんが悲痛な声で泣くように叫んだ。ああ、確か二人は彼女との飲み仲間だと言っていたか。

しかし、私たちの悲痛な声もむなしく、その5メートル級ほどの巨人は、ひとつ大きく口を動かして中身を咀嚼した。

ぼきり、と骨の折れるような音が、塔の上にいる私の耳にも、生々しく響いた気がした。

\*\*\*\*\*

日が沈み、ストヘス区の街並みはすっかり夜の底に沈み込んでいた。ストヘス区内にある兵团本部では、一帯に松明がたかれ、翼と一角獣のシンボルを背負う二兵团の兵士たちが忙しくなく走り回っている。

「ナイルの采配でなんとか憲兵团の数隊を援助に回してもらえることになった。それらの準備が出来次第、すぐに出発する。エルミハ区まで進んだ後、ハンジを班長として巨人出現のポイントへミケ分隊への援軍を出す。その後、本隊は憲兵团をつれてトロスト区まで南下。リヴァイ、お前は司祭の監視についてくれ」

机の上に広げられた壁内の地図を見ながら、淀みなく言った上官に、リヴァイはいつも通り「了解した」と返す。金色の男はウォール・ローゼに巨人出現の報を聞いても、特に大きく顔色を変えることなく、迅速かつ的確な指示を出した。

その指示はストヘス区長や憲兵团師団長への請願という形でもなされ、「人類存亡の危機」に対応することを優先するということで、エルヴィンへの責任追及は一旦保留となった。むしろ、彼の請願により、有事の際の調査兵团の影響力の大きさと、憲兵团の無力さが露呈した形となった。

——大した奴だ。

リヴァイは副官二名に指示を矢継ぎ早に出す上官を、横目で眺めながらひとりごちた。

「おい、エルヴィン。少し休め」

そうリヴァイが口を開いたのは、エルヴィンについている副官が二人とも退出し、大きな執務室に二人きりになった時だった。しかしエルヴィンは、「ああ、ようやく喋ったな。「了解」しか言わないものだから、てつきり寝ているのかと思ったよ」と似合わぬ冗談を、口の端

に笑みを浮かべて言った。なぜか喧嘩腰に投げられたその言葉に、瞬間的な苛立ちがリヴァイを襲ったのは言うまでもない。

「お前が無駄な嫌味を言う時は決まって、頭がうまく回ってねえ時だ。いいから、少しだけでも休め」

「この非常時にか？リヴァイ兵士長らしからぬことを言う」

広げた地図を丸めてしまいがら、エルヴィンが鼻で笑った。そう言う碧眼は、一度もリヴァイを見ていない。だから、彼はリヴァイの眉間の皺がいつもよりさらに険しく刻まれたことに、全く気がつかなかった。

「おい、金髪野郎。テメエは自分の状態もろくに把握できないデグの棒か？一体いつから水も何も口にしてない？そんな状態でエルミハ区まで行ってみる。途中で脱水症状でもおこして干からびるのが目に見えてるぞ」

どん、と大きな音を立ててリヴァイが机の上に水差しを置いた。先ほど、通りすがりの憲兵に頼んで持ってきてもらったものだ。夕刻の区長たちによる聴取からこちら、アホみたいに喋り通しの上官に飲ませてやろうとしたのに、そのアホはアホらしく延々部下どもに指示を出し続けているから、すっかり水も生ぬるくなっていた。

「……金髪野郎とは懐かしい呼び名だな」

「テメエがそんな風になるのは決まって焦つてるときだ。しつかりしろよ、団長様」

下から睨みつけてやれば、しばらくの沈黙の後、エルヴィンは「参ったな」と困ったように笑った後、降参したようにソファに腰を下ろした。

「確かに昼から何も口にしていない。出発前に野戦食だけでも食べておこう」

「今食え。俺が見てる前で食え」

間髪入れずにリヴァイは言う。このアホが人の言うことなど素直に聞くはずなのだ。今まで何度、こうしたやりとりをしてきたのかわからない。でかい子供でもあるまいに、と思いつながら、リヴァイはグラスに水を注いでやる。リヴァイの周りには、このアホのように手

のかかる人間はやけに多い。ハンジも、クシエルも、そういう類の人間である。本人たちは世話されている意識がないのがまた夕チが悪い。

「……そんなに焦るのは、クシエルのことか」

懐から出した野戦食の包みを開け始めたエルヴィンに、リヴァイはグラスを差し出しながら問うた。しかし、その金色の男は、ちらりと青くて大きな瞳をリヴァイに寄越しただけで、何も言わずにただ野戦食を口に運んだだけだった。

——難儀な奴め。

その女に関する事だけは、決してリヴァイに本音を漏らそうとしない男に、リヴァイは舌打ちしたいのをこらえながら思った。

振り返って見上げた窓の外の空には、高く丸い月が昇っている。

それは、調査兵团主力部隊がストヘス区を出るほんの数十分前。ちようど、ミケ分隊の生き残りたちが、ウドガルド城へと身を寄せた頃合いのことだった。

ウドガルド城へと身を寄せた調査兵团の武装兵たちが全滅するまで、あと数時間。リヴァイが話題にした団長付き副官の一人、クシエルを含んだ同僚が戦死したことを彼らが知るのは、それからさらに数時間後のことだった。

\*\*\*

話は少し遡る。場所は、件のウドガルド城である。

後に、ここでの攻防と、それに尽力して戦死した調査兵たちは、人類の英雄たる兵士として賞賛され語り継がれることとなるが、そのようなことはもちろん歴史上の物語であって、この時は誰も知る由のないことである。

それは、調査兵团の主力部隊が彼らミケ分隊を援護するため、シーナの突出地区のひとつ、エルミハ区まで来た頃である。ローゼ内に発

生した巨人に遭遇したミケ分隊の生き残りは、捨て置かれた古城、ウドガルド城で休息をとっていた。

近隣の集落への避難勧告を終えた後、壁に空いたと思われる穴を捜索した南班と西班は、合流後にその古城へと身を寄せた。

巨人発生確認から、悠に半日は過ぎているだろう。夜も深まり、巨人も寝静まる安息の夜が、彼ら孤立した調査兵の心身を癒すわずかな時間を連れて来ていた。

ナナバ率いる西班にはユミルとクリスタが、ゲルガー率いる南班にはライナーとベルトルト、そしてコニーがいた。104期のなかでも10位以内の連中がこぞって生き残るとは、何かの因果か。そう思いながら、ユミルはロウソクに火をともして古城の中を物色している最中である。

104期の中でも特にかかわりのあつたサシャ・ブラウスの姿を、散会してから見た者はいない。散会指示を出しながら、ひとり巨人のおとりとなって兵団施設に居残ったミケ分隊長の生存も不明確なままだ。さらに、コニーの故郷にいたという動けない巨人、空いた形跡のない壁。そして、昼間に発見してから一度も巨人に遭遇していないという状況。数多くの不自然な状況に、先輩方、歴戦の兵士もいくらか困惑しているようだった。

——まさか、ここで終わりとはな。

ユミルはため息をついた。推測の域を出ないが、彼女は今の状況を少しは把握しているつもりだった。要は、この壁の中の安息はもう長くはもたないのだ。マーレの国が、ついに憎むべき「悪魔の民」を滅ぼしに来た。そういうことなのだろう。

ならば、自分が生き残る術もそうそうあるはずもなかった。

「君が淹れる紅茶は少し薄いんだ」

ふと、古城の塔の中腹にあたる部屋で、仮眠を取っているはずの上官の声がしてユミルは振り返った。扉の向こうから、ナナバとクシエルが小声で話しているのが聞こえる。クリスタやコニー、ベルトルトが壁際でぐっすり眠りにについているのが扉の隙間から垣間見えた。

「そう?」

「そう。ミケが言ってた。葉の量をけちってるだろ。だからリヴァイにマズイって言われるんだ」

「薄い」

「そう。それから私が見るに、蒸らす時間がとんでもなく短い。3分は蒸らさないと葉が開かない」

「蒸す。3分?」

「そう。3分。急いちゃダメ」

「ケチつてもダメ。せつかちでもダメ」

「そうそう」

どんな話をしているのかと耳をすましてみれば、なんとも気の抜ける会話に、ユミルは目を瞬かせた。簡易カップに紅茶を入れてすすっているナナバは、昼間に見せていた凜とした表情ではなく、どこか優しいげな笑みを浮かべている。男性然とした人だと思っていたが、こうしてみると、どこからどう見ても女性だ。隣で膝を抱えているクシエル副官は、何やら熱心にメモを取っている。どうやら紅茶の入れ方をレクチャーしてもらっているらしいと気づいたユミルは、盛大なため息が漏れるのを隠せなかった。

とんだ腑抜けた上官たちだ。

こんな死地の真つただ中、明日をも知れぬ現状で、そんな事を話しているだなんて。

否、だからこそなのだろうか。これが、何度も死地を潜り抜けてきた猛者どもの会話だというのだろうか。

ユミルは、自分が死を覚悟して最後の晚餐を探しているのが、なんだかばかばかしく思えてきた。あの上官どもは死ぬつもりなど一切なく、帰ってから淹れる紅茶について話しているのだから。はちみつ色の髪の女性兵士と、黒髪の女性兵士はひそやかにほほ笑みながら会話を続けている。それは、一見すれば、訓練兵団の可愛らしい少女たちのようにも見えた。ユミルがまだあの兵団にいた数か月前のあの頃、こんな風に屈託なく笑い合っていた少女たちが大勢いた。しかし、その多くがトロスト区で命を落としてしまって、今はもうほとん

どいない。

ユミルが息をひそめながら、その上官たちの、まるで少女のような無邪気な会話に耳を傾けていけば、しばらくしてそれは静かな寝息へと変わっていった。

「……………」

ここで死ぬことに恐怖があるわけではない。一度死んだ人生だ。この気まぐれな運命に翻弄された自分の生きざまに、何か意味を求めているわけではない。もちろん、立派な死に際を願っているわけなどあるはずもない。

もともと、路上で家畜以下の獣のように死にいく生まれだったのだ。

——ただ……。

ユミルは扉の隙間から垣間見える、友人の寝顔に視線をやった。まるで童話の中のお姫様のように可愛らしい友人。ユミルにとっての、唯一無二の大切なクリスタ。

——ばかばかしい。

ユミルは首を横に振ってその考えを振りほどいた。マーレが攻めてきているとするならば、どうあっても自分は生き残ることができない。それを再度確認するように心中でかみしめて、再び食糧あさりに戻った。

「ユミル。何してんだ」

そんな彼女に不意に声をかけたのは、同期の104期訓練兵、ライナーだった。扉からするりと中に入ってきた男は、何を考えているのか、うすら笑みを浮かべている。面倒な奴に見つかった、と舌打ちしそうななるのをこらえて、いつものように冷笑を返す。

「……何だよライナー。夜這いか？驚いたな。女の方に興味があるようには見えなかったが」

「ああ。お前も男の方に興味があるようには見えんな」

「はっ。あたしはこうして腹の足しになりそうなもんを漁ってるのさ。たぶんこれが最後の晩餐になるぜ」

特に注意をしに来たわけでもないらしいと見て、ユミルは再び食糧

あさりを始める。箱の中を無造作に漁っていると、それらしきものが姿を見せた。

「ゴニーの村の件だが、お前わざとはぐらかしたよな。できればその調子で続けて欲しい。あいつが家族のことで余計な心配しねえように……」

ほとんど確認めいた口調で言うライナーを背後に、ユミルは素知らぬふりで箱を漁り続ける。

「何の話だ？お、こりやいけそうだ。ニシンは好みじゃないが……」  
「他にもあるか？見せてくれ」

ライナーの言葉に、ほらよ、よ手渡した缶詰。箱の中には他にもいくつかの食料と思しきものがあるが、どれもこれも、ユミルの好きなものはない。最後の晚餐にしても味気ないじゃないかと思うもの、こんな状況でわがままは言っていられない。

「こりや缶詰か……ん？何だ……この文字は……」

驚愕の声を漏らすライナーに、ユミルはぴたりと箱を漁る手を止める。

「俺には読めない。ニシンと書いてあるのか？お前……よくこの文字が読めたな……。ユミル、お前……」

ライナーの言葉に、身体中から一気に汗が噴き出るのがわかった。冷たい汗が背中をつう、と落ちるのを感じながら、その男を振り返る。ライナーが、何か言おうと口を開きかけた時、

「そこで何してる」

胡乱な低い声がして、二人がはじかれたように振り返る。小部屋の入口で、腕組みをしてけだるそうに体を預けて立っている人物がいた。

「ク、クシエル副官」

「ライナー・ブラウンとユミルか。何してる。今すぐ答えなさい」

ひそめられた声は低く、先ほど少女のようなやりとりをしていた人とは同一人物とは思えない鋭さを持っていた。ユミルの口ウソクの

炎が揺れて、真つ暗闇の中に彼女の鋭い視線がきらりと輝く。

「し、食料が他にないか探していたんです。明日の分もなければ壁の穴の搜索は難しいでしょう」

ユミルが口を開くより先に、汗を浮かべながらライナーが早口で述べた。が、クシエル副官は冷たい表情のまま、ふうん、とけだるげに答えただけである。彼女は長く、兵団の中にいる異端者を探し出す仕事をしてきた人物だ。調査兵団に敵対する者を炙り出すことに長けた観察眼に、下手なウソは通用しない。下手にごまかそうとすれば、それこそ処罰を受けかねない。

「最後の晚餐かもしれねえって思ったんで、なんかいいもんじゃないか探してたんすよ」

「ユミル！」

「ライナーさんよ。変にウソついて誤解されちゃ、あたしらも困るだろう？…ここはきちんと話してお許し願わねえと」

「……仲間全員腹をすかしてるのは変わりないってのに、あなたは自分の分だけ最後の晚餐を探してたってわけだ」

冷たい声。よくよく見れば、副官はその細い背中にライフルを背負っていた。「女神様」とはよく言ったものだ。部下の粗相にライフルを持つてくるやつがあるか、とユミルは心中で舌打ちする。思った以上に、この上官は気性が激しいのかもしれない。

「あたしはこのライナーやクリスタみてえに良いヤツじゃないんでね。仲間の為にとか人類のためにとか、そういう崇高な精神持ち合わせてないんすよ」

ぶんなぐられるだろうか、とも思いながら、虚勢をはり冷笑すれば、以外にもその副官は目を瞬かせただけだった。

「……調査兵団にはとことん向いてない人間だね。どうしてこの兵団に？」

「まあ……そうなんでしょうけどね。別に、誰かに言われてここにいろわけじゃない。あたしにとっちゃ、「人類」のためより、「自分」のためという方が説得力があるっていうだけですよ」

「自分のため……？」

「お前の場合、クリスタのためだろ」

冷や汗を流して、視線をそらしながらライナーが口出した。ユミルは「同じことだろ」と舌打ちする。

そう。結局それは同じことだ。「クリスタのため」だなんて、きつと当のクリスタはひとかけらも望んじやいない。ならばそれは、つまるところ自分勝手な「自分のため」の行動なのだ。しかしそれが何のためであっても構わない。ウソ偽りがなければ、ユミルにとってそれが何よりも価値あるものなのだ。

「……まあ、そういうこともあるのかもね」

絶対怒鳴られる。そう思ってた半ばあきらめていたユミルだったが、クシエル副官は予想外にも、気の抜けた感じで彼女に同意を示した。

「はは……。懲罰房行きじゃないんすか？」

「こんな状況でどの房に入れるんだよ……。それに……。まあ、あなたの言う意味も分からなくもないよ。……。私もそう変わらないのかもしれないし」

「副官が？」

けだるげな雰囲気、副官が、ユミルの問いに初めて、少しだけ微笑んだ。その人はそのまま、何も言わずにライナーの持っている缶詰を彼の手からかすめ取り、

「美味しいそうなものはあった？」

と缶詰に視線をやって、目を丸めた。それは、まさに驚愕を表した表情だった。その驚きの表情に、ユミルは違和感を覚える。

「副官、どうしたんですか」

ゆっくりと、ライナーが問う。それは先ほど、ユミルに缶詰の文字を問おうとしたときに似た、訝しむような声だった。

「その缶詰が、何か、おかしいんですか」

探るように、ゆつくりと。ライナーは冷や汗を滲ませながらその女性に問うた。

壁の中の住人にしては珍しい、黒い瞳がロウソクの炎をうつしてきらりと光った。

「……あなたたち、まさか」

「全員起きろ!! 屋上に来てくれ!! すぐにだ!!」

彼女がひとつ、言葉を口にした瞬間。塔の上から、女性兵士のせつぱつまった声が聞こえた。ユミルが腰を浮かせるより早く、何か言いかけたその副官は、はじけたように扉から外に出て階段へと走っていく。

「巨人だ!!」

屋上で監視を勤めていた女性兵士、リーネが叫ぶ。仮眠をとっていたナナバたちが熟練兵よろしく、凄まじい速さで階上へと駆け上がった。その後ろにつくクシエルに、ユミルは気づけば叫んでいた。

「副官！あんたなんで?! あれがおかしいって分かったんすか!?!」

場違いな質問に、ユミルの後ろを駆けあがっていたコニーが何やら叫んでいる。クシエルは少し振り返り、

「……生き残ったら答え合わせしよう。お互いに」

とユミルを目をまっすぐ見つめてそう言った。

やはり。彼女は壁の外を知っている。「ニシン」の缶詰を見て、驚愕の表情を浮かべたのは、その文字が読めたことと、「ニシン」という壁の中にはいない海水魚の存在を知っていたことの証左だ。

なんだ。どうということだ。どうして壁の外を知っている人間が調査兵団をやっている。なぜ、彼女がいるのに、調査兵団は壁の外を知らないでいる!?!

考えられる可能性はひとつだ。

——クシエル副官は、調査兵団の裏切者。

屋上に出たユミルの髪を、冷たい夜風がすいていく。目の前の黒髪の女性は、明るい月光に照らされながらも、妙に落ち着いた表情で周囲を見渡していた。

月光が照らす城の周り。

十数体の巨人が、無数に動き回っているのがはつきりと見えた。子供のように遊びまわる小型の巨人。ぬらりとした目を屋上にいる人間からそらさずに、まっすぐに塔に向かってくる大型の巨人。

大小さまざまな形の巨人が、周囲を包囲していた。夜には巨人は動かない。そんな「常識」を覆す奴らが、食事を求めて塔にいつせいにむかってきていた。

先輩方の表情が厳しくゆがめられるなか、クシエル副官だけは、冷めたような視線でそれを見つめていた。

「おい……ふざけんじゃねえぞ……。酒も飲めねえじゃねえか俺は。テメエらのためによお!!」

ゲルガーが叫んで刃を抜いたのを皮切りに、他の兵士たちも塔のへりへと駆けながら刃を抜いた。その中で、ナナバがユミルたちを振り返る。

「新兵！下がってるんだよ！……ここからは立体機動の出番だ……！」

彼女が抜いた刃が、月光に照らされて銀色に輝く。迷いなく死地へと向かう様は、まさに命知らずと名高い調査兵団だ。

「おいクシエル！その背中の中の荷物早く捨てろよ!!」

「わかってるよゲルガー!!」

黒髪の細い背中が、言いながら不意に振り返った。

「ユミル。これ、頼むよ」

「お、おお!？」

ぽい、と無造作に投げられたライフルを慌ててユミルが受け取る。それを見届けた副官は、

「ユミル。生きてるうちに最善を尽くせよ。誰のためでもいいからさ」

と、なぜか笑って言った。

「行くぞ!!」

ナナバの掛け声で、五人の兵士が一齐に塔の上から飛び降りる。それが、ユミルが見たクシエルの最後の立体起動の姿であった。

その戦いの矢先、塔から身を乗り出したコニーが誤って落下したのを助けたクシエルが、巨人に襲われて空中でバランスを崩した。なんとか持ち直して着地したその場所で、奇行種と思わしき小型の巨人に一口に呑まれたのは、ほんの一瞬の出来事だった。その後、彼女の姿は巨人と共に夜闇に消えていった。

クシエルは、ウドガルド城の戦場から、巨人に食われて離脱した最初の犠牲者となった。

### 三章 遺志

一

いつの頃からか、肉体も精神も、完全に支配することができていた。おおよそのことは初見で人並み以上に出来ていたし、旧知の馴染みを失ったときでも、俺を慕ってきた部下を全て失ったときでも、生きて帰れる程度の平静は装うことができた。

だから、こんなことでいちいち荒立っていてはいけない。俺は、心臓を公に捧げた兵士の長たる人間なのだ。

「リヴァイ。いい加減その顔やめろよ」

「あ？」

「情けない顔だね。兵士長が聞いて呆れるよ」

エルミハ区に繋がる門扉の前。行軍全体がその門扉の解放を待っている時だった。ニツクという宗教野郎を挟んだ向こう側にいるメガネが、じろりと視線を寄越してきた。

「何がだ」

「心配しなくても、ちゃんとクシエルたちと合流して戻ってくるよ。彼らはきつと生きてるからさ」

「……………」

にかりと歯を見せて笑顔で振り返ってきたメガネに、呆れたようなため息が漏れる。自分がどんな顔をしていたかなど知りようもないが、そこまでひどい顔をしていたものだろうか。ちらりと見やれば、目の前にいたミカサがきつと視線を逸らした。

「……………」

舌打ちをこらえながら、手元の小銃の安全装置を外した。黒金竹で作ったという銃身から、ひやりと冷たさが伝わってくる。よく使い込まれている割に、丁寧に磨き上げられたそれは、本来の持ち主の性格をよく表しているようだった。

「……その銃は連発式か？なぜそんなものを調査兵団が持っている」  
「あなたには関係ないことだニック司祭。余計な無駄口叩く前に、やることがあるだろう」

王政からは製造を禁止されているはずの連発式の銃。その持ち主であるクシエルは昔、この壁の中の技術に違和感があると云っていた。ウォール教が隠しているのは、壁の中の巨人についてばかりではないのかもしれない。

「あなたはまだ何かを隠してるな。洗いざらい話してもらわねえとこつちも困るんだがな」

「……私には話せない」

押し問答だ。何度言っても、この宗教野郎は聞きやしない。何がこいつの口を噤ませるのか。ハンジが呆れたようにため息をついた。

「……その小銃の持ち主は、シグリ・アーレントという女性なのではないか」

司祭が、怯えたような視線だけをこちらに寄越して言う。

「シーナ内地では有名な話だ。王政を脅かす銃を持っていた女が調査兵団にいたと。シシイという娼婦の仕事もしていた売女が、」

「売女とはひどい言い様だね、ニック」

司祭の言葉を遮って、低い声で呻くように言ったのはハンジだった。茶色い瞳が、松明の火に照らされてぬらりと光っている。その瞳の奥に、底知れぬ怒りが見て取れて、俺はそのメガネの名を呼んでたしなめた。この女は怒ると厄介なのだ。

「確かに、そんな名前の女が在団していたのは事実だ。シシイという源氏名で娼婦をしていたのも本当のことだが……奴はもう調査兵団とは関わりがない。あれは、壁外追放になった。……もう六年近く前の話だ」

手元の拳銃を懐にしまい、ひと睨みすれば、司祭は再び口をつぐんだ。真一文字に結ばれた口元からは、もう無駄口は漏れそうもない。しかし、その女の話は、妙な方向へと飛び火していった。まず疑問を呈したのは、記憶力のやけにいい、アルミン・アルレルトだった。「リヴァイ兵長。しかし、その方は拳銃の件ではなく、無断での門扉解

放の咎に問われたのでは」

「……そうだ。奴は門扉解放、そしてそれに伴い、シガンシナ区への巨人侵入を許したとして処罰された」

「六年前の事件ですね。僕たちはまだ子供でしたけど、類を見ない凶悪な事件だったので記憶しています」

「ああ」

六年前の夜。確かに、あのシガンシナ区に数体の巨人が侵入した。すぐに出動した調査兵団の働きで、人的被害はなかったものの、あの事件は壁が破られる前のシガンシナでは受け入れがたいものだった。「とんでもねえ野郎だったって聞いてます」

拳を握りしめて、会ったこともない女を、まるで親の仇のように語るのはエレンだ。その頃から巨人への憎しみはあつたのか。このガキの巨人への憎しみはぶれがなくて、いつそ清々しい。

「……そういえば、あの夜も今日みたいな望月だったね」

星の川が流れる空を見上げながらハンジが呟く。それを聞いて飛びつくようにアルミンがさらなる疑問を呈した。つまり、「あの夜、巨人が動いていたのは何故か」と。

「巨人が日光を遮断されて活動を停止させるまでの時間にも個体差がある。あの夜に動いていた巨人は、ビーンのように日光を遮断されても長時間動ける巨人だった……。そう仮定するしかないね。あのとき動いていた巨人も、動きは緩慢だったし……。おそらく寝る直前だったんじゃないかな。本当は、以前行った実験で」

「クソメガネ。その話はもういい」

「ええ!?あの巨人は本当に興味深い子たちばかりだったんだよ!?あの子たちのような子がいるかどうかを調べるために、私が何度実験をしたっていい」

「あの女の話はもういいと言ってるんだ」

ベラベラとお喋りな口はこんな時でも健在か。鬱陶しいことこの上ない、と低く咎めたが、全くこたえていないようだった。代わりに、エレンとアルミンがびくりと肩を震わせた。

「あの子の話、本当に嫌がるんだから」

「その女と、何かあったのか?」

思わぬその問いは、司祭から発せられたものだった。隣を見上げれば、その初老の男もびくりと震えた後、視線を彷徨わせる。ビクつくくらいなら口を開くなど言つてやりたい。

「何かあったも何も、リヴァイと彼女はあれだよ。大人の関係つてやつだったのさ」

「クソメガネ!」

怒鳴つた瞬間、荷馬車が突然動き出した。見れば、門扉はすっかり解放され、軍列がその歩みを始め始めていた。エルミハ区の壁上に所狭しと焚かれた松明の炎が、区内の物々しさを語っている。

「……………不潔」

行進が始まつて荷馬車の中で落ちた沈黙に、ミカサがポツリと呟いた。その言葉だけが、やけにひりひりと耳に痛かった。アルミンは驚きに目を丸め、司祭は気まずそうに視線を逸らす。エレンだけが馬鹿丸出しで怪訝そうに首を傾げたのが、逆に苛だたい。予想以上に駆逐脳なバカだ。

その後、妙に気まずい空気を乗せながら、行軍はエルミハ区へと入つていった。ウォール・ローゼ内に巨人発生の報によつて、ローゼ内地の避難民が押し寄せているらしい。区内は物々しきに加えて、夜半にもかかわらず、住民たちのざわめきに占領されていた。

「……………テメエはこんな時に余計なこと言いやがって……………。頭にクソでも詰まつてんのか」

「別に今日も快便だったけどね」

荷馬車を降りて、エレンたちが先を歩いていくのを見送つた後、俺は監視対象の司祭を前に蹴り上げながら、メガネを睨みつけた。しかし返つてきたのはつかみどころのない笑顔だ。

「あなたが情けない顔してるからだよ。エレンたちも緊張しきりだし、ちよつと場を和ませようとしただけじゃないか」

「本気であるの話題で和むと思つてんなら、テメエの脳内は腐つてる」

メガネを睨みつけてやったが、そいつはずつと前方を見据えたま

ま、予想外にも神妙な顔をしていた。その目は、エルミハ区の避難民ではなく、その先の、ずっとどこか遠くを見つめているようである。それは、奴が思索にひたっているときの目だった。

「……リヴァイ。これ、あなたは見覚えがないって言ってたね」

懐から取り出されたのは、アニ・レオンハートが結晶化した際の力ケラだった。半透明の石は、不思議と鈍色に松明の炎を返している。一見すれば、それが壁と同じ素材などと誰も思いつきもしないものだ。

「ああ」

「私さ、これ、ずっと前に見たことあるんだよね」

「は？」

そこかしらで焚かれた松明の炎が、夜のエルミハ区を橙色に染め上げている。その橙色を、眼鏡のガラスが反射して、ハンジの目を隠した。ハンジは感情の読めない顔で、歯切れ悪く言った。

「これ、シグりを壁外で見つけた日に……。見たこと、ある気がするんだ……」

それは八年前のことだ。俺がまだ地下街にいた頃の話。

ハンジのその記憶が何を意味するかなど、その時の俺たちは想像だにできなかった。

\*\*\*\*\*

「イリヤ。こつちだよ。ここから先の計画はさつき言った通りだから、十分気をつけてね」

「はい、ニファさん」

立体機動装置にガスをありつけたけ充填した後、イリヤはハンジ班の精鋭のニファに連れられて、兵団施設の中を足早に進んでいた。エルミハ区から、ローゼ内地へと本隊に先んじてハンジ分隊長率いる分隊が出動する。イリヤは、その班員に組み込まれることとなったため、分隊に合流するところである。

今回も、イリヤに託されたのはエレンの護衛という任務だ。最近特に護衛らしき仕事などほとんどしていないな、と頭の片隅で思いながらも、イリヤは己に課せられた任務を果たすために、余計な思考を頭の外に追いやった。

ローゼ内地に巨人が発生したとするならば、それは人類存亡の危機なのだ。あの壁を破られれば、ピクシス司令が言ったように、わずかな領土をめぐって、生き残った人間同士の争いへと発展することは必ずだ。それこそが、人類の危機である。

「あなたの上官のクシエルさんもミケ分隊長のもとに配属されてたよね。間に合うといいんだけど」

心配そうな顔でイリヤに声をかけたニファは、小柄な女性兵士だ。あのハンジ班に所属するくらいだから、それなりに癖のある人物なのだろうが、彼女は兵団内でも女性らしくて人気のある兵士だ。とにかく可愛らしい。若くておしゃれで可愛い。正直、またこの人と働くことができて嬉しい。こんな時に不謹慎だが、とイリヤは大きく頷いた。

「大丈夫だよ。きつと」

その頷きを、上官の心配をする部下の頷きだと誤解したニファが、優しくイリヤの背中を叩いて元気付けてくれる。はい、と神妙に嬉しさを噛み締めながら返事をする。実際、イリヤはその上官のことなど全く心配していなかった。

ローゼから巨人出現の報をもたらしたのは、ミケ分隊長の班のトーマだった。こうした場合、十中八九クシエル副官が伝令となることが通例だったので、その彼女ではなくトーマが伝令兵としてストヘス区に走ってきたときは驚きが走った。団長や兵長も、彼女がローゼ内地に残ったという報を聞いて少々思うところがあったようだが、イリヤにとつては彼女の生存はそれほど重要ではない。

というより、横柄で乱暴で、人の耳を遠慮なく拳銃でぶつ放すような人はそうそう死にはしない。一見常識人のように見えるが、あの女の顔面の皮は相当分厚い。ああいう類の人間は殺しても死なないものだ。

「エレン」

ハンジ分隊長とモブリット副官と話しているエレンの姿を認めて、イリヤは声をかけた。

「体は大丈夫か」

「ああ。ここからは俺も馬で行く」

「イリヤ。君もリフトのところに行こう」

「はい。……あ、ハンジ分隊長。エルヴィン団長より伝言です」

会議も一通り終えたらしい分隊長たちの足を止めて、イリヤは先ほどまで団長たちと話していた内容を伝えた。それは、イリヤがハンジ班の会議に参加できなかった理由だった。

「トロスト区より、ピクシス司令からの伝令兵が数名来ています。トロスト区内の状況は、現在のところ問題なし。ローゼ内地にはった防衛戦も持ちこたえているということですよ。……それから、一名、応援に来たという者が……」

「応援？一名？」

トロスト区から、応援に来た兵士が一名。その者の処遇について、団長とのやり取りは非常に長引いた。イリヤの説得で、その応援の者をハンジ分隊長の指揮下に配属する許可を得たのは、ほんのつい先ほどのことだ。

「おい、来いよ」

後ろからついて来ていたその一名に、イリヤは声をかけた。線の細い、イリヤより小柄な男の影がおずおすと姿を現したのを見て、驚きの声をあげたのは、モブリットである。

「く、クルト・ウエルナーか!? 脱走兵がなぜ!？」

トロスト区攻防より数ヶ月前、兵団内の情報漏洩の罪にて拘留され、その後脱走した兵士。その脱走兵、クルトが、調査兵団の兵服を

身にまとい、立体機動装置をつけてそこに立っていた。分隊長は常よりも険しく、その栗色の瞳を細めて、低い声で命令した。

「……手短かに説明してくれ」

クルト・ウエルナーがトロスト区へやって来たのはまだ陽が沈む前のことだった。民間人の格好をした彼は、以前調査兵団で勤めていた者であり、この有事の際に自分の力を活かしたいと駐屯兵団に進言してきたのだと言う。クルトが脱走兵であることはピクシス司令の耳にも聞こえていたが、彼の並々ならぬ熱に、数名の伝令兵とともに馬を貸してエルミハ区へと使いに出した。

ストヘス区にいる調査兵団は、おそらくエルミハ区を通過する。それを予想したピクシス司令は、クルトの処遇をエルヴィン団長へと投げたのだ。確かに、その人事は駐屯兵団には決めかねるものだったのだろう。

そして夜半に駐屯兵団の伝令兵と共に、エルヴィン団長と合流したクルトは、その熱意をエルヴィン団長へと進言したのだ。もちろん、エルヴィン団長は復帰を許さなかった。イリヤの並々ならぬ説得がなければ、彼が再び双翼を背負うなど、あり得なかっただろう。

「脱走した罪は償います！しかし、今は人類存亡の瀬戸際。こんな有事の際に、命を使わないなんて俺には耐えきれません！どうか、もう一度ハンジ分隊長のもとで働かせてください！ここで人類のために死ねれば本望。運良く生き延びたときには、今度は罪を背負いますので！」

必死の形相で、クルトが言った。対するハンジ分隊長の目は冷めたものである。クルトは在団中は彼女のもとで働いていた、イリヤの同期だ。情に厚い彼女ならば、きっと許可してくれる、とイリヤは手に汗を握りながら許可を待った。

「……お前が裏切らない確証はあるのか？」

しかし、返ってきたのは冷たい声だった。クルトは大粒の汗を額からこぼしながら、口をつぐむ。

「は、ハンジ分隊長！クルトは、そんなやつじゃありません！それは、俺が」

「イリヤ。君の意見は聞いていない。……だが時間もない。クルトはイリヤと組むように」

絶対零度の低い声のまま、そう言われてクルトとイリヤは一瞬呆けたように目を瞬かせる。その言葉の意味を理解したのは、クルトにモブリットが、ガスの補充について確認したときだった。

「あ、ありがとうございます!!ハンジ分隊長!!」

喜び声をあげたクルトの表情は、16歳の少年然とした幼いものだった。イリヤはそれを見て、ほっとする。彼にとつての唯一生き残った同期だ。

「イリヤ。口添えありがとう。助かったよ」

「……………ああ。またお前と働ける日が来るなんてな…………」

イリヤが彼と最後に会ったのは、女型の巨人と交戦した壁外調査の一月ほど前のことだ。あの古城での待機中に、クルトはイリヤに対して、「俺と来て欲しい」とどこかへと誘おうとした。その時は兵団への不信任を露わにしていた彼が、また舞い戻って来た。

その違和感と不審さが拭えたわけではない。ただ、イリヤは、四年以上苦楽を共にしたその同期の熱を信じたかった。人類のために、と再び空を飛ぶことを覚悟してきたその友人を、信じたかったのだ。

それこそが、イリヤの最も悪い「甘さ」であると指摘する上官のクシエルは、ここにはいない。イリヤはただ、アニ・レオンハートの悲しげな横顔を思い出すばかりである。彼女を信じてやることができれば、もつと選べた道はあったのではないか。イリヤはそればかりを考えていた。

「分隊長。いいのですか?」

「彼が「敵」だったとして、勝手に動かれるより、側に置いておいた方がいい。エルヴィンの判断は、そう思っていることだろう」

ひそやかに囁かれた上官たちの声は、イリヤの耳には入らなかった。

「それより、だ」

「分隊長？急ぎましょう」

「モブリット。ちよつと待つて」

ハンジ分隊長が、足を止めた。彼女が見る先に、私服姿のリヴァイ兵長と、ニック司祭がいる。兵士ばかりがいる兵団施設内に不相応なその司祭の格好に、クルトが首を傾げた。

「あれは？」

「ウォール教のニック司祭だ。……ハンジ分隊長のご友人、だそうだ」  
「友人？」

暗い表情の変わらぬ司祭に、ハンジ分隊長が駆け寄って問う。

「何か、気持ちの変化はありましたか？」

しかし、司祭は口をつぐんだまま、視線を地面に落とすだけである。最後に何か、と問うたハンジ分隊長が、苛立ったように声を荒げた。

「時間がない！わかるだろ？話すか黙るかはつきりしろよ！お願いですから!!」

「……私は話せない。他の教徒もそれは同じで変わることはないだろう」

「それはどうも!!わざわざ教えてくれて助かったよ!!」

分隊長が投げやりに、かなり横柄に踵を返した時、司祭はさらに言葉が続けた。

「それは自分で決めるにはあまりにも大きな事だからだ。我々ウォール教は、大いなる意志に従っているだけの存在だ」

「誰の意志？神様ってやつ？」

「我々は話せない。だが、大いなる意志により、監視するよう命じられた人物の名なら教える事が出来る」

「監視？」

「……その人物は今年調査兵団に入団したと聞いた」

思わぬ話の展開に、イリヤやクルトだけでなく、エレンたちもまた足をとめてその話に聞き入る。今年入団したとなると、エレンたちの同期ということになるが。

「その子の名は……」

「失礼します！調査兵団104期調査兵、サシャ・ブラウスです！」

イリヤの背後で、扉が開く音と、大きな声が聞こえた。それに驚いて振り返れば、イリヤと同じような髪色の女性兵士が、書類を片手に立っていた。

「あいつが……？」

「え？誰？」

エレンや分隊長たちが、司祭の言葉にどよめく。イリヤはサシャの声のせいで聞き逃したその名前を確認しようとした。しかし、サシャに腕を掴まれて、「あの、書類を分隊長に、」と迫られてしまい、それどころではない。

「いや、今、ちよつと取り込み中、」

「いや、あの、書類をお渡しにあがったんです、ぶんたいちよ、」

「いや、だから、サシャ・ブラウス。ちよつと、」

丁寧な口調の割に、妙に押し強い女の子だ。イリヤがちよつと今は待てと手を広げても、彼女はそれを横からいくぐろうと頭をぴよこぴよこ動かし始めた。

「その子の本名は、ヒストリア・レイス。レイス家の人間だ」

司祭のその声だけが、はつきりとイリヤの耳にも届いた。

「は？」

振り返ってみれば、エレンやハンジ分隊長たちがこちらを見ている。ニツク司祭の思いつめたような視線が、イリヤをじっと見つめていた。

「レイス？」

それは、ツエラン家が仕える家の名前。イリヤが育った屋敷の主人の名だった。

ウォール教にとって、調査兵団という存在は、王政に反する不穏分子の塊のようなものであった。彼らが存在できるのは、王政に反する者の末路を壁の中の住人へ、見せしめる役割を担っていたからにすぎない。

「自由」という魅力ある夢を背負った彼らが、絶望の表情を浮かべて戻ってくるのを見るたびに、親は子に言うのである。

——ほら、壁の外に出ようとするとああなるんだよ。

調査兵団など、そのような存在意義しかなかったはずだった。あの日、壁が破られるまでは。

シガンシナ陥落によって、唯一巨人に抗する技術を持っていた調査兵団は、世論によってその役割を求められた。設立目的のひとつでもある、人類の未来のために、彼らは存在意義を得たのだ。存在意義を与えられた自由の翼は、水を得た魚のように躍動的に動き始めた。それ以前とは比べ物にならないほど頻繁な壁外調査はその現れだろう。

しかし、実際に調査兵団を動かしているのは、住民どもの要望などではない。たった一人の人間なのだ。

「ニック司祭。初めまして。調査兵団13代団長、エルヴィン・スミスです。挨拶が遅れて申し訳ない」

その人間は、にこりともしない無表情で、ニックに言った。それは、ハンジ分隊がエルミハ区を出発してから間もなくのこと。残留の調査兵団本隊がトロスト区へと向けて出発しようと準備を始めていた頃だった。

月は高く蒼い天に登り、星たちが賑やかに明滅する頃合い。彼らが顔を合わせたのは、そんな夜空の光など程遠い、松明の光に満ちた兵団施設の中であった。

「……私はこれ以上は話せない……」

「承知しています。ご協力感謝しますニツク司祭」

碧眼に金髪の男は、抑揚の少ない低い声で謝辞を述べた。ニツクにはそれが嫌味なのかどうかすら分からない。かの男は、全く感情を滲ませない。その金糸の髪の毛一本すら乱していない様は、この緊急時には不釣り合いなほどであった。

「礼なんて言いやがって……。いちいちわからねえ男だな、お前は」

そう舌打ち混じりに言ったのは、その団長たる金色よりかは、いくらか分かりやすい黒色の兵士長だった。少しばかりだが、時間を共にして、ニツクはこの兵士長という男が、話に聞いていたよりも感情の豊かな人間のようなだと知っていた。子細を話そうとしないニツクに、あからさまに不躰な態度を示す兵士長に、団長たる男が諫めるように彼の名を呼ぶ。

粗暴なゴロツキと揶揄される兵士長は、ニツクへ向けていた殺意に似た視線を逸らした。どうやらこの二人の関係は少しばかり団長の方が優位のようなであった。

「あなたが全てを話さなくとも、我々は必ずあなた方が隠している真実へと辿り着くでしょう」

「……この壁の秘密を暴こうと言うのか。この100年の安寧を？お前たちができると？」

100年とは長きに亘る時間である。平均寿命の短い壁の中の住人からすれば、まるで悠久の時間にも思えるだろう。しかし、その金色は真つ直ぐに、射すくめるような瞳でニツクを見つめて頷いた。

「もちろん。我々が必ず。壁の穴を塞ぎ、巨人どもを駆逐し、そして真実に辿り着く。必ず全てをやり遂げてみせます。……それができなければ……」

「できなければ……？」

「人類は滅びる。それだけです」

迷いなく告げられた言葉に、背筋がゾツとする。この男は、それになによりも重要で、正義だと思っっているのだろうか。

「……そのために無辜の民を殺してもか。それは正義と言えるのか」

ニツクの呻くような言葉に、初めて金色の男の表情が変化した。少しだけ、その青い瞳が不気味に輝いた。

「正義など知りません。それは我々が決めることではない。……それに、我々がしたことは、あなた方がしようとしていたことと、何か違いでもあるのですか？」

その言葉に、今度はニツクが表情を強張らせた。壁の中の無辜の民を、滅亡へと導いていたのはまぎれもない王政の方針だ。

わずかな時間でもいい。

争いに濡れたこの血塗られた民に、一瞬の安寧を。世界の辺境のこの土地に、黄昏の世界を。

そう願ったのは、まぎれもなく王家の一族だ。そしてそれは、その子孫たる我らがユミルの民の願いでもあるはずだった。ニツクは、それこそが救いの道なのだ、信じて疑わなかったのだ。それこそ、家を失った民が絶望の表情で目の前に現れるつい先程まで。

「少しだけ、あなたの信じる宗教について聞かせてください」

冷や汗を流していたニツクの隣に、その団長がやおら腰掛けてきた。彼の屈強な身体が荷馬車に乗ったことで、簡素な作りの荷台がぎい、と少し音を立てた。こんなときに悠長にしているものか、と見上げれば、その金色は少しだけ穏やかな笑みを浮かべているようだっ

た。

場違いな微笑みに驚いて目の前の兵士長を見やれば、苦々しそうに彼は上官を見つめて、

「エルヴィン。お前がこんなところで寛いでる時間はねえだろう」

と注意したが、当の本人は「まだ準備には時間がかかるさ」とやけに軽く言い放った。まるで、聞き分けの悪い子供を持つ親と、ワガママな子供のようにも見えるのは気のせいか。その大きな子供は、大きな両手をいじりながら、他愛もない話をしだした。

「私の父は学校で教師をしていますがね。私は彼から壁の中の歴史を学んだものです」

曰く、子供の頃に教わったその歴史から、エルヴィン少年は壁の外への興味を持つようになったという。彼の知的好奇心は壁の外だけではなく、壁の中の知識にも及んだ。特に、一面的で一方的な視点から語られる歴史には大変興味をそそられたらしい。

「この壁の中の「語り」が矛盾していると気づいたのはその頃です。しかし、その矛盾を矛盾と理解する者は私以外、誰一人としていませんでした」

不意に男が顔を上げて、満点の星空へと視線を向けた。その横顔は相変わらず表情の読めないものだったが、口調だけは団長らしきそれではなく、どこか柔らかさをもっていた。その男が、星の瞬きからニツク的首飾りへと、その視線を落とす。

「シグリ・アーレントという女性をご存知だそうですね。連発式の拳銃を所持していたという女性です」

「ああ……我々の界限では有名な話だ」

「私は貴方の信じる神を知りませんが、それを教えてくれたのは彼女でした。宗教なるものに命を捧げる宗教者を、敬うようにと彼

女は教えてくれました」

「……ただの娼婦だ」

「その仕事を課せたのは私です。彼女はもともと教養の深い人物だ。私の感じる矛盾を理解した、唯一の人間です」

ぱちり、と松明の炎がニツクの耳元ではじけた。話の着地点が分からない恐怖に、目線をさまよわせれば、兵士長の鋭い視線と目があった。シグリという女の話をやけに嫌った彼が、腕組みをしながら、微動だにせずに視線だけを厳しくニツクと団長に配っていた。

「彼女は言っていました。宗教とは、一切の生ける者を救わんとするものだ。ウオール教は、……いや、あなたは、一体何を救おうとされていたのですか？」

覗き込まれた青い視線に、息がつまる。ニツクの脳裏に、ストヘス区で女型に踏み潰された信徒たちの血まみれの姿と、エルミハ区の避難民たちの姿がよぎる。

あれは、いずれ来るべき民の姿であった。彼らが築こうとした、黄昏の世界の終焉の景色だったはずだ。

「……無駄話がすぎました。我々はこれから夜通しローゼ内地を抜けて、トロスト区へと向かいます。ローゼ内地の安全性は確保されていません。ですが、我々は人類を救うため、そこに向かう必要があります」

金色の男が立ち上がりながら言う。荷馬車が揺れ、彼の装備している立体機動装置ががしやりと大きな音を立てた。

「あなたは、どうしますか。ニツク司祭」

そう問うた声は、冷たい温度の、調査兵団団長のそれとなっていた。

ニツクは、その声と、調査兵団という命知らずの人間の長たる男に、初めて恐怖を覚えた。

ニツクに、死地への旅路の同行を断る選択は、用意されていなかった。

\*\*\*\*\*

「前方！ウドガルド城付近に巨人確認!!」

イリヤたち調査兵団先遣隊が、目的地のウドガルド城を視界に入れたのは、もう西の空が白じんできた頃合いだった。夜通し炊いていた松明の炎も必要ないほど、朝が近くまで来ていた。

「総員、戦闘準備!! 巨人を全て叩け!!」

ハンジ分隊長の鋭い指示が飛ぶ。イリヤの目の前を走るエレンが、湧きだったように「おう」と叫んだ。それに少しばかり嫌な予感を覚えながらも、イリヤは並走するクルトに声をかけた。

「クルト！訓練してないだろ!?!なまってるんじゃないのか!?!下がってたらどうだ!」

「バカ言うな！下がる訳ないだろ!」

そう返したクルトの表情は覚悟が決まっている。数ヶ月前、共に壁外へと取り残された時のような臆病さは、微塵も感じられなかった。それに嬉しさと、少しばかりの違和感を覚えながらも、イリヤは大きく頷く。

巨人を前にした行軍は幾度も経験した。しかし、こうして訓練兵時

代を共にした仲間が隣にいるというのは、これほどまでに心強いものなのか、とイリヤはしみじみと実感していた。

「……あれはー!」

巨人が群がるウドガルド城に近づいた矢先、単騎、前に躍り出たのはミカサだった。彼女が前に出たのと、イリヤが彼女の進路の先に、私服姿の人の姿を目視したのは同時だった。

「あいつらだ!!」

エレンが気色ばった声で叫んだのを聞きながら、イリヤは立体機動装置のグリップを握って目標との距離を測り出す。が、その一瞬のうちに、目の前の馬からその少年は飛び立っていた。

「お、おいーエレン!!?」

愚鈍そうな8メートル級のうなじめがけて、エレンがワイヤーを巻き上げて宙を舞う姿に、イリヤは素っ頓狂な声を出した。戦闘に加わるなど再三隊長に指示されていたのを忘れたのか。

「やったー!討伐数ー!!」

訓練兵団を上位で卒業しただけのことはある。愚鈍な巨人とはいえ、補佐なしでうなじを削いだのは確かに悪くない腕だ。だが……。

「エレンー!ワイヤー!!」

宙に浮いた片方のワイヤーが、城の瓦礫に打ち込まれた対のワイヤーに接触して、エレンの身体が衝撃でバランスを崩し、そのまま地面へと落下した。

「馬鹿野郎！下がってろって言うてんだろエレン!!」

ハンジ班のケイジに怒鳴られて、エレンは半身を起こしながら返事だけは元気よく返した。

「おい、エレン！バカかお前!?遊んでるワイヤーはすぐに巻き取れて、訓練兵の頃に嫌ってほど習っただろ！」

「悪いって……ちよつと失敗しただけだろ」

イリヤが慌てて駆け寄れば、エレンはいつものように減らず口を叩いて返した。受け身を取れたようで、大した怪我はしていないようである。

「イリヤー」

ほつと胸を撫で下ろした時、背後で声がしたかと思うと、地響きと土煙が背中を襲った。振り返れば、うなじを削られた小柄な巨人と、息を切らしたクルトが立っていた。

「おい、油断するな！」

「わ、悪い、クルト」

ウドガルド城は、大きな塔が目印となる古城であることが地図上で記されていた。しかし、今日の前に広がるのは、その塔の崩れ去った瓦礫の山である。そこに群がる巨人に、幾重にも立体起動のまっすぐな白い煙が伸びている。薄桃色の朝焼けの空に、煙がきらりと光っているようで、イリヤは眩しくて目を細めた。

血しぶきをあげる巨人の周りを、調査兵たちは翼を得たように飛ん

でいる。その光景に、イリヤは既視感を覚えて微笑んだ。

「おい、クルト。見てみる。俺たちが壁の外に取り残されたときと同じ光景だぞ。あの時はミケ分隊長の隊に助けられたけど、今度は俺たちが助けたんだ」

噴射されたガスが幾重にも重なり、朝焼けの光を抱きしめるようにきらきらと輝いている。それは、数ヶ月前にクルトとイリヤが死の淵で見た光景そのものだった。

「あの時はお前、ビビってたのにな。そういえば、クルトが補佐なしで討伐したのって初めてじゃないのか？」

ハンジ分隊長の猛撃に、既に動いている巨人は視界に映る限り見当たらなかった。鮮やかな勝利と、瓦礫の向こうにいる生存者と思わしき人間の姿に、イリヤは喜色を隠しきれない様子でクルトを見た。

しかし、そのクルトは一瞬険しい表情をした後、イリヤから目を逸らして、

「……もう躊躇ってられないから……」

と、ぽつりと呟いただけだった。イリヤがその言葉の意味に首を傾げた時、エレンを呼ぶ声が入った。それは、生存者である104期生たちだった。

\*\*\*

ハンジ分隊長率いる調査兵団の先遣隊の到着により、ウドガルド城に群がった十数体の巨人は一瞬のうちに、一匹を残してすべて駆逐さ

れた。

一匹の巨人だけは、その近くに104期調査兵と思わしき少女が寄り添っていたため、誰も手出しをすることができなかった。

その巨人は、他のものに比べれば小柄で、ひどく醜い容姿であった。今、彼ら調査兵が見る前で、そのうなじからひとりの細身の女性が、ゆっくりと蒸気に包まれながら出てきているところである。

「あれは……ユミルです。そばにいる小さい子が、例の……クリスタです」

震える声で、ハンジの隣で言ったのはアルミンである。その巨人から離れた位置で、彼らは遠巻きにうなじから人間が出てくる様を見ていた。

「状況を……誰か、状況を説明してくれ」

苛立ったように、焦ったように、ハンジ分隊長がしかめ面で言った。その右手には、瓦礫の上に打ち捨てられていたボロボロの兵団ジャケットが握られている。

「……ミケ分隊長の指示で、兵団施設から近隣の村へ伝令を終えた後、ゲルガーさんとリーネさん率いる南班と、ナナバさん、ヘニングさん、それからクシエル副官の西班が合流してこのウドガルド城に一時避難しました。ですが夜中にいきなり巨人が多数襲来して……。まずクシエル副官が食われて、そのあと奇行種の投石によってリーネさんとヘニングさんが……。日が昇る寸前にナナバさんとゲルガーさんが食われて戦死しました」

震える声で、しかし必死に冷静さを保ちながら言ったのは、コニー・スプリンガーだった。「あの巨人は？」とハンジ分隊長が問えば、彼は

目を見開いたまま、首を横に振った。

「分かりません。ただ、塔が崩されそうになった時、あいつが……ユミルが突然巨人化して、俺たちを助けてくれました」

俺たちにも分かりません、とぼつりと呟いたコニーに、エレンが労わるように肩を叩く。混乱しているのは、皆同じのようだった。ハンジ分隊長は、そうか、と一つ頷いた後、

「彼らの……。ナナバやクシエルたちの最期はどうだった？ 彼らは戦って逝ったのか？」

「はい。最後まで、俺たちを守ろうとしてくれました」

コニーがすかさず頷いたのを見て、ハンジ分隊長が「そうか」とまた小さく頷いた。その声は小さくて、その視線はゴーグルのガラスが陽光に照らされて反射し、全く見る事ができなかった。だが、なんとなく、イリヤには彼女が泣いているように感じた。もちろん、分隊長は泣いてなどいないだろうが、それでもイリヤにはそんな風に思えた。

「モブリット。1班と2班を後続の班と見張りにつかせる。3班には担架を用意させろ」

「担架、とは」

モブリットと呼ばれた彼女の副官が、隣で問う。

「ユミルのだ。彼女に応急処置を」

巨人のうなじからこぼれ落ちるように出てきた女性を、小柄な少女が受け止めようとするのを見て、ハンジ分隊長はそれに駆け寄った。彼女たちがユミルという巨人の女に手を差し伸べる姿を見ながら、

イリヤは言葉を失っていた。

助けられたのは、ほんのわずかな人間だけだった。いつかの日、彼を助けてくれたミケ分隊の兵士たちは、誰一人として生存していなかった。

あの、イリヤの苦手な上官もまた、跡形もなく死んでいったのだという。その報せに、イリヤは信じられないような心地で言葉を飲み込んだ。

「イリヤ。大丈夫か」

「何が」

問うてきたクルトに、それだけ返した。なぜだか、イリヤは喉の奥がカラカラに乾いたような心地になっていた。一言返すだけでも喉が痛い。痛い。ただただ、痛い。

「大丈夫だ。イリヤ」

「だから、何がだよ」

痛みに苛立ちながら振り返った時、クルトのまつすぐな視線が食い入るように覗きこんできていて、思わずイリヤは言葉を飲む。

「心配ない。大丈夫だ」

クルトは、迷いのない声で、イリヤにそう言った。

その言葉の意味はわからなかったが、その声色はイリヤを不安に陥れるには十分なものであった。

——クルト・ウエルナーを監視しろ。

出立前にそう言ったハンジ分隊長の声が、イリヤの耳の奥でこだました。

その女と男の関係を、リヴァイは実はあまりよく知らない。

シグリという女は、リヴァイが地下の馴染みと共に調査兵団へ入団した頃からその男の隣を陣取っていた。彼女が中央憲兵に追われて兵団を抜けたとき、男は情けない様子でリヴァイに弱音らしきものを吐いていた。男がリヴァイの前で実にもならぬ想いをさらけ出したのは、後にも先にもあれきりだった。

その後、壁外追放を装って彼女を再び兵団へと迎え入れた時、リヴァイは彼女に「クシエル」という名を与え、その手をひいて男のもとから引き離れた。まるで妹のように気にかけていた女を、地下街のゴロツキなんぞがさらっていったにもかかわらず、男は何も言わなかった。

ナナバ曰くは、女とリヴァイの関係性はいわゆる「恋人」というものであったらしいが、いかんせん、リヴァイには彼女と将来を共に歩まんとするような人生の展望は全く持ち合わせていなかったし、女も女で、求めれば応じるものの、基本的にはのらりくらりとしていたものだから、どうにも甘い雰囲気はなかった。少なくとも、リヴァイがよく目にした兵団内の「恋人」同士とは、およそ温度が違っていた。

男が13代団長に就任し、リヴァイが兵士長に就任してからというもの、仕事抜きでの二人きりの時間など、本当に限られていたように思う。もちろん、非常に健康的な兵士である以上、身を燻る欲を互いで発散することは往々にしてあった。しかしそれも、いつしか発散のみが全面に押し出された殺伐としたものとなっていた。共に夜を過ごすのは、情愛というよりかは、お互いに使い回しの相手をするのは病気をもらいそうで嫌だから、というある種の清潔観念に根ざしたものだ。

年を経るごとに甘さを失っていく二人の関係を、「専属の発散相手」と称したのは決してリヴァイではなく、女の方である。さすがにその

表現にはリヴァイも腹を立てたし、あのハンジですら目を丸くしていた。ナナバにいたっては「不純すぎる」と友の貞操観念の様相に泣き叫ぶ始末だったが、男は黙って頷いただけだった。

その男、エルヴィン・スミスと、女、クシエルの関係性を、リヴァイはよく知らない。それはひとえに、彼が彼女との心の触れ合いを怠ってきたことの何よりの証左なのだが、彼は彼で近しい人間関係の構築に著しく不慣れであるから自覚はない。ただ彼がはつきりと分かっているのは、いつもは素知らぬ顔をしているエルヴィンにとつて、その女の存在はかなり大きなものであるらしい、ということだった。

「エルヴィン。お前大丈夫か」

「何がだ」

そう問うたのは、もう陽もすっかり天高く昇った頃、トロスト区内でのことだった。迅速な指示を部下と憲兵団の面々に出していた男が、一息ついたようにリアヴィの隣でため息をこぼした時である。男は不思議そうな顔を装ってリヴァイを振り向いた。

「情けねえ面してんじやねえぞ」

「さて。どんな顔だろうか」

嘯くように男が首を傾げる。ほんの僅かな動揺だ。部下どもには全くわからないであろうほんの細やかな揺れだった。だが、六年間隣で男を見続けていたリヴァイからすれば、大きな違いだった。

「テメエの気に入りが一人死んだくれえぞ。らしくねえぞ、エルヴィン団長」

ひと睨みすれば、男は碧眼の大きな瞳を一つ瞬かせた後、困ったように眉尻を下げた。

「そんな風に見えるか」

「そんな風に見えるから言っている」

男は目の前で準備に勤しむ部下たちに視線をやった。リフトの準備もできつつある。今から、彼ら調査兵団は、ハンジ分隊が超大型巨人と交戦したという場所まで壁の上を行軍する。鎧と超大型に敗北したという報告を持ってきた駐屯兵団と、104期のサシャ・ブラウ

スもまた、準備のために資材を持って辺りを駆けていた。

男が揺れたのは、超大型の出現のせいではない。ただ、ミケ分隊に配属していた男の副官の死亡の報告を聞いたせいだ。死亡確率の低い配置であつたにもかかわらず、死んでいったあの女一人のために。

「……俺がクシエルのために悲しんでいるとでも？」

「……そうだろうか」

リヴァイの言葉に、しかし男は小さく笑った。

「リヴァイ兵士長殿はひどく動揺しているようだな」

「は？」

まるで揶揄うように放たれた言葉に、思わずリヴァイは眉をひそめた。男が何か言おうと口を開きかけた時である。準備に駆けていた兵士たちの間から、どよめきが上がった。

「エルヴィン団長！」

そのどよめきの中心から、男を呼ぶ声上がる。見れば、そこには死亡した副官の直属の部下、エーミールが立っていた。

「エーミール調査兵！そんな身体で動いてはいけませんと何度言えば！！」

彼は白い病院服に身を包んでおり、体中に包帯を張り巡らせている。息を切らせながらリヴァイたちの元に歩み寄ってくる彼の身体を、衛生兵が支えながら叱咤を飛ばしていた。先の巨大樹における女性の巨人との交戦で負傷したエーミールである。その怪我のため、今回の作戦からは外されていた兵士だった。

「どうしたエーミール」

「先ほど、報せを聞いて……クシエル副官が……戦死されたというのは本当なのですか!？」

顔を青くして叫ぶように言ったエーミールは、シガンシナ陥落前から彼女の部下であつた者だ。異動もなく、彼女の部下であり続けたのは、ひとえに彼女がエーミールを手放そうとしなかったためである。「間違いない。巨人に食われたところを見たところ104期が証言したらしい」

抑揚なく言った男に、エーミールはその女好きのする顔を歪めて、

その場に膝をついて崩れ落ちた。

「おい、大丈夫か」

彼の元に膝をついてリヴァイがその震える肩に手を伸ばせば、彼は絶望の表情を載せながら眩いていた。

「まだ俺は全部聞いてないのに……。まさか、あの人……。このままじゃ、「人類」は……」

「エーミール？ どうした」

リヴァイにしか聞こえないような小さな声の眩きの意味がわからず、リヴァイは彼の肩を再度叩く。しかし、エーミールは臆病に取り憑かれたように頭を抱えて震えるだけである。その姿は、リヴァイが入団した頃の、死の影に怯えていた若い頃の彼を彷彿とさせた。

「エーミール。君は兵舎へ戻れ。ここには邪魔だ」

リヴァイとエーミールの頭上から、冷たい声が落ちてきた。見上げれば、エルヴィンが揺るぎのない、感情の読みづらい瞳と目があった。「クシエル一人の死を悼んだところで状況は変わらない。今我々がすべき事はエレンの奪還だ。それができなければ、人類が生き残る道は潰えるだろう」

「……エルヴィン団長……」

「たった一人の死に捕らわれるな。お前たちには、これからも働いてもらわねばならない」

男はエーミールの震える肩に手を置いた後、リヴァイを一瞥してそう言った。その眼は、もうすっかりと迷いのない団長のそれになっていた。

「エレンをつれて帰る。必ずだ。待っている」

踵を返した男の背に、双翼が翻る。ああそうだ、とリヴァイは頷いた。この男はそういう人間だった。たった一人のかけがえのない命を、無機質な数字として数えることのできる人間だ。己の感情の揺れでさえ、単なる誤差の範囲として計算式に組み込んでしまえる男だ。リヴァイは、初めての壁外で馴染みを亡くした時のことを思った。あの時に自分は、かけがえのない死を、括弧の中に入れてしまうことを決めたのだ。この男のように。

「了解だ。エルヴィン。テメエの仕事ぶりを期待してるぜ」

立ち上がってそう返したりヴァイに、男はわずかに口角をあげて満足そうに頷いた。その背中を見た瞬間、怪我した足が一際大きく痛んだ。

「クルト……！クルト・ウエルナーはどこにいますか!? トロスト区から出発したと聞いたのですが!!」

エルヴィンがその場を去ろうとした時、不意に叫んだのはエーミールである。いつの間にか、その肩は震えを止めて、焦りのような感情がその女好きのする顔に乗っていた。

「クルトなら、ハンジの分隊に組み込んだが。イリヤと同じ班に配属されたはずだ」

「彼はどうなったんですか!? あいつは、」

やおら興奮して立ち上がったエーミールが腹の傷を抱えて言葉を詰まらせる。衛生兵が「無理はやめてください」と叱咤したが、当の本人は気にしない様子でその焦った表情を団長へと必死に向けていた。

「オイ、エーミール。どういうことだ」

「リヴァイ！クシエルさんが言ってたんだ！あいつは、壁の外から来た人間だ！」

エーミールの言葉に、リヴァイとエルヴィンが顔を見合わせた。エルヴィンは一つ頷き、エーミールの前にかがみ込んだ。

「話してくれ。クシエルは何をつかんでいた？」

そして、副官の遺した情報をその部下に問うた。

\*\*\*\*\*

トロスト区にまで南下していた調査兵団の本隊が、駐屯兵団から超大型と鎧の巨人の出現の報せを受けるより数時間前にさかのぼる。

壁の上、ハンジ分隊と駐屯兵団先遣隊が合流した時のことである。

ウドガルド城で巨人と交戦し、生き残った104期と共に、壁の上へと一時避難したハンジ分隊は、ユミルという少女の巨人化と、壁に穴が空いていないという二つの異常事態に困惑していた。

「一旦、トロスト区で待機しよう」

壁の上から臨むローゼ内地は穏やかなもので、巨人の影一つ視界に納めることができない。平穏な草原の広がる光景を見渡しながら、兵士たちにそう指示を出したのはハンジ分隊長である。

「……ユミル。帰ろう……」

ポツリと落とされたその言葉にイリヤが振り向けば、担架の側で、金髪の長い少女が顔を俯かせていた。その両手が、担架の上で眠る巨人化した少女の残った右手を握りしめている。

ヒストリア・レイス。

イリヤの一族が代々仕えてきたシーナ内地に領土を持つ貴族。その現当主の妻の子であると告白したのは、ウォール教のニック司祭だ。その妻の子が、壁の秘密に迫る鍵なのだと言ったが、その意味はイリヤにはさっぱり分からなかった。レイスの屋敷は、使用人長の息子であるイリヤの育った屋敷でもある。だが、彼が知るのとは単なる平凡な貴族の日常だけで、壁の秘密とは程遠い安寧だけだった。

とは言っても、12歳になってすぐに屋敷を出て訓練兵団に入団したイリヤには、屋敷の主人たちとの関わりなどほとんどなかった。ともに会話をしたことがあるのは、幼い頃、イリヤにも分け隔てなく接してくれていた現当主の弟、ウーリ・レイスくらいのものであった。

「ヒストリア。そろそろ」

イリヤが声をかければ、小柄な彼女は、憂いた表情のまま、「はい」と小さく頷いて立ち上がった。大きな青い瞳が、苦しげに歪められていて、胸を締め付ける。笑えばさぞ可愛らしいだろうに、とイリヤは思った。

「あの、何か……」

不躰に彼女の顔をじっと眺めていたことに気づいたのは、その本人が訝しげにイリヤを見上げてきた時だった。イリヤはしどろもどろになりながら、場に似つかわしくなく、自己紹介をした。さらに訝し

げに首を傾げたヒストリアに、イリヤは口ごもりながら、

「えつと、あの、うん、俺、レイス家の使用人だったから……。君と会ったこと、あったかな、と思つてさ」

「……私は屋敷には行つたことないので。会つたことないと思ひます」

しかし、笑つて語りかけたその言葉は、さらに表情を暗くしたヒストリアに一蹴された。

「だよなあ」

イリヤは、ははは、と乾いた笑いを返すだけで精一杯だった。噂で聞くには、どんな時でも優しい「女神様」だと聞いていたが、印象は大きく異なる。まあ、こんな異常事態だから当然か、と思ひながら顔を上げれば、離れた場所にエレンがライナーとベルトルトと会話している姿が目に入った。

ライナーとベルトルトがアニ・レオンハートの仲間である可能性がある。

そう、エルミハ区で行き着いた一つの疑義を思い出し、イリヤはヒストリアの側から離れ、エレンの方向へと足を進めた。

「この壁の中は一体どうなつちやつたんでしよう」

サシヤやアルミンが呟きながらハンジ分隊長の後を歩いて行くのとすれ違いながら、「エレン」と彼はその少年の名を呼んだ。

壁の上の空は、いつしか曇天に覆われて、霧雨が彼らの上に降り注いでいた。暗雲立ち込める静けさに、イリヤは嫌な予感がして足を進める。そのイリヤの姿を見て、エレンが二人と会話していることに気づいたミカサが足を止める。

「エレン」

「イリヤ」

しかし、エレンのそばに寄ろうとしたイリヤを呼び止めた者がいた。振り返れば、そこにはイリヤの同期であるクルトがじつと彼を見つめて立っていた。

「なんだ、クルト。ちよつと後にしてくれないか」

「イリヤ。なんであの日、俺の元へ来なかつた？」

風が上空で唸る音が耳に届いた。壁の上は静かなものだが、空は嵐を呼びそうなほど風が強いようだった。黒く分厚い雲が、駆けるように空を流れている。

「何だよ、こんな時に……。そんなこと、今話すことじゃないだろ」  
「この前の壁外調査の前。お前が古城に勤務していたとき、俺はお前に一緒に来てくれって言ったよな。どうして、来なかった？誰かにバレたのか？」

イリヤの言葉を見無視して、じつと見つめてくるクルトの表情は何かを思い詰めているように、険しく顰められていた。

「いや……。バレてない。あの夜は、見張りがきつくて……。古城から出られなかったただけだ……」

嘘である。あの夜、イリヤはクルトが己の能力を知っていることから、彼の元に行こうとした。しかし、それはクシエル副官とリヴァイ兵長に見つかって叶わなかった。イリヤは自分の耳を犠牲に、クルトのことだけは上官に漏らさなかったが、あの嗅覚の鋭い上官たちはもしかしたら気づいていたのかもしれない。

「なあ……。クルト。お前、どうして俺の能力のことを知ってたんだ？一体、お前は何で、この能力の由来を俺に教えてくれるなんて言ったんだ……」

——クルト・ウエルナーを監視しろ。

エルミハ区を出る前、イリヤに指示したハンジ分隊長の言葉が脳裏によぎる。イリヤは両手の拳をぎりりと握りしめた。じつとりと気持ちの悪い汗が滲んでくるのがわかった。

「あの時、お前は俺をどこに連れてくつもりだった……。？いや、お前、今までどこにいたんだ？憲兵たちに見つからず、どこに隠れてたんだ……」

問いながら、それでもイリヤはその友人のことを信じていた。否、信じようとしていた。彼は単なる脱走兵だ。「人類の敵」ではない。

——彼は、アニ・レオンハートと同じく「敵」である可能性がある。  
ハンジ分隊長の憶測は間違っている。そう、イリヤはクルトを見ながらそう言い聞かせていた。

「おい！何とか言えよ！クルト！」

いつの間にか、焦ったようにイリヤは叫び出していた。彼の焦燥とは裏腹に、あたりは静けさに包まれており、面するクルトも冷静さを貼り付けたように、黙りこくったままである。己の感情との対比に、イリヤはますます追い詰められていく。叫んだ声が、震えるのが止められなかった。何とか言ってくれ。そう、叫んでいた。

だが、クルトは少し悲しそうな表情を浮かべた後、イリヤに手を差し伸べた。

「イリヤ。俺と来い。俺はお前を友達だと思ってる。お前に死んで欲しくないんだ。お前なら、きつとあちらに行っても死ぬことはない。きつと大丈夫だから」

「……っ！何だよ、それっ！あちらっつて何だ?!」

曇天の下、ひゆるりと風が一陣唸った。

「壁の向こうだ」

その言葉を聞いた瞬間、イリヤは腰の刃を振り抜いていた。刃を構える両手が震える。カチカチと奥歯が鳴るのが止められない。イリヤは、四年間苦楽を共にした友人に、刃を向けていた。

「エレン！逃げて!!」

次の瞬間に、耳をついたのは、背後で叫ばれたミカサの声だった。振り向いた先で、踊るように舞ったミカサの身体と、ポンと空に投げ出された人間の手首が見えた。その手首が切断されたライナーのものだと理解した時には、ミカサはベルトルトの首を掻き切っていた。

「エレン!!」

「イリヤ!!」

叫んだ瞬間に、背後で刃を抜く硬質な音が響いてイリヤは急いでクルトに向き合った。彼は、イリヤに刃を向けながら、「一緒に来い」と再度言った。

「よく考えろイリヤ。ここでお前とエレンがこちらに来れば、ひとまずの危機は立ち去るぞ」

「だから！それが意味わかんねえって言ってんだろ!？」

異変に気付いたハンジ分隊長たちが、イリヤとエレンの名を呼びながらこちらに駆けてくるのが、クルトの背後に見えた。しかし、次の瞬間、イリヤの背中を襲ったのは、巨人化の際の閃光だった。振り向けば、ライナーとベルトルトの体から、独特の雷のような閃光が放たれていた。

「エレン！」

「お前はいつだって誰かが死ぬことを嫌ってたよなイリヤ！」

巨人化する二人に向かおうとするイリヤに、クルトが躡り寄りながら叫んだ。

「お前が来ることで確実に助けられる命が一つあるぞ！お前が来なければ、あの人は殺される！見殺しにしたくなければ俺と来い！！」

「は!?!誰だつて!?!」

「クシエル副官だ！あの人を殺されたくないけりや、俺と来い！イリヤ!!」

クルトがそう言って、イリヤに手を伸ばしたのは、ライナーたちの巨人化の爆風が壁の上を襲う寸前だった。

身を焼くような熱風の中、飛ばされないようにうずくまって体を庇いながら、イリヤは涙が両頬を伝うのを感じた。

——この裏切り者が。

そう言ったのは、エレンだったのか、それとも自分だったのか。

爆風の中、全ては混乱の底に消えていった。

\*\*\*\*\*

巨人の腹の中は、たいそう寒く、そして硬いらしい。予想外の実事だ。ハンジに報告すれば、彼女はそれは興奮して喜ぶ事実だ。

そうまどろむ意識の底で、クシエルは仲間の顔を思い浮かべていた。

死後の世界にしては、やけに五感が鋭い。体中を襲う寒さと痛み  
に、声を漏らせば、喉もカラカラで痛かった。死してなお、安息は訪  
れぬらしいと思い、否、それもそうかと己の生前の行いを振り返って  
得心した。

しかし、うつすらとその瞼を開けて、そこがどうやら死後の世界で  
はないらしいと気付いた時には、ホツとするより先に、げんなりとし  
た気持ちが出来た。

一つ二つ瞬きをすれば、煌々と光る満ちた大きな月と目があった。  
ウドガルド城の外か、と思い、体を動かそうとした時に、頬に当たる  
木の皮の感触に驚いて、思わず半身を起こす。

「巨大樹……」

人一人が身を転がしてもまだ余裕のあるほど大きく太い幹。それ  
は、自分が先ほどまで戦っていたウドガルド城の付近には生息してい  
ない植物だった。

「あ、目が覚めたみたい」

困惑に息を詰めていたクシエルの近くから、女性の声が落ちてき  
た。

声の方向には、髪の毛の長い女と、メガネをかけた青年が幹の上に腰掛  
けていた。兵団服も、立体機動装置も身につけていない。見慣れぬ服  
を身にまとった二人が、緩やかな笑顔を浮かべている。

「おはよう、兵士のお姉さん」

月の光が反射したメガネを向けて男が笑った。

刻限は夜の深い頃合い。

ちようど、ナナバとゲルガーが崩れかけた塔の上で、生き残りをか  
けて巨人と戦っていた時のことだった。

## 四章 兵士と戦士と、

一

それは、ハンジ分隊長率いる調査兵団とライナー・ブラウン、ベルトルト・フーバー、つまり鎧の巨人と超大型巨人が交戦した時より、数時間前のことである。

ちようど、ウドガルド城で獣の巨人の投石と、多数の巨人の襲来により、調査兵団が窮地に陥っていた時のことだった。

ウドガルド城での交戦中、巨人に食われたことで、巨人の口の中で意識を失ったクシエルが目覚めたのは、旧マリア内地にある小規模な巨大樹の森の中だった。自分が置かれた状況を理解するより先に、そこにいた人間は懇切丁寧に説明してくれた。

「突然食べちゃってごめんね。勢いであなたの装備と体をちよつとないがしろにしちゃった」

そう言つて月の光に照らされた笑顔を向けたのは、髪の毛の長い妙齢の女性だった。ゆつたりとした話し方が特徴的で、兵士特有の歯切れのいい話し方ではない。彼女は巨大樹の枝に腰掛けるように、その足をぶらりと空に遊ばせていた。脇に置かれているのは、一本の松葉杖と、立体起動の腰部に備える装置だった。

「兵士のお姉さんはクシエルさん、だったかな。俺はジーク。彼女はピークだ。よろしくね」

その彼女よりもクシエルに近い場所で聞こえた声に顔をあげれば、そこには丸メガネの髭を蓄えた青年が立っていた。月の光に反射して、メガネのガラスがキラリと輝いている。まるでその真意を覆うように、彼の瞳を隠していた。

彼らは見慣れぬ服装に身をまとっていた。壁の外にいるにもかかわらず、立体機動装置も、兵団服も身につけていない。得体の知れない彼らの正体を、「壁の外から来た者」であるクシエルは直感した。「ちよつと俺たちの仲間のお願いでね、あんたにここまで来てもらつたわけだけど……」

しかし、男は歯切れ悪そうに言葉を詰まらせ、そのまま思案するようになり黙り込んでしまう。

その沈黙の最中に、クシエルはようやく緊張の糸を少しだけ解いて、大きく息を吐くことができた。彼女の体は巨大樹の枝の上に転がされたままである。身体中の痛みには耐えながら、手足を動かさそうとしたものの、どうやら後ろ手に両手を縛られているようだった。両足も自由がきかない。おそらく、両足も同じように拘束されているのだろう。

動こうとしても、身じろぐ程度で精一杯だった。しかし、それよりも気になるのは、意識が戻ってから腹に響く激痛と、心身を蝕む凍えるような寒さだった。

「ああ、あまり動かない方がいいよ。さっき右の横腹を少し傷つけちゃったから」

言ったのは、女の方である。顔を動かして見れば、確かに右脇のシャツが真っ赤に滲んでいた。

「怪我は大した傷じゃないよ。応急処置もしたし。ただね、ちよつと出血がひどかったから、早めにまともな治療を受けた方がいいだろうね。体温も下がってるみたいだし」

奥歯が震えるのを止められずにいるクシエルに、ジークと名乗った男が他人事極まりない声音で言った。まだ季節は秋のはじめ。夜とは言え、ここまで凍えるような気候ではない。ならば、やはり傷の出血のためか。その事実を聞いた途端、手足の力が抜けるような心地がして、クシエルは悪寒ではないものに背筋を震わせた。

「言ってること、わかるよね、クシエルさん」

男が低い声で言う。雲に隠されて陰った月光に、男のメガネの奥が覗いた。のんびりと優しい口調に反して、その奥に隠されていた瞳はぞつとするほど冷たかった。これこそ、「クソな状況」だと、クシエルはめまいがした。ウドガルドでの交戦中、巨人に食われて死んだと思ったが、それは違ったらしい。自分を食ったのは、おそらく女、ピークということになる。つまり、彼女はエレンと同じ、巨人になれる人間だということだろう。ならば、この男もまた、そうなのかもしれない

い。

「……何が目的だ」

「話が早くて助かるよ、クシエルさん。そんなに怖い顔しなくても大丈夫だ。あんたには生き残ることができる道が二つもある」

ジークは少し明るい声でそう言った後、背後にいるピークの脇にある装置を持って、クシエルの目の前に置いた。見慣れたその装置に、クシエルはどきりと、捧げたはずの心臓が悲痛に脈打ったのを感じた。

「それは……」

「あんたのじゃないよ。あんたと同じ格好をした男のもんだ。確実に生き残るための道はとも簡単だ。あんたはこの装置をはじめとして、壁の中の情報を知りうる限りこちらに提供すること。ただそれだけだ」

簡単だろ？とジークは右手で左手の耳裏をかきながら首を傾げた。見下ろしてくるその顔に、吐き気をもよおしながら、クシエルはその装置の傷を確認する。やはり、見間違えようもない。

それは、ミケ・ザカリアスの立体機動装置だった。

身を内から焼き尽くすような憎悪が湧き上がるのを抑えられない。その身悶えするような重く熱い感情に、クシエルは呻いた。じりりと芋虫のように体を這わせるクシエルに、ジークが少し身構えたが、すぐに彼女は大人しく動かなくなり、すすり泣くような声だけがわずかに漏れた。

彼女の顔は、巨大樹の枝に突っ伏されており、ジークたちには見えない。

「もう一つの生き残るための道は、あまり確実性はないんだ。だから、」

「あんたたちに話せることはない」

ジークの話の話を遮って、クシエルが彼の顔も見ずに言い放った。ジークはその様子にため息をつき、彼女のそばに膝をつく。

「気持ちにはわかるけどね。そんな復讐心なんてためにならないよ。命は大切にされた方がいい」

言いながら、その手は彼女の顔を上げさせるように、その頭に触れた。

その、瞬間である。

クシエルに、その膨大な記憶が蘇ったのは。

それは、彼女がエルヴィンと出会った頃には既に失っていた記憶だった。彼女自身、ただの妄想では、と疑っていた壁外の記憶。

その瞬間は、彼女の人生の中で最悪の瞬間だった。

一瞬のうちに、膨大な映像を直接頭の中に叩き込まれたような感覚だった。

四方を山に囲まれた谷あいの美しい村。

膨大な書籍。

黒くて蒼い海。

暖かなナイフとフォークの食卓。

波止場の処刑場。

男の目尻の巨人化の跡。

ガラスの棺。

そして、雨の中の金色の髪。

膨大な記憶に、彼女はただただ言葉を失うだけだった。記憶は忘れ去っていた感情を連れてくる。

そして――。

「ん？どうした」

ジークは思わずその手を引いた。その女の見開かれた黒い瞳から、大粒の涙がぼたぼたとこぼれ落ちてきたからである。上げられたその顔に、ジークは首を傾げた。

「あれ？あんた、どつかで見たことある顔だな」

いや、そんなはずないか、と即座に否定するジークの声がクシエルの耳を打つ。

「黒い目なんだね。エルディア人……じゃないみたいだ。東洋の人種か？いや、それにしても顔つきははっきりしてるし……」

「エルディア人との混血では？」

「ああ。そうか、そうだね、ピークちゃん」

そりやそうか、と頷いた後、ジークは再度、その黒い瞳の民に向き合った。

「で、もう一度聞くとよ。本当は俺たちはあんたを故郷へ連れ帰るのは乗り気じゃないんだ。ただ、あんたは使えると俺たちの仲間が言うもんだからさ。わかるだろう？あんたが生き残るには、できることは少ないんだ。……壁の中の情報を、俺たちに話せ。できるだろう？」

「……………言えば、私を壁の外に連れて行ってくれるのか？」

「ああそうだ。あんたの命は保証しよう。お客様として歓迎するよ」  
「……………もう一つの道は？それを断った時、残された確実性の少ない道はなんだ？」

先ほどまで泣いていたのとは打って変わって、彼女の声は冷静さを宿していた。その顔は相変わらず俯いたままである。

「もう一つは、俺たちの仲間が、「出来損ない」を連れて帰ってくることに成功した時だ。俺の仲間のたつての願いだね、あんたたちの仲間にいる「出来損ない」をこっちに連れて行くことが今回の目的なんだ。

ただ、何度かこっちに来たことはあるけど、中に入り込む作戦は初めてだ。成功率は極めて低い。タイムリミットは明け方。それまで待ってここまで戻ってこなければ、もしくは「出来損ない」を奪取できなければ、俺たちは今回もそのまま帰る。その場合、あんたは生かしておけない。妥当だろう？」

なるほど、とクシエルは頷いた。最初から正体を明かすような真似をしたのは、もともと彼らにクシエルを生かす気などほとんどなかったからだ。彼らがクシエルを生かすのは、壁の中の情報を提供した時だけなのだろう。そして、「出来損ない」とはおそらくイリヤ・ツエラのことだ。巨人化になれないにもかかわらず、再生能力を有したあの部下を連れ帰る。いわば、クシエルはイリヤを釣り上げるためのエサと言うことになるのだろう。

それを計画し、実行に移した「仲間」とは、おそらく脱走兵のクルト・ウエルナーだ。以前のクシエルの睨み通り、彼はやはり、壁の外から来た作業員のようなものだったのだろう。

そこまで考えがいたり、彼女は自嘲気味に笑った。

「信じられない。あんたたちの「仲間」が「出来損ない」を連れ帰って来たとして、私を生かしておく必要性を感じられない」

「ウウン、まあそうだね。でも、どっちでも同じだろう？」

ジークが立ち上がって、巨大樹の木々の向こうにある空を見上げた。壁が見えない広大な旧マリヤ内地。そこから臨む空は、まるで遮るもののない自由な空だった。そのはるか向こうが、うつすらと白んでいた。

夜明けが近い。

クシエルは、その巨大樹の森が、数ヶ月前にイリヤやクルト、そしてリヴァイたちと共に取り残された森であったことを思い出した。あの空の向こうにあるのかもしれない「故郷」に思いを馳せた夜は、も

う遠くの彼方に消えてしまった。

記憶を取り戻した彼女はもう、あの頃と同じようにリヴァイの隣に立つことは叶わないだろう。彼女が背負う翼は、もうない。

クシエルは、その背中にある双翼のシンボルが、重くのしかかるような心地に襲われながら、ジークの瞳を見据えた。

「もう夜が明ける。タイムリミットはもうすぐだ。帰ってくる様子はないし……。実際のところ、あんたに残された道は二つだけ、と言うことだ」

かたりと軽い音がして彼女が顔をあげれば、松葉杖をついたピークが立ち上がっていた。その冷たい目が、クシエルを品定めするように見つめてくる。

「壁の中の情報を俺たちに提供するか。それとも、ここで死ぬか。どっちがいい？」

親切な体を装った、その実恐ろしい取引が提示される。

その質問の仕方は、クシエルのよく見知った、金色の男の好むやり方だった。

「好きな方を選べ」

こんな言い方をする人間が、他にもいるもんなんだな。

そんな風に思いながら、クシエルはその選択肢などない取引に応じるために、言葉を紡いだ。

ベルトルトには夢がある。

自分の意思もなく、ただ周囲に請われるまま、戦士候補生へと志願し、晴れて超大型巨人を継承した。故郷にいた時は、周囲が自分に抱く期待に応えるためだけに努力し、それを疑いもしなかった。

夢というものが、際限のない希望に満ち溢れたものだとは知ったのは、パラダイ島の訓練兵団に潜入してからのことだった。復讐心に駆り立てられていた少年ですら、壁の外への景色に夢を抱いていたのだから、ベルトルトは驚いた。最初はマーレの収容区にいるエルディア人は苦しい思いをしているのに、このパラダイ島へと逃げた悪魔の末裔どもは、なんともお気楽なものだと苦虫を噛み潰すような気持ちがあったものだ。

しかし、今はというと、そんな感情は薄らぎ、お気楽な少年たちに感化されたベルトルトは、夢を抱くようになっていた。

彼の夢は、故郷に帰ることだ。

彼の仲間。ライナーとアニと一緒に、三人で帰ることだった。それは、壁を破って中に潜入したあの時、避難所で肩を抱き合って三人で交わした約束でもある。

この悪魔の島から逃げ出して、彼らは彼らの故郷に帰るのだ。そして、最後の日までを穏やかに家族と仲間たちと一緒に過ごすのだ。

そんな、夢を抱いていた。

——おっさんになったら一緒に酒を飲もう。

一方で、少年たちと交わしたその夢は、まさに眠る時に見る夢だった。それこそ、単なる泡沫。目を開けては見ることのできぬ、白昼夢にもならぬ淡い夢だった。その夢は居心地がよく、彼に生まれてはじめて「自由」を教えてくれた。

皮肉なことに、「自由」を求めて壁の外から出ようとする人間の隣で、ベルトルトははじめて「自由」を身にしみて感じたのだ。それは、

彼にとって屈託無い時間だった。

生きていくために、訓練をしなくてもいい。

生きているだけで、貶められることもない。

生きているのに、ゴミのように扱われることもない。

ただ生きていることが、楽しかった。それはベルトルトにとっての、紛れもないはじめての少年期だったと言えよう。

「……お前さあ、疲れてんだよ」

細かな雨を降らす曇天の下で、そう言っただけでライナーの肩を叩いたのはエレンだった。ウドガルド城から壁の上へと移動した時のことである。夜はすっかりと明け、壁の異常を確認できなかった調査兵団が、トロスト区までの撤退と待機を決めた頃だった。それは、ウドガルド城から拉致されたクシエルに、ジークが提案した「タイムリミット」を悠に数時間は過ぎた頃合いである。

トロスト区まで戻るために、壁の上を歩き出した調査兵団の一人、エレン・イエーガーの背中にライナーが突然声をかけた。ベルトルトの予想をはるかに超え、ライナーは突然、エレンに自身の正体を明かし、故郷への同行を提案しだしたのだ。

ライナーはこの壁の中の人類にとっての敵、鎧の巨人である。ベルトルトに至っては、その厄災の象徴として人類に記憶されている、超大型巨人。そんな自分たちに、人一倍巨人への憎しみを抱いているエレンが応じるはずがない。

しかし、ライナーにはそんな簡単な判断すらできずにいるようだった。

ベルトルトは曇天の下、風が唸り声を上げるのを聞きながら、会話の進行を息を飲んで見守ることしかできずにいた。震える喉と、額から不自然なほど滲み出る冷や汗は止めることができない。

「なあベルトルト。こうなってもおかしくなくらい大変だったんだ

ろ？」

「あ、ああ。ライナーは疲れているんだ!!」

どうやらエレンはライナーの言葉を真に受けていないらしい。ベルトルトはエレンの言葉に大きく頷いた。ちらりと周りへと目を向ければ、アルミンやサシャ、そしてミカサがこちらを怪訝そうな表情で見つめている。さらにその近くでは、クルトとイリヤという先輩兵士が何やら口論をしているのが見えた。

クルト。

その背中に助けを求めようとしても、彼はイリヤという兵士との口論に夢中になっている。共に壁内へと潜入した仲間であり、唯一巨人化の能力を有していなかったクルト・ウエルナー。斥候としての役割を担っていた彼は、調査兵団のクシエル副官に正体を見破られかけて、そのまま身を隠していた。指名手配されていた彼が、ひと月前に死を覚悟して海を目指して発ったことを、ベルトルトはアニから聞いていた。

彼がこうして戻ってきたということ、そしてウドガルド城に現れた獣の巨人。このことはつまり、マーレ軍が上陸していることを指していた。本格的な攻撃がないこと、クルトが必死にあのイリヤという「出来損ない」の能力者のそばから離れないようにしているところを見ると、今回の上陸は、壁内の威力偵察と、能力者の拉致だろうか。

今なら、帰れる。

ベルトルトはゴクリと喉を鳴らした。

「大体なあ、お前が人類を殺しまくった鎧の巨人なら、なんでそんな相談を俺にしなくちやなんねえんだ？そんなこと言われて、俺が、はい行きますって頷くわけねえだろ」

エレンのもつともな発言に、ライナーが息を飲む。その音が、ベルトルトの耳にやけにはつきりと届いた。しばしの沈黙が落ちる。その間、ベルトルトの耳に響いていたのは、ライナーの乱れた息と、風の唸る音だけだった。沈黙が怖い。そう、ベルトルトは震える手を握りしめながら涙をこらえて思った。

「そうか……。その通りだよな……。何を考えてるんだ俺は。本当におかしくなっちゃったのか？」

ライナーの呟きに、エレンが汗を滲ませた様子でため息をついて、促すように背を向けた。

「とにかく行くぞ」

いつしか、曇天の切れ間から空がのぞいている。そのさらに向こうに、陽の光が射ってきていた。

雨は止んだ。

雲の切れ間からのぞいた陽光を見た時、ベルトルトは強く「帰りた」と願った。もう、こんな生活から逃げたい。こんな優しい世界で、世界の滅亡について計画を練るのはごめんだ、と涙に滲む空を見て切実に思った。

「そうか……。きつと……。ここに長くいすぎてしまったしまったんだ……。……」

差し込む陽光に辺りが明るくなる中、ライナーが顔を俯かせたまま、小さく呟いた。

「バカな奴らに囲まれて、三年も暮らしたせいだ。俺たちはガキで、何

一つ知らなかったんだよ。こんな奴らがいるなんて知らずにいれば……、俺は、こんな半端なクソ野郎にならずにすんだのに……！」

涙を双眸ににじませながら、険しい表情でライナーが右腕を吊るしていた布をとる。その腕から蒸気が上がるのを見て、ベルトルトは目を見開いて拳を握りしめた。

「もう俺には何が正しいことなのかわからん！ただ、俺がすべきことは……、自分がした行ないや選択に対し、戦士として最後まで責任を果たすことだ！」

「ライナー!!やるんだな!?今、ここで!!」

「ああ！勝負は今ここで決める!!」

沈黙の時は終わった。

そしてここに、ベルトルトの「自由」な少年期は終わりを迎えた。その「自由」は、故郷では味わうことのなかった、呪いのない、ただの少年としての友人たちの時間だった。

「エレン！逃げて!!」

終わりは、エレンの背後から現れたミカサの斬撃によってあっけなく訪れた。彼女はその柔軟な体をしならせてライナーの右手を切断した後、返す刃でライナーの隣にいたベルトルトの首を切りつけた。身をつんぎくような痛みにも叫んだ時には、視界一面に空が広がっていた。ミカサに押し倒されたのだ、と気づいた瞬間に、その彼女の体がライナーの体当たりで壁の下へと押しやられる。

「ベルトルト!!」

ライナーが呼ぶ声に、体を起こした時にベルトルトが見たのは、エ

レンの驚愕の表情だった。それは、いつも強気な彼に似つかわしくない、今にも泣きそうな顔だった。

その友人の絶望を載せた表情は、ベルトルト自身の巨人化に伴う閃光によってすぐに遮られた。しかし、その表情は、閉じたまぶたの裏に焼き付いてしまっていた。

\*\*\*

——お前が来なければあの人は殺される！見殺しにしたいくなければ俺と来い!!

そう言っ手て手を伸ばしてきた友人は、敵だった。四年間、苦楽を共にした友人は、人類の敵である巨人どもの仲間だったのだ。

イリヤはその事実に関心臓が焼けるような思いに襲われながら、身を起こした。その瞬間に、地響きと突風が身体を襲う。恐る恐る目を開ければ、身体中から蒸気が立ち上っているのが見えた。どうやらまた怪我をしたらしい。

両手を地面につき、半身を上げて見上げれば、すぐそこで鎧の巨人とエレン巨人が戦っているのが目に入った。その様子に、ライナー・ブラウンとベルトルト・フーバーが巨人化した際の光景を思い出す。そう。イリヤがクルトに正体を明かされ、共に来るように言われた時、彼らはエレンを攫うために、そろって巨人化したのだ。その時、爆風の中、超大型の巨大な手が自分とクルトを壁の外へと放り投げたことを思い出した。

「イリヤ」

「うああああアツツアアア!!」

頭上から声が降ってきたのと、両手を焼き切るような痛みが襲ったのは同時だった。再生するごとに鈍化していた神経ですら耐えきれない痛みにも、喉から断絶魔のような呻きがほとばしる。

くゆる視界を凝らせば、両手の平から、立体起動の刃が生えていた。

「しばらくここで大人しくしてくれ」

冷静な声に顔をあげれば、そこにはクルトが立っていた。調査兵団の双翼を背負いながらも、鎧や超大型と仲間であった裏切り者だ。

「クルトおおお」

「動くな」

冷たい声で一言放ったクルトが、イリヤの両手を地面に縫わせている刃をぎりりと少し回転させる。手のひらの肉をえぐるように動く刃に、イリヤが絶叫した。

「こうしていると再生できないだろ。あまり動くなよ。お前の足まで刺したくない」

ガチ、と硬質で冷たい金属音がして、涙に滲む目をイリヤが向ければ、クルトはさらに新たな刃を取り出していた。動けば、今度は足を貫通させるということだろう。

その表情はひどく冷たい。今まで、壁外で臆病風に吹かれながら行軍していたクルトの姿はそこにはなかった。それはもはや、イリヤの知らない人間だった。

イリヤの両手の平から際限なく蒸気が上がる。しかし、刃を貫通させたその傷は、当然のことながら治る気配はなく、ただ苦悶の痛みをイリヤに与え続けるだけである。見れば、イリヤがいる場所は壁からかなり離れた場所であり、壁の上の調査兵たちはイリヤとクルトの存在に気づいていないようだった。

体を動かそうと身悶えした瞬間、全身の血を凍らせるような咆哮と、突風、そして大きな衝撃音が、さらに近くで地鳴りとともに響いた。

それが鎧の巨人とエレン巨人の交戦によって巻き起こった衝撃だと気づいたのは、すぐそばでエレン巨人が地面に叩きつけられた時だった。

「エレン!!」

「イリヤさん!!?」

エレンの劣勢に叫んだとき、自分を呼ぶ声が出てイリヤは顔を上げた。鎧の巨人のそばを、鳥のように翔ぶ人の影があった。その影は近くの木を支点にくるりと空中で回転し、ひらりと草原の上に着地した。

まるでリヴァイ兵長を思わせる、いや、兵長よりもしなやかに舞う姿は、見覚えがある。

「ミカサ!!」

「イリヤさん!今助けます!」

刃を構えながら、彼女がこちらに足をむけるのを見て、クルトが舌打ちをしながら彼女を睨みつけた。それを見て、イリヤは思わず叫ぶ。

「ミカサ!俺はいい!今はエレンを!!」

再び地響きと突風が彼らを襲う。鎧の巨人に、エレン巨人が完全に抑え付けられている。劣勢は変わらない。

「エレン!!」

「ミカサ!行け!!」

ミカサは一瞬ためらいを表したものの、クルトを一瞥したあと、そのままエレンに向かって再び空を駆けて行った。その姿を見ながら、イリヤはほつと息をつく。

「殊勝なことだな。イリヤ」

冷静な声と言う。クルトは刃を構えたまま、鎧の巨人たちの交戦を見守るだけだった。

「お前はいつも勇敢だった。巨人にも怯まず立ち向かって……。俺にはできなかった。いつもすごいと思ってたよ」

「どの口が言ってるんだ……。!!この裏切り者が……。!」

「お前には来てもらいたくないんだ。俺たちの故郷に。ここにいてもお前

は死ぬだけだ。前も言っただろ?」

「誰が行くか!!俺は調査兵団だぞ!」

感情のまま叫ぶも、その声はクルトには届いていないようで、彼は素知らぬ顔で話を続ける。

「クシエル副官が生きている」

その言葉に、イリヤは言葉を失った。イリヤの脳裏に、いけ好かない黒髪の女性の顔が浮かぶ。彼の苦手とする、しかし、直属の上官だ。「お前はただでは来てくれないと思ったから、彼女をさらった。あの人が助かる道は二つだけだ。お前が俺たちと来るか。それとも、壁の中の情報を提供するか。どちらかだ」

「はあ?!お前、それは」

「あの副官が、兵団の情報を売ると思うか?」

クルトが初めてイリヤの目をまっすぐに見つめてきた。そんなこと、聞かれなくとも分かるだろう、とイリヤは歯を食いしばる。あの人が、まさかそんなことをするはずがない。エルヴィン団長への忠義心に溢れ、ルール順守のリヴァイ兵長と肩を並べるあの副官が、そんなことを自分に許すはずがない。

「……この卑怯もんが……!!」

「お前が来なければあの人は死ぬ。なあ。イリヤ。お前、死ぬとわかっていて人間を見殺しにできるのか?お前が来れば、クシエル副官は死なずに済む。エレンとお前が来てくれれば俺たちも故郷に顔が立つ。晴れて壁の中の平穏はひとまずの間保証される。悪くない取引だと思わないか?」

どんな取引だ、とイリヤは奥歯を噛み締めた。どっちにしても、壁の中の人類にとっては不利なことばかりだ。どうすればいい。

イリヤの脳裏に、上官の顔が浮かぶ。彼女が残したメモは胸ポケットに入っている。これは、彼女の努力の証だ。壁の中の矛盾を解き明かそうとしていた彼女の仕事の成果だ。今なら分かる。壁の中の歴史文献などを漁っていたのは、彼女がウォール教をはじめとした、壁

の中の体制に不信感を抱いていたからだ。彼女は、その謎に迫るために必要な人物だ。

そして、イリヤにとってははいけ好かなくとも、イリヤの敬愛する上官たちにとっては、かけがえのない仲間なのだ。彼女と話すときのリヴァイ兵長の表情が、イリヤの瞼に浮かぶ。

どうする。どうする。何が正しい選択だ。

——助かる命の数を数えろ。

ここにはいない上官の声が、イリヤの耳を打った。

瞬間、エレン巨人と鎧が走って行く振動と突風が再びイリヤを襲う。その後ろに、飛ぶしなやかな舞姫の姿。

その黒くて細い影と目があった。

「ミカサアアああああ!!! 斬ってくれええええ!!!」

彼女が近くの木にアンカーを打ち込んだ瞬間、イリヤは必死に大声で叫んだ。彼女がその黒い瞳に迷いを浮かべたのは、ほんの一瞬だった。瞬きを一つしたその後には、その黒い瞳は険しく研ぎ澄まされて、あつという間にイリヤのそばまで最大出力までガスを噴射させて近づいていた。

ミカサのその突進に、クルトが身をかわすように近くの木にアンカーを放ってイリヤから離れる。その瞬間に、ミカサは鋭利なその刃の両刀でイリヤの手首を切断した。

クルトの刃によって虫のように地面に縫い付けられていたイリヤ

は、その両手を諦めることで、解放された。両手から鼓動の数に応じて吹き出る血を物ともせず、ミカサがイリヤを抱えてクルトから距離を取る。一瞬のうちに、クルトの姿はガスの噴射煙の中に隠れて小さくなっていた。

「み、ミカサ！お前、すごい力！」

「黙って!!」

壁の近くまでミカサに抱え上げられたイリヤは痛みと驚きに困惑したが、ミカサに一蹴された。地面に転がされるように着地したが、彼女の視線はエレンに釘付けで、イリヤに一瞥すら加えない。両手を切断しておいて、その冷たさはないだろう、とイリヤが思ったとき、やおら彼女が振り返った。

「いつ再生するの!?早く！エレンが!!私はエレンを守らないと！」

その役目は俺が言付かった任務だと思いながらも、彼女も彼女なりに僅かながらイリヤを気にかけているらしいと気づき、

「5秒だ!!」

イリヤは叫んだ。全身の神経を両手に集中させる。痛みで朦朧とする頭の生き残った理性を全てその再生につき込む。それはまるで体中の細胞をかき集めるような感覚で、頭の中に大量の麻薬をブチ込んだような圧倒的な開放感すらあった。

数えること、4つ。

「生えた!!」

驚きの速さで、爪の先まで回復させたイリヤは、もう1つ数えるう

ちに、両脇のホルスターから立体機動装置のグリップを取り出した。

「ミカサ!!何が何でもエレンを守るぞ!!」

イリヤは選んだ。

そう叫んだ声は、少しだけ掠れていた。涙は流さない。そう決めて、イリヤは空を駆けた。

彼は選んだ。全部守ることができない自分の無力さを呪いながら、上官の命を捨てることを選んだのだ。

——命の数を数えろ。

それは、あの黒髪の女性の上官が言っていたことだ。より多くの命が助かる方を選べ。それが戦場での選択肢だ。その選択基準に異を唱えていたイリヤは、このとき切実に己の無力さを実感した。ただ、彼女の命を諦めてしまった代わりに、エレンだけは必ず守ろうとグリップのトリガーを引いた。

しかし、イリヤの決意も虚しく、調査兵団と超大型、鎧の巨人との戦闘は、調査兵団の敗北という形で幕を閉じた。

ハンジ分隊長率いる調査兵団の多くは怪我により戦闘不能。イリヤたち調査兵団は、鎧と超大型、そしてクルト・ウェルナーを取り逃がすばかりか、エレン奪取を許すこととなった。

それは、太陽も天高く上がった頃のこと。すでに、クシエルに与えられていたタイムリミットも切れて久しい時間のことだった。

時折、クシエルは空に泳ぐクジラの幻影を見る。

それが白昼夢であるのか、はたまた夜に見る夢の光景なのかは分からぬが、空にはクジラは泳がぬから、それは幻なのであろう。しかも、そのクジラはこの壁の中では、実在しない幻の海獣とされているものである。禁書にだけ描かれたその姿を知る者など、壁の中では誰一人としていない。

だから、彼女が見るそれは、まさに単なる幻なのだろう。しかし、彼女はそれを壁の中に来てからというもの、昼夜問わず見ていた。青い、蒼い空に泰然と、白い腹を翻しながら泳ぐその名を、クシエルは最初知らなかった。

それを教えてくれたのは、彼女の後継人でもあるエルヴィン・スミスの与えてくれた生物図鑑であった。禁書の類のそれは、彼から彼女への最初で最後の贈り物であったため、クシエルはそれはそれはその図鑑を大切にしていた。

空に泳ぐ幻のそれではなく、海に泳ぐ現実のクジラを見たいと彼女が思うようになったのは、調査兵団への入団をエルヴィンから提案された頃だった。しかしその夢は、エルヴィンにもついぞ語ったことはない。

子供じみた幻のような夢を語ったのは、リヴァイにだけであった。彼が入団してまもなくの頃、お目付役として彼と同室であった時、二人で腹の探り合いをしながら酒を飲み交わした際に語った夢物語である。稚拙な夢であったが、彼は笑うことなく、真面目くさった顔で「そうか」と頷いていた。それは、まだ昨夜のことのように鮮明な記憶である。

良い仲間にも恵まれた己は、実に果報者であった。

そう、暗くなりかけた視界で、夕焼けの空を悠然と泳ぐクジラを認めながら、クシエルは息を吐いた。

「おい、クシエルさん。大丈夫すか。寝たら死んじまいますよ」  
すぐ近くから声が降ってきて、クシエルは重い瞼を開けて、「ユミ  
ル」とその声の主を呼んだ。

「寒いんだ。変な幻覚まで見えてきた。これはいよいよ危ない。お願いだから、一回巨人化してぱくつと一飲みにもしてくれないかな。このまま失血死なんて笑えないよ」

クシエルが巨大樹の幹の上で寝そべったまま笑えば、ユミルと呼ばれた長身の少女は、大人びた表情でため息をわざとらしく吐いた。

「せっかくなこまで生き延びたんですから、しっかりとってくださいよ。第一、死にたかったら、そつから飛び降りりやすぐ巨人が食つてくれますよ」

「ううん、あいつらは食べ方が汚いからなあ。とつちらかすだろ、あいつら。ああいう死に方はできるだけ避けたいよなあ」

クシエルが冗談めかして言った言葉に、少しだけユミルが動揺したように息を飲んだ。

その場所は、旧ウォール・マリア内地にある小規模な巨大樹の森だった。ユミルのそばには腹の傷から血を垂れ流しているクシエルが、その隣には四肢をもぎとられたエレンが気を失って横たわっている。

彼らのいる幹の上から少し離れた場所には、ライナーとベルトルト、そして彼らより一期上のクルトがいる。三人とも、ユミルたちとは違って立体起動装置をしつかりと身につけていた。

それは、クシエルがジークたちの取引を拒み、そのままそこに放置されてから数時間後のこと。壁の上での交戦から逃れてきたライナーたちが、偶然にも彼女の寝そべっていた場所に逃げ込んできてしばらくしてからのことだった。

おおよそのことの次第を、クシエルとユミルたちは情報交換しあった。なんの意図か、ライナーたちは夜までここで待機すると決めた。腹の傷が痛むというクシエルに手当をしてやらないのは、つまり、そ

ういうことだった。彼らにはクシエルを生かす選択肢など端からないようだった。

「情けないもんですね、クシエル副官。あんたがそんなに弱つてるところ、死んでいった部下たちに見せてやりたいですよ」

冷たいクルトの声が攻めるように、横たわって息を切らしているクシエルに投げられた。その女の腹から滲み出た血の色は、すっかりと白いシャツを染め始めていた。ウドガルド城の攻防から、ライナーたちの仲間にこの巨大樹に連れてこられた彼女は、どうやら腹を巨人に食われたらしい。傷はそう深くはなさそうで、簡易な手当もされているようであるが、なにぶん時間が経ち過ぎている。

ウドガルド城の攻防から、悠に20時間近く経過しているのだ。屈強な兵士である彼女の体力も徐々に死へと近づいてきているのだろう。

「兵団の情報を提供してくれていれば命は助かったでしょうに。仲間がここにあなたを置いていったのは誤算でしたが、どちらにせよあなたはここで死ぬ運命だ」

クルトの冷たい瞳が睨みつけるようにクシエルを見下ろす。その声と瞳に、彼女はちらりと視線をよこしただけで、何も言わずに再び視線を空に向けた。否、仰向けにされた胸が深く上下しているのを見るに、言葉を返す余裕もないのかもしれない。

「あんたらがイリヤさんを連れてくるために、この人を囷にしたつてのは理解したけどよ、ここで見殺しにするなんてやめてやれよ」

みかねたユミルが、ダメ元で冗談のように懇願すれば、即座にライナーが首を横に振った。

「クシエル副官がいたことは俺たちにとっては想定外だ。ここから故郷に帰るまで、俺たちだって命がけなんだ。これ以上定員は増やせないし、彼女に連れ帰る利点も感じられない」

「故郷つてのは相当厳しいみてえだな。一体あんたら、何を目的にしてんだ？」

「その話はエレンが目を覚ましてからだと言ったろ」

有無を言わさぬ体で言い切ったライナーに、思わずユミルの口から舌打ちが漏れる。見れば、彼女は寒そうに体を震わせて瞼を閉じている。ライナーたちに連れられて、ここまで来たユミルが目覚めたときに見たときより、更に少し顔が青くなっている。

「クシエルさん」

「大丈夫だよ、ユミル。あいつらのお仲間さんに朝方、ここに置いてかれてからずっと横になってるんだ。ずいぶんゆっくりさせてもらってる。すぐに死にやしない」

「……………なんで、やつらの言うことを聞かなかったんですか。命が惜しいなら、適当な情報喋ってひとまず生き延びるって方法もあったんじゃない」

「ああ……………そういう方法もあったね。まあ、確率は低いけど、たしかに。うん、今よりマシだったかもね」

瞼を閉じたまま、うつすらと微笑を浮かべた彼女の額には、びっしりと冷や汗が浮かんでいる。

「なんで」

「まあ……………私は調査兵団だから、かな」

その答えに、ユミルは眉をひそめた。ユミルがクシエルと会話したのは、ウドガルド城でだけだ。そのわずかな間だけであるが、その時の彼女と、今日の前に横たわっている彼女はどうにも別人のように思えた。その違和に、ユミルはウドガルド城で彼女が巨人に食われる前に言ったことを思い出す。

——生き残ったら答え合わせをしよう。

「あんた、壁の外から来たんだろ？どうして、今まで調査兵団にいながらそれを黙ってたんすか」

沈黙。

その沈黙は、意図して彼女が黙したそれだった。ユミルが辛抱強くその答えを待つていれば、ふと黒い瞳が開いて、ユミルを見上げてきた。濡れた、まるで子供のように大きく、キラキラ光りを抱いた瞳だった。

「覚えてなかった。忘れてた」

「はっ」

「壁の外から来たなんて、自分の妄想だと思ってた。それほど、記憶はほとんど曖昧だった。海獣の知識も、技術革新の歴史の違和も、全部おぼろげで、自身がなかった。自分の知る言語が、生まれた故郷のもだったと思い出したのは、ついさっきなんだよ」

「じゃ、じゃあ、あんたは壁の外から来たにもかかわらず、それをさっきまで全然覚えてなかったっていうのか？」

こくりと頷いたその黒髪の小さな頭に、ユミルは絶句した。そんなことがあるのか、と。否、不自然な点は他にもあった。彼女が「どのようにして」この壁まで来たのか、という点である。それについても、彼女は思い出したのだろう。

キラキラとした黒い瞳は、ウドガルドで見たまっすぐな意思に固められたそれではなく、まるで幼子のように不安げに揺れていた。

「どうしよう、ユミル」

か細い、迷い子の震える声がユミルを呼んだ。細くも、兵士らしく硬く鍛え上げられた彼女の右手が、そのまま顔を覆うように添えられた。

「私は調査兵だ。彼らを裏切れない。……………なのに、どうして。こんなにも、死にたくないんだ。生きて、故郷に帰りたかって思ってしまったんだ……………」

仲間に顔向けできない。そう言って嗚咽を漏らした彼女は、両手で顔を覆ったので、ユミルからはその表情は見えなくなってしまった。

その姿に、ウドガルド城での彼女との相違を見出して、はた、とユミルは気づいた。クシエルは、団長付きの副官として、そして古参兵

の一人として、シガンシナ陥落の英雄として、その誇りを胸に抱えて立っていた兵士だ。その兵士は、決して部下の前で本音を吐露しない。ましてや、こんな弱々しい姿は見せやしない。

「……もしかして、クシエルさん。あんた……記憶があつたら、調査兵团なんて入ってなかったんじゃない……」

まさか、と思いながら眩かれたユミルの言葉に、クシエルはわずかに首を縦に振った。「全部、裏切った」とその小さな口は呟いた。その意図はユミルにはわからなかった。調査兵团への裏切りなのか。それとも。

そのあと、彼女の口からだれかを呼ぶ声が漏れたが、ユミルの耳にはその名前は届かなかった。ただ、黒髪の女の小さな嗚咽と、自分とエレンの体から上がる蒸気の音だけが耳の奥に痛みをもつて響いていた。

\*\*\*\*\*

同刻。壁の上である。

イリヤが目を覚ました時には、既にエルヴィン団長率いる調査兵团本隊が合流していた。リフトの昇降音が唸るのを、イリヤは目覚めたばかりの惚けた耳で聞くとともになしに聞いていた。

「イリヤさん！大丈夫ですか？」

駆け寄って来たのは、104期のアルミン・アルレルトだった。金色の髪が斜陽に輝いているのを見て、自分がかなり長い時間眠っていたことを悟る。

「ああ……俺は、」

「超大型巨人が落ちて来た熱風で気を失っていたんです。外傷はすぐに再生したんですが、なかなか目を覚まさなかつたので心配しました……」

アルミンの手を借りながら立ち上がれば、壁の上でせわしなく兵士達が右往左往している。両翼の紋章と、薔薇の紋章。そして、

「憲兵団？」

一角獣の紋章の兵士。

「はい。エルヴィン団長が」

見れば、エルヴィン団長は横たわるハンジ分隊長のそばに膝をつき、なにやら話しているところだった。その物々しい様子に、イリヤは瞬時に悟った。

「……エレンが負けたのか……」

「はい……。ハンジ分隊長の推測で、ここから一番近い巨大樹の森に向かうことになりました。夜までにそこにたどり着ければ、ライナーたちに連れ去られたエレンを奪還できる可能性がある」と

よどみなく告げられた状況報告に、イリヤが見れば、エレンの幼馴染というその少年は、きりりと迷いない瞳で壁の向こうを見据えている。その姿に、イリヤは頷く。

「アルミン。俺の装置は？」

「え？まさか、イリヤさん、出撃するつもりですか？」

「そりやそうだろ。もう体は大丈夫だ。俺の任務はエレンを守ることだ」

「そ、そんな、無茶です。まだ、」

「あなたは足手まとい」

イリヤを止めようとしたアルミンの言葉を遮った声に振り返れば、そこには鋭い瞳でこちらを真っ直ぐに見つめるミカサが立っていた。その迷いのない表情に、イリヤは少し意外に思っただけ目を丸めた。

「お前、大丈夫なのか？」

「？」

「エレンがさらわれて、もつと取り乱してると思った」

あけすけにイリヤが言ったが、彼女は怒るでもなく、赤いマフラー

で口元を覆いながら「もう、大丈夫」と頷いた。

「私はもう大丈夫。迷いもない。でも、あなたはそうじゃない。そんなに焦っていては、体以前の問題」

「焦ってないさ」

イリヤは壁の向こうの広大な景観に視線をやった。陽が傾きつつあるなか、旧ウォール・マリア領土内は、広大な草原を黄金色に染め上げ始めていた。その穏やかな景色を見ながら、イリヤは拳を握りしめた。

「焦ってない。俺は、諦めてない」

何を、とミカサが問おうとした言葉は、ひとりの男性が彼らの前に歩み寄って来たことで形をなさなかった。アルミンやミカサ、そして長身のイリヤよりもさらに屈強で背の高い影がさして、イリヤは視線を上げた。

「エルヴィン団長……」

「イリヤ。君も出るのか」

「はい。エレンを守るという任務を果たせなかった責は、きちんと果たすつもりです」

真つ直ぐにイリヤはその碧眼を見つめて頷いた。目覚めてから、体は軽い。きつと、大丈夫。なによりも、自分が行かなければいけないと感じていた。

「……君には礼を言わなければいけない」

「え？」

「クルトに連れ去られそうになったとミカサに聞いた。その際、彼に交渉をもちかけられていたとも。クシエルの命と引き換えに、君がここに残ってくれた。その選択ができた君に、敬意と感謝を」

厳しい表情で、抑揚のない声で、しかし熱のこもった眼差しを向けて、団長が言った。イリヤはその声に、瞳に、泣きそうな思いに駆られる。そんなふうにかこの人に言ってもらえたのは、巨大樹の森における女型の巨人との交戦以来だ。

あの時は逆に、クシエル副官の命を救ったことと、生き延びたことを褒められた。

「当然の判断です。俺はクシエル副官に……、救える命の数が多い方を選べと教えられました。俺があちらに行つて一人の命を助けるより、こちらに残つた方が多くの人を助けられると判断したまでです」  
「……ああ。しかしそう簡単にできる判断ではない。人一人の命は決して軽くはないのだからな」

そう言つて、エルヴィン団長は遠い目をして、その副官がいるであろう壁の向こうの景色へと視線をやつた。彼にとって、部下の命を切り捨てることはもう何度目になるのだろうか。それでも、その一度は毎回、辛いものであるはずだ。なにより、彼女は彼に最も長い時間就いていた副官なのだ。

「エルヴィン団長！」

イリヤは拳を握りしめて、その兵団の最高司令官を睨みつけるように見上げた。

「しかし俺は諦めていません！あの人はまだ生きています！エレン奪還の次に、俺はクシエル副官救出を掲げます!!」

右手拳を心臓へ。

誰も死なせたくない。死にたくない。そんな甘い価値観を叱つたのはクシエル副官だったが、リヴァイ兵長はその甘さを貫き通せと教えてくれた。ならば、やりたいようにやりたかった。イリヤはあの厳しく、折の合わない上官を見返してやると決めたのだ。

まだ、それは達成されていない。あの人には、生きて帰つて来てもらわねばならない。あの上官を、団長や兵長のもとに連れ帰るのはこの俺だ。そう、思った。

エルヴィン団長は、一瞬、驚いたように目を丸めた。そのまま一度二度瞬きをした後、

「生きていると思うのか。あいつが」

「信じています」

「根拠は」

「ありません！」

胸をはつて言えば、背後からミカサのものとかわしき呆れたようなため息が聞こえたが、イリヤは素知らぬフリをする。根拠など、そも

そも最初からない。

エルヴィン団長は、そんな部下の発言に、ふと穏やかに笑った。そしてその大きな右手を、細く薄いイリヤの肩に置いた。

「そうか。……クシエルが君を可愛がっていた訳がようやく理解できた気がするよ。……無茶はするな、イリヤ。第一の目標はエレン奪還だ。第二は生きて帰ること。それが達成できなければ、クシエル救出は叶わない。それを肝に銘じておくように」

「はいー」

許可を得た。それに安堵して大きく頷けば、団長はまた少しだけ笑った。そのままほかの副官たちと馬のもとへと踵を返して歩いていく。その顔は、再び険しい団長のそれであった。

イリヤが嬉々として振り向けば、驚いた表情のまま目を白黒させているアルミンと、呆れた顔を隠そうともしないミカサがこちらをじつと見つめていた。

「呆れた……」

「そりゃ、お前からからすればそうだろうな。エレン奪還が主目的なこととは忘れてないから安心しろ。それに……可能性が低いってこともわかってるよ。……でも、そうじゃねえだろ」

「そうじゃない、とは？」

怪訝そうに首を傾げて不安げに問うてきたのはアルミンだ。賢い彼だからこそ、クシエル副官の生存の可能性の低きは、しっかりと数値として割り出せているのだろう。

「信じてる。あの人はこんなところじゃ死なない」

もう一度、自分に言い聞かせるようにイリヤは言った。

「呆れた……」

再度言ったのはミカサ。呆れた顔の、上官と同じ色の瞳をしたその少女に、イリヤは笑った。

「そーいや礼を言っただけじゃなかったな。ミカサ、あの時俺の両手を斬ってくれてありがとう」

それは、クルトの拘束から逃れようとしたときの咄嗟の判断。クルトから逃れるために、ミカサに頼んで自分の両手を切断させた。あの

切れ味はとんでもなかった。

「ミカサだから頼めた。嫌な頼みだったと思うけど、ありがとう」

「い、いえ……。別に……………」

「ミカサ？」

照れたように顔を伏せたミカサに、思わずアルミンが驚いて彼女の顔を覗き込む。そんな二人の様子をそっちのけに、イリヤは体のベルトを締め直していく。

調査兵団の古参兵たちは、皆一様にその心臓を公に捧げきつている。仲間の死をも肥料として、彼らは悲しみを殺して前に進み続ける。未来にあるはずの自由のために。

しかし、彼らのそうした崇高な夢には、彼ら自身のしあわせな姿は決して描かれることはない。死地へと向かう彼らに、それを描けというのはたしかに酷なことなのかもしれない。

でも、仲間の死に抗うことは決してダメなことではないはずだ。

イリヤは思う。

きつとあの上官を連れて帰る。そして、すっかり悲しみも怒りも殺すことに長けてしまった団長と兵長のもとへと連れて行くのだ。仲間の死に涙ひとつ流すことなく、指示を出し続けたハンジ分隊長だつてきつと泣いて喜ぶ。

失くしてはいけない。そんなものばかりなのだ。自分たちには大切なものばかりが増えていく。まだ可能性があるなら、それを信じたい。

陽が沈む。リフトが兵士たちを巨人の領域へと運んでいく。タイムリミットは夜まで。

追う者たちの、エレン奪還の数時間が幕を開けようとしていた。